

野盆地遺跡II・赤池4号古墳

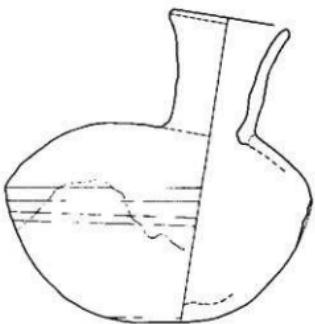


2002

財団法人 岐阜県文化財保護センター

の ざ さ い せき あ か い け よん ご う こ ふん

野 笹 遺 跡 II ・ 赤 池 4 号 古 墳



2 0 0 2

財團法人 岐阜県文化財保護センター



野籠遺跡II区（北より）



野籠遺跡III区（北西より）

巻頭図版 2



赤池 4号古墳石室（北より）



赤池 4号古墳石室内より出土した遺物

序

美濃加茂市は、古くから木曽川水運の港町として、また中山道など主要街道の宿場町として栄えてきました。現在も、岐阜・名古屋・東濃・飛驒を結ぶ要の地となっており、鉄道や国道などの幹線交通路が集まっています。恵まれた地理的環境は、旧石器時代から現代に至るまで、連綿とした人々の生活をはぐくみ、多くの遺跡となって残っています。

野籠遺跡は、今回の一般国道248号線道路改良工事に伴う発掘調査により、縄文時代から現代にかけての長い時代にわたる生活の跡が明らかになってきました。

平成8・9年度の調査で、縄文時代から中世にかけての集落跡が見つかりました。特に古墳時代後期の竪穴住居跡は23軒にもおよびました。調査の記録は『野籠遺跡I』で報告させていただいたとおりです。

このたびの平成11・12年度の調査は、前回の調査の南側部分と北側部分にあたります。古墳時代の住居跡4軒、溝数条をはじめとする数多くの遺構が見つかり、野籠遺跡における集落範囲の広がりがわかりました。また、横穴式石室を持つ円墳1基が見つかりました。この古墳は文献上では知られていましたが、近現代の改変に伴い埋没していたもので、今後この地域の群集墳を考える上で貴重な資料となりました。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多くな御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、美濃加茂市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 服 部 卓 郎

例　　言

- 1 本書は、岐阜県美濃加茂市野並町・御門町に所在する野並遺跡（岐阜県遺跡番号21211-08845）と、美濃加茂市御門町に所在する赤池4号古墳（岐阜県遺跡番号21211-09272）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般国道248号線道路改良工事事業に伴うもので、岐阜県土木部（現 基盤整備部建設管理局）から岐阜県教育委員会が委託を受けた。本発掘調査は、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成11・12年度に実施した。平成11年度（II区・III b 区、赤池4号古墳）、平成12年度（III a 区）ともに堀田一浩が担当した。
- 4 本書の執筆・編集は、堀田が行った。
- 5 遺物の写真撮影は、フォトスタジオ サトウに委託して行った。
- 6 地形測量は、（株）イビソクに委託して行った。航空写真測量は、（株）アジア航測に委託した。
- 7 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

井川様子 池谷勝典 内堀信雄 角張淳一 可児先生 八賀晋 藤村俊 渡辺耕平
建設省中部地方建設局岐阜国道工事事務所 美濃加茂市教育委員会
美濃加茂市野並町二丁目自治会

- 8 本文中の方位は、国土座標第VII系の座標北を示している。
- 9 土及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄（1996）『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 10 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例 言

日 次

はじめに	1
第1章 発掘調査の経緯	3
第2章 遺跡の立地と環境	12
第3章 野籠遺跡II区	16
第1節 基本層序	16
第2節 遺構	18
第3節 遺物	93
第4章 野籠遺跡III区	120
第1節 基本層序	120
第2節 遺構	122
第3節 遺物	158
第5章 赤池4号古墳	174
第1節 外部施設	177
第2節 内部構造	181
第3節 遺物の出土状況	188
第6章 考 察	195
第1節 野籠遺跡についての考察	195
第2節 赤池4号古墳についての考察	199
計測表・観察表	204
引用・参考文献	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	野籠遺跡内地区別図	2
第3図	野籠遺跡II区調査区画設定図	4
第4図	野籠遺跡III区調査区画設定図	5
第5図	周辺の遺跡分布図	13
第6図	油庫発掘部分攝取時の西壁	16
第7図	II区堆積状況模式図	16
第8図	II区堆積状況図	17
第9図	II区遺構配置図	19
第10図	II区遺物出土位置図	21
第11図	SB01実測図(1)	23
第12図	SB01実測図(2)	24
第13図	SB01出土遺物(1)	25
第14図	SB01山土遺物(2)	26
第15図	SB01出土遺物(3)	27
第16図	SB 位置図	29
第17図	SB02実測図(1)	30
第18図	SB02実測図(2)	31
第19図	SB02実測図(3)	32
第20図	SB03実測図(1)	34
第21図	SB03遺物出土状況	35
第22図	SB03実測図(2)	36
第23図	SB02・03出土遺物	37
第24図	SB04実測図(1)	39
第25図	SB04実測図(2)	40
第26図	SB04実測図(3)	41
第27図	SB04出土遺物	42
第28図	SB05実測図(1)	43
第29図	SB05実測図(2)	44
第30図	SB05出土遺物	45
第31図	SD01・12実測図	47
第32図	SD02・04・06・19実測図	49
第33図	SD03・07・20・23実測図	51
第34図	SD08・10・11・15・18 ・21・26実測図	53
第35図	SD09・13・14・22 ・24・25・27実測図	55
第36図	SD 遺物出土位置図	57
第37図	SD01出土遺物	58
第38図	SD02・03出土遺物	59
第39図	SD03出土遺物	60
第40図	SD 位置図	60
第41図	SD04・07・09・11出土遺物	61
第42図	SD13・20・23出土遺物	62
第43図	SK01～07実測図	64
第44図	SK08～17・P27実測図	65
第45図	SK18～27実測図	66
第46図	SK28～35実測図	67
第47図	P01～09実測図	68
第48図	P10～18実測図	69
第49図	P19～26実測図	70
第50図	P28～36実測図	71
第51図	P37～42実測図	72
第52図	P 43～50実測図	73
第53図	P 51～58実測図	74
第54図	P 59～67実測図	75
第55図	P 68～74実測図	76
第56図	P 75～77実測図	77
第57図	SK 位置図	78
第58図	SK02・03・05・23・30 ・P11・23出土遺物	79
第59図	P 23・48・51出土遺物	80
第60図	P 位置図	81
第61図	SI01～03実測図	83
第62図	SI 位置図	84
第63図	SX01実測図	86
第64図	SX01遺物出土状況	87
第65図	SX02～05・07実測図	88
第66図	SX01出土遺物(1)	89
第67図	SX01出土遺物(2)	90
第68図	SX02・04出土遺物	91
第69図	SX 位置図	92
第70図	遺構外出土繩文土器(1)	94
第71図	遺構外出土繩文土器(2)	96
第72図	遺構外出土繩文土器(3)	98
第73図	遺構外出土繩文土器(4)	99
第74図	遺構外出土赤生土器(1)	101
第75図	遺構外出土赤生土器(2)	102
第76図	遺構外出土土師器・須恵器(1) ・山茶碗(1)	104
第77図	遺構外出土須恵器(2)・山茶碗(2)	106
第78図	遺構外出土山茶碗(3)・中世陶器(1) ・銅鏡	107
第79図	遺構外出土中世陶器(2)	108
第80図	遺構外出土石鍬・石槍	110
第81図	遺構外出土石鍬・ノッチ・剝片	111
第82図	遺構外出土打製石斧(1)	112
第83図	遺構外出土打製石斧(2)	113
第84図	遺構外出土打製石斧(3)	114
第85図	遺構外出土打製石斧(4)	115
第86図	遺構外出土打製石斧(5)・磨製石斧	116
第87図	遺構外出土石鍬・偽石器・石核	117
第88図	遺構外出土石核	118
第89図	範囲確認調査のTP 1北東壁	120
第90図	III区堆積状況模式図	120
第91図	III区堆積状況図	121
第92図	III区遺構配図	123
第93図	III区遺物出土位置図	123
第94図	SB01実測図(1)	125
第95図	SB01実測図(2)	126
第96図	SB01出土遺物	127
第97図	SB02実測図(1)	129
第98図	SB02実測図(2)	130
第99図	SB02出土遺物(1)	131
第100図	SB02出土遺物(2)	132
第101図	SB03実測図	134

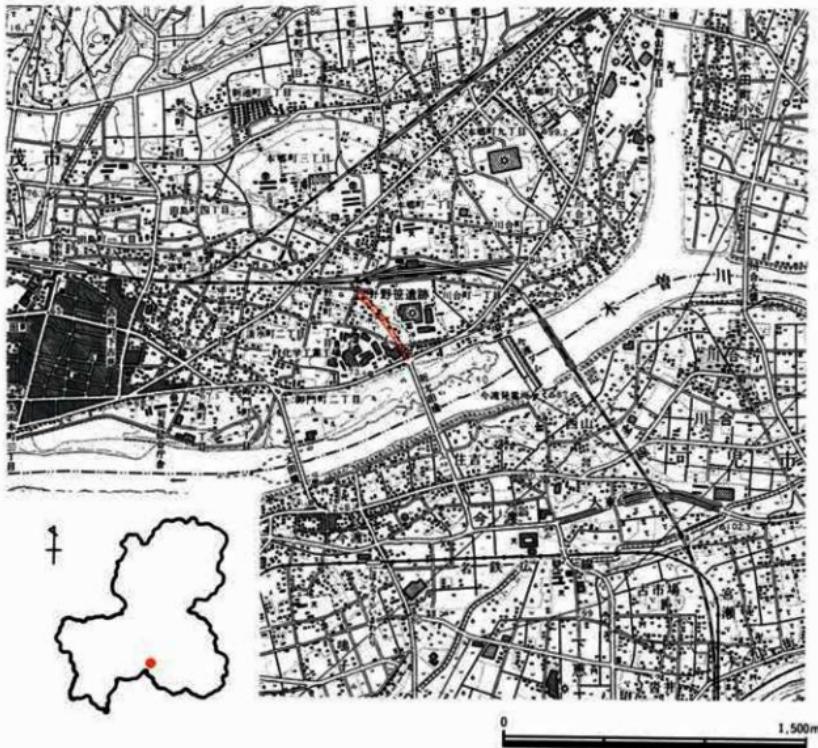
第102図	SB03出土遺物(1)	135
第103図	SB03出土遺物(2)	136
第104図	SB 位置図	137
第105図	SD01～04・06実測図	138
第106図	SD05・07・08実測図	139
第107図	SD 遺物出土位置図	139
第108図	SD01～03出土遺物	140
第109図	SD 位置図	141
第110図	SK01～12実測図	142
第111図	SK13～18・P01～07実測図	143
第112図	P08～16実測図	144
第113図	P17～24実測図	145
第114図	P25～38実測図	146
第115図	P39～49実測図	147
第116図	SK 位置図	148
第117図	P 位置図	148
第118図	P02・23上層で出土した遺物の 平面図	148
第119図	SK07・12・14・17・18 ・P02・23出土遺物	149
第120図	SK12遺物出土状況	150
第121図	SU 実測図	151
第122図	P23・41・SU01・02出土遺物	152
第123図	SX01・03～05・07～09実測図	153
第124図	SX02・06実測図	154
第125図	SX01・02出土遺物	155
第126図	SX02出土遺物	156
第127図	SX02・07・09出土遺物	157
第128図	遺構外出土縄文土器・弥生土器(1)	159
第129図	遺構外出土弥生上器(2)	160
第130図	遺構外出土土師器(1)	162
第131図	遺構外出土土師器(2)	163
第132図	遺構外出土須恵器(1)	165
第133図	遺構外出土須恵器(2)・灰陶陶器	166
第134図	遺構外出土山茶碗 ・上製品・中近世陶器(1)	168
第135図	遺構外出土中近世陶器(2)	169
第136図	遺構外出土石器	170
第137図	III区範囲確認調査出土・遺物(1)	171
第138図	III区範囲確認調査出土・遺物(2)	172
第139図	出張所建物配置図	174
第140図	赤池 4 号古墳測量図	175
第141図	赤池 4 号古墳遺物出土状況	176
第142図	石室及び埴丘周辺の堆積状況図	178
第143図	埴丘堆積状況模式図	178
第144図	周溝出土遺物(1)	179
第145図	周溝出土遺物(2)	180
第146図	墓坑実測図	181
第147図	石室構築過程イメージ図	183
第148図	石室実測図	185
第149図	区画石列・敷石・基底石実測図	187
第150図	石室内遺物出土七状況	188
第151図	石室内埋土堆積状況図	190
第152図	石室内出土遺物(1)	191
第153図	石室内出土遺物(2)	192
第154図	石室内出土遺物(3)	193
第155図	赤池 4 号古墳範囲推定図	200

表 目 次

第1表	野籠遺跡I区における時期区分	95
第2表	赤池 4 号古墳石室の石材	186
第3表	野籠遺跡II区 SB 計測表	204
第4表	野籠遺跡II区 SD 計測表	204
第5表	野籠遺跡II区 SK・P 計測表	205
第6表	野籠遺跡II区 SX 計測表	207
第7表	野籠遺跡III区 SB 計測表	207
第8表	野籠遺跡III区 SD 計測表	207
第9表	野籠遺跡III区 SK・P 計測表	207
第10表	野籠遺跡III区 SX 計測表	209
第11表	野籠遺跡II区出土土器類 種別点数一覧表	210
第12表	野籠遺跡III区出土土器類 種別点数一覧表	210
第13表	赤池 4 号古墳出土土器類 種別点数一覧表	210
第14表	野籠遺跡II区出土石器 種別点数一覧表	211
第15表	野籠遺跡III区出土石器 種別点数一覧表	211
第16表	赤池 4 号古墳出土石器 種別点数一覧表	211
第17表	野籠遺跡II区土器その他観察表	212
第18表	野籠遺跡III区土器その他観察表	218
第19表	赤池 4 号古墳土器観察表	223
第20表	野籠遺跡II区石器観察表	224
第21表	野籠遺跡III区石器観察表	226
第22表	赤池 4 号古墳石器観察表	226

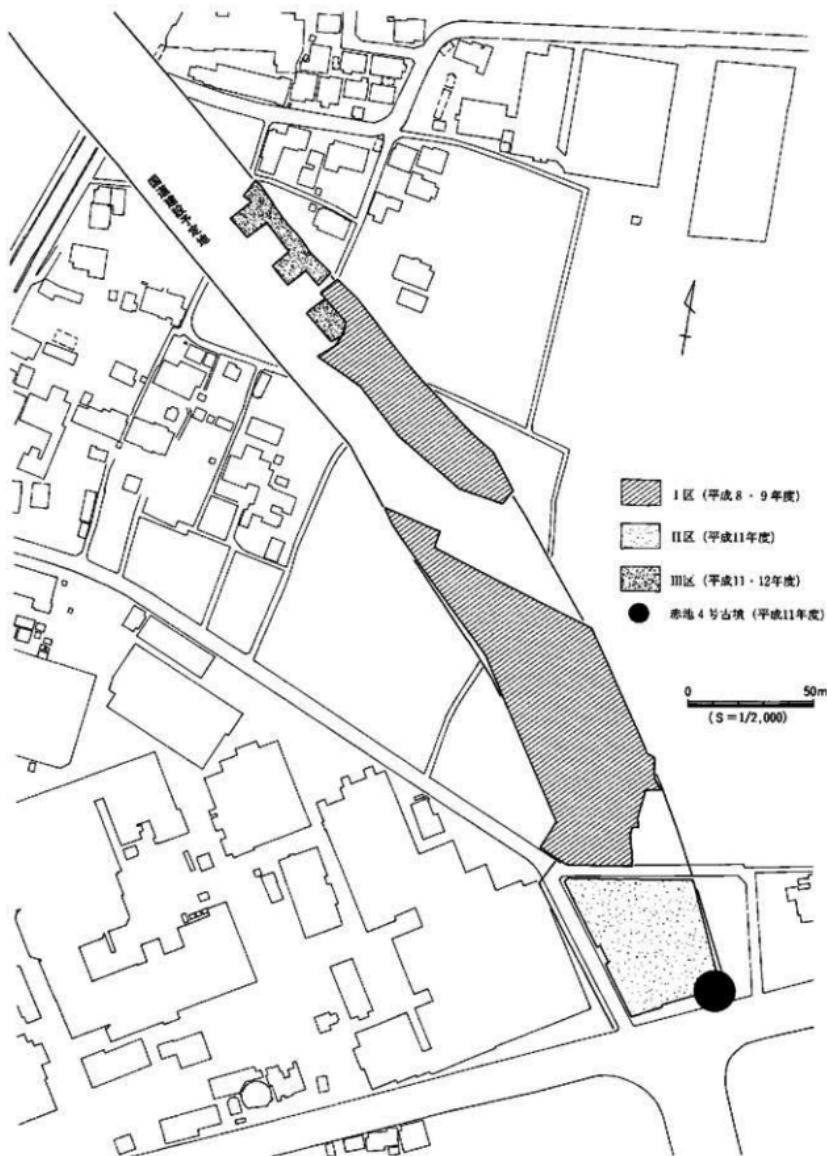
はじめに

本報告書は、既刊の『野籠遺跡I』の続編である。『野籠遺跡I』で報告したI区は、遺跡の中央部にあたり、本書で報告するII区・III区とは同一遺跡内の1地点である（第2図参照）。I区を調査している時点では、II区には建設省中部地方建設局（現 国土交通省中部地方整備局）岐阜国道工事事務所の美濃加茂国道維持出張所があり、III区は未だ遺跡の存在が確認されていない状況であった。そのため平成8～9年度にI区のみを先行して発掘調査し、12年度に報告書を刊行する運びとなった。従って、本書で記述しようとする「第1章発掘調査の経緯」「第2章遺跡の立地と環境」については、「野籠遺跡I」の記載と重複する部分がある。そこで、この2つの章については詳細な記述は避け、概要のみをまとめて記すこととする。詳細は『野籠遺跡I』を参照されたい。また、本書におけるローマ数字I・II・IIIの使用区分は、『野籠遺跡I』というように、遺跡名の後に付するものは報告書の分冊を表現するものであり、「II区」というように、後に「区」を付した場合は、遺跡内の地点を表すもの



第1図 遺跡位置図

2 はじめに



第2図 野籠跡内 地区别図

とする。なお、I区で用いられている「A～D区」という表現は、区域の混同を避けるため「I～D区」というように記す。

第1章 発掘調査の経緯

本遺跡は、美濃加茂市野並町から御門町にまたがる範囲に所在し、木曽川の右岸低位河岸段丘上(L4面=I-A～I-C区・II区、L3面=I-D区・III区)に位置している。

本遺跡の発掘調査は、岐阜県土木部(現 基盤整備部建設管理局)による一般国道248号線道路改良工事に伴うものである。この道路建設予定地周辺は、周知の縄文時代の遺跡や古墳があり、比較的遺跡分布密度の高い地域であった。また野並町から御門町にかけての一帯は、美濃加茂市教育委員会の調査により、以前から遺跡の可能性が指摘されていた。そして平成7年度に岐阜県教育委員会によって行われた試掘確認調査に基づき、本遺跡は新発見の遺跡として登録された。

本発掘調査は、岐阜県土木部から岐阜県教育委員会が委託を受け、当センターが平成8・9・11・12年度に実施した。平成8・9年度は中央部分にあたるI区の7,500m²を、平成11年度は建設省の美濃加茂出張所跡地であるII区の2,225m²を、平成12年度はI区の北西部でL3面上にあるIII区の570m²を中心調査した。I区の調査については、「野並遺跡I」の報告があるので省略し、ここではII・III区とII区調査中に発見された赤池4号古墳の発掘調査の経緯について簡単に述べることにする。

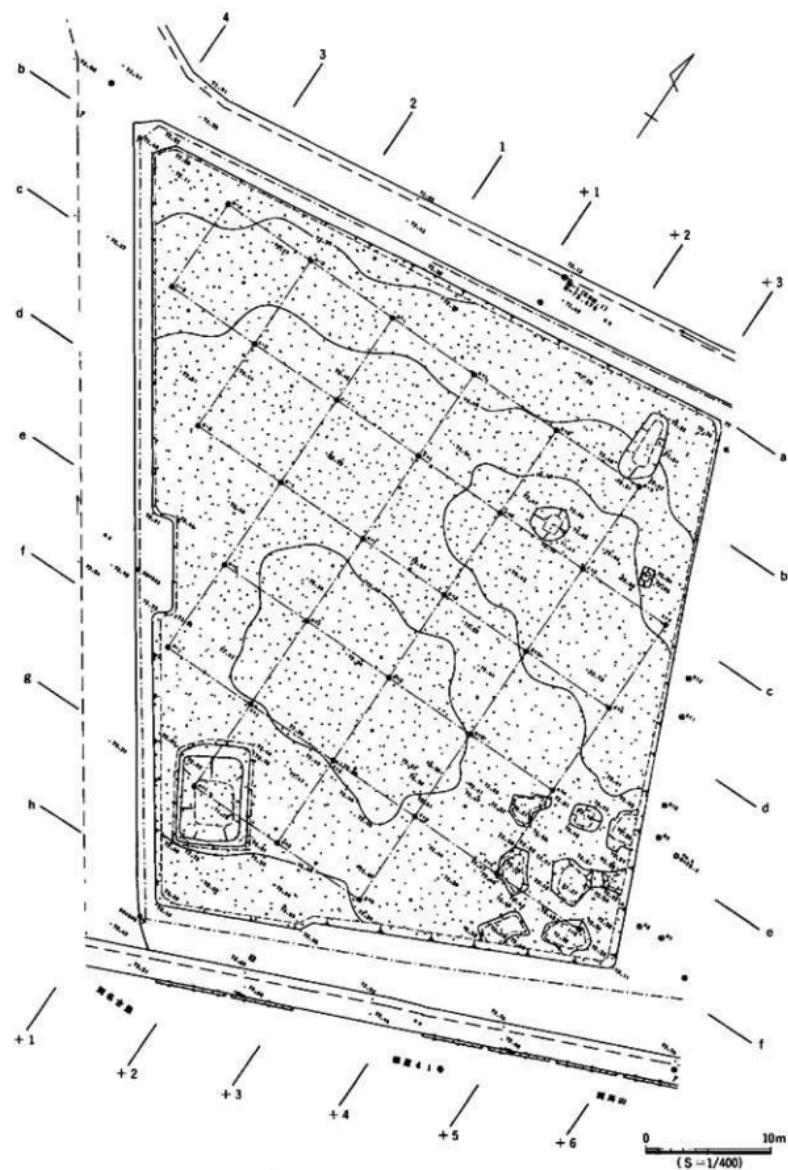
II区は、平成10年度に岐阜県教育委員会が建設省岐阜国道工事事務所美濃加茂出張所(以下、出張所)地内の試掘確認調査を行い、隣接するI区と連続すると思われる遺物包含層を確認した。そして翌11年度に出張所の移転を待って、本発掘調査に着手した。

調査は、まず重機によって遺構面直上まで厚く敷かれていた盛土を除去することから始めた。試掘確認調査の段階で、II区には遺物包含層である黒褐色土の上に盛土が敷かれていることが判明していた。その盛土は瓦礫等の混入が激しいことから、出張所が構築される際に搬入・形成されたものであることがわかつっていた。よって遺構面直上まで重機によって除去することにした。除去は一度に遺構面直上まで行うのではなく、数度に分けながら平面的に行った。

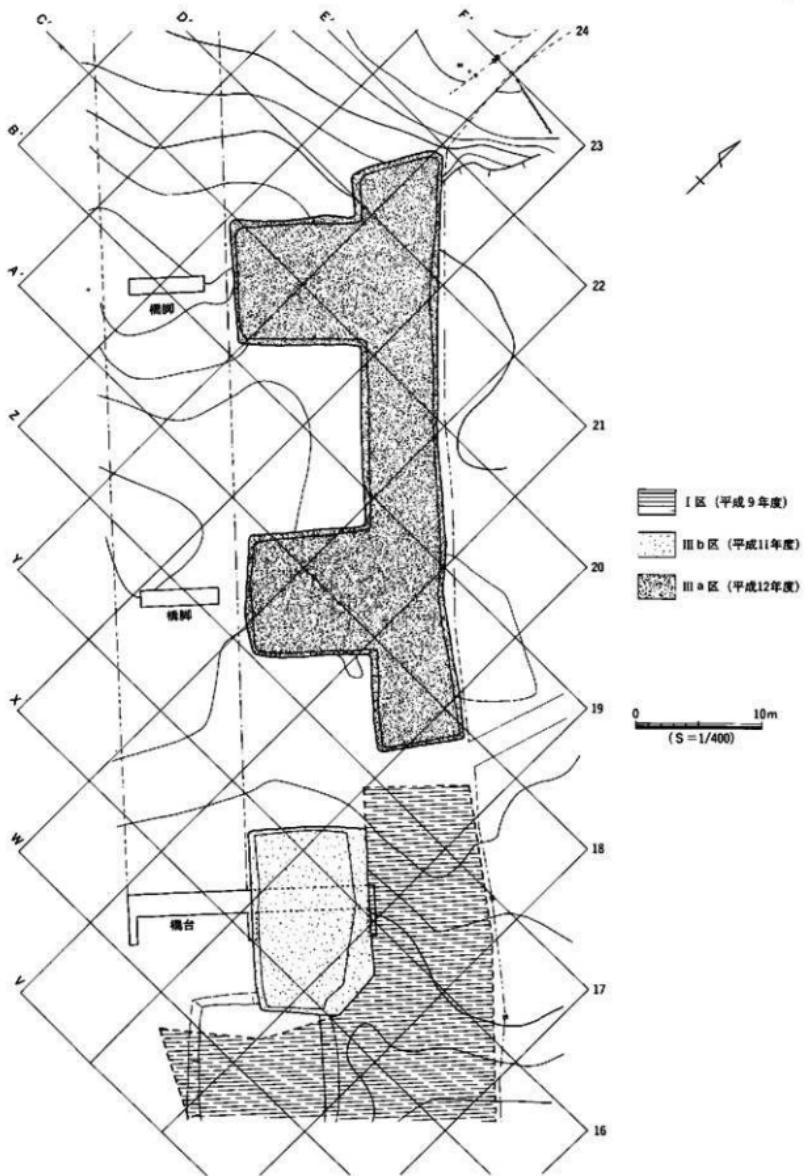
出張所移転作業の中で、遺構面に達するような深い基礎部分の撤去や立木の伐根の作業の際には調査員も立ち合った。特に調査区内南西隅には、油庫建設に伴う大規模な搅乱があったことを確認した。重機による盛土除去の際には、その搅乱部分を先に掘り抜き、堆積状態を確認しながら行った。盛土除去後は人力により包含層掘削・遺構面精査を進め、遺構検出後は慎重に遺構掘削を行った。

調査区内には、国上座標に合わせて一辺8mの方形区画(グリッド=調査区画)を設定した(第3回参照)。調査区が幅約4mの一般道路を隔ててI区と隣接していることから、グリッド番号はI区との整合性を考慮して付そうとした。しかし、I区は調査区の南東隅を基点としており、II区はそれよりさらに南方・東方向へ広がるため、そのまま番号を利用することはできなかった。検討の末、I区では南から北へ向かってA～A'をえているのに対し、II区では南方向へ小文字のa～hを付した。また、東から西に向かってI区では1～20がえられているのに対しては、1の隣から東へ向かって+1～+6を付した。なお、調査区画の呼称は西北角の杭番号を用いた。

III区は、I区の調査でさらに遺跡が広がると想定された範囲であった。II区の本発掘調査が始まる



第3図 野籠遺跡II区調査区画設定図



第4図 野世遺跡II区調査区画 設定図

6 第1章 発掘調査の経緯

以前の段階では、まだその遺跡範囲が確定されておらず、平成11年度に試掘確認調査を行った。その結果、道路工事対象区の南東半分の範囲に遺跡が広がることが判明した。本発掘調査は本体工事が先行する橋台部分の60m² (III b 区) の調査を平成11年度に行い、残る橋脚部分と側道部分の570m² (III a 区) を平成12年度に行った。III b 区は I-D 区に隣接しており、基盤となる褐色土層までは比較的浅い堆積である。よって造構面（褐色土層）直上まで重機によって表土を除去し、以下は人力によって慎重に掘削を進めた。III a 区は I-D 区や III b 区に近隣しているが、堆積状況はやや異なり、褐色土層に達するまでには深いところで 1m 以上もあった。試掘確認調査の段階で確認した造構面の直上まで重機で除去し、以下は人力で慎重に掘削した。

赤池 4 号古墳は、II 区の調査中に発見した。調査区南東隅で検出した半円形状を呈する溝（周溝）と調査区南端壁で確認した石組み及び土層の落ち込みの発見を契機として、調査区を拡張して人力掘削したところ、礫群中より 1 点の須恵器（平瓶）が出土した。その石組みが古墳の石室である可能性が高まったので、重機により表土及び後世の盛土の除去を行い、以下を人力により慎重に掘削した。調査の結果、検出した石組みは古墳の石室部分にあたることが判明した。文化財保護法57条の 6 に基づく遺跡発見の通知を文化庁長官へ提出し、「赤池 4 号古墳」と命名された。

野籠遺跡 II・III 区と赤池 4 号古墳の発掘調査及び整理調査、報告書作成業務の調査体制は以下に示す通りである。なお、調査工程の詳細については、「調査日誌抄」として調査区域別の時間的経過に従い、まとめて記述した。

〈調査体制〉

調査部長	山元敏治（平成11年度）、高橋幸仁（平成12年度）
調査次長	高橋幸仁（平成11年度）、武藤貞昭（平成12年度）
調査第1課長	柘植卓伸（平成11・12年度）
担当調査員	堀田一浩（平成11・12年度）
調査補助員	河村千寿（平成11・12年度）
発掘作業員	大坪節子、小原るみ子、川上さだ子、佐伯久美子、日江井敬子、 日比野典子、平野百合子（平成11・12年度） 安田ヒサ子、渡辺秋子、兼松賢三（平成11年度） 河野勇士、柴田竜彦、清水孝昭（平成12年度）
整理作業員	市橋美栄、今尾さち子、岩田のり子、大野里美、常富由美子、山田純子 (平成12年度)

調査日誌抄

〈現地調査に至るまでの経緯〉

平成11年

- 4月22日 岐阜県可茂土木事務所・県教育委員会文化課・財團法人岐阜県文化財保護センター（以下「当センター」）の三者による事前協議。
- 5月28日 野猿遺跡III区試掘検討委員会
- 5月31日 文化庁長官へ埋蔵文化財発掘調査の届出（財岐保第62号）を提出。
建設省国道維持出張所跡地内樹木撤去の立ち合い。
- 6月2日 建設省庁舎基礎撤去の立ち合い。
- 6月14日 野猿遺跡III区の試掘確認調査のための基準杭設定。
- 6月15日 建設省国道維持出張所跡地内埋設油庫撤去の立ち合い。
- 6月17日 「埋蔵文化財の発掘調査について」（教文第30号の10）を受理。
- 6月21日 岐阜県可茂土木事務所、建設省美濃加茂国道維持出張所、当センターによる調査開始時期についての三者協議。

〈II区本調査日誌……調査期間平成11年7月1日～平成12年3月31日〉

7月1日 II区調査前状況の写真撮影。

美濃加茂市水道局との現地での打ち合わせ。

進入防止フェンスの設営。

7月2日 現場事務所設置。

7月5日 重機によるII区盛土除去開始（～9月1日）。

7月12日 調査始め式。

7月26日～30日 油庫搅乱部分の壁を掃除・精査し、
堆積状況を確認（基本層序の確定）。

8月2日～6日 油庫搅乱部分で確認できる堆積状況



盛土除去の様子

を実測。除去した盛土内の遺物を確認。建設省庁舎基礎による搅乱部分の掃除・精査。

8月16日～20日 盛土内遺物の確認。調査区南半分の包含層掘削。

8月23日～27日 盛土除去終了部分の包含層掘削。土坑・溝を検出。確認できたものを中心には構図（S=1/100）を作成。

8月30日～9月2日 調査区内北西端部でカマドと焼土を伴う住居跡1軒（SB02）を検出。そのほか新たに溝数条を検出。

9月6日～10日 さらに調査区内中央部から北西部にかけての範囲でカマドを伴う住居跡3軒（SB03～05）を検出。

9月13日～17日 SB03～05の周辺を念入りに精査し、プランをほぼ確定する。

9月20日～24日 台風18号の接近に伴い、現場作業中止の1週間。

9月25日 台風18号通過後の現場確認。異状を認めず。

9月27日～30日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。小規模遺構（土坑・搅乱・溝）の処理。



II区作業風景

- 10月4日～8日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。
小規模遺構（土坑・溝等）の処理。
- 10月12日～15日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。
小規模遺構（土坑・溝等）の処理。
- 10月18日～22日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。
小規模遺構（土坑・溝等）の処理。
- 10月25日～29日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。
小規模遺構（土坑・溝等）の処理。

11月18日～19日 包含層掘削。SB05の東で住居跡と思われる方形プランを検出（SB01）。

11月22日～26日 SB01四分割。SD03・周溝の掘削。SX02を検出。

11月29日～12月3日 SB01・SX02四分割。SD01・03・周溝の掘削。

12月6日～10日 SB01・SX02四分割。SD01・03・周溝の掘削。

12月13日～17日 SB01・SX02四分割。SD01の掘削。

12月20日～24・27日 SB01・SX02四分割。SD01の掘削。その他小規模遺構の処理。

三重大学名誉教授八賀晋氏による現場指導（22日）。

1月6日～7日 SB01床面精査。SB05四分割とSB04と切り合うSD10・11掘削の準備。

1月11日～14日 SB05四分割。SD10・11掘削。

1月17日～21日 SB05四分割。SD02・04・08・10・11

掘削。

1月24日～28日 SB03・04・05四分割。

SD02・04・08・09・10・11・13掘削。

1月31日～2月4日 SB02・03・04・05四分割。

SD02・04・08・09・10・11・13

掘削。

2月8日～10日 SB02・03・04・05四分割。

2月11日 現地説明会 参会者202名

2月14日～18日 SB02・03・04・05四分割。

2月21日～25日 SB02・03・04・05掘削。

SI01・02・03の処理。

2月28日～3月3日 SB02・03・04・05・SX01掘削。

3月6日～10日 SB03・04・05・SX01掘削。

3月13・14日 全体の精査及び遺構の完掘。

3月15日 空掘

3月17・21日～23日 遺構確認作業。住居跡カマド確

認作業。調査納め式（23日）。

3月24・27日～31日 調査区埋め戻し。現場事務所、撤去。埋蔵物発見届・発掘調査終了報告書の作成。



遺構掘削



現地説明会の様子



空撮の様子



調査後のII区

<III区範囲確認調査日誌……調査期間平成11年7月12日～8月5日>

7月12日 調査始め式。試掘確認調査対象区の除草。

7月14日 試掘確認調査開始。

7月14日～16日 試掘坑（以下 TP）を6カ所、トレンチ（以下 Tr）を2本入れる。TP 1・5・6は表土を重機で除去し、以下は人力による掘削を行う。

7月19日～23日 TP 1 で須恵器を伴う小土坑を検出。TP 1・5・6 で縄文時代～近現代にいたる遺物が出土。

7月26日～30日 TP 1・5・6以外の TP・Tr の埋め戻し。TP 1 の堆積状況をもとに基本層序の確定。

8月2日～5日 TP 1・5・6 の最終確認（遺物取り上げ・実測）と埋め戻し。試掘確認調査終了（5日）。

9月13日 岐阜県教育委員会へ試掘確認調査報告書を提出。



試掘トレンチ

<III b 区本調査日誌……調査期間平成11年11月1日～11月18日>



調査後のIII b 区

10月19日 岐阜県可茂土木事務所とIII区橋台部分（以下「III b 区」）の本発掘調査（平成11年度調査分）について現地協議。

11月1日～5日 1日よりIII b 区の調査開始。重機による表土掘削の後、過去の調査区（平成8・9年度に調査したI区）との境界を確認。隣接する橋台建設に伴う搅乱範囲の確定。小規模遺構を数基検出。

11月8日～12日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。小規模遺構（土坑・溝等）の処理。

11月15日～18日 検出遺構の処理。本発掘調査終了（18日）。

〈赤池4号古墳本調査日誌・…調査期間平成11年11月30日～平成12年3月23日〉

11月30日～12月3日 調査区南東隅で人為的と思われる石組みを確認。掘削中に須恵器（平瓶）が出
土。II区すでに検出していた半円形状を呈する溝を周溝とする古墳の石室を検出。調査範囲を拡張するため重機による表土及び盛土層の除去。主体部の落ち込みを確認。主軸を設定し、落ち込みの振り下げ。周溝・奥壁・側壁の確認。

12月6日～10日 石室部の落ち込みの四分割。堆積状況の記録。墓坑堤方の確認。須恵器（高环）数
点が出土。

12月13日～17日 石室内埋土の掘削完了。敷石の確認。遺物出土状況の記録・実測を行い、遺物取り
上げ。

12月20日～24日 奥壁・敷石・両側壁・石室断面の記
録・実測。

三重大学名誉教授八賀晋氏による現
場指導（22日）。

（以降、現地説明会終了まで中断。）

2月14日～17日 空中写真撮影及び地上での測量。測
量終了後、石室解体作業。玄室内奥壁
近くの長方形石列下から土師器（小鉢）
出土。



石室内部

2月21日～25日 敷石の平断面実測。側壁基底石の立面実測。基底部の長手積みを確認。堤方断割部
の実測。

2月28日～3月3日 基底石・奥壁の除去。墓坑の検出と平断面の実測。埴丘部の掘削。

3月6日～10日 墓丘部の掘削。

3月15日 II区全体の空操。

3月22・23日 確認のためのトレーン予掘削。調査納め式（23日）。



遺物出土状況



調査風景

〈III-a本調査日誌・…調査期間平成12年7月3日～9月5日〉

5月25日 可茂建設事務所との事前協議。

6月28日 調査区（周辺も含む）の地形測量。現場事務所設置。調査前状況の写真撮影。

7月3日 重機による表土除去開始（～11日）。

7月4日 調査始め式。

7月4日～7日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。

7月10日～14日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。

調査区南部でのカマドと焼土を伴う住居跡1軒（SB01）を検出。重機による掘削を終了（11日）。

グリッド設定（12日）。

7月17日～19・21日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。



III区表土除去の様子

7月24日～27日 包含層掘削と出土遺物の取り上げ。調査区のはば中央部あたりでカマド伴う住居跡1軒（SB02）を検出。



実測風景

7月31日～8月4日 遺構掘削と出土遺物の取り上げ。

8月7日～11日 遺構掘削と出土遺物の取り上げ

8月21日～25日 遺構掘削と出土遺物の取り上げ。遺構実測、写真撮影。

8月28日～30日 遺物の取り上げと実測、写真撮影。

9月1・4・5日 調査区の埋め戻し。現場事務所の撤収

9月7日 岐阜北警察署へ埋蔵物発見届を提出。

9月22日 美濃加茂市教育委員会へ調査終了報告書を提出。

〈赤池4号古墳追加立ち会い調査日誌……調査期間平成12年10月6・10・11日〉

10月6日 工事箇所の確認。重機による表土掘削。

10月10日 人力による掘削で石室を検出。

10月11日 石室の精査・清掃。写真撮影、実測。



追加立ち会い状況



追加立ち会いで確認した石室の一部

第2章 遺跡の立地と環境

野並遺跡及び赤池4号古墳が所在する美濃加茂市野並町・御門町は、美濃加茂盆地内に位置する。美濃加茂盆地は、木曾川と飛騨川の合流点から加茂郡坂祝町で先行性河川となるまでの東西約17km、南北約10kmの広がりを持つ地域である。盆地の大半は、主に木曾川によって形成された河岸段丘である。その河岸段丘は、高位段丘2面、中位段丘2面、低位段丘5面に区分される。これらの地形分類図は、『野並遺跡I』に掲載しているので本報告書では割愛した。

野並遺跡II区及び赤池4号古墳は、木曾川の現河床からみて2番目に低い段丘上にあり、その段丘面はL4面と呼ばれている。一方III区はもう一段高く、3番目に低い段丘上（L3面）に位置する。野並遺跡II区及び赤池4号古墳と木曾川の現河床との比高差は約13mである。さらに、II区とIII区の比高差は約3mである。

これまで知られている美濃加茂市内の遺跡の多くは、低位段丘上と、中位段丘にあたる加茂野台地上に所在する。しかし、近年の開発が及ぶにつれて、高位段丘面でも従来知られていなかった新たな遺跡が発見される機会が増えた。ここではそれらのすべてについて触れることは、紙面の関係上割愛し、本遺跡が所在する低位段丘上の遺跡を中心に概観し、ごく簡単に記述する。位置は第5図に示す。



II区 遠景

【旧石器時代】

遺跡は、低位段丘上では確認されていない。ただ本遺跡の対岸に所在する川合遺跡群（可児市）では、ナイフ形石器などの遺物の出土が報告されている。

【縄文時代】

早期の押型文土器が牧野小山遺跡や富田清友遺跡で確認されてる。牧野小山遺跡では、これ以降晚期までの遺物が確認されている。主体となる時期は中期後半で、大量の遺物や遺構が報告されている。

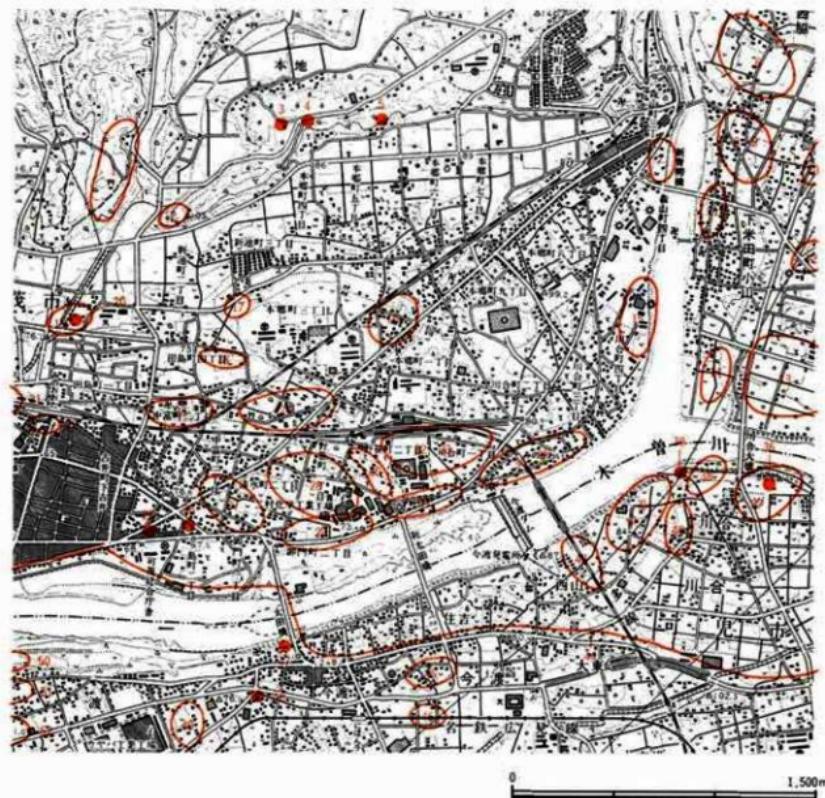
【弥生時代～古墳時代】

尾崎遺跡、牧野小山遺跡、今遺跡で住居跡が検出されている。後田遺跡では、弥生時代前期の遠賀川式土器が出土している。本遺跡に隣接する亀淵遺跡では、弥生時代後期～古墳時代初頭のパレススタイル土器が出土している。また二ツ塚遺跡からは、弥生時代前期～中期の条痕文系土器が出土している。

古墳は、かつて後期の群集墳が市内の各地で知られていたようであるが、後世に破壊され、消滅してしまった。今回発見された赤池4号古墳もその一つであると言えよう。近くに二ツ塚古墳がある。

【古代・中世】

特に古代寺院については、瓦が採集されたり、伝承が残っていたりする例もあるが、いずれも正式な調査は行われていない。中世の遺跡については、調査例が少なく今後の調査が期待される。I区で検出された敷石を伴う大溝は良好な資料と言えるであろう。



(S = 1/2,500)			
1 尾崎道路（弥生～中世）	14 島崎道路（弥生）	27 大塚古墳群（古墳）	40 大郡兵衛塚古墳群（古墳）
2 一夜坂道路（弥生）	15 川合東道路群（绳文～弥生）	28 鬼面道路（弥生）	41 宮之瀬道路群（绳文～中世）
3 大塚男塚道路（古墳）	16 本郷道路（弥生）	29 亀淵古墳群（古墳）	42 宮之瀬古墳群（古墳）
4 稲塚古墳（古墳）	17 石坂道路（弥生）	30 野笠道路（绳文～近世）	43 西野道路（古墳）
5 元禪隆寺跡（近世）	18 神道間道路（绳文～近世）	31 池赤古墳群（古墳）	44 川中山道（近世）
6 深波道路群（绳文～弥生）	19 大塚古墳（古墳）	32 二ツ塚道路（绳文～弥生）	45 今波道路（绳文～近世）
7 森山道路（弥生）	20 大塚道路（弥生）	33 二ツ塚古墳群（古墳）	46 今波金星道路（近世）
8 長船道路（弥生）	21 片口道路（弥生）	34 川合西古墳群（古墳）	47 今波渡船場の跡（近世）
9 長船古墳群（古墳）	22 後田道路（弥生）	35 川合西道路群（绳文～弥生）	48 今波下池古墳（古墳）
10 今道路（弥生～中世）	23 中富道路（绳文～弥生）	36 東畠古墳（古墳）	49 土田東山古墳群（古墳）
11 小山觀音北道路（弥生）	24 表道間道路（绳文～弥生）	37 川合道路（绳文～古墳）	50 土田袖浦道路（绳文）
12 繩間古墳群（古墳）	25 神明堂古墳（古墳）	38 福荷塚古墳群（古墳）	51 八幡古墳群（古墳）
13 牧野小山道路（绳文～古代）	26 塚弓古墳（古墳）	39 コダマ塚古墳（古墳）	52 土田定安道路（古墳）

第5図 周辺の遺跡分布図

野笛遺跡II区



第3章 野籠遺跡II区

II区は、建設省の美濃加茂国道維持出張所の跡地である。調査範囲は、その大半を占める。出張所は、南側の国道に面する部分に入り口があり、南辺以外には、廃倉や倉庫・車庫などが「コ」の字状に配置されていた。中央部分は、アスファルト舗装されているだけで構築物等はなかった。建物やアスファルト舗装の下には、最大で1m超の盛土が敷かれていた。厚さは均一ではなく、南西部では薄く数10cmしかないところもあった。全体には西側が薄く、東側が厚く敷かれていた。出張所の建物はこの盛土上に構築されていたため、基礎部分は盛土中であった。しかし、中には地下1.5m超もあるような大型基礎もあり、下部が褐色土層にまで到達してしまっていた。最も顕著であったのは廃倉跡の部分（調査区内の南東隅）で、基盤の目状に配置された基礎が確認された。また、南西隅には油庫埋



遺構面に残るキャタピラの跡

設に伴う大規模な掘り込みが、北東部には詳細不明な擾乱が確認された（第3図参照）。そのほかにも、小規模な擾乱は随所で確認できた。遺構検出を行っている傍らに、重機のキャタピラの跡が刻まれているようなところもあった。そうした状況下で出土する遺物は、やはりその実態を反映しており、層位学的な裏付けができる状況である。遺構面についても同様であった。

第1節 基本層序

野籠遺跡の基本的な層序は、「野籠遺跡I」に示したとおりである。特に、「遺跡の基盤の層序」については詳細に記されているので、それに関する記述は割愛する。ここでは、II区の堆積状況に基づく、基本層序について、土層図・模式図を図示しながら簡単に説明を加える。

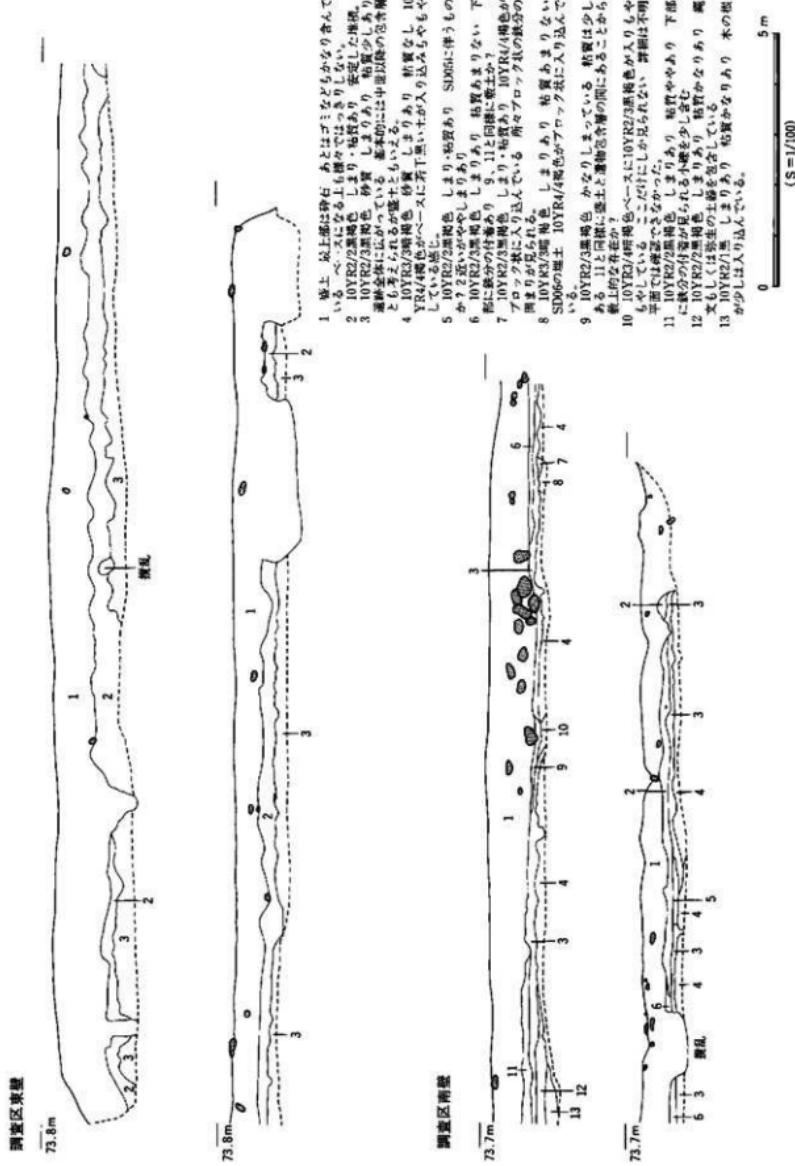
II区の基本層序は、第7図に示したように、7層から形成されている。第1・2層は、盛土である。遺物も含んでいるが、それは本遺跡に伴うものであるかどうかは判別しがたい。第3～5層は、遺物包含層である。第4層は、確認できない箇所もある。第5・6層が遺構面となる。第6・7層は、基盤となる褐色土層で、いわゆる「地山」と呼ばれる層である。第7層には、段丘疊と思われる円礫が混入している箇所が



第6図 油庫擾乱部分掘削時の西壁



第7図 II区堆積状況模式図



第8図 II区堆積状況図

確認できた。I区では各層を時代別の造構面として捉えることに成功しているが、II区では困難であった。また、I区では明黄褐色砂層としている地山面は、本地点の第6層以下に該当する。

第2節 遺構

平成11年度に調査したII区では、住居跡5軒、溝27条、土坑112基、集石造構3基、不明造構8基を検出した。前述したようにII区は、建設省国道工事事務所跡地である。造構面及び包含層の上には、人為的と思われる盛土が散かれていたが(第6~8回参照)、ところどころ、廀舎や倉庫などの基礎工事に伴う大規模な擾乱が、基盤となる褐色土層(いわゆる地山層)にまで達していることがあった。また、多くの造構がその褐色土層に掘り込まれているが、その層はすこぶる砂質である。そのため構築された造構も、廃絶後は比較的短時間に風雨によって土砂等が堆積・移動し、埋没あるいは破壊された可能性がある。つまり造構を形成している土と同色・同質の土が埋土となるため、検出は極めて困難であり、小規模な造構は検出できないこともあったと思われる。そうした状況のなか、造構検出が行われたので、ここに確認できた造構は比較的明瞭なプランを有していたと言える。以下、各造構の種類ごとに順次説明を加えていくことにする。なお、造構を分類する上で、本報告書としての定義を設けているが、それぞれの定義で挙げている条件は、必ずしもすべて満たされているわけではないことを予め断っておく。また、各造構の規模等を示す測量値については、別表にまとめた(第3~10表)。出土遺物についての記述の中に挙げている遺物点数は、接合前の破片数を示す。

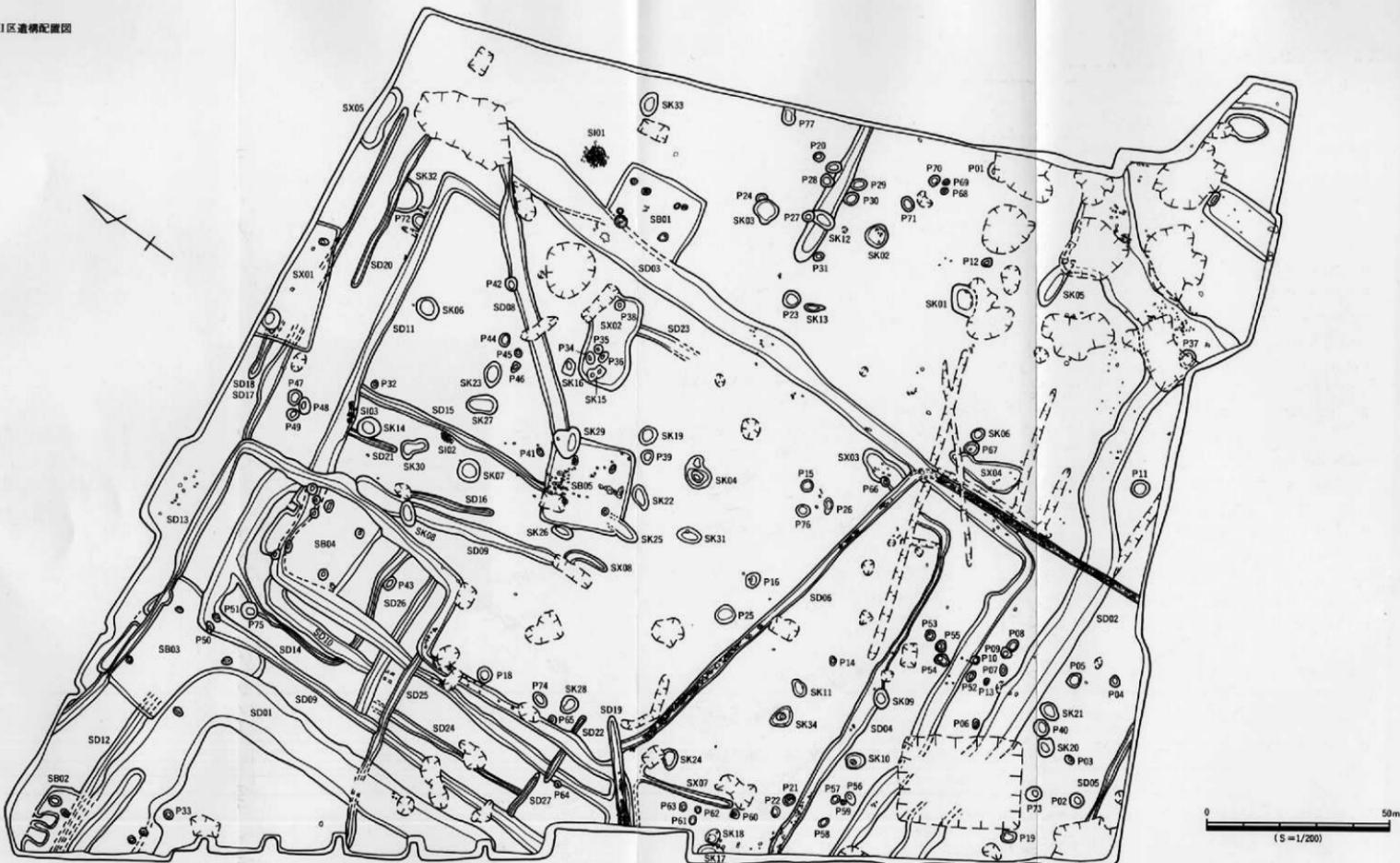
住居跡(SB)

5軒検出した。ここでは平面形のプランが確認でき、それに伴う柱穴と思われるビット群があり、さらには出土遺物にまとまりのあるもの、また炉跡・カマドや焼土といった屋内施設を持つものをいわゆる「住居跡」と定義し報告することにした。いずれも溝等の一部や大半が破壊されているので、全容を解明するのは困難であった。したがってここでの記述は、調査の過程及び結果において確認できたことのみを記載するにとどめる。第1号より順に説明する。なお、造構を図化するにあたっては、原則として以下のようにした。縮小率は住居跡の平・断面・エレベーション図がS=1/50、住居跡内ビットの断面・エレベーション図がS=1/20、そのほかカマド部分のように、その住居跡の特徴を示している図等はS=1/20とした。検出した礫の断面や焼土は、それぞれスクリーントーンで表現した。基本的には遺物の出土状況はその出土位置を点で図示し、必要のあるものについてはその遺物番号を示したり、遺物出土状況図を掲載したりした。

第1号住居跡(SB01)

+2b+3b+2c+3cグリッドにまたがる範囲で検出した。東側の辺は南北方向に縦走するSD03によって破壊されているため、正確な形や規模は不明と言わざるを得ない。しかしSD03を越えてまで西側へ伸びていないことなどから、一辺約5mで隅丸方形の平面形を呈すると考えられるが、ビットの位置から判断すると、やや南北方向に長い可能性もある。

SB01自体の堆積状況は比較的単純で、図11のように3層に分けることができた。四分法により土層観察用ベルトを残しながら、底面に向かって慎重に掘削を進めたが、床面と思われる箇所は確認でき



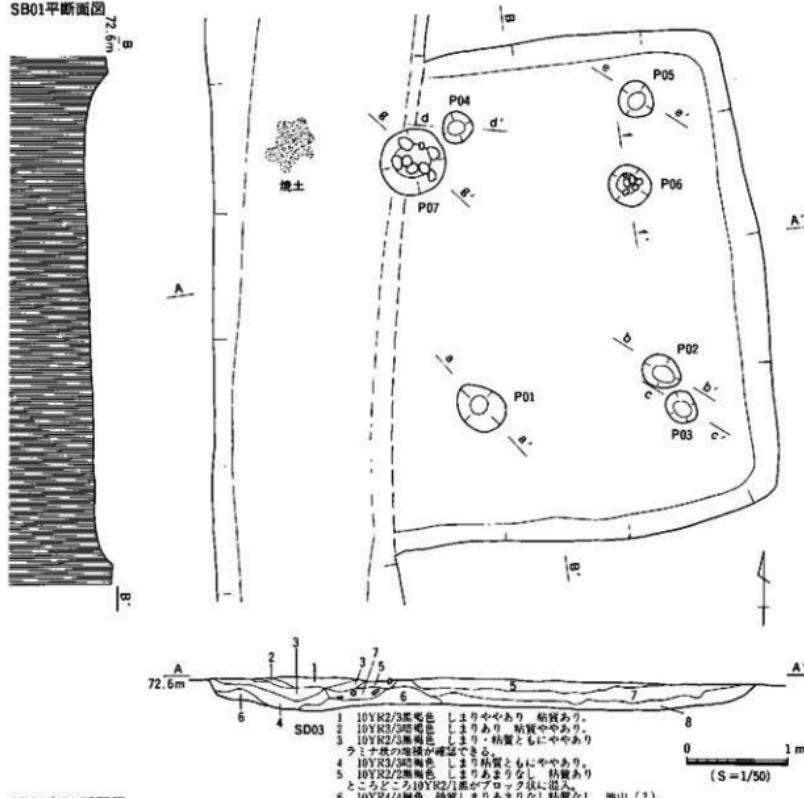
第9回 II区造構配置図

II区遺物出土位置図
(・は原則として遺物 1点を表す。)

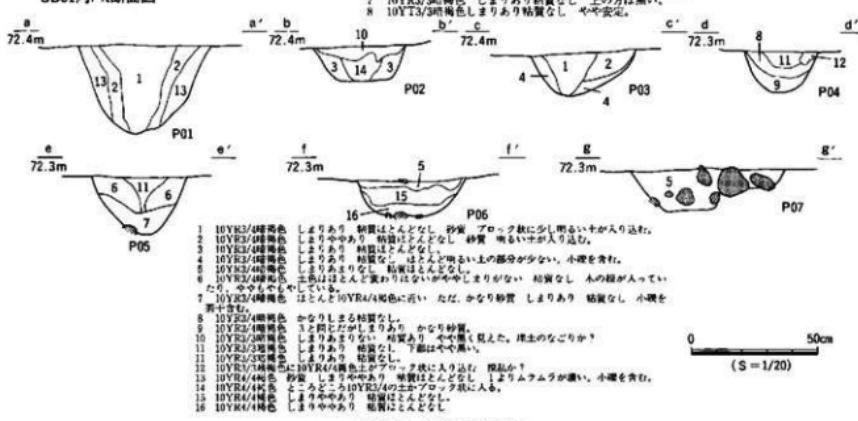


第10図 II区遺物出土位置図

SB01平面図

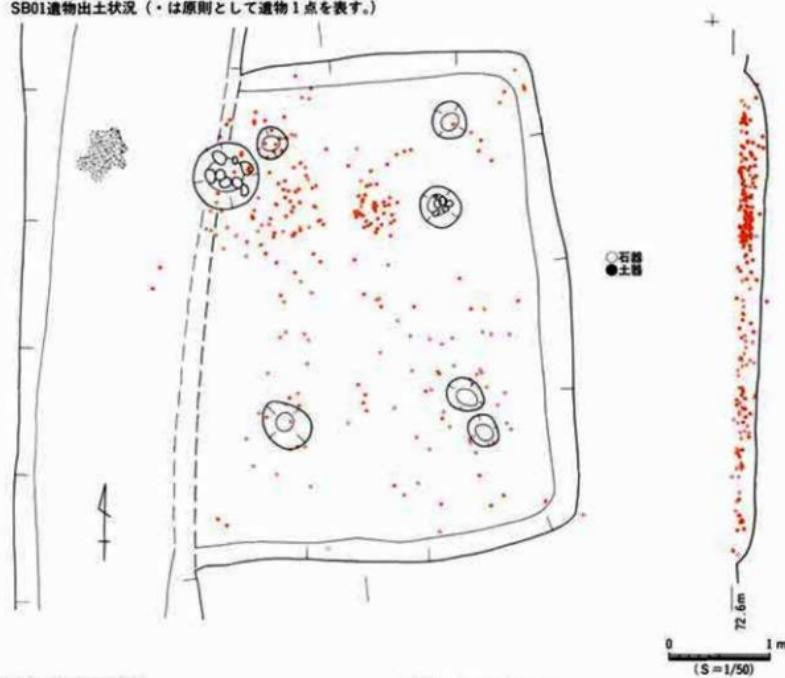


SB01内Pit断面図

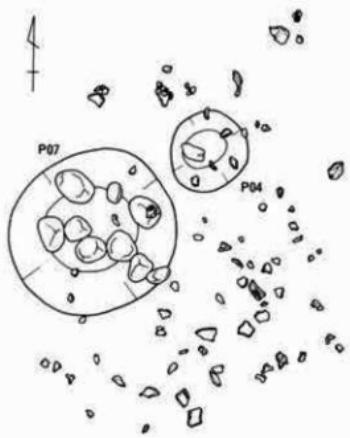


第11図 SB01実測図(1)

SB01遺物出土状況（・は原則として遺物1点を表す。）



遺物出土状況（北西部）



遺物出土状況（南東部）

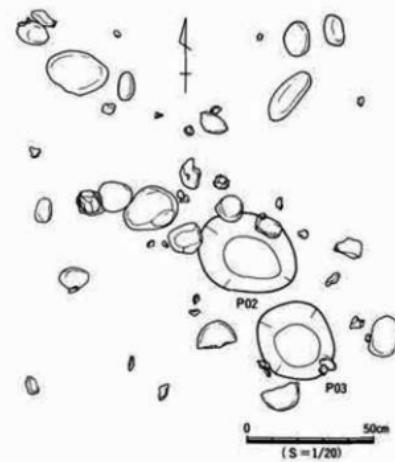
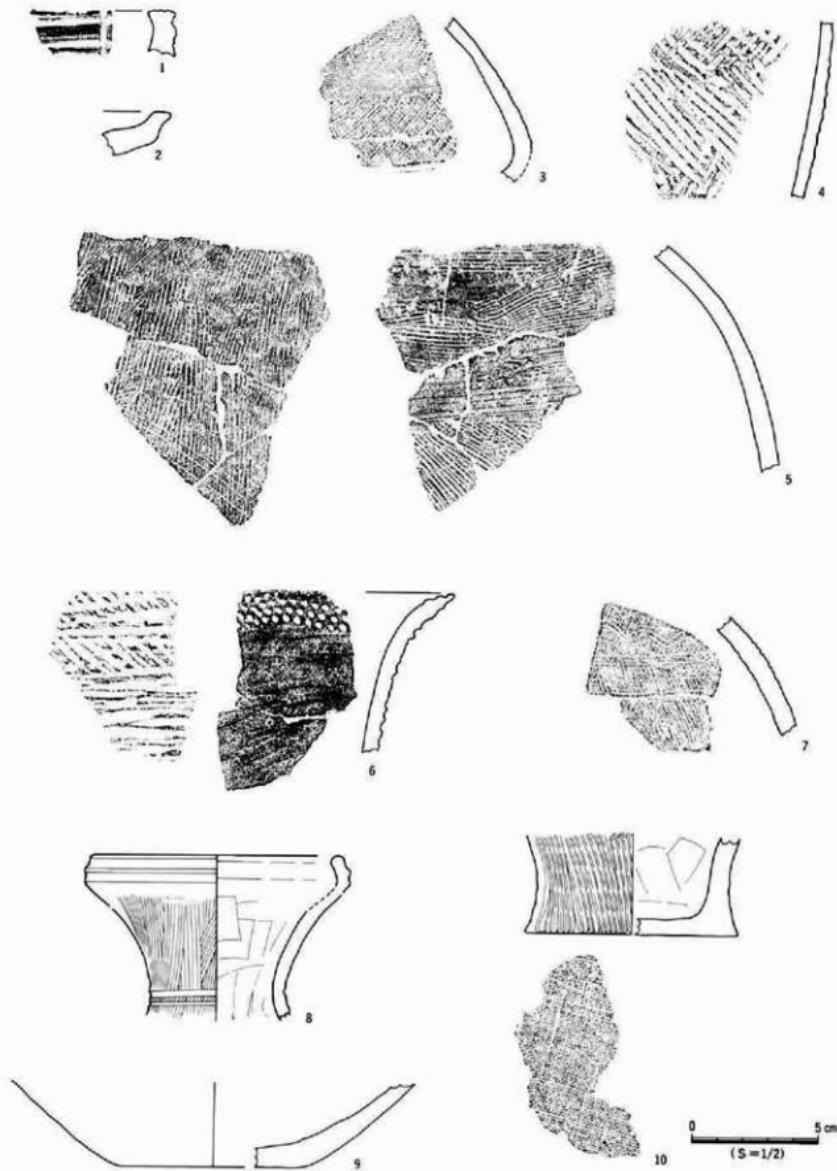
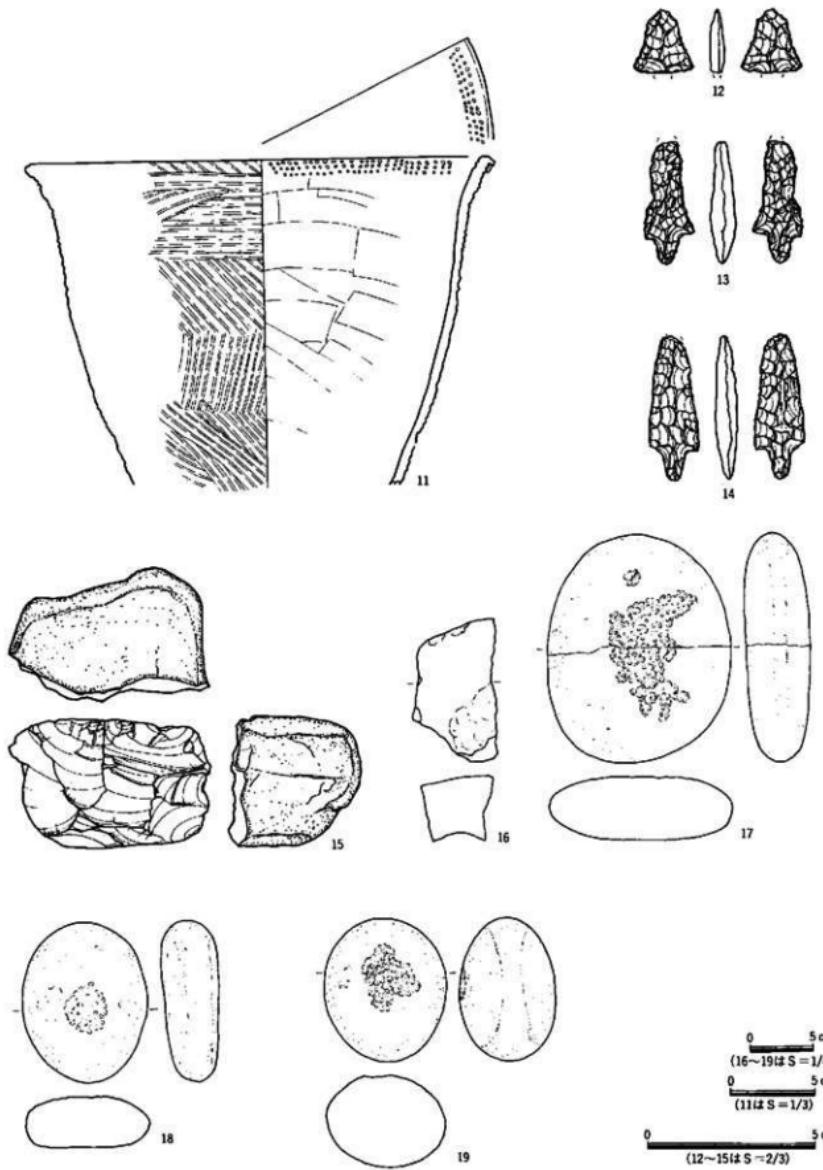


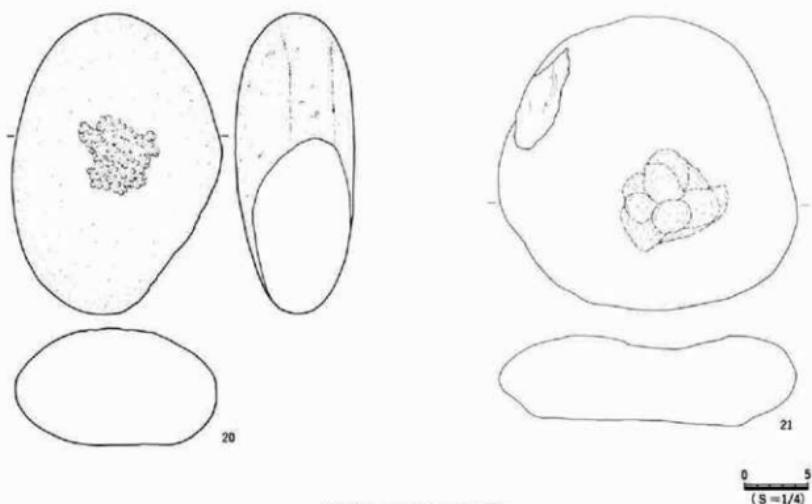
図12図 SB01実測図(2)



第13図 SB01出土遺物(1)



第14図 SB01出土遺物(2)



第15図 SB01出土遺物(3)



SB01遺物出土状況(1)



SB01遺物出土状況



11の口縁部の内面



10の底部の底面

なかった。やや硬化した箇所はあったが、その範囲については明確ではないため、あえて図示はしていない。炉跡や焼土も同様に確認できなかった。ただ本住居跡の東側を縦走するSD03の底面で1カ所焼土を確認している(第11図)。詳細は不明ではあるが、その焼土が存在する位置は、本住居跡の内側と理解することも不可能ではない。検出したレベルも本住居跡の床面に該当すると思われる面の高さとはほぼ一致する。焼土に伴う遺物は出土していない。

本住居跡に伴うピットは7基検出した。その位置・規模から主柱穴は、P01・03・05と考えられる。そのほかは詳細不明である。本住居跡の上層つまりプラン確定以前の堆積状況は、一面黒褐色土に覆われ、他所とは様相を異にしていた。+2cグリッド杭を中心とした範囲に小片の遺物が散在し、住居跡のプランが明確化する以前から比較的大きな遺構の存在をうかがわせていた。

遺物は全部で296点出土した。内訳は、繩文土器2点、弥生土器171点、土師器24点、石器99点である。繩文土器と土師器については、出土したものが小片ばかりであったので、出土破片数のみをここに記した。弥生土器と石器についてはその一部を図示した。弥生土器は、6・10・11をはじめとする中期の土器が主体を占めている。11には、接合できなかった破片(同一個体と判断できるもの)が他に多く存在するので、個体としての残存度は高いが、底部片が確認できていない。10は、11と酷似しているが、径から判断して別個体である可能性がある。石器は下呂石製の剝片が多く、石核や原石も出土している。原石は成人の拳大で、表面は摩滅していることから、遺跡の南を流れる木曾川の河原より採集した可能性がある。剝片や石核の状態から、金属器を使用した衝撃による剝離であるとの指摘もある。遺物の出土位置は第12図に示すが、その特徴として、石器類が南東1/4の部分を中心に、土器類が北西1/4の部分を中心に出土している。

全体に遺物は、基盤となる褐色土層よりや上方で出土している。ただ、床面が確認できていないため、出土位置が完全に埋土中であるとは断言できない。また主体となる時期とそうでない時期の遺物が、出土位置で明確に分けられるわけでもない。この住居跡出土の遺物を取り扱う際には、この点について注意を払う必要があるかもしれない。

なお、本住居跡の帰属時期は、その形状や出土遺物などから判断すると、弥生時代中期である可能性が高いと思われる。

第2号住居跡 (SB02)

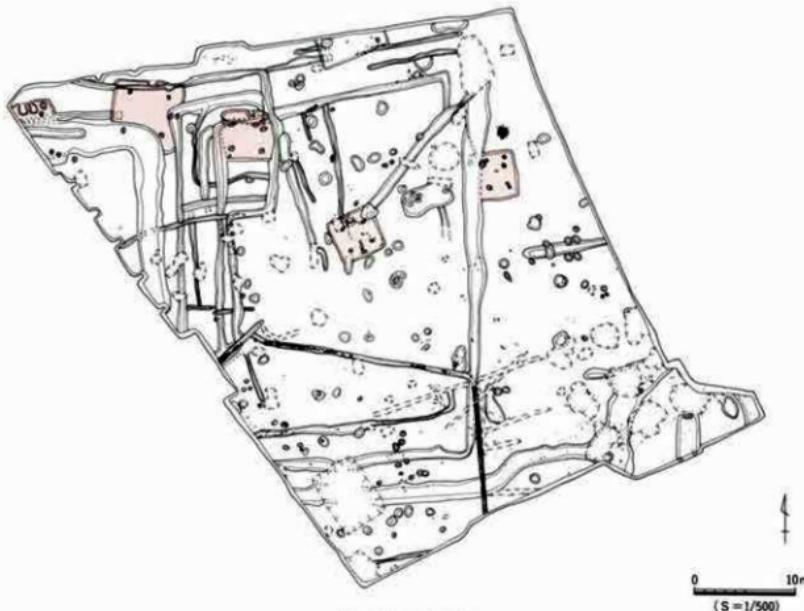
本住居跡は、調査区の最も北西端の4a・4bグリッドで検出した。西側半分は、調査区外の一般道路下となるので調査できなかった。本住居跡の検出は、平面形プランよりカマドが先であった。重機による盛土除去の直後に、カマドに使用されているのと同じ礫が確認できた。その礫は、カマド以外の他所ではほとんど出土せず、かなり被熟した焼土とともに検出されたので自ずとカマドと知れた。本住居跡の平面形はおそらく隅丸方形と考えられる。規模は南北の辺が約7mである。東西の長さは不明であるが、カマドの中心が住居の中心軸と仮定するならば約5mとなる。しかしそうすると、平面形は南北方向に長い四角形ということになり、本区で検出した他の住居跡と比較するとやや様相を異にする。あるいは平面形はほぼ正方形を呈しており、カマドの位置が東に偏っているのかもしれない。現状では詳細不明である。

本住居跡も他と同様に、後世の溝によって破壊されている。中央部をSD01が通過しているため、検

出できた遺構は南北に分断されている。そのため柱穴などのピットも検出は困難を極めた。はっきりとした床面は、他の住居跡同様に確認できていない。貼り床のように堅く叩き締めたり、他所より土を運び入れた様子もなかった。

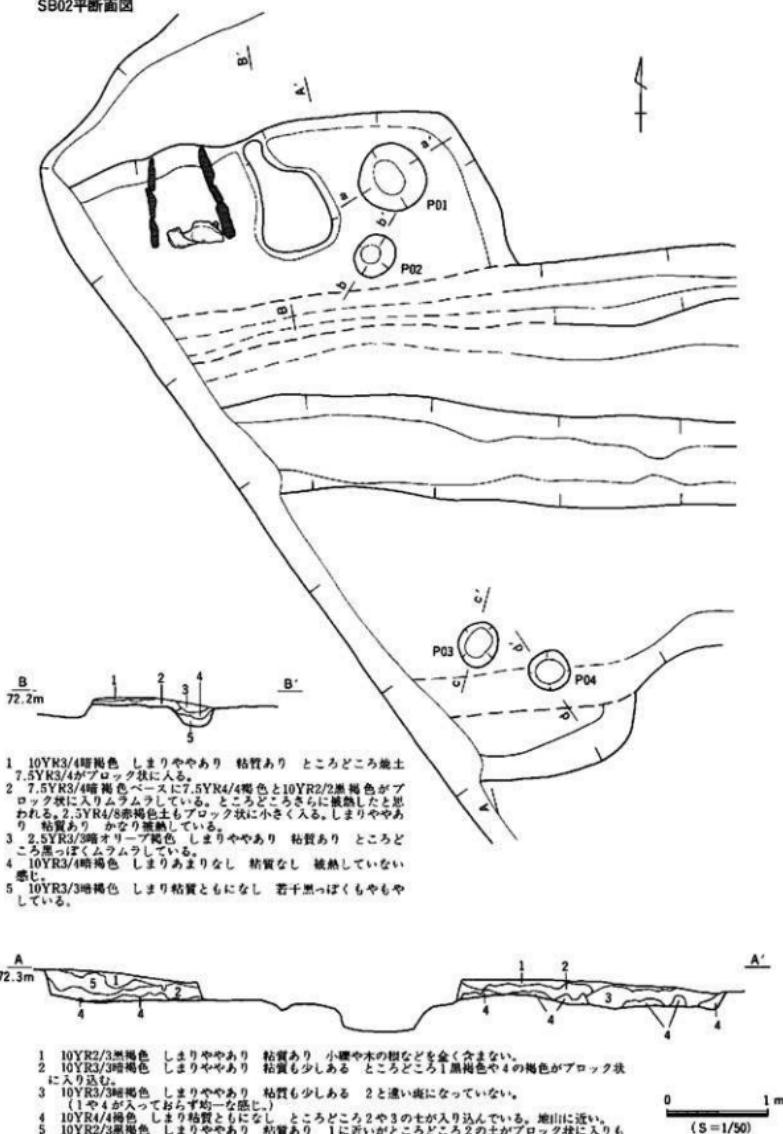
カマドは、I区で検出した住居跡に使用されていたのと同様に、軟質な礎（『野尻遺跡I』第5章第4節参照）で構築されている。本住居跡が確認された4a・4bグリッド周辺は、盛土が薄く、遺構面に達するまで削平されており、本カマドが検出された時には、既に上部が破壊されてしまっていた。しかし、下半分については残りがよく、その構造を伺い知ることができた。カマドの基礎となる軟質な礎は、南北方向に東西2列に並べられていた。その列は平行ではなく、南側（住居の内側）に向かってやや開き気味に並んでいた。カマドの焚き口が広く、壁際（北側）部分が煙道に向かってやや狭くなる構造であったことがわかる。焚き口付近には、上部構造の崩落と見られる被熱した土塊が確認できた。規模としては、本遺跡の中では平均的な大きさである。本住居跡の場合、カマドの東側横に立面形が台形状の硬化部分があった。検出時に数点の小片遺物を確認している。詳細は不明であるが、カマドに伴う調理台の可能性も考えられる。なおカマドに伴う煙道ははっきりとは確認できていない。

遺物は、106点出土した。内訳は、縄文土器38点、弥生土器21点、土師器25点、須恵器5点、山茶碗1点、石器16点である。遺物は主に北半分から出土している。分断された南半分からも少量の遺物が出土した。ほとんどが小片で、本住居跡の性格を決定づける根拠には乏しい情報量しか供給できない。



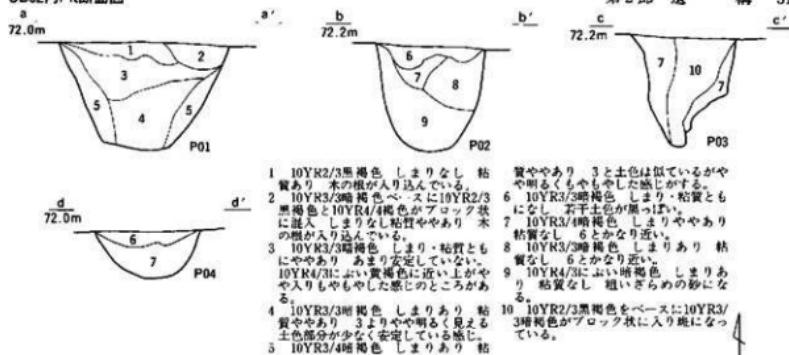
第16図 SB位置図

SB02平断面図

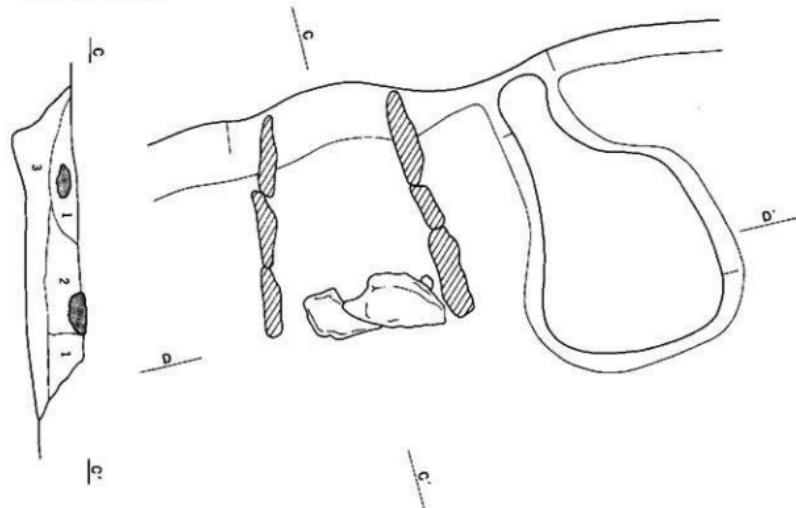


第17図 SB02実測図(1)

SB02内Pit断面図



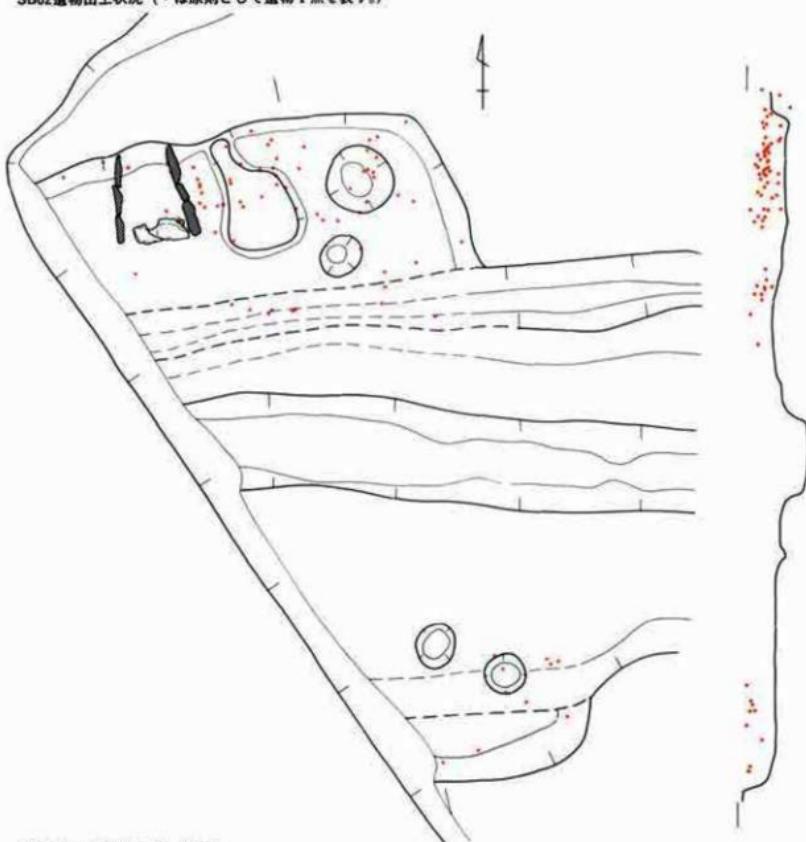
SB02カマド平面図



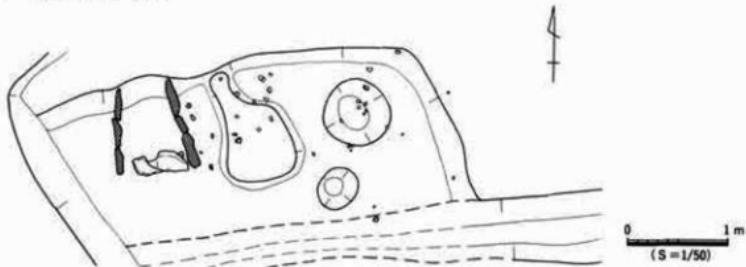
1. 10YR2/3暗褐色の中15YR4/4褐色が斑点状に混入 砂質 しまりあり 入り組み合はそれほど多くない。(かまどの天井に剥離された焼土と共に落ち込んだものか)
 2. 5YR4/8赤褐色 被熱大 わずかに黒色土混入 砂質 しまりあり (かまどの火床に剥離された焼土と共に落ち込んだものか)
 3. 10YR2/3に地山以上10YR8/6赤褐色点状に混入したものの 砂質 しまりあり。
 4. 10YR2/3暗褐色 砂質 しまりあり 地山の混入少ない 硬石の配列。
5. 10YR2/3暗褐色にわずかな10YR5/8黄褐色土の混入あり 砂質 しまりあり。
 6. 10YR2/3奥褐色に10YR5/8黄褐色が斑点状に混入 砂質 しまりあり マーブル状になっている。
 7. 10YR5/6赤褐色 砂質 粘土質 黒くはってある様。
 8. 10YR2/3暗褐色と10YR6/8明黄褐色が斑点状に合っている 砂質 しまりあり。
 9. 10YR2/3暗褐色と10YR6/8明黄褐色が斑点状に合っている 砂質 しまりあり。

第18図 SB02実測図(2)

SB02遺物出土状況 (・は原則として遺物1点を表す。)



SB02カマド付近遺物出土状況



第19図 SB02実測図(3)

状態である。カマド付近からも、同様に土師器の小片を中心に出土している。図示した土師器甕の底部と須恵器の蓋が、カマド付近から出土している。出土状況は、カマド崩壊に伴うものと考えられることから、本住居跡の帰属時期を探る手がかりとなる。そのほかの遺物は、ほとんどが埋土中からの出土である。埋土には、SD01によって破壊される以前のSB02の埋土とSD01構築後の埋土があるが、明確な判別は困難であった。従って、縄文土器や弥生土器といった比較的古い土器片が混入した時期は定かではない。石器は、製品と思われるものは確認できず、下呂石製の剥片がそのほとんどであった。

なお、本住居跡の帰属時期は、その構造や出土遺物から判断すると古墳時代後期である可能性が高いと思われる。

第3号住居跡（SB03）

SB02の東隣（3a・2a・3b・2bグリッド）で検出した。本住居跡も南西隅をSD01に破壊されている。また、カマド付近でも、SD13がカマドの一部（南端）を破壊しながら、北東隅から北西隅へ貫通している。しかしながら、そのほかの部分は、多く残存しているため、平面形は隅丸方形であることがわかる。一辺は約7mで、本II区の中では面積的に最大であると推定される。検出面において、平面形プランを確定後、人力掘削により慎重に調査を進めたが、貼り床等の面は検出できないまま褐色土層に到達した。従って、明確に床面と思われる面は確認できていない。ピットは4基検出した。位置・規模等から判断してこれら4基とも主柱穴になると思われる。P01は、SD01の床面で検出されたが、褐色土層で確認できたことなどから本住居跡に伴うものと判断した。

カマドは、SB02同様に軟質な磚を使用している。本住居跡のカマドも後世の削平によって上部は破壊されている。また、前述のようにSD13によって南端も破壊されている。しかし残存状況は悪くなく、構造は確認できたので、平面・断面図を図示した。SB01同様にやや焼き口付近が広がる構造になっている。推定できる規模は平均的であろうと思われる。

遺物は、168点出土した。内訳は、縄文土器が67点、弥生土器が26点、土師器62点、須恵器1点、石器12点である。本住居跡でもカマド付近で良好な遺物が出土している。それ以外の部分では、詳細不明な小片ばかりである。24は、土師器甕の口縁部であるが、カマド付近より出土している。26の須恵器は、ややカマドより離れた位置（SD13近く）から出土している。

なお、本住居跡の帰属時期は、構造や出土遺物から判断すると、古墳時代後期である可能性が高いと思われる。

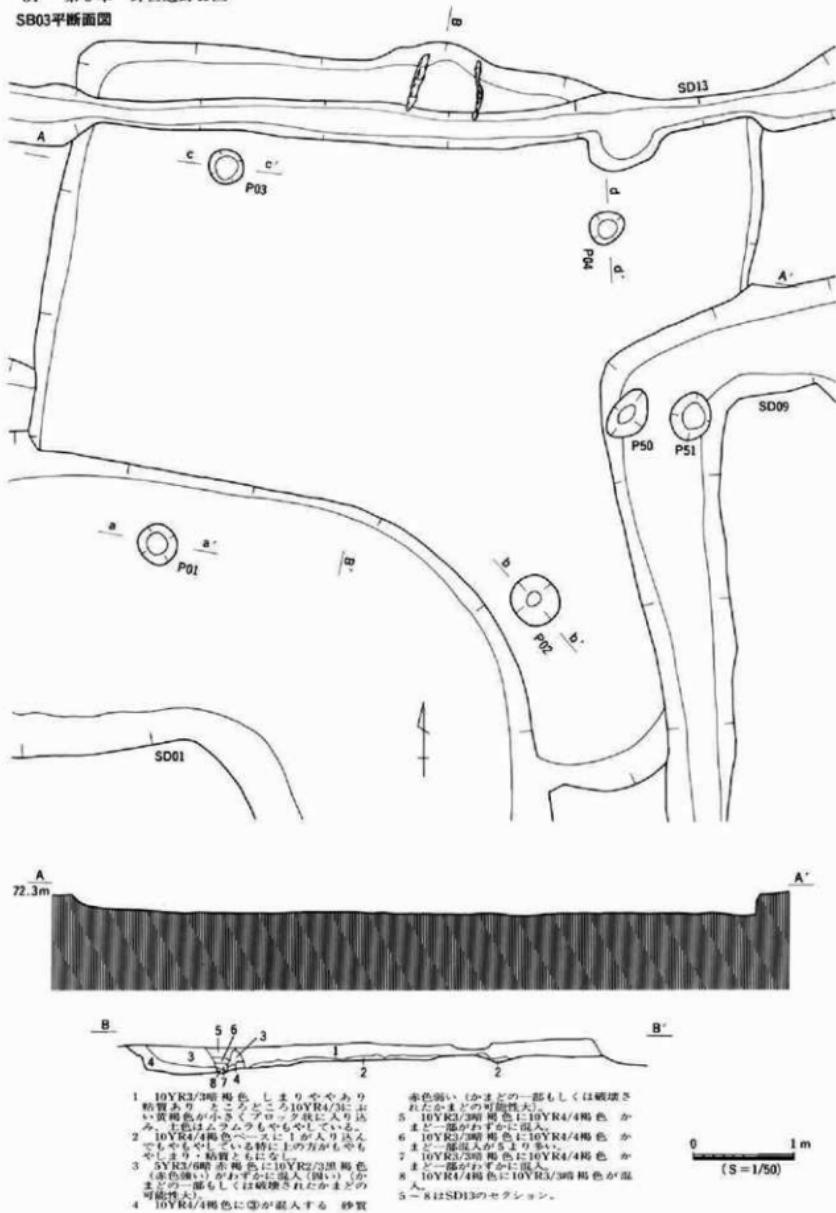
第4号住居跡（SB04）

SB03の南東にあたる位置の2b・1bグリッドで検出した。本住居跡も例に漏れず、後世の溝によってその一部を破壊されている。SD11が、本住居跡の西辺を通り、東に直角方向に曲がり、カマドをかすめるようにして住居跡の内部を東西に通過している。そのため、カマド付近はやや不明瞭な部分がある。幸いにも、カマドは完全には破壊されていない状況であった。

本住居跡は、溝が縦横に集中する区域内にあり、平面形プランを確定するのは困難であったが、カマドの存在から本住居跡の範囲を推定した。まず、周間に巡っている溝群の新旧関係を見極めながら、

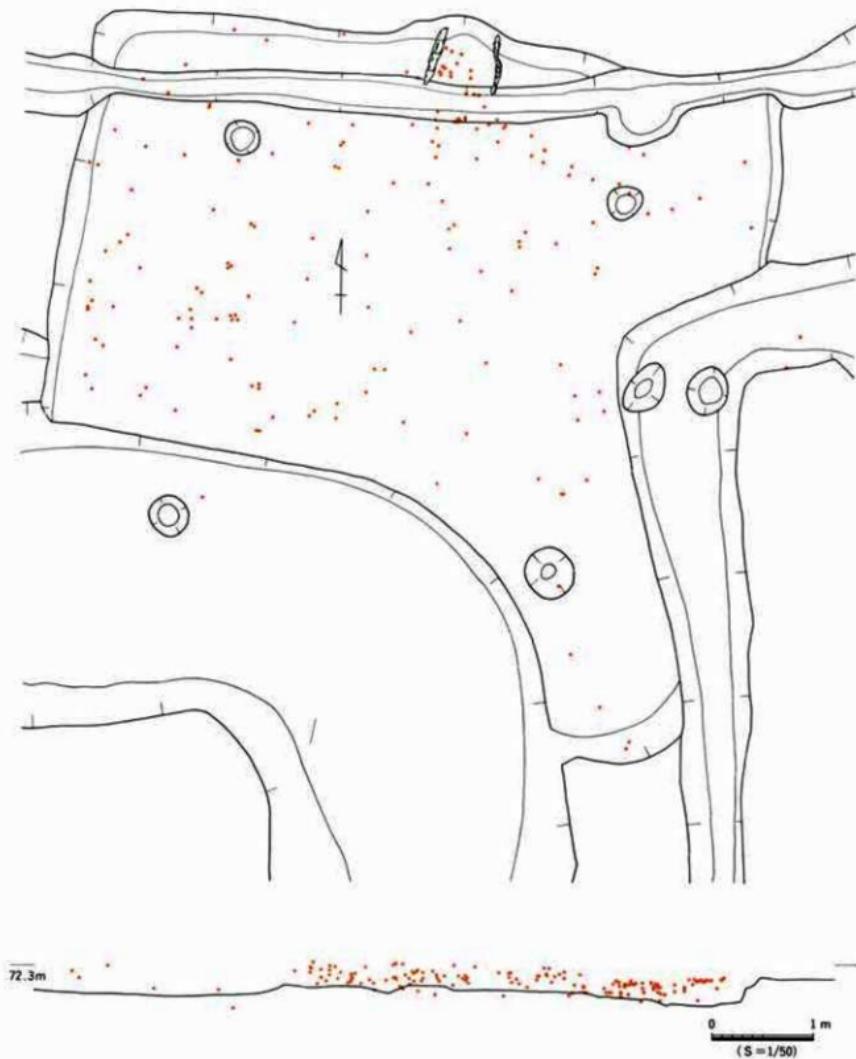
34 第3章 野釜遺跡II区

SB03断面図



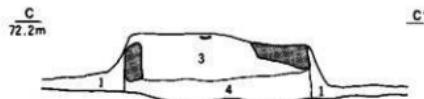
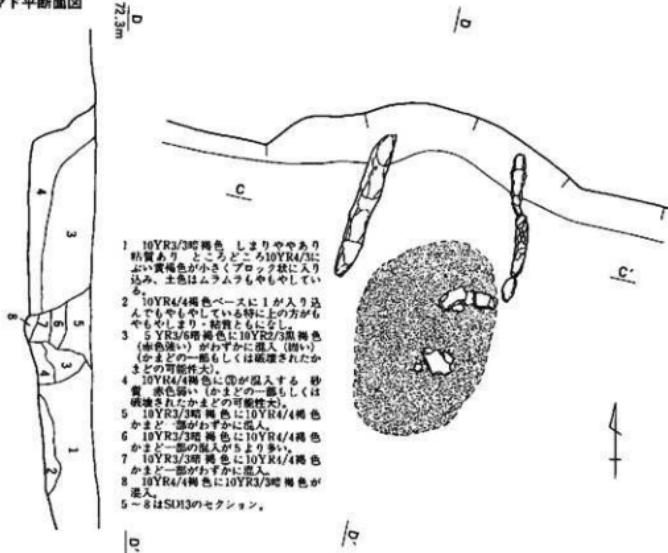
第20図 SB03実測図(1)

SB03遺物出土状況 (・は原則として遺物1点を表す。)



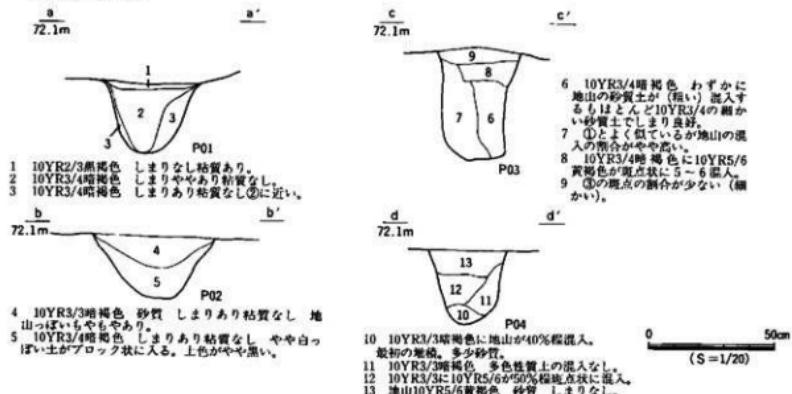
第21図 SB03遺物出土状況

SB03カマド平面図

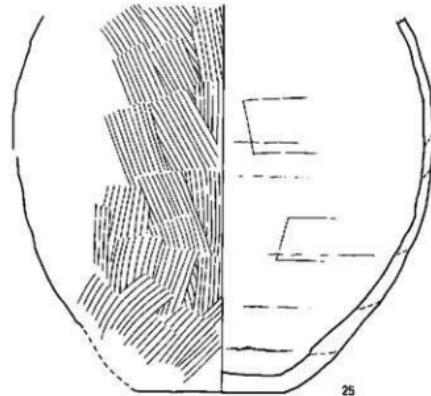
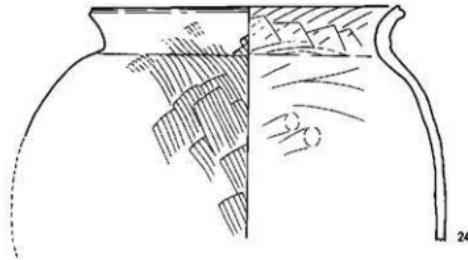
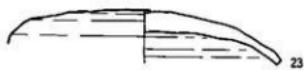
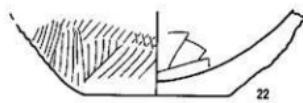


0 1m
(S=1/50)

SB03内Pit断面図



第22図 SB03実測図(2)



0 5 m
(24, 25± S = 1/3)

0 5 m
(22, 23, 26± S = 1/2)

第23図 SB02・03出土遺物

最も新しいと思われるものから順に掘削した。その後、住居跡内部の埋土を四分法により人力掘削で慎重に調査を進めた。本住居跡は、一辺5mの隅丸方形であると思われる。II区で検出した5軒のうちでは竪穴が最も深く、しっかりととした壠方を持つ。東西の辺は溝により破壊されているが、残っている南北の辺によって、そのことは確認できた。カマド調査の際には、基盤となる褐色土層を掘り込んで南北縦断トレチを入れ調査したが、貼り床等の明確な床面は検出できなかった。ピットは、8基検出した。P01・02は、他の遺構との関わりのない部分での検出であったので、問題なく本住居跡に伴う（主柱穴の可能性が高い）ものであると言えるが、他のP03～08については必ずしもそうであるとは断言できない。ただ、その位置・規模から推測すると、P01・02・04が主柱穴である可能性が高い。

カマドは、他の住居跡と同様に軟質な礫を使用して構築されていた。本住居跡のカマドもSB01・02同様に南側の礫と礫との間が広く、焚き口方向に広がる構造である。中央部には、立柱石と思われる柱状に立つ礫が確認できた。

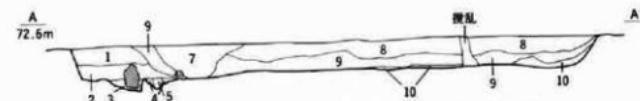
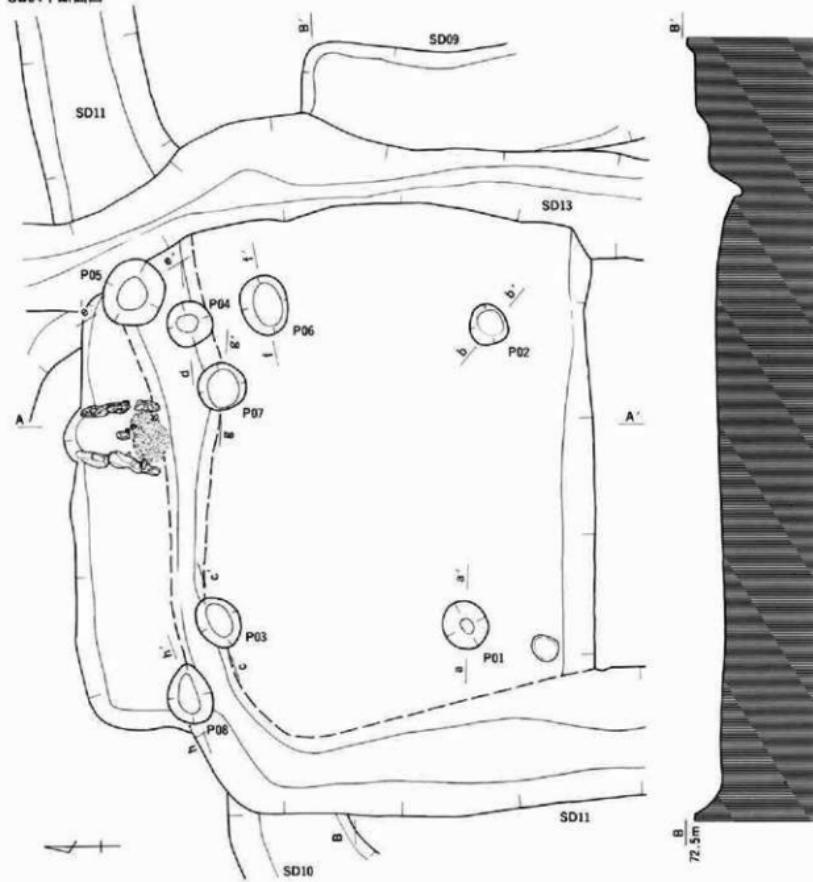
遺物は、全部で274点出土した。内訳は、縄文土器41点、弥生土器95点、土師器59点、須恵器8点、山茶碗6点、中世以降の土器類2点、石器63点である。本住居跡は、竪穴が深く埋土量が多い方であるが、出土した遺物量は多くない。また、出土遺物は小片が中心で、しかも埋土からの出土が多いため、資料的価値が高いとは言い難い。それは出土遺物の内訳点数からも容易に想像できる。31の須恵器は、最もわかりやすい資料である。出土地点は住居跡内南東隅のSD13付近の埋土中であり、本住居跡の帰属時期や性格を決定する資料としては不安が残る。カマド付近でも遺物は出土しているが、やはり小片（土師器が主）が多く、同様な状況である。ただ、SB02・03とその形状やカマドの構造が酷似しているということから、SB02・03の帰属時期にかなり近いと考えても差し支えないと思われる。

第5号住居跡（SB05）

SB04の南東、SB01の西にあたる+1c、+1dグリッドで検出した。SB02～04の密集地からはやや離れて位置している。本住居跡もSD08・SK29等によってその一部を破壊されているが、一応四辺が確認できる最も良好な残存状況である。平面形は隅丸方形で、一辺は約4.8mと規則的にやや小さめである。明確に床面は検出できていない。しかし調査の過程で、散乱したカマドの礫（後述）や小片の遺物が混入しなくなった部分があった（一部分はかなり堅くしまっていた）。その下は基盤となる褐色土層であるが、SB01～04の例とは異なり、本住居跡の場合はその褐色土層に小礫が多く混入していた。そのため、そうした礫層を床面とするのではなく、その上に少し土を入れて床面としていた可能性がある。それが遺物が混入しなくなった部分（硬化部分）ではないかと推測できる。残念ながら四分割の断面でも、その部分は面として明確に検出することができなかった。図示した住居跡断面図の最も下の層がその部分であるが、住居跡内部全体に広がっているわけではなく、一部分しか検出できなかったりやや堆積が厚かったりと、一様に人为的に設けられたとは考えにくい点が多くある。ゆえに、床面と断定するには不安が残る。

本住居跡も例に漏れずカマドが設けられていた。基礎となる礫は、SB02～04同様に軟質な礫であった。ただ、検出した時点では既に破壊され、基底となる礫が若干、本来のカマド部分に残存している状態であった。住居跡内部にはその軟質な礫が碎けたものが北西部を中心に散乱していた。20～30cm

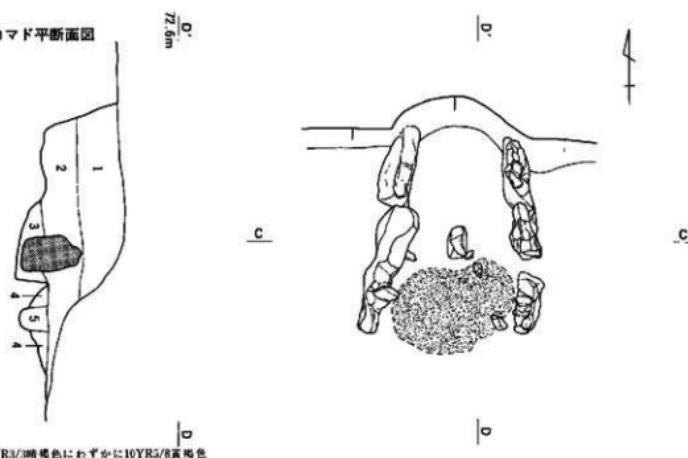
SB04平面図



- 1 10YR3/3暗褐色にわずかに10YR5/8黄褐色が混入。砂質。SB04塵土と同様。
- 2 1に被覆土がまんべなく混入している。10YR3/3暗褐色に10YR5/8黄褐色の赤色がほのかにかかった感じ。砂質。
- 3 10YR5/8黄褐色塊山土に10YR2/3暗褐色が汚く混入。砂質。(人为的に掘って埋めた)かまどの立柱石柱。柱間に盛り凹形。被熱なし。
- 4 5 YR4/8赤褐色。被熱休面。かまどのかき口の床面。堆山が被熱を受けただけのもので、固く焼きしていない。砂質。
- 5 10YR3/2暗褐色。砂質。被熱の痕入なし。黄色土土の少し底点状に混入。被熱地山を削っている。
- 6 住居用の塵土。かまどの土ではないのでは、まったく被熱を受けて。砂質。
- 7 10YR3/3暗褐色。しまり少しあり。粘質あり。7がブロック状に混じる。
- 8 10YR2/3暗褐色。しまりあきらか。粘質あり。8より弱い。7がブロック状に混じる。8より7の入っている割合が多い。もろいのが多い。
- 9 10YR2/3暗褐色。しまりなし。粘質あまりない。やや7が混じる。地山に近い。
- 10 10YR4/4褐色。しまりなし。粘質あまりない。やや7が混じる。地山に近い。

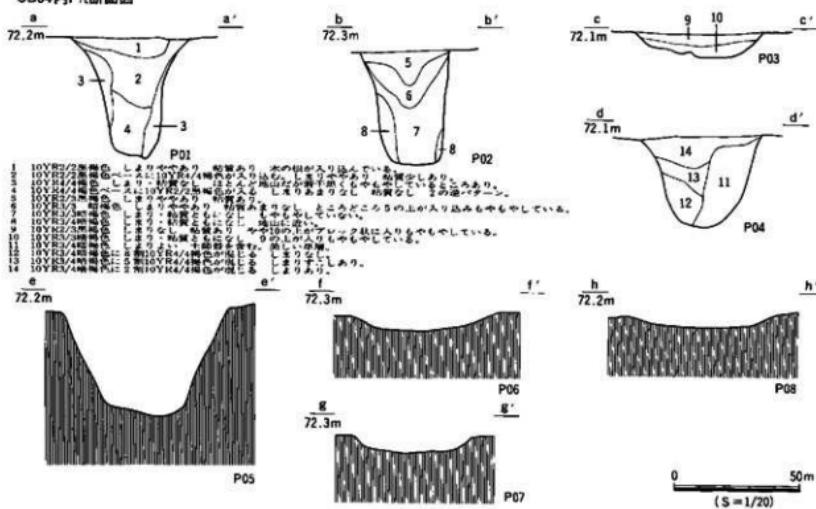
第24図 SB04実測図(1)

SB04カマド平断面図



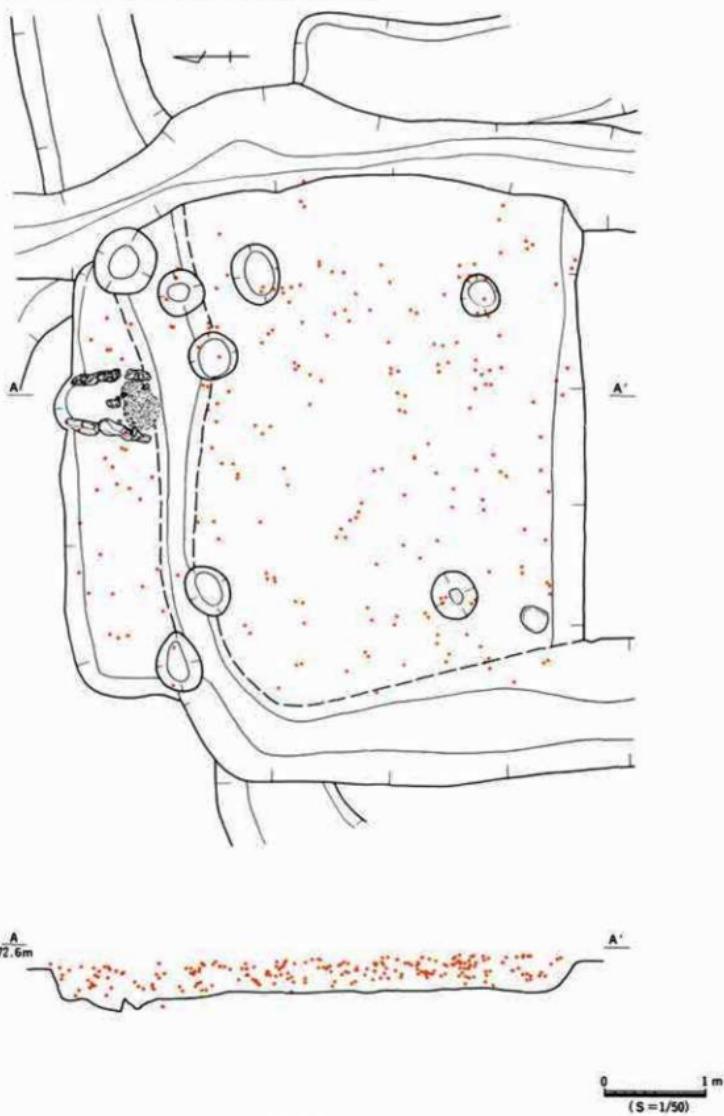
1. 10YR3/3暗褐色にわずかに10YR5/8赤褐色が混入。砂質。SB04風土と同様。
2. 1.5m被熱土がまんべなく混入している。10YR3/3暗褐色に10YR5/8赤褐色の赤色からはのこにかかる熱風。砂質。
3. 10YR5/8深褐色風化土層に10YR3/3暗褐色の赤色からはのこする風。砂質。
4. 3YR4/8赤褐色。被熱表面 かまとだき口の床面、地山が被熱を受けただけのもので、固く固まっている。砂質。
5. 10YR3/3暗褐色。砂質。被熱の進入なし。黒色土は人の少し足跡点状に混入。被熱地山を削つてある。
6. 住居地の覆土。かまとどの土ではないのでは。まったく被熱を受けた。砂質。

SB04内Pit断面図

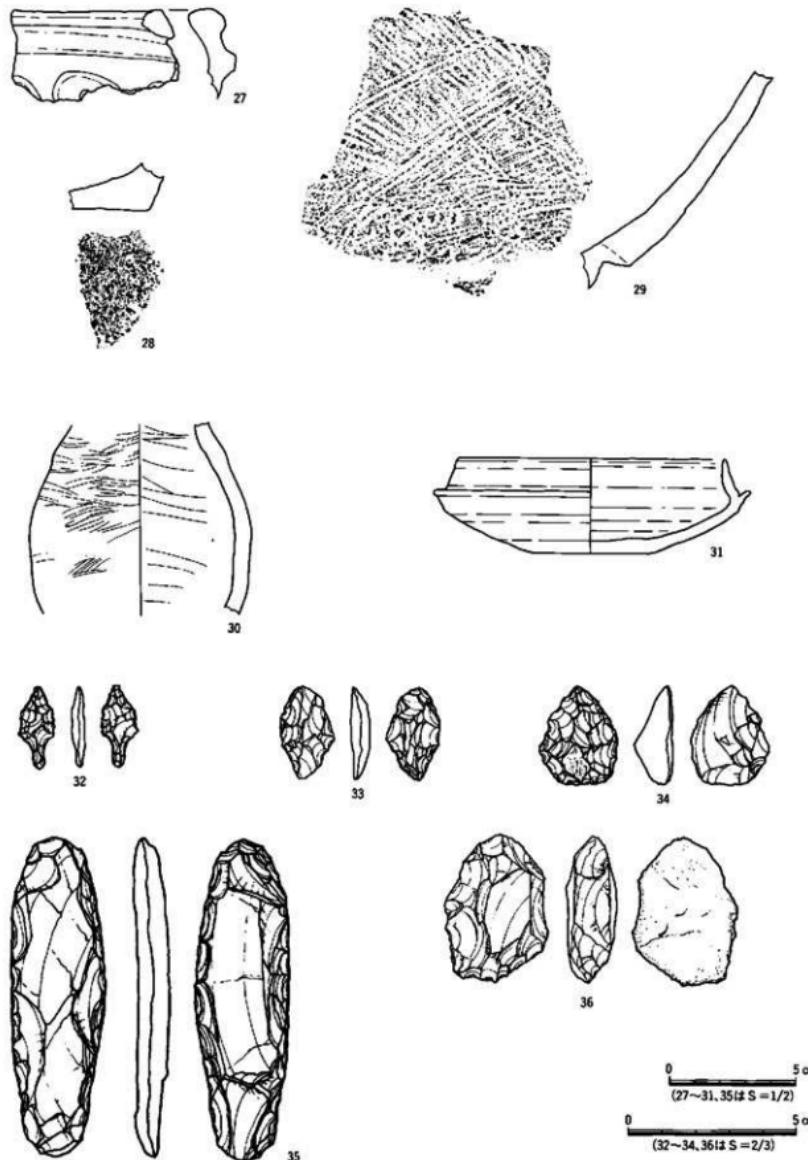


第25図 SB04実測図(2)

SB04遺物出土状況 (・は原則として遺物1点を表す。)

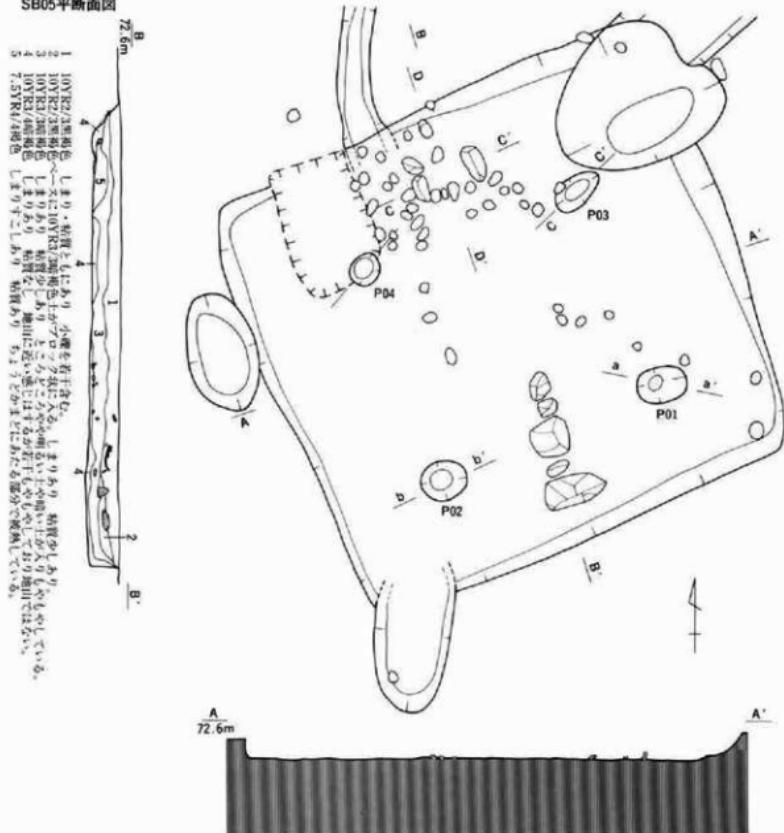


第26図 SB04実測図(3)

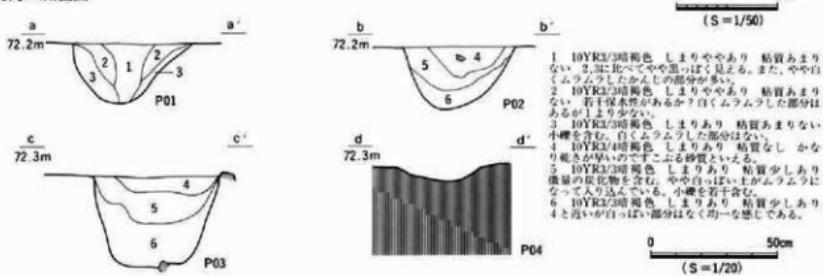


第27図 SB04出土遺物

SB05平面図

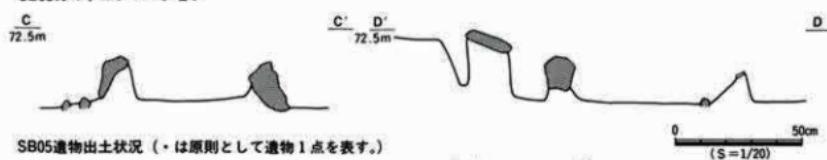


SB05内Pit断面図

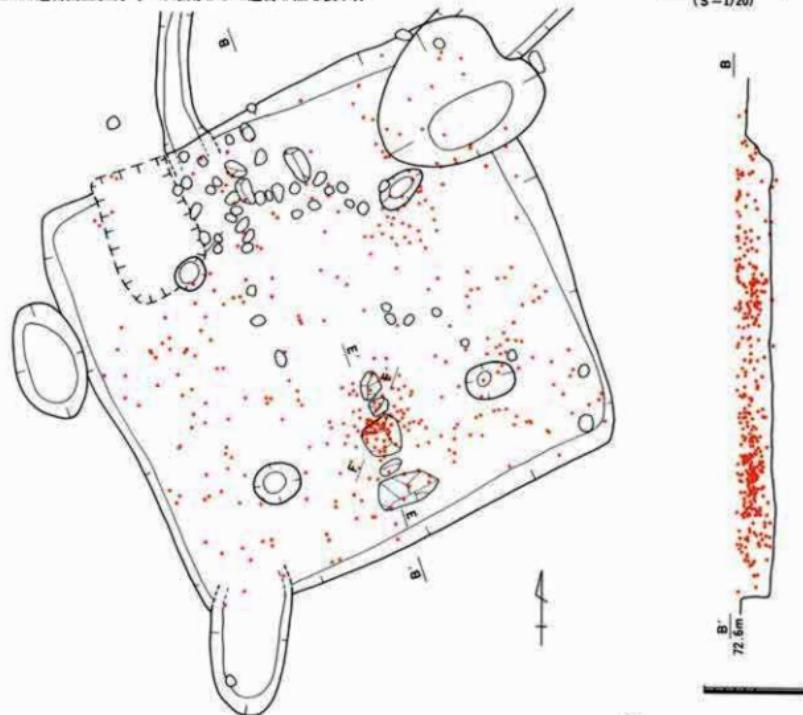


第28図 SB05実測図(1)

SB05カマドエレベーション



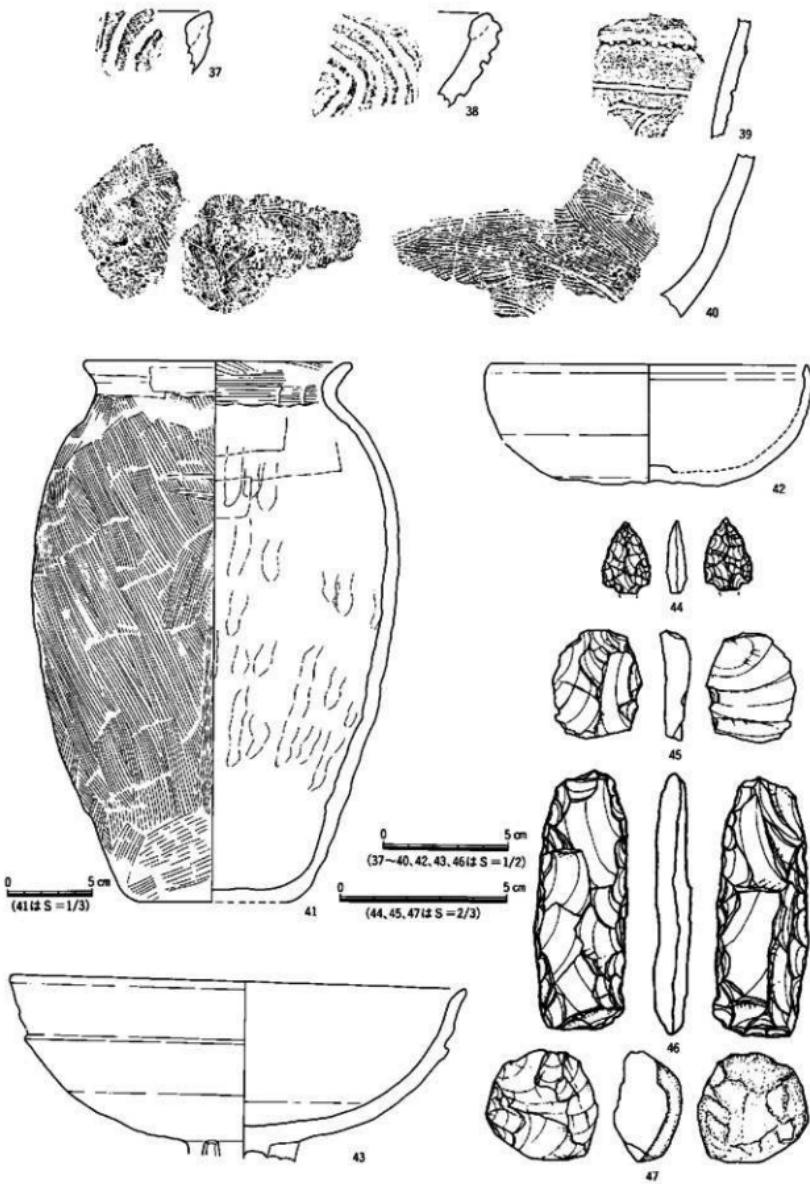
SB05遺物出土状況 (・は原則として遺物1点を表す。)



SB05南部遺物出土状況



第29図 SB05実測図(2)



第30図 SB05出土遺物

大の礫が数個と小片は無数にあった。散乱範囲は、住居跡内部にとどまらず西辺の外側にも広がっていた。そのことから、本住居のカマドは住居の上部構造が崩壊した後に、破壊されたと推測できる。散乱していた礫のほとんどが、カマドから見て南西方向に集中していることから、北東方向から圧力が加わり破壊されたと考えられる。

遺物は、627点出土した。内訳は、繩文土器31点、弥生土器57点、土師器331点、須恵器135点、山茶碗14点、石器59点である。41の土師器甕と43の須恵器は、四分法で残した土層観察用ベルトから出土した。41については、堆積状況を示す断面図中にもその出土位置が示されている。レベル的には上層から出土しており、本住居跡の帰属時期を端的に示すものとは断言できない。ただ41は、比較的大きめの砂岩礫や土砂と一緒に混入しており、住居廃絶時に廃棄物として土砂とともに投棄された可能性がある。住居廃絶時に破壊・投棄したとする仮説はカマドの破壊とも矛盾しない。なお43は、やや下方より出土しており、本住居跡の帰属時期を示す資料としては価値が高いと評価できる。なお、本住居跡の帰属時期は、構造及び出土遺物から判断して、古墳時代後期である可能性が高いと思われる。

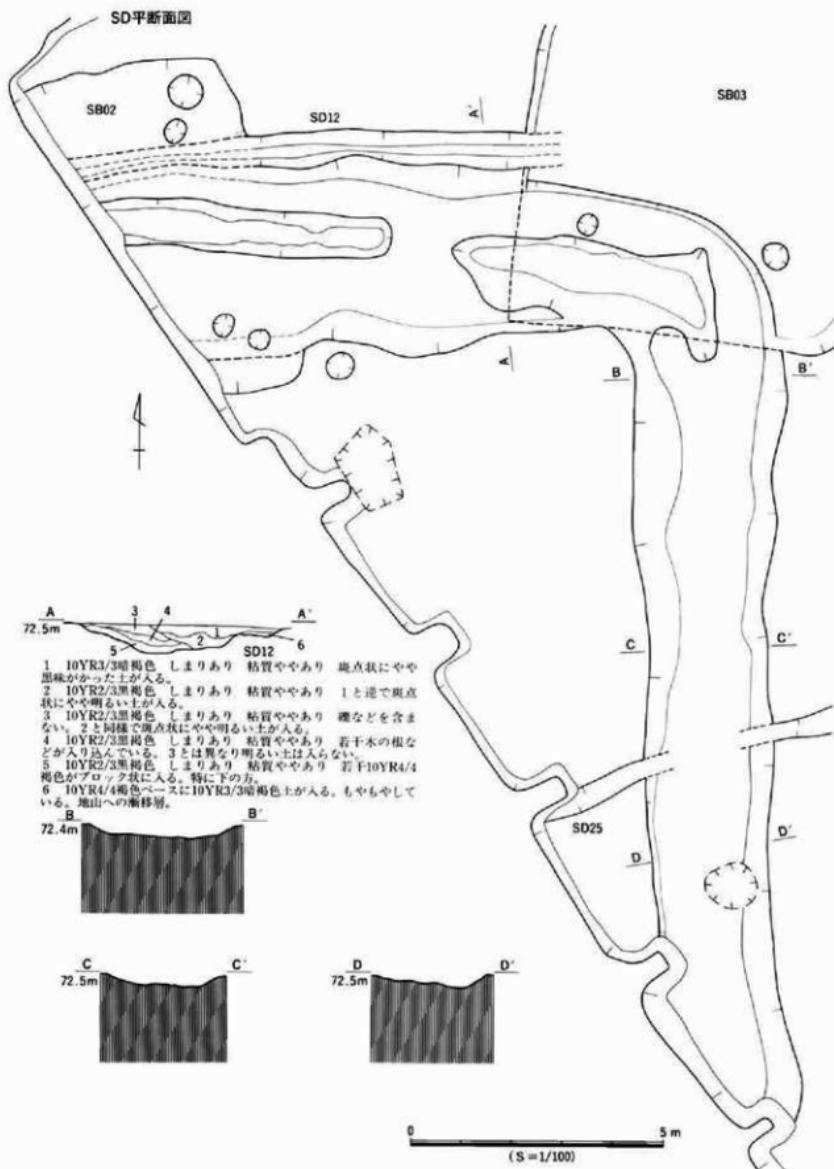


SB05遺物出土状況

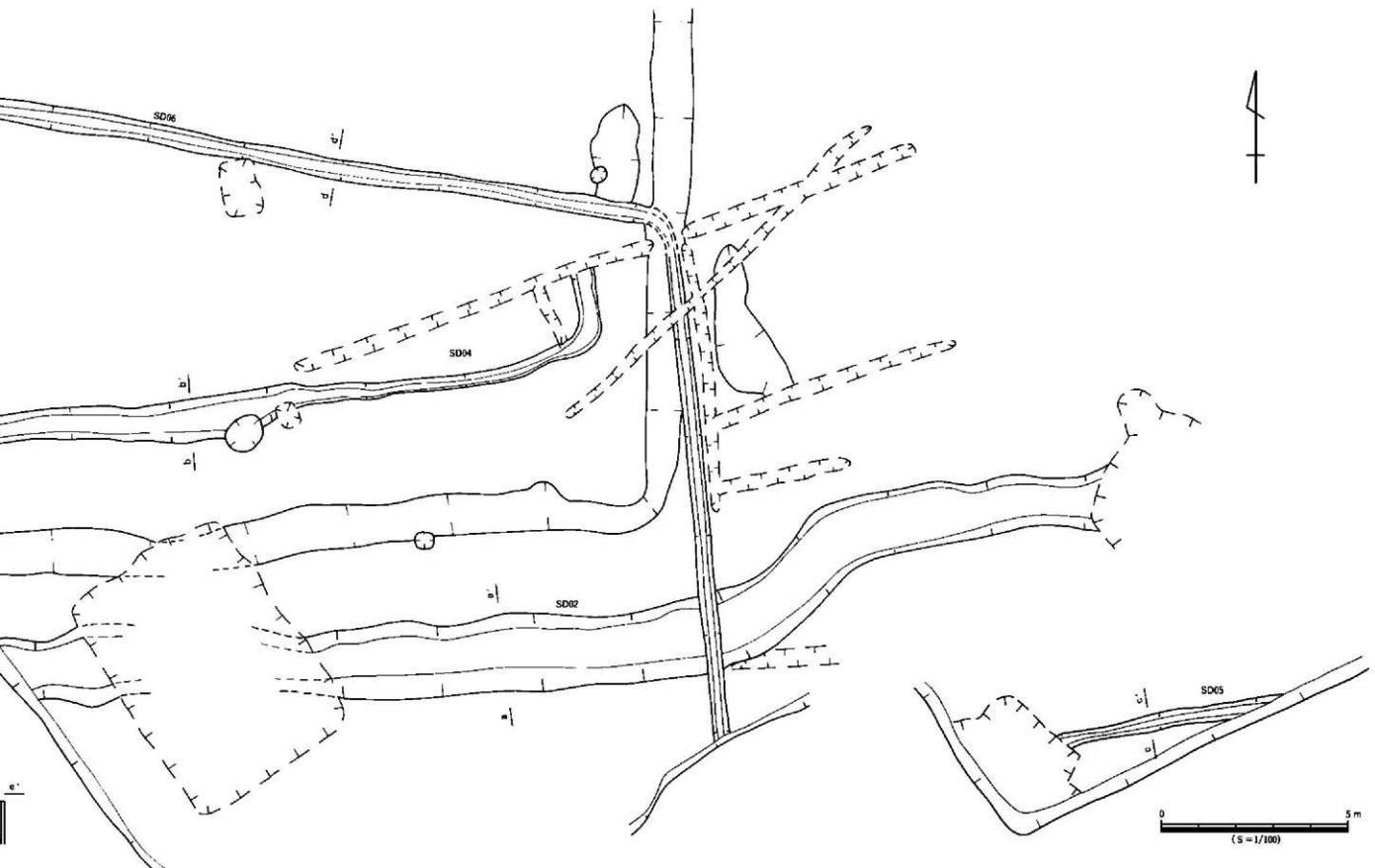
溝 (SD)

27条検出した。平面形で帯状に長く伸び、断面が皿状もしくは半円状に掘削されている遺構を「溝」と定義し報告することにした。前述したように、基盤である褐色土層が砂質であったり、現代の搅乱が調査区のいたるところに及んでいたりすることもあって、これらの溝は侵食・破壊されていることも少なくない。例えば、SD08は掘削時には最大で30cmほどの深さがあったにも関わらず、冬季の霜柱や乾燥の繰り返しによって、調査終了時にはほとんど埋まってしまっている状況であった。おそらく、遺構が構築された時点でも同様な現象が起こっていたと思われる。従って、ここで溝と判断したものの中には、判別不能なため人为的に掘削された溝だけではなく、侵食作用による自然流路的なものも含まれている。また、すべての溝について詳細な情報を得ているわけではなく、むしろほとんどが詳細不明である。よって、一つ一つの溝についての記述は避け、特筆すべき点だけを列挙することにした。それぞれの遺構測量値または溝全体の出土遺物については、別表（第4・11・20表）を参照のこと。なお、遺構を図化するにあたっては、原則として縮小率は平面・エレベーション図とともにS = 1/100とした。ただSD01については安定した堆積状況であることを示すため、断面図をS = 1/50で図化した（SD01の北側を平行しているSD12の断面図も合わせて）。出土遺物については、報告者の主觀に基づき特徴のあるものを中心に図化した。

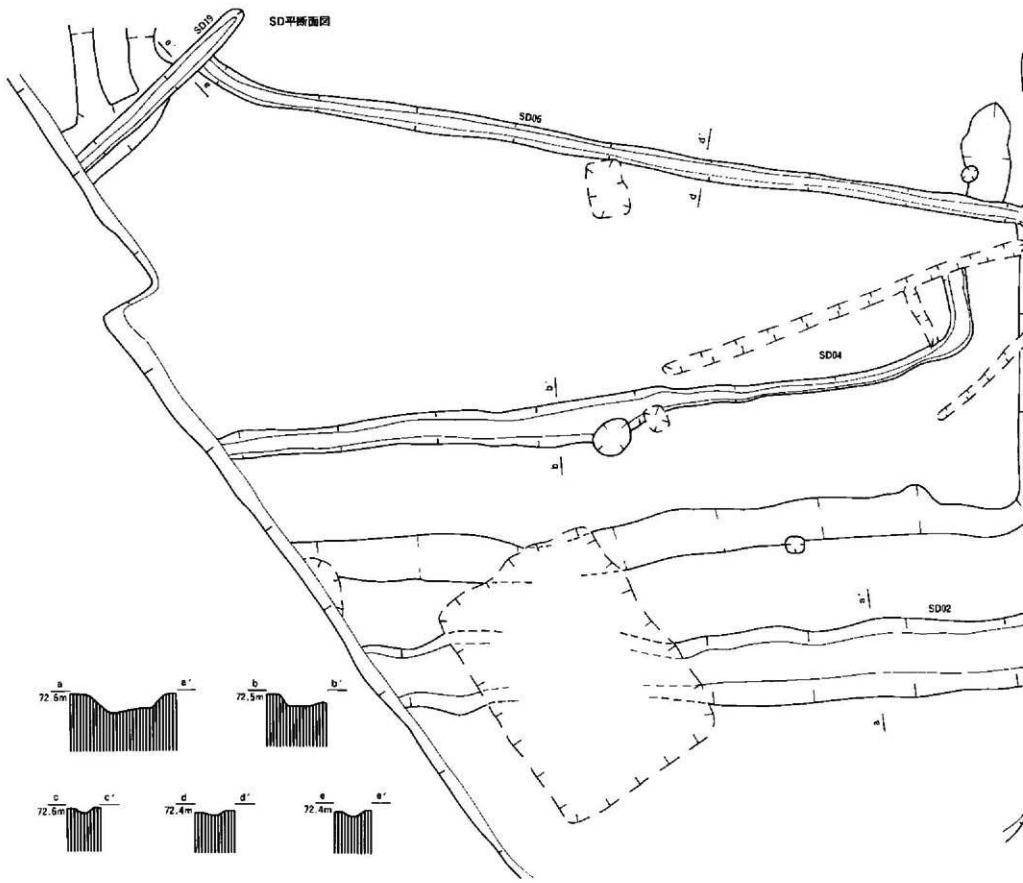
SD01は、II区の中では最も計画的に構築された溝といえる。検出した部分においては、どの位置でもほぼ均等な幅が確保されている。また、東西方向から南北方向へ（順不同）と直角に曲がる方向性などの点でも他の溝とはやや様相を異にする。堆積は、SB02とSB03の間の部分が最も厚く70cmほどある。出土遺物は、当然のことながら27条中最も多く、埋土の上部からの出土も少なくない。61・62



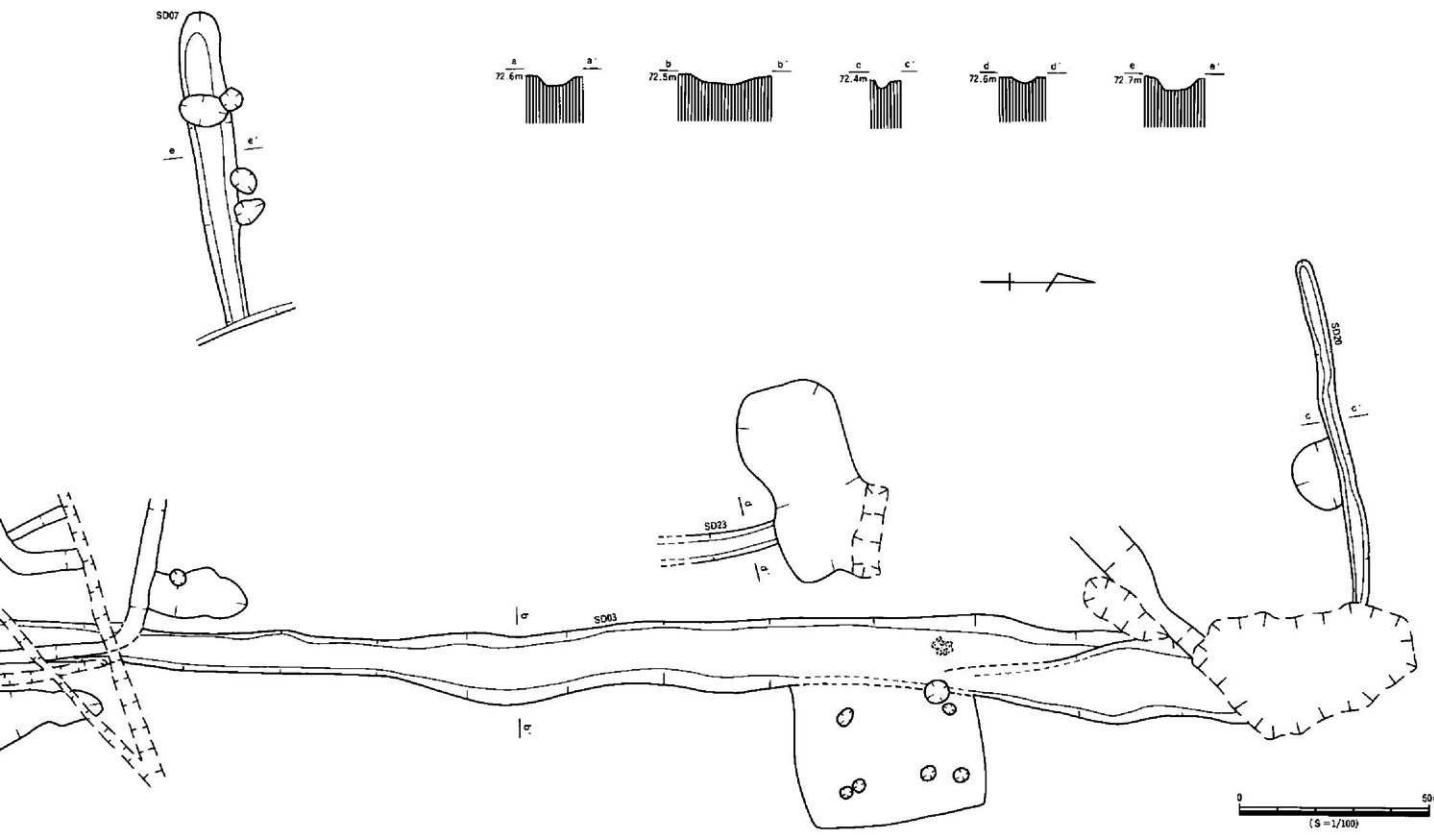
第31図 SD01・12実測図



第32図 SD 2・04-06・19実測図

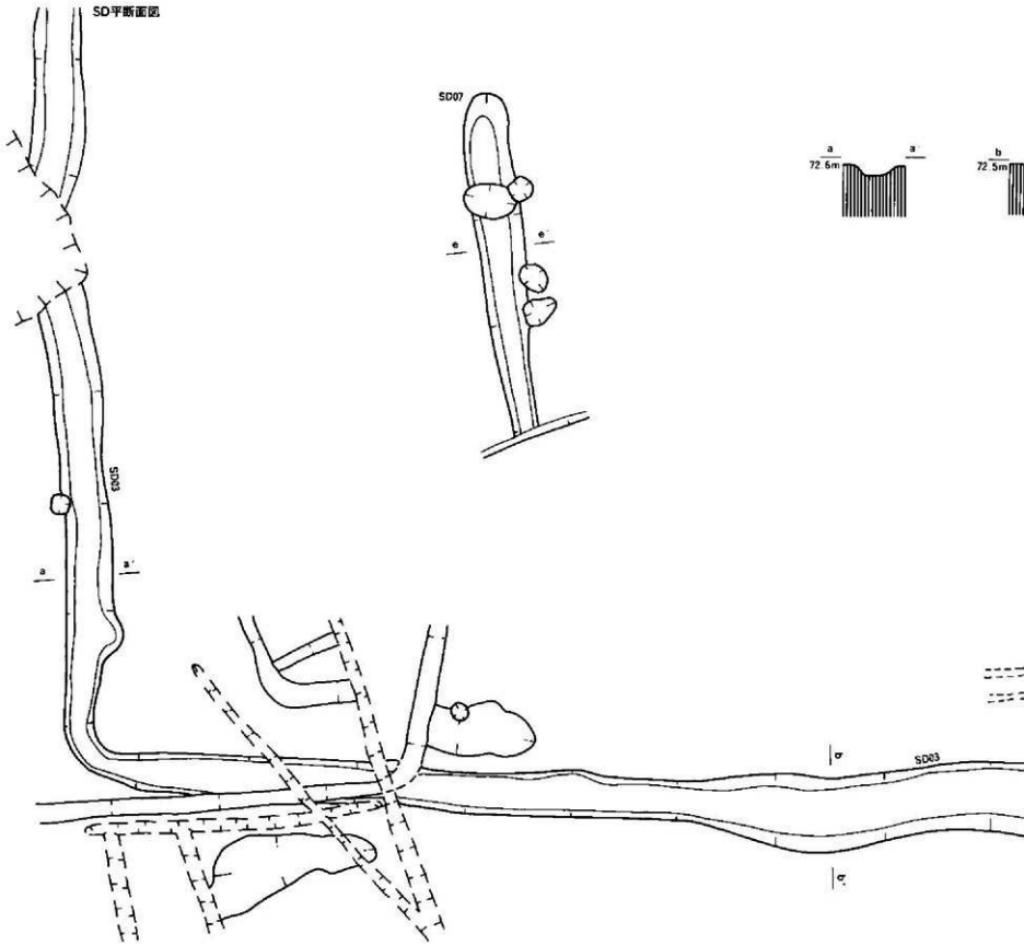


第32図 SD 2・04~06・19実測図



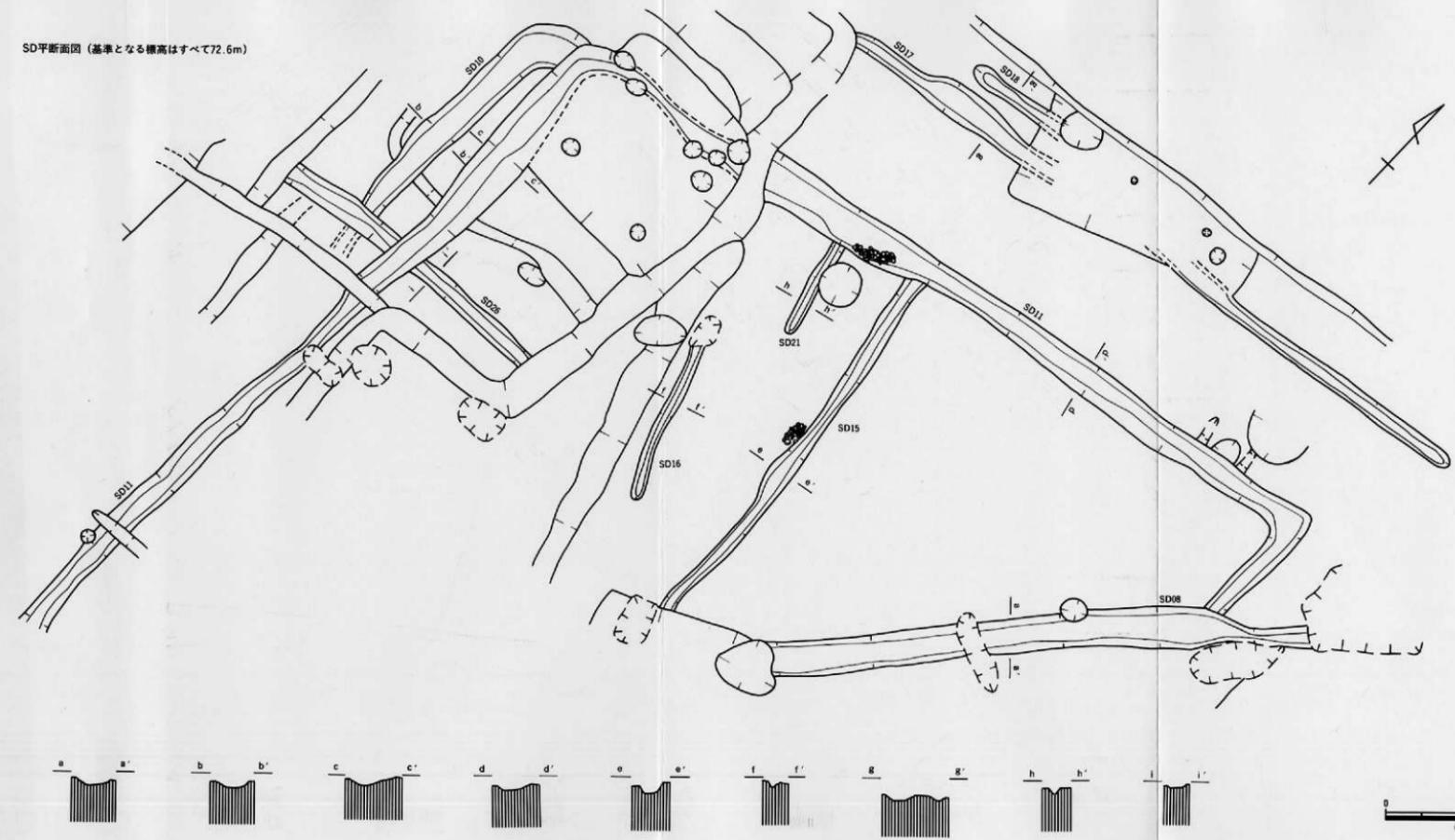
第33図 SD03・07・20・23実測図

SD断面图

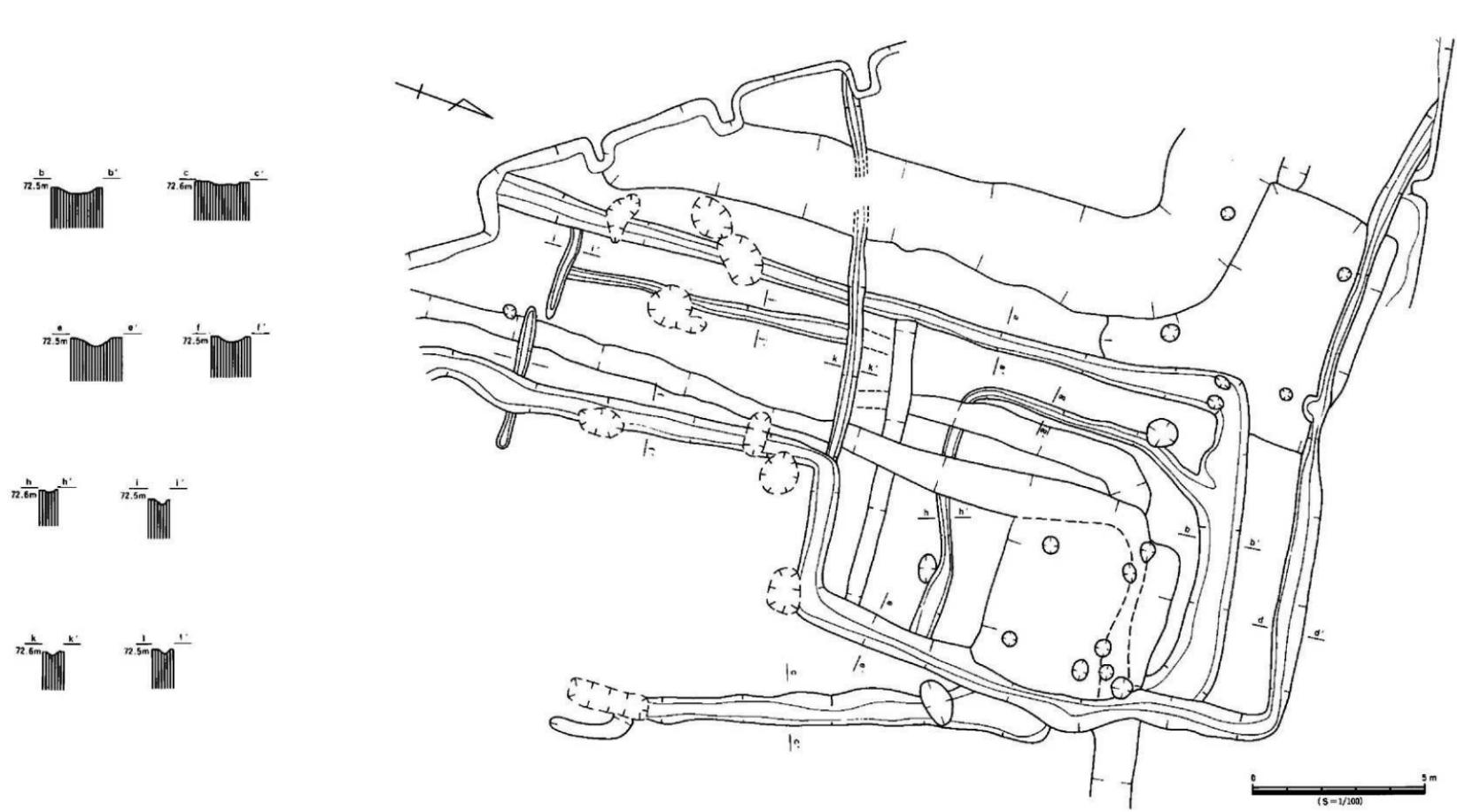


第33图 SD03-07-20-23实测图

SD平面図（基準となる標高はすべて72.6m）

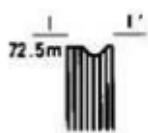
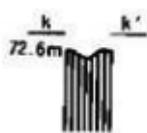
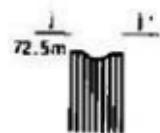
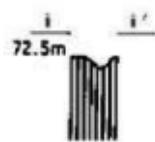
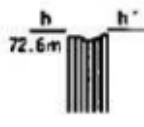
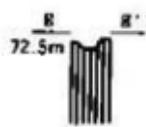
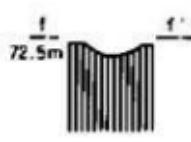
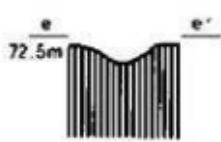
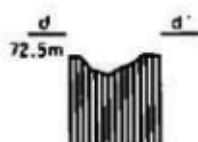
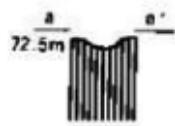


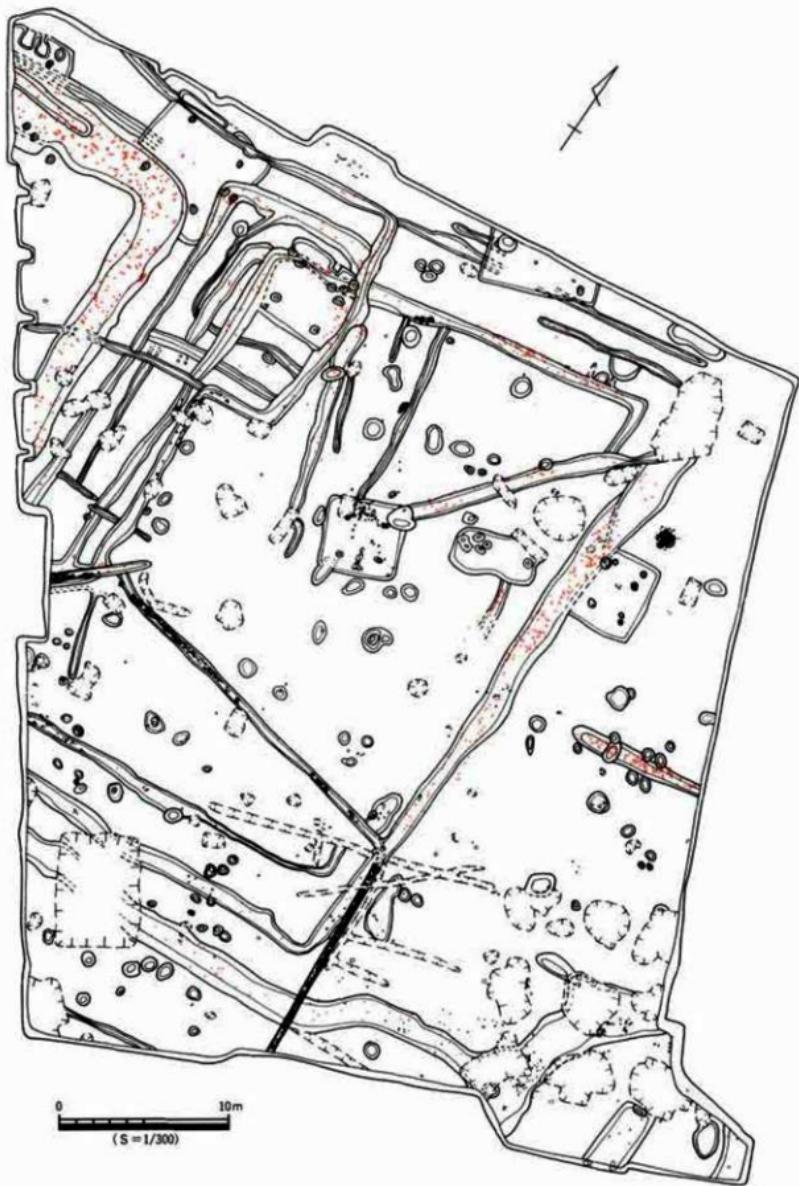
第34図 SD08・10・11・15~18・21・26実測図



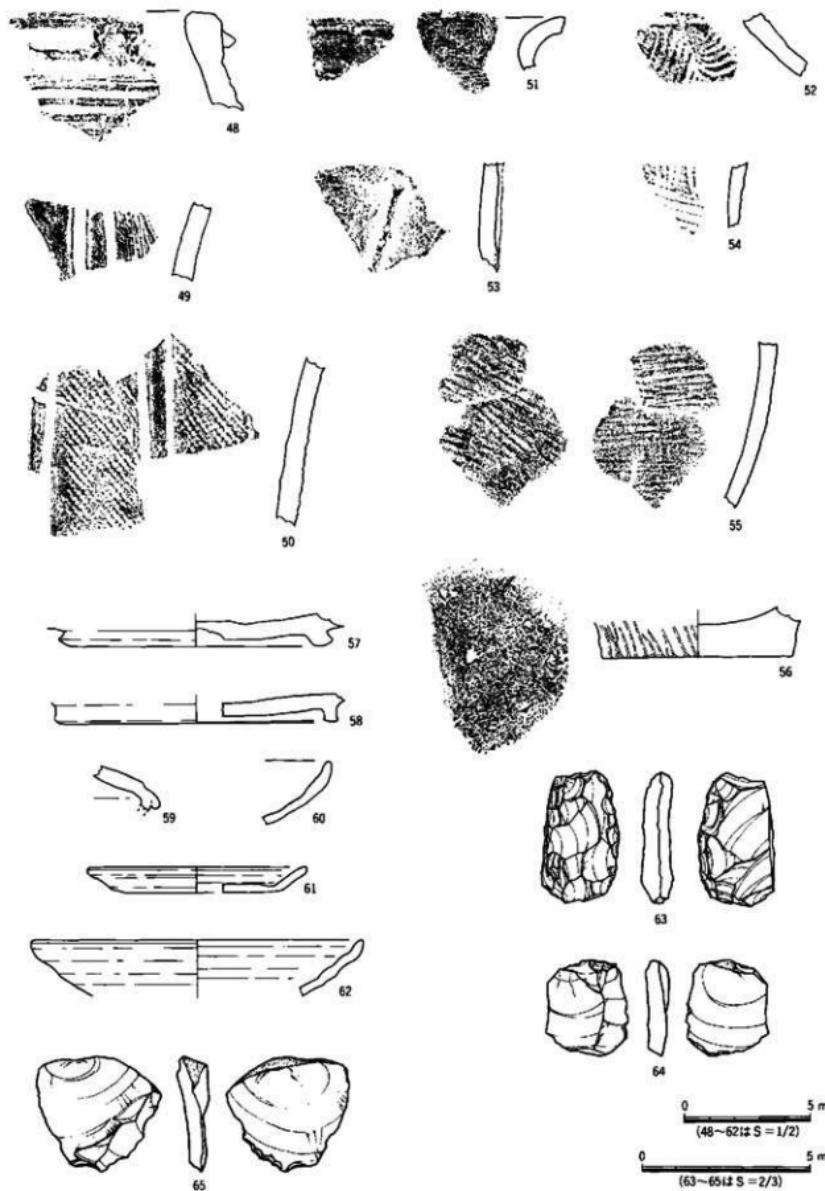
第35図 SD09・13・14・22・24・25・27実測図

SD平衡面図

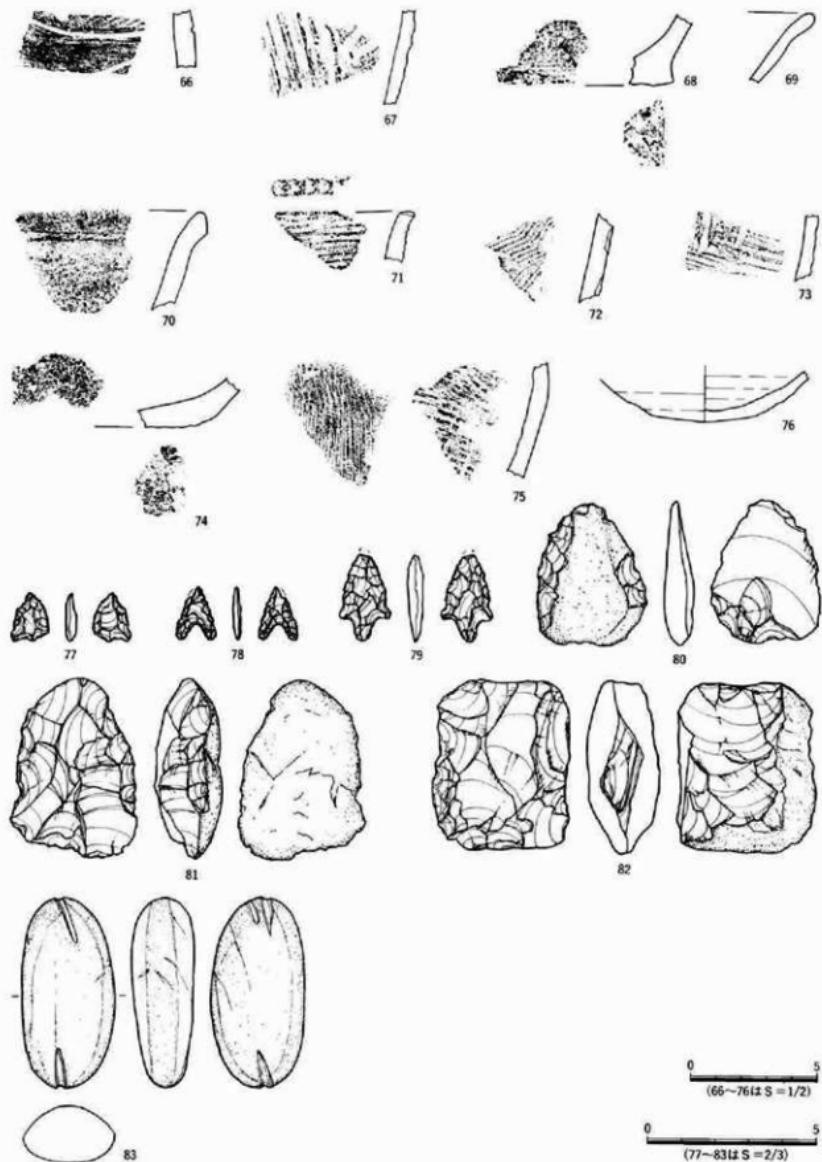




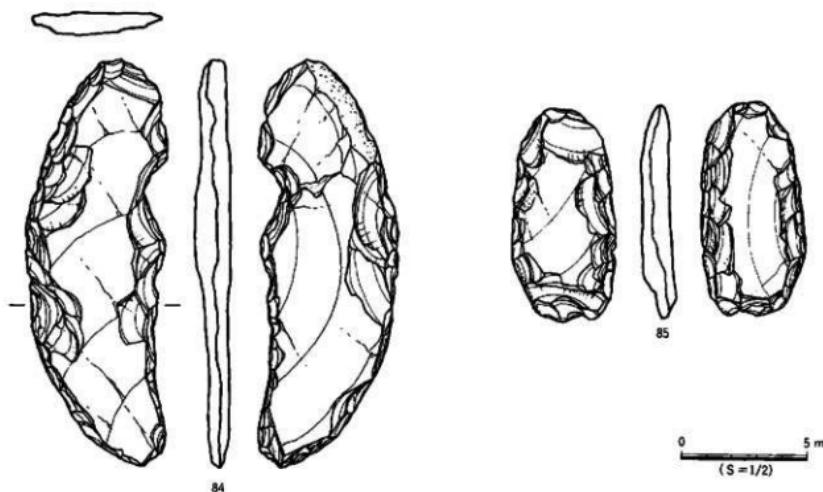
第36図 SD遺物出土位置図



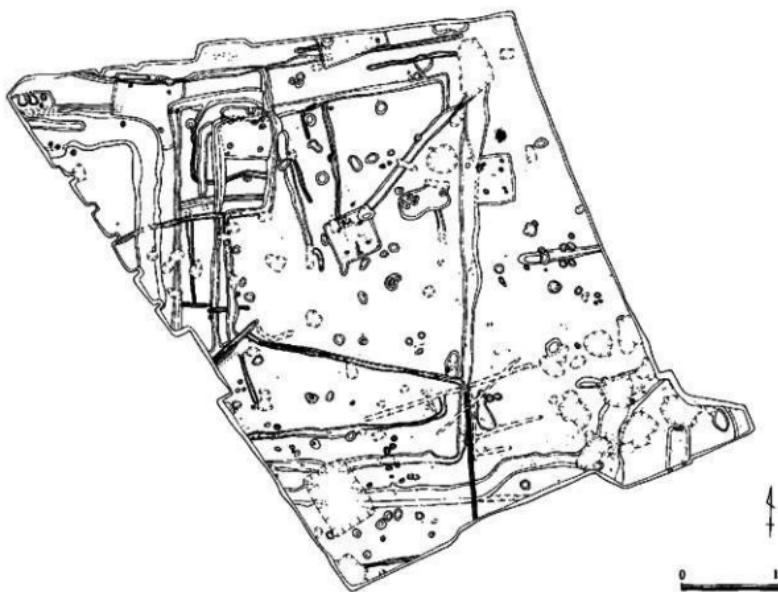
第37図 SD01出土遺物



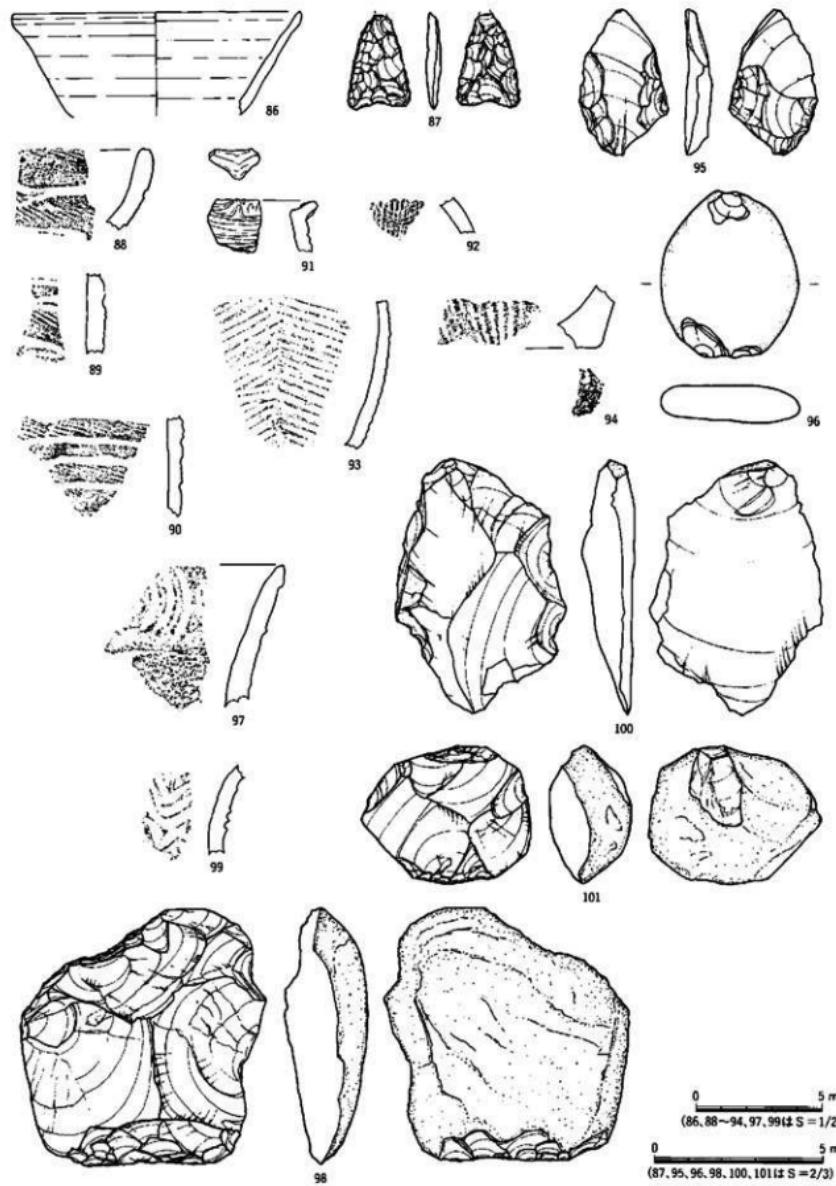
第38図 SD02・03出土遺物



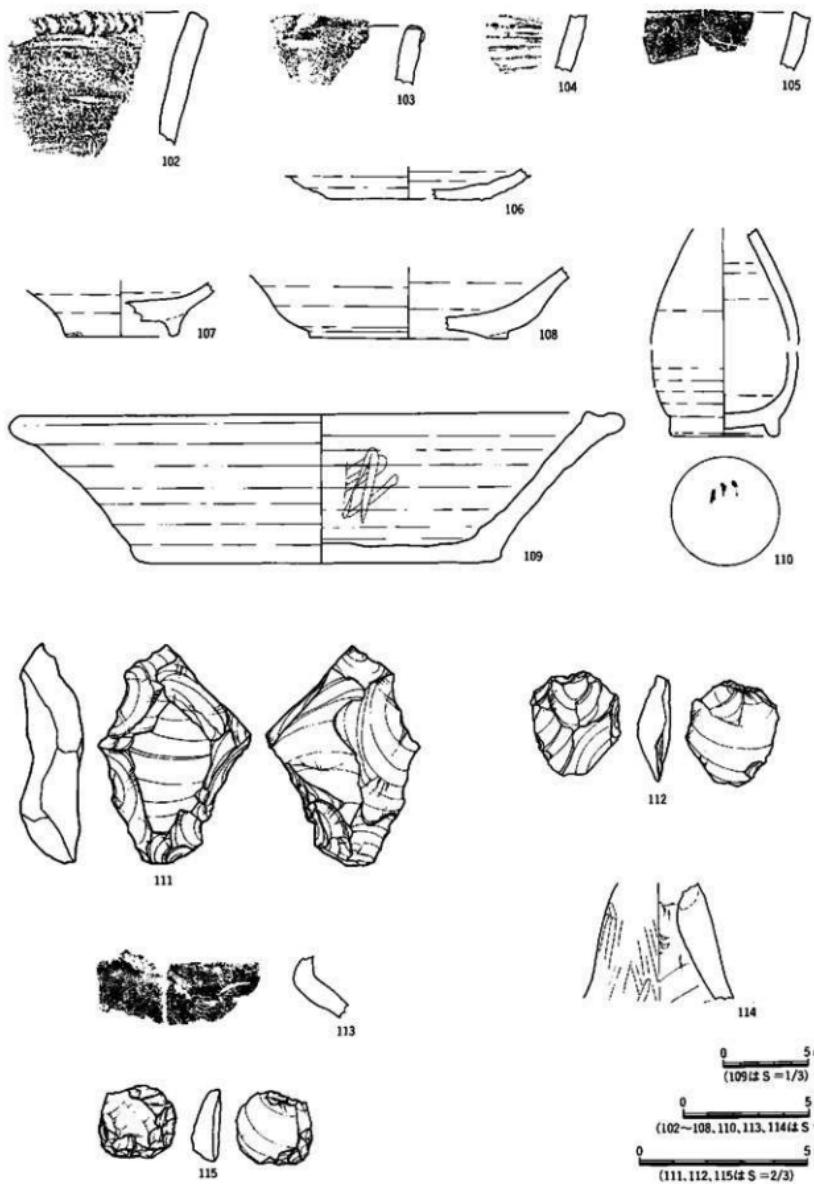
第39図 SD03出土遺物



第40図 SD位置図



第41図 SD04・07・09・11出土遺物



第42図 SD13・20・23出土遺物

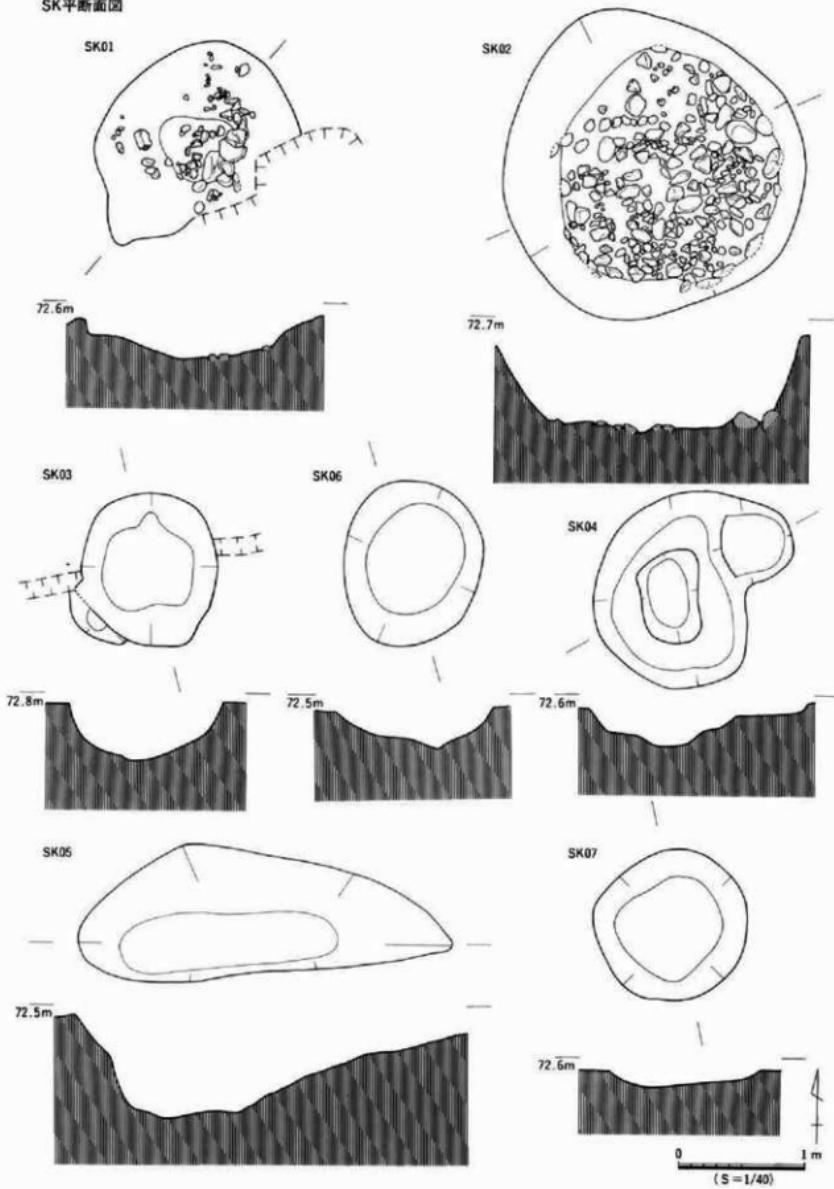
などの山茶碗は、比較的底面近くから出土しており、本溝の帰属時期を考える上では有効な資料といえる。なお、本溝については、規模・方向性等の点から居館跡に伴う溝ではないかとの指摘もある。SB02・03は詳細不明だが、規模や方向性という点ではSD01に次ぐ存在である。調査区の南西隅にある、建設省時代に設けられた油庫埋設に伴う搅乱部分の壁面で、掘削以前からその断面を確認することができた。それによるとこれら2条の溝の掘り込みは比較的上方から確認できる。該当時期を限定することは困難であるが、比較的新しい可能性もある。SD03は、北に屈曲しSD01に向かって広がり、SB01以北では複数の溝が重なり合っているような様子もうかがえた。SD04は、SD02・03と平行するように構築されているが、北へ屈曲した後に確認できなくなった。確認できなくなった調査区の中央部分は、基盤となる褐色土層が微高地状になっているため、削平と同時に消滅してしまったとも理解できる。そうすると、SD04を北へ延長したところにある、SX02からわずかに南へ伸びているSD23がその延長線上にあることになり、両者は繋がっていた（同一溝であった）可能性もある。SD06は、幅が細く深さも浅い。ただ全面ではないが、多くの部分で礫の集中が見られた。南北方向ではなく全面に、東西方向でも西側半分に見られる。礫間にはところどころ遺物が混入しているが、この溝の資料として扱える状況ではない。本調査区は、建設省庁舎構築以前には農地として土地利用されていたらしく、その際の所産であるかも知れない。暗渠の可能性もある。SD07も詳細不明である。規模的には比較的大きい。西側は、途切れているのかここで収束するのかは不明である。SD08は、SB05の北東隅を破壊するように入り込んでいるが、SB05の埋土中では明確に見極めることはできなかった。北東隅にはSK29があるので、その影響かも知れない。しかし、SD08がSB05より古く、SB05がSD08を破壊しているとは考えがたい。SD09は、SB04の北側を東西に走る部分は幅も深さも比較的のしっかりしているが、南北に縱走する部分は浅く細い。詳細は不明である。SD10は、SD11に破壊され、一部分しか検出できなかった。SD11は、SB04を通過している。比較的長く検出できたが、詳細不明である。一部分をSD13に破壊されている。SD13は、SB04の西辺を破壊する部分ではかなり深い部分があり、その断面形はV字状であった。SD17・18は、SX01を破壊しながら通過している。SX01の掘り込みより浅いので、SX01の埋土をわずかにかずめる程度であった。SD22・24~27は、SB04の南側の溝が縦横に入り組んでいる箇所での検出である。いずれも詳細は不明である。

土坑（SK・P）

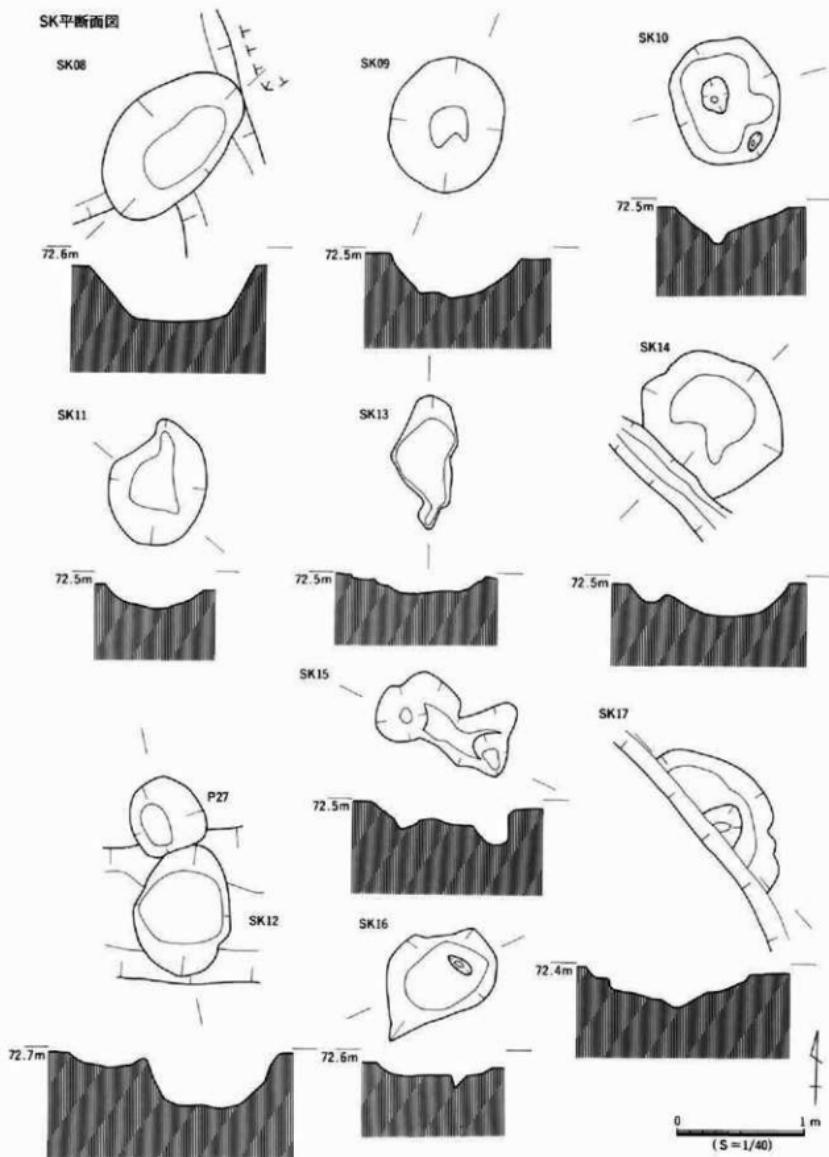
112基検出した。平面形が円形もしくは梢円形を呈し、堆積状況が比較的安定していたものを「土坑」と定義し報告することにした。形状が似通っていても堆積状況が不安定のものや、調査した結果人為的に構築されたとは考えにくかったものは、不明遺構（SX）もしくはごく新しい段階で形成された搅乱（現代の建築物に伴うものや植物の根などによるものも含む）として処理した。

ここで報告する土坑は、規則的に二分した。検出面における上場の直径が1m以上のものを大土坑（土坑=SK）、1m未溝のものを小土坑（ピット=P）とした。それぞれの確認数は、SKが35基、Pが77基である。I区と比較するとかなり少ない。理由は定かではないが、現代における搅乱が多く入り込んでいたことや、II区はI区よりさらに基盤の褐色土層が砂質であったために、埋没・破壊されてしまった可能性があることが挙げられる。なお、I区では近現代の農耕作業に伴う「芋穴」もSKとして扱っているが、II区では現地での調査段階から明らかな芋穴は「搅乱扱い」とした。

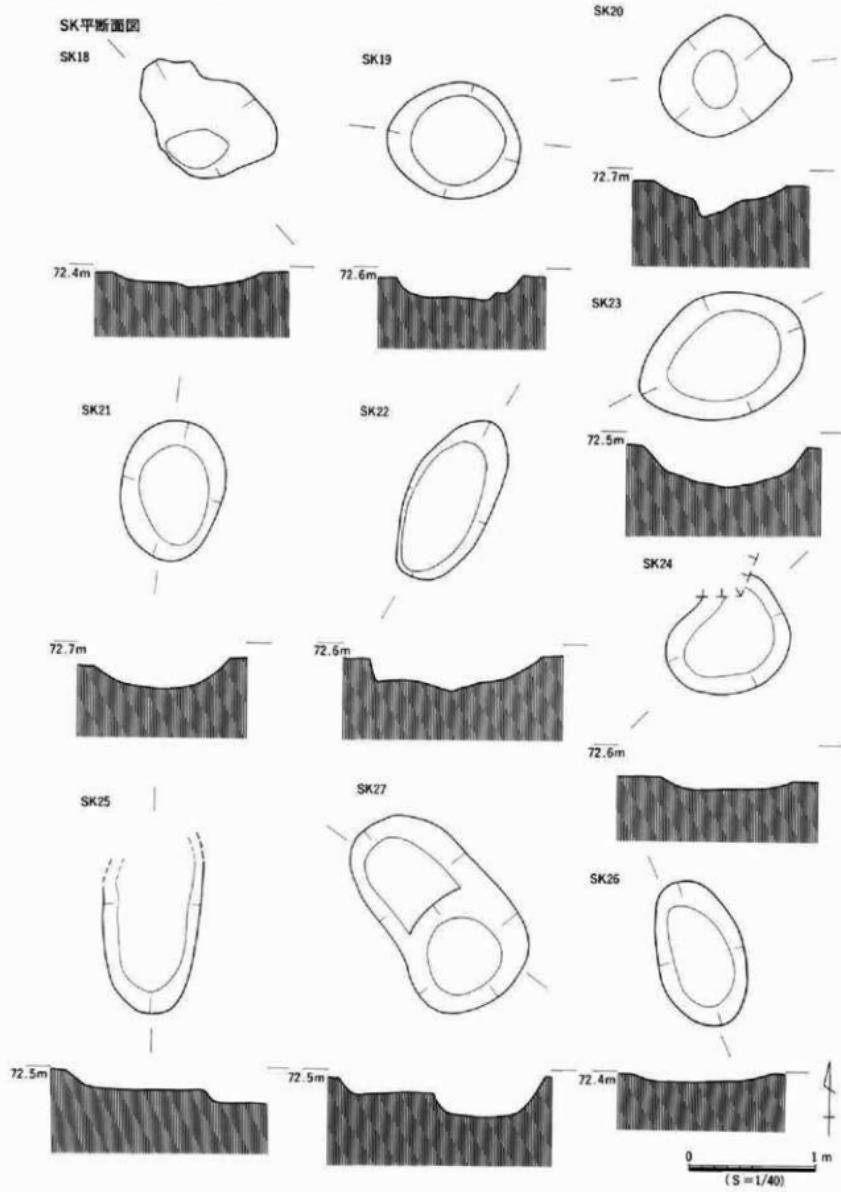
SK平断面図



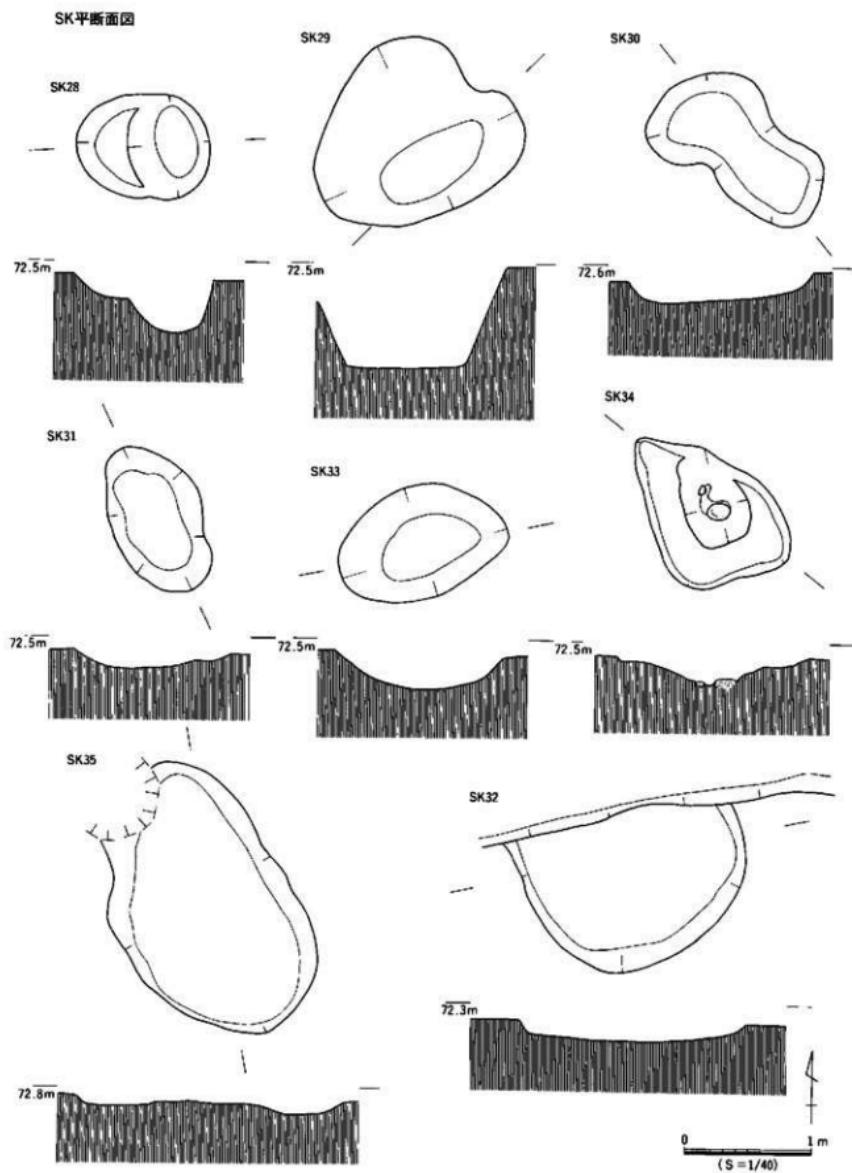
第43図 SK01~07実測図



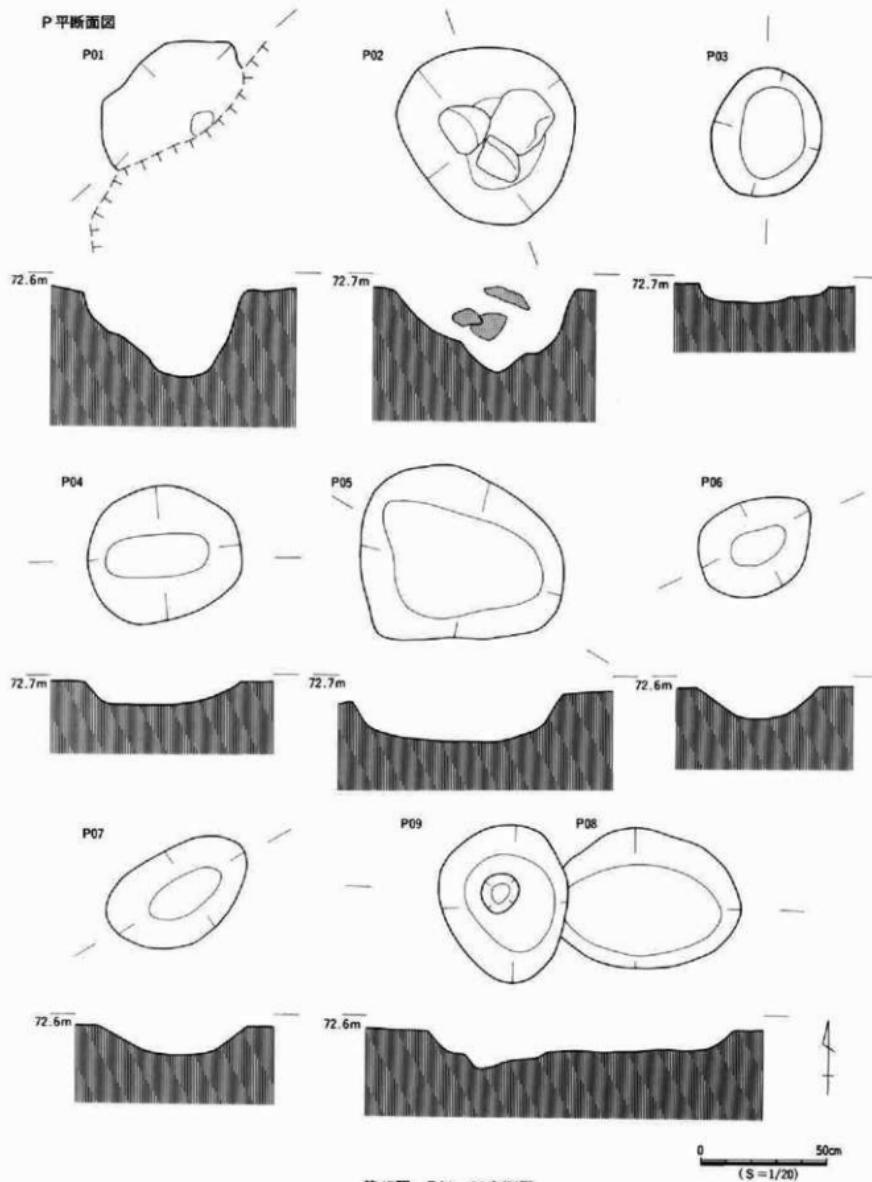
第44図 SK08~17・P27実測図



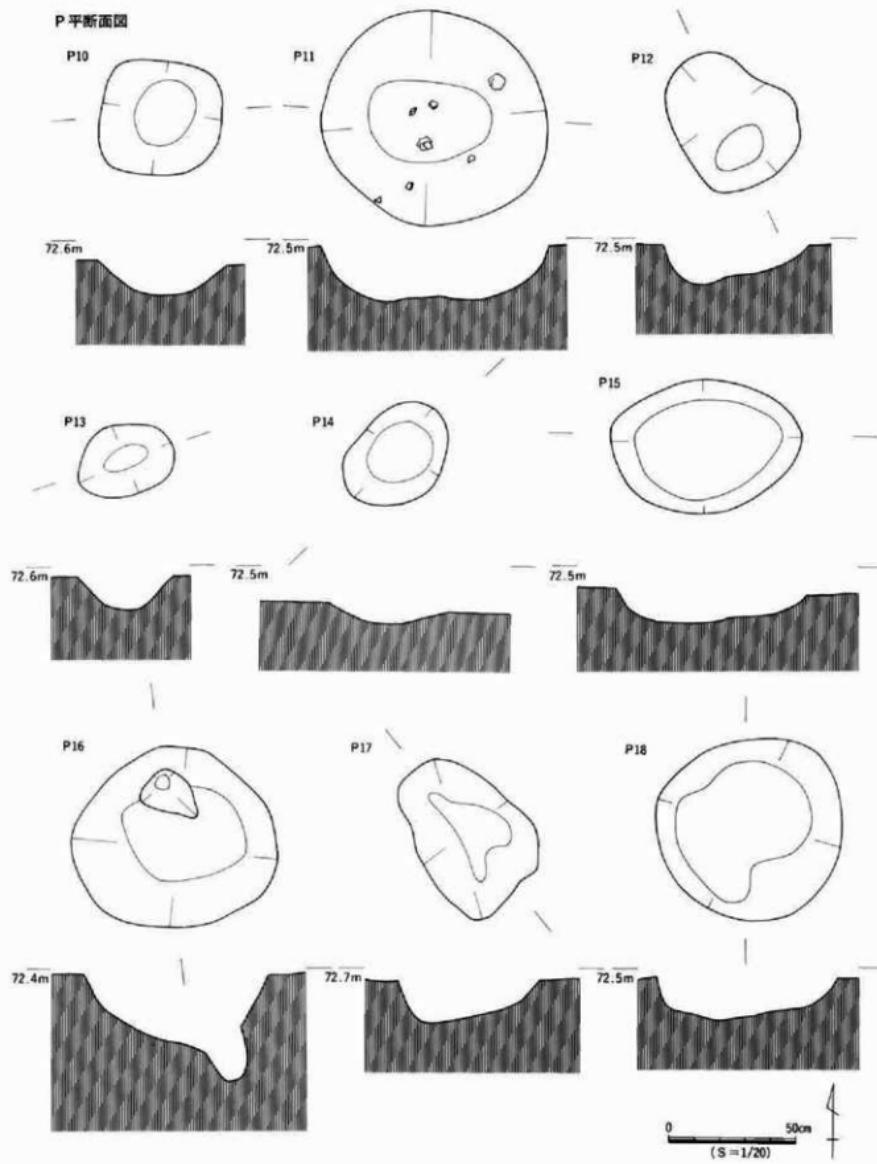
第45図 SK18~27実測図



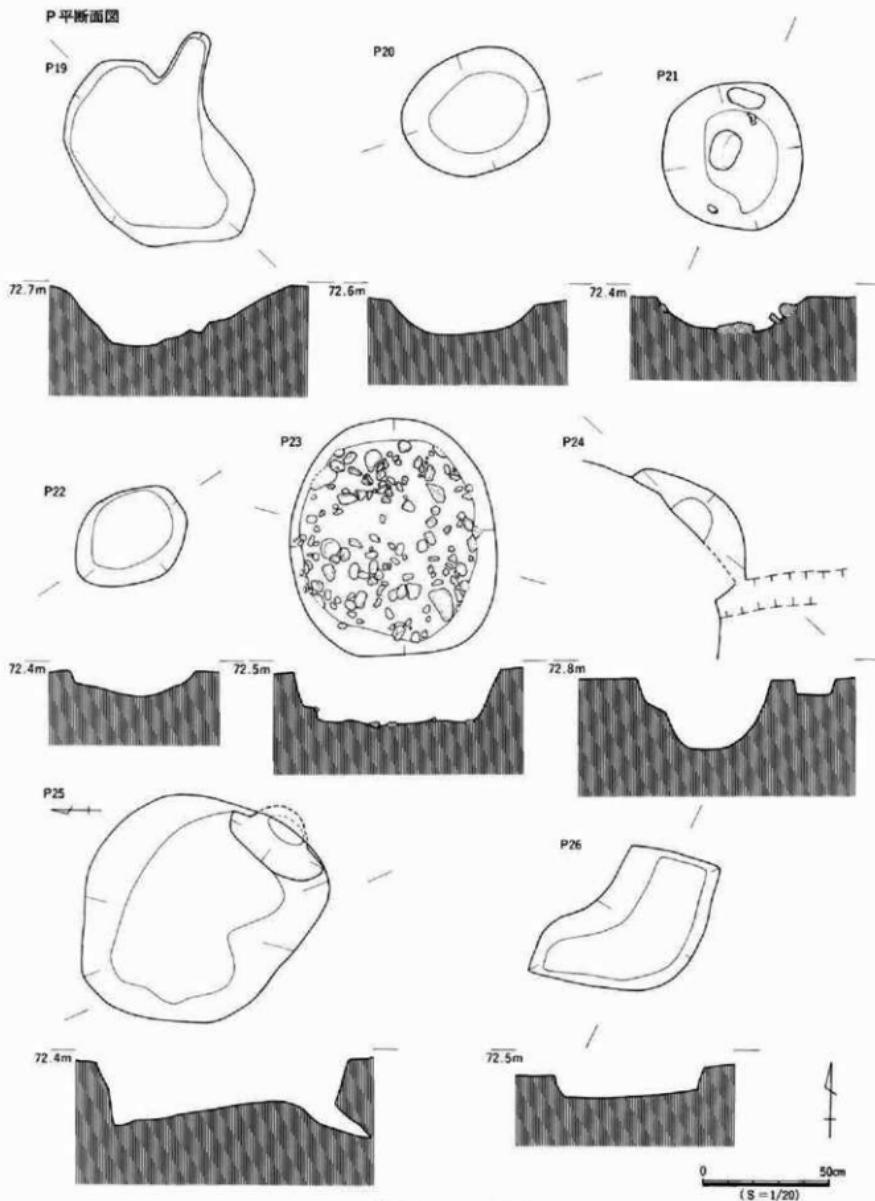
第46図 SK28~35実測図



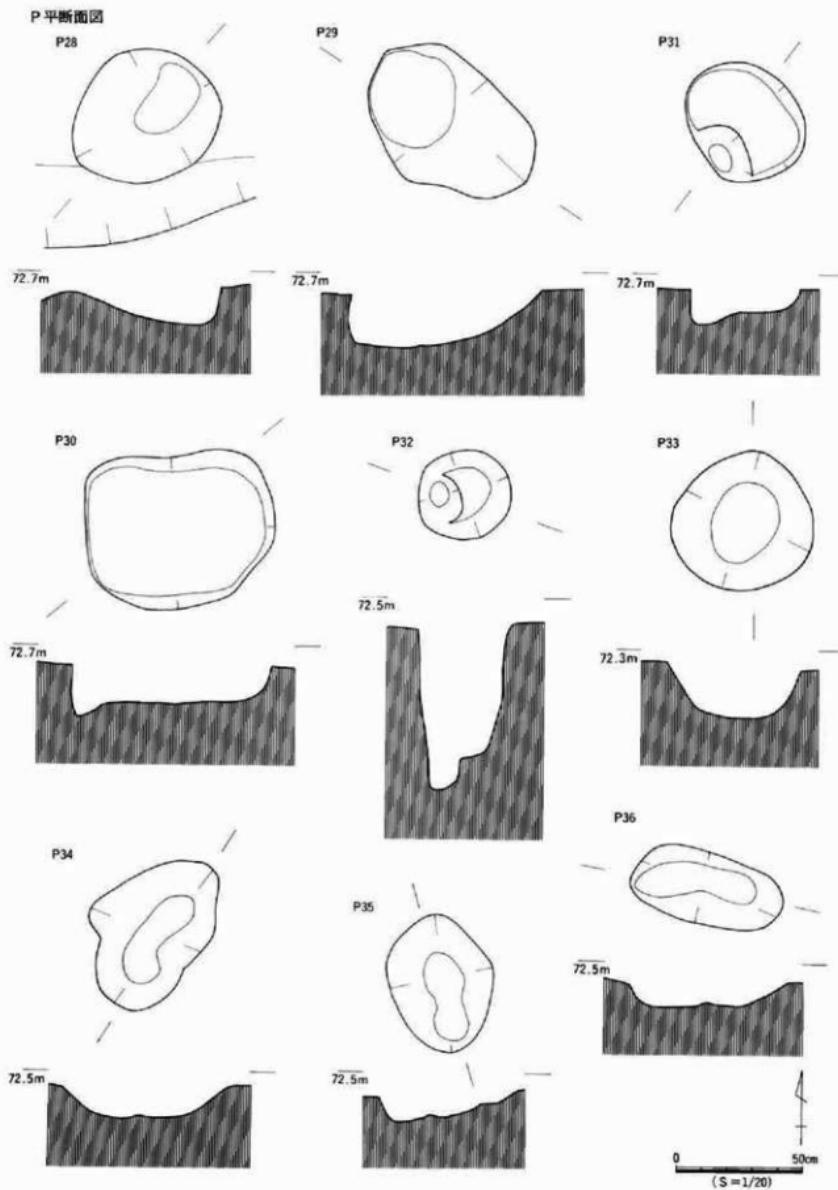
第47図 P01~09実測図



第48図 P10~18実測図

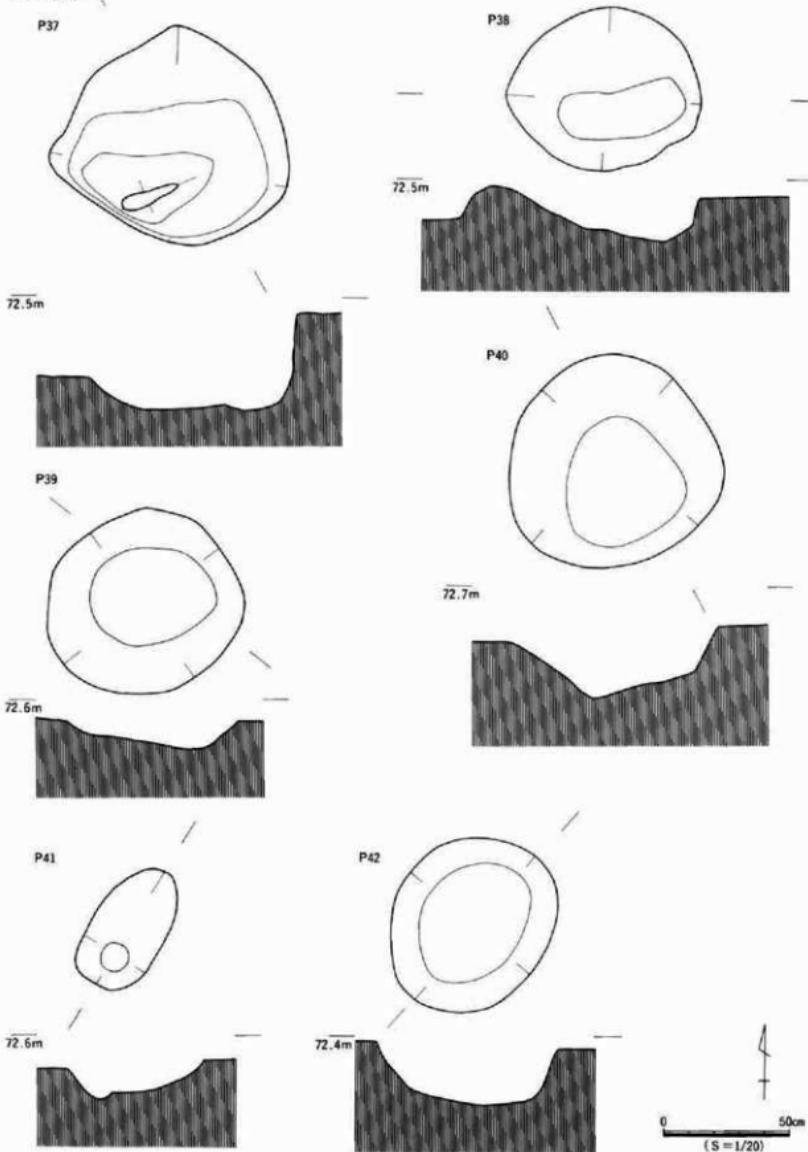


第49図 P19~26実測図

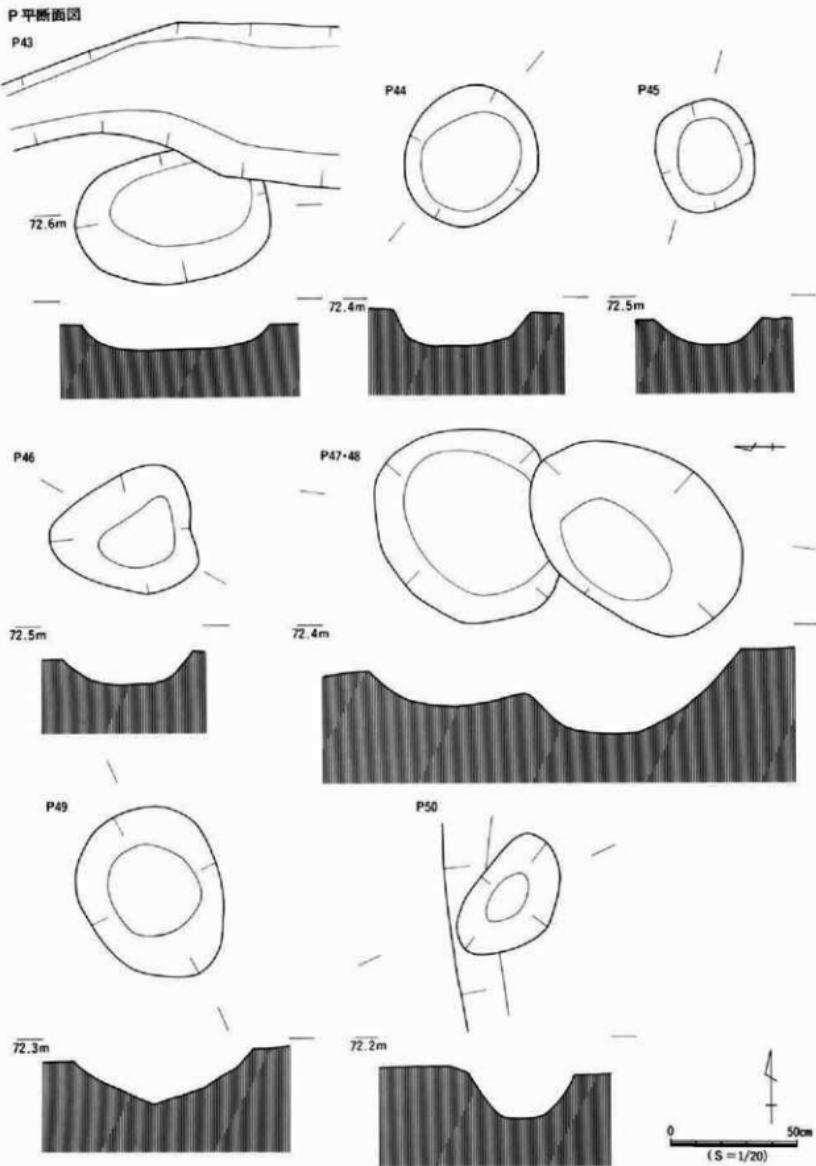


第50図 P28~36実測図

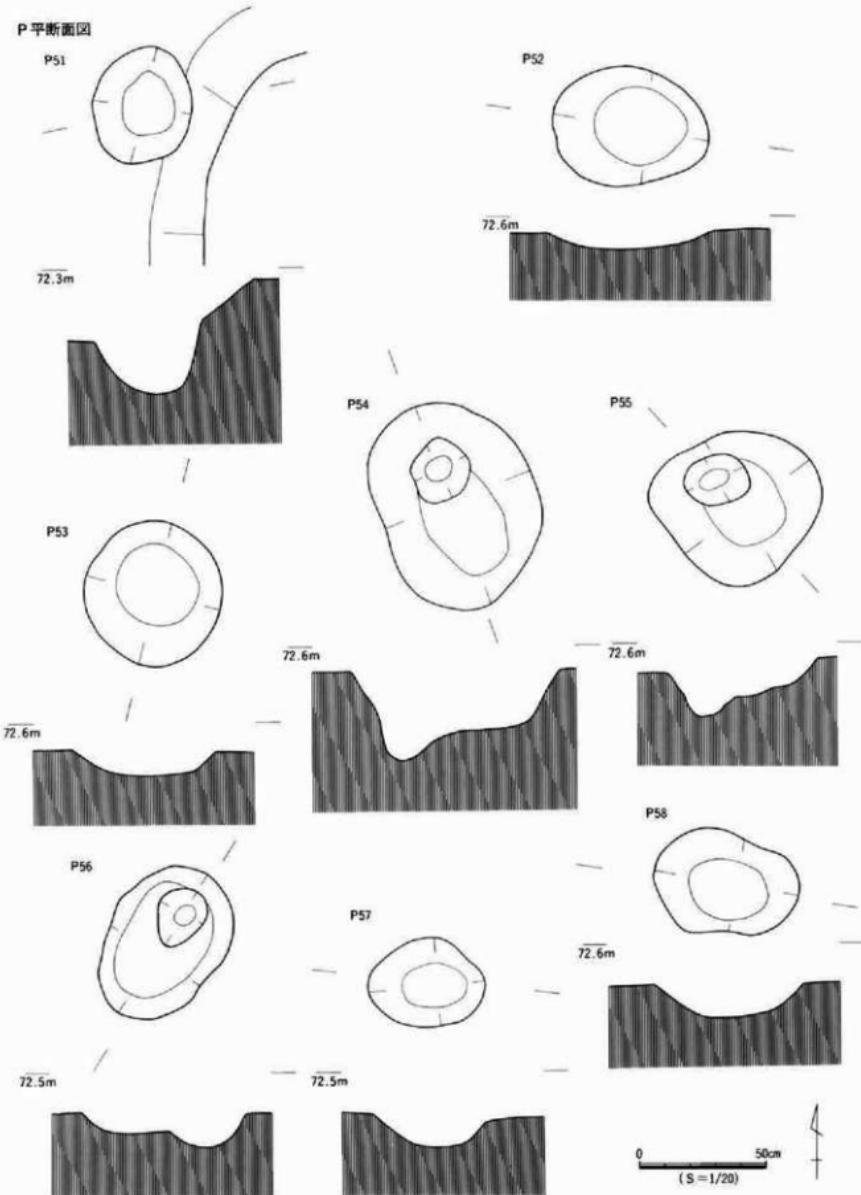
P 平断面図



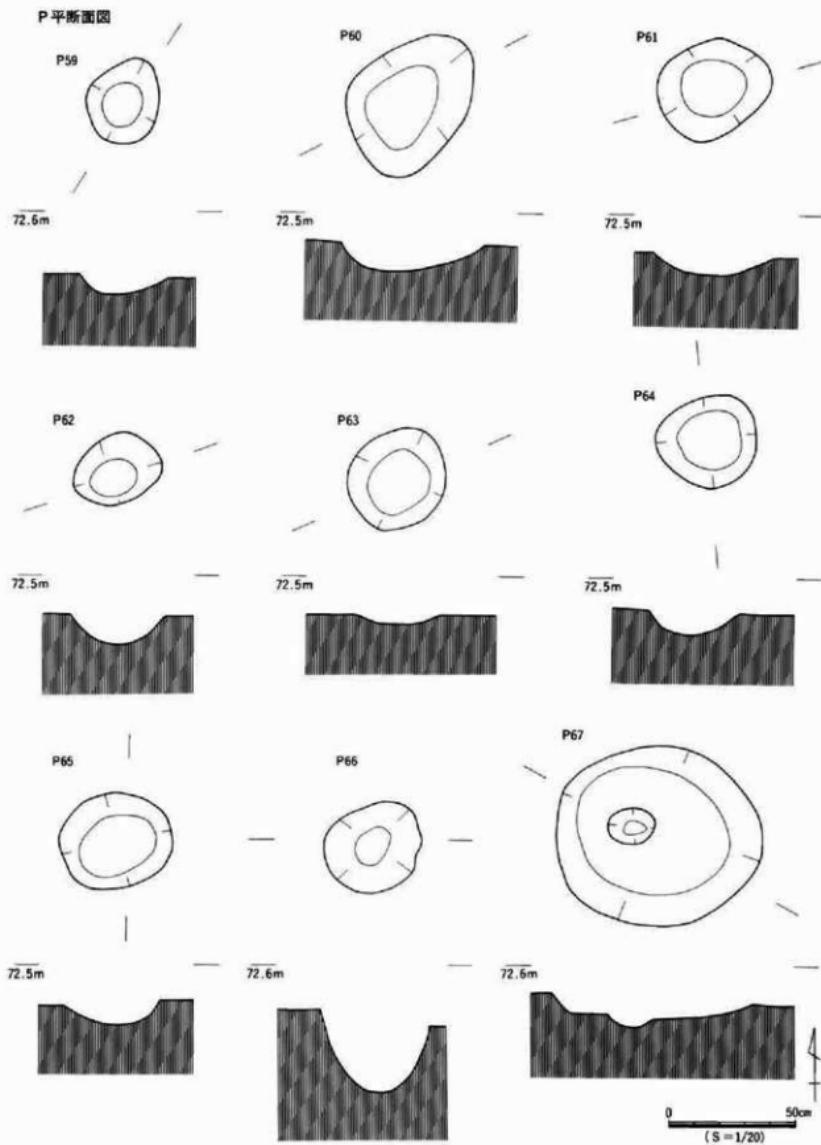
第51図 P37~42実測図



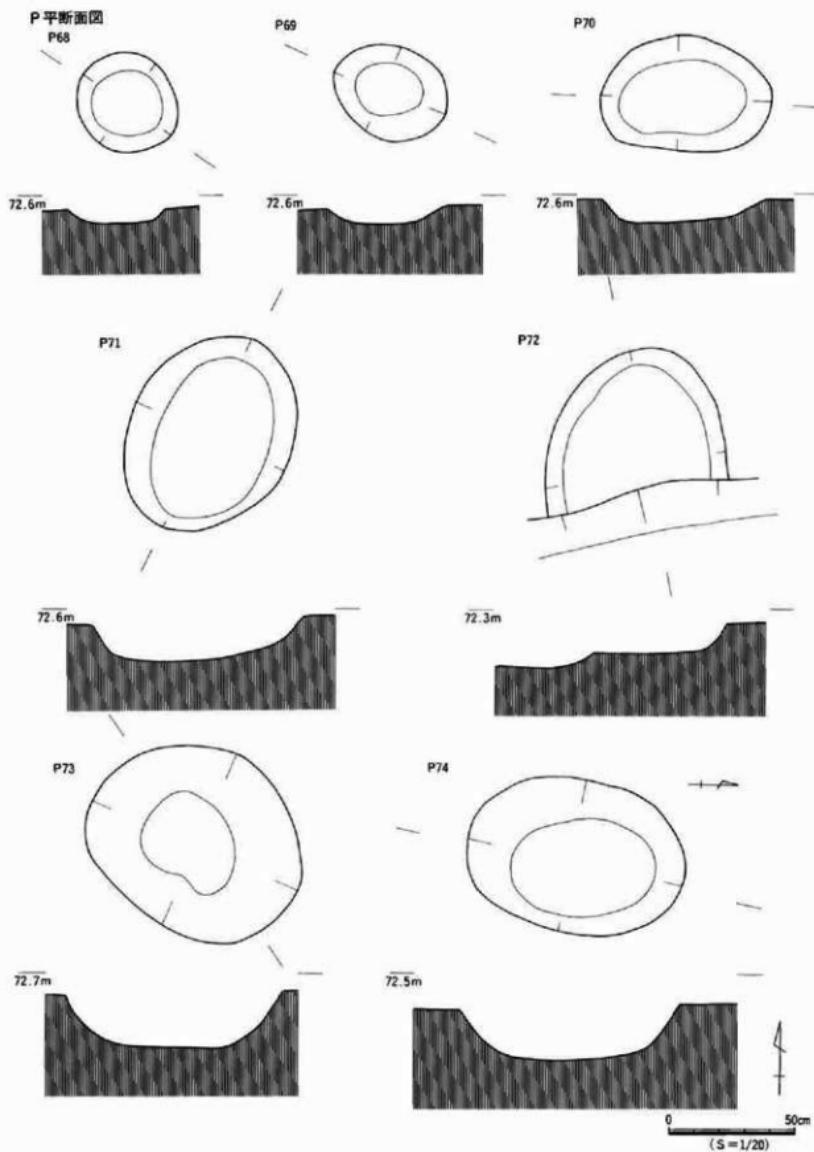
第52図 P43~50実測図



第53図 P51~58実測図



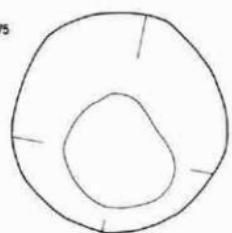
第54図 P59~67実測図



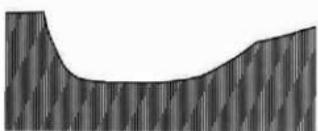
第55図 P68~74実測図

P 平断面図

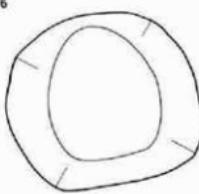
P75



72.5m



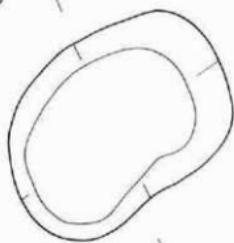
P76



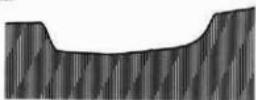
72.5m



P77



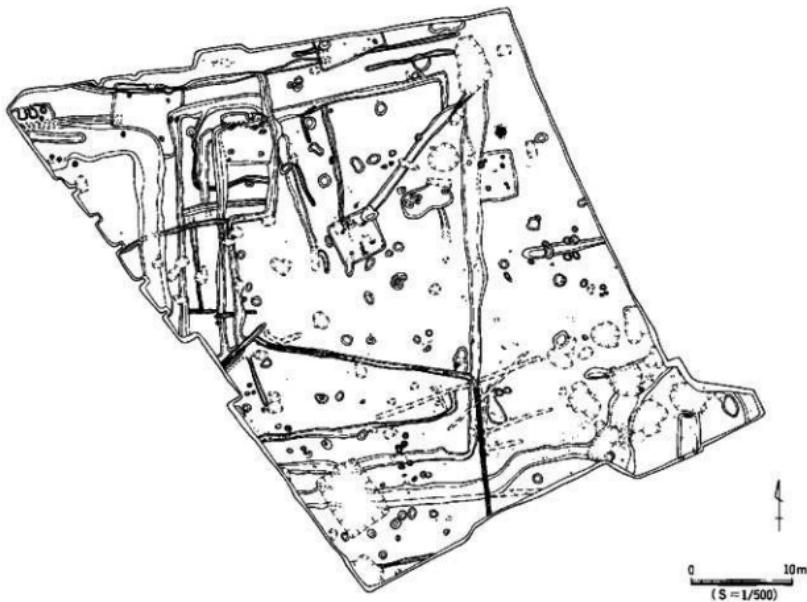
72.6m



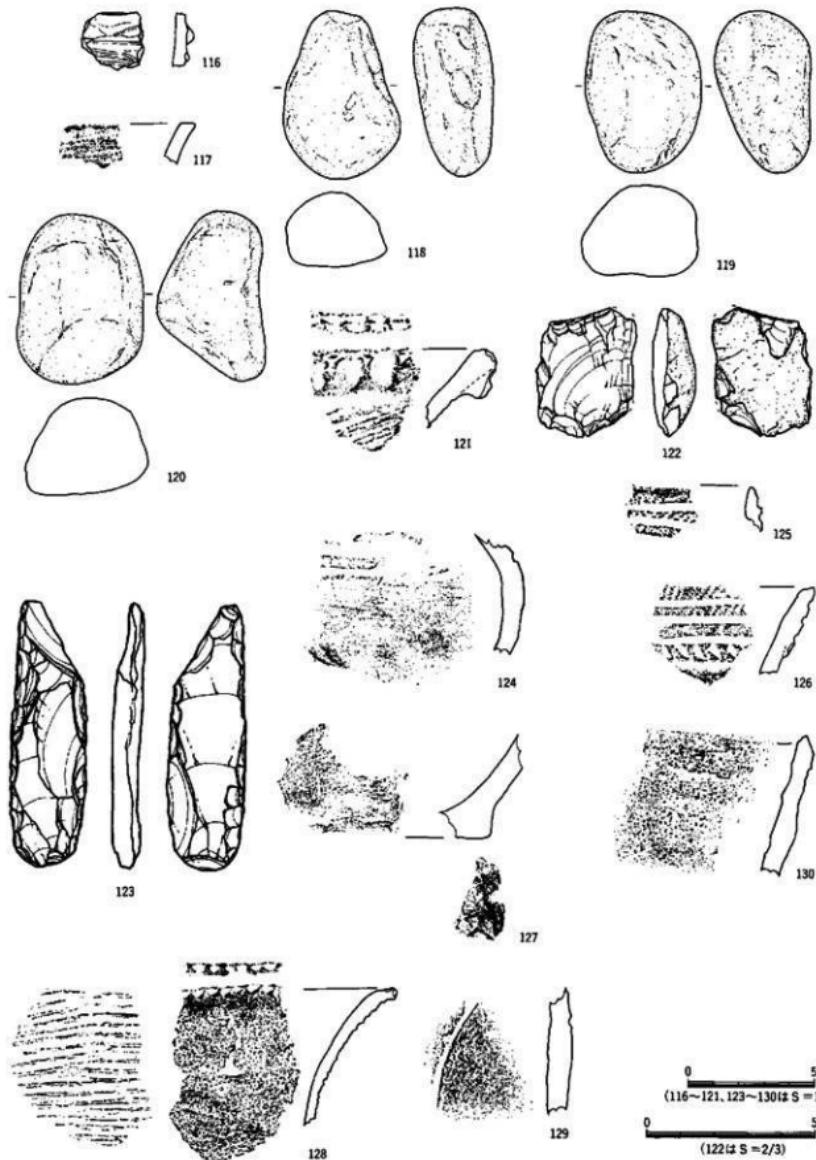
0 50cm
(S=1/20)

第56図 P75~77実測図

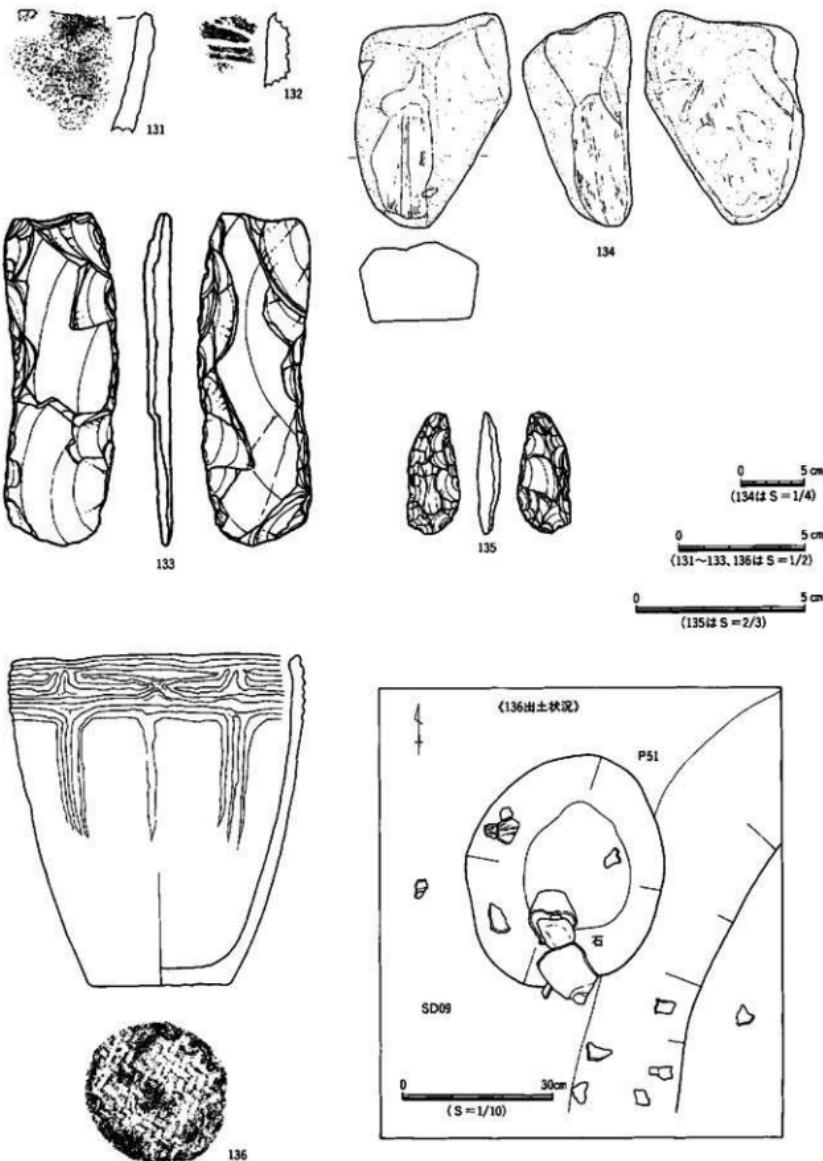
SK・Pとともに、特別な遺物理納があるなどして、帰属時期や性格を決定できるものはほとんどない。たとえ遺物の出土が認められたとしても、多くは小片で、しかも埋土の上方からの出土であるため情報量としては乏しい。ほとんどのSK・Pが、基盤である褐色土層中に掘り込まれており、検出レベルは一様ではない。野井遺跡の場合、基本的な層序は確定しているが、出土する遺物は相違的な裏付けを持たず、渾然一体となって表出してくる。よって、検出面での時期決定も正確さに欠ける。また、その検出位置においても、上部構造を持つ遺構が想定できるような配列も確認できない。従ってここでは、一つ一つについての記述は割愛し、測量値のみを表にまとめて記載することにした（第5表参照）。しかし、SK02・P23・51については特記すべき点があるので、若干触れて、以下順に説明を加える。なお、遺構を図化するにあたっては原則として以下のようにした。縮小率はそれぞれ、SKは、平面・エレベーション図を $S = 1/40$ 、Pは、平面・エレベーション図を $S = 1/20$ とした。ともに、堆積状況を示す半剖断面図は図示していない。ただSK02・P23・51のように、ほかより情報量の多いものについては、碑及び遺物出土状況図や遺物出土位置図を掲載した。



第57図 SK位置図



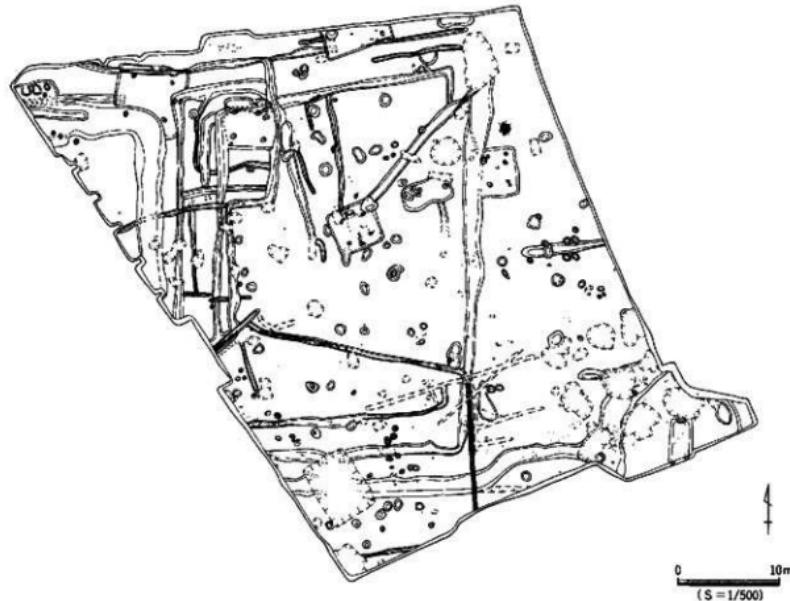
第58図 SK02・03・05・23・30・P11・23出土遺物



第59図 P23・48・51出土遺物

SK02は、+3dグリッドで検出した。半剖して堆積状況を確認したところ、遺物が比較的上方から出土した。土器類は、縄文上器4点、弥生上器6点、土師器5点で、いずれも小片であった。縄文土器、弥生上器のうちそれぞれ1点ずつ図示した(116・117)。石器は、加工を加えられた製品は出土せず、わずかに成人の拳大程度の下呂石原石が3点出土した(118~120)。本SKは、掘り込みがしっかりしている。深さは中央部で30cm程度あり、底面部で多くの小礫を確認した。礫は、直径10数cm~数mmの小さなものばかりが、ほぼ全面にわたっている。底面部に意図的に小礫を敷き詰めたかどうかは判然としない。他所の同レベルでは、このように小礫が集中する部分は確認できていない。P23も同様である。規模は小さく、やはり底面には同程度の小礫が集中している。遺物の出土状況でも共通する部分がある。例えば、遺物の出土位置が比較的上方であることや、小片の土器に混じて礫が混入している。P23の場合は、下呂石原石ではないが、研磨された砥石(134)が検出面近くから出土している。この砥石は「弥生時代のものではないか。」との指摘があるが、出土した遺物は縄文上器片が多い。これらSK02・P23は時期差はあるが、位置・形状等の点で多くの共通点を持つ。土坑の底面に礫を敷き詰め、亡骸を埋納し、土をかぶせた上に土器片等を撒く土壙墓の類例があると聞く。これらはその類である可能性もある。

P51は、縄文時代晩期の土器(136)を伴っている。SD09内であるため、上方からの検出はできなかっ



第60図 P位置図

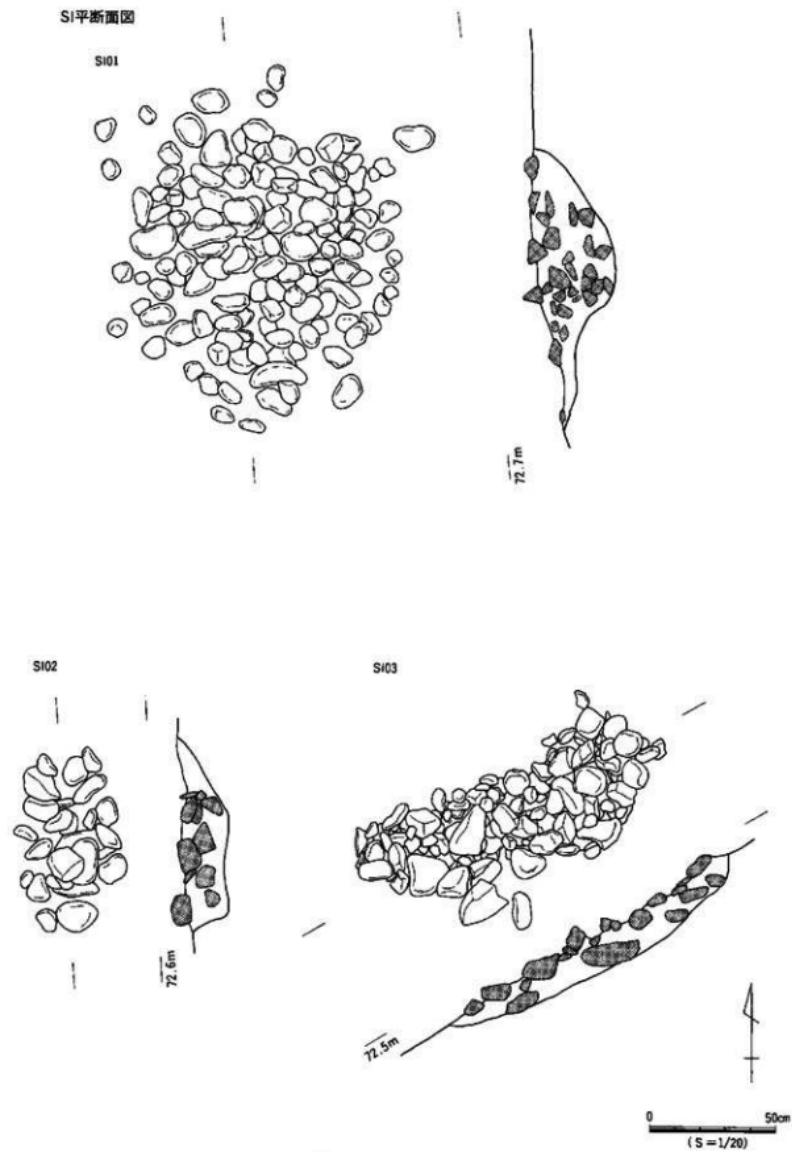
たが、遺物が出土したSD09の底面近くで、プランが検出された。おそらく本ピットの上部はSD09構築の際に破壊されて、わずかに底面近くのみが残った状態であったと思われる。出土したI36も底部片は本ピット内から出土しており、口縁部近くの破片はその付近に散乱していた。I36の底部片の内側には径数cmの礫が入り込んでいた。その礫によりI36は破壊されたと思われる。それが意図的なものであるのか、それとも自然現象によるものであるのかは定かではない。なお、SK35は、赤池4号古墳石室東の墳丘部で検出した。これは、古墳構築以前の所産と判断しII区に含めた。

集石遺構(SI)

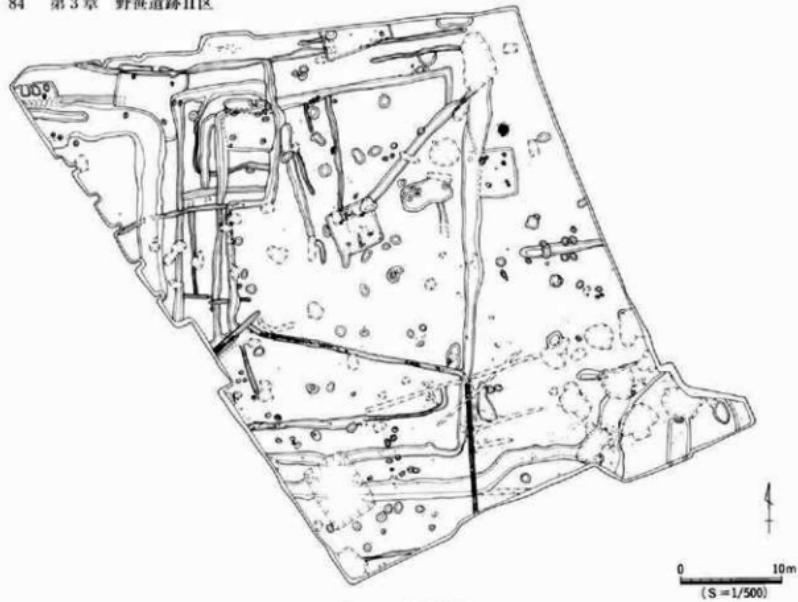
3基検出した。ここでは、人為的に集中させた礫群を主体とした遺構を、「集石遺構」として定義し報告することにした。このほかにも包含層中には、数個の礫が集中している箇所があった。それらは、人為的に集中させたと考えにくいものや、逆にごく最近の新しい段階において意図的に集中させたと思われるものであったため、遺構としては取り扱わずに処理した。わずか3基であるため、まとめて説明を加えることにする。なお、遺構を図化するにあたっては、縮小率を平面・断面両ともS=1/20とし、礫の断面はスクリーントーンで表現した。被熱箇所の表示については、明確でないものも多く認められたため、正確に図化することは困難と判断し割愛した。

現地調査の段階では5基確認している。しかし、そのうちの2基はいかにも礫が少なく、集中というよりも点在に近い状態であった。また、垂直方向の積み重ねがほとんどなかったことから、集石遺構とせず自然現象によるものと判断した。そういう点でいえば、SI02・03の規模はあまり大きくなかった。また、礫にも被熱した痕跡や加工等も確認できなかった。しかし、現地調査の段階では、不自然な感じがあり人為的な所産と思われたので、遺構として取り上げることにした。

SI02は、SD15の脇で検出した。しかし、SD15との関係は明らかでない。半削して構造を調査したところ、礫はおよそ2、3段で構築されており、逆台形状の掘り込みを伴うことが判明した。検出面以下では、ぎっしり礫が詰まっているような状況ではなく、礫と礫の間に土砂が堆積していた。遺物や炭化物等は確認できなかった。SI03も同様である。SD11の法面で検出された本遺構は、やや浅めの掘り込みを伴っていた。礫は垂直方向に2、3段程積み上げられていたが、詰め込まれた感はなかった。遺物や炭化物は確認できなかった。いずれにしても規模は小さく、詳細不明といわざるを得ない状況である。一方それに比べ、SI01は規模も大きく、礫も一部被熱していた。最も深いところで30cm程度の掘り込みを伴っている。下方の状況は一様ではなく、礫も密集していない。同様に炭化物は確認できなかったが、遺物は小片を数点伴っていた。しかし遺物の詳細は不明であり、出土位置も最上段の礫の隙間であった。検出当初は、比較的多くの礫が集中し、一部被熱も確認できたので、縄文時代早期の遺跡でよく確認される焼礫集積遺構の可能性を想定し調査を進めた。現時点では、そうした焼礫集積遺構の定義には当てはまらない状況である。このSI01は、SB01に隣接するように北東隅の外側に位置しているが、SB01との関係は不明である。また、これら3基の出土位置は、それぞれ(SI01から順に)+3b,+1b,1bグリッドで、3基の間に相関関係は認められないというのが妥当な見解であろう。



第61図 SI01～03実測図



第62図 SI位置図



SI01 断面



SI02 西から



SI03 北から



SI02 東から

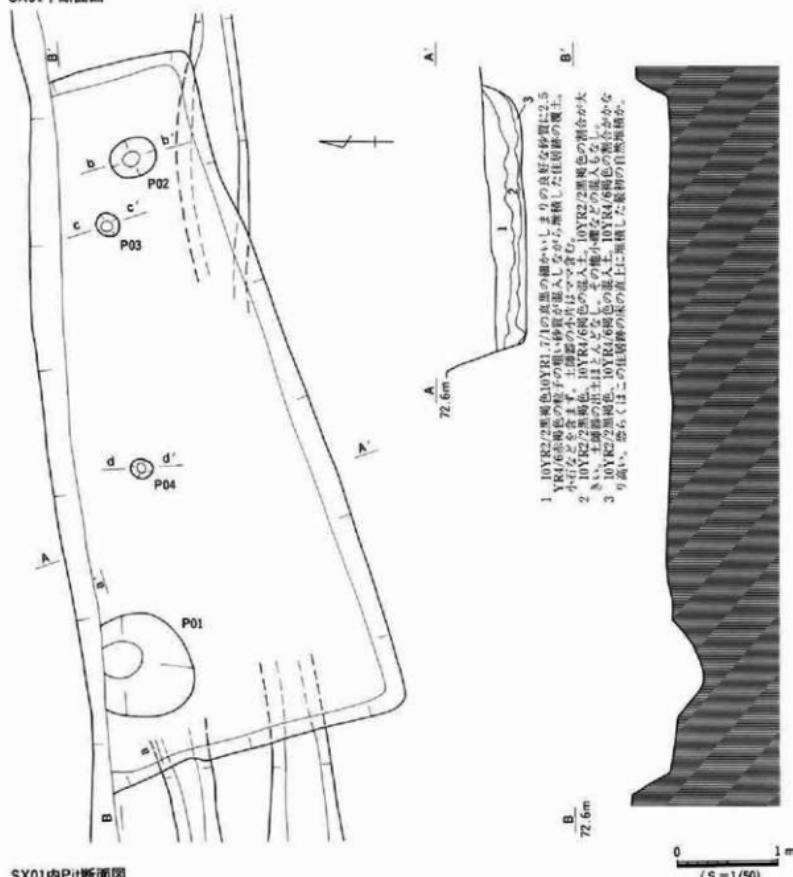
不明遺構 (SX)

8基検出した。ここでいう「不明遺構」とは、人為的に構築されたと思われるが、上記に分類したどの遺構の定義にも当てはまらないものをまとめた。従って、検出時の平面形や堆積状況においても一貫性がなく一様の定義は設けられない。紙面で平面・エレベーション図を見るだけでは、何ら土坑とかわらないものも含んでおり詳細は不明である。よってここではそれぞれの説明は割愛し、測量値及びSX全体の出土遺物量についてのみ別表（第6・11・14表）にまとめるにした。出土遺物も報告者の主観に基づき選出し図化した。ただ、SX01・02については、他のSXと大きく様相を異にするので、以下に若干の説明を加える。なお、図化するにあたっては、原則として縮小率を平面・エレベーション図ともにS=1/100とした。ただ、SX06・08については、やや小さめであったので図化を省略した。また、SX01はさらにほかと状況が違うことからS=1/50とし、必要に応じて断面図も図示した。

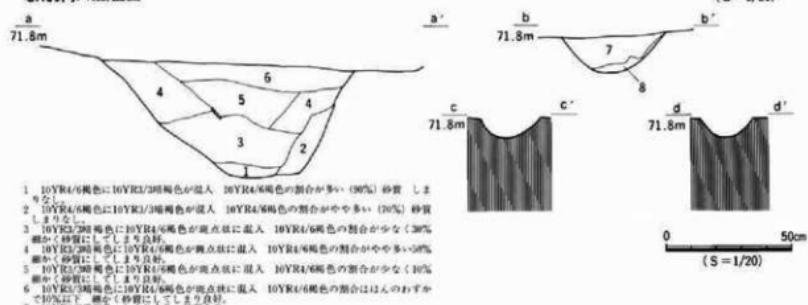
SX01は、調査区の北辺(1a,+1aグリッド)で検出した竪穴状遺構である。今回の調査で確認できたのは、南側のほんの一部でしかなく、そのほか大半は調査区外の一般道路下にある。よって本SXの南北の長さは不明である。東西は約7mで、平面形は南西・南東隅を見る限りでは隅丸方形と思われる。検出できた南側は、東西に走るSD17・18によってその一部を破壊されているが、両溝とともにそれ自体はさほど深いものではなかった（最も深いところで約10cm）ため、幸いにも破壊による影響は少なく済んでいる。遺構自体の堀方はしっかりとしており、竪穴の壁面は比較的急角度で立ち上がっている。深さは約40cmを計る。床面らしき箇所は確認できていない。基盤となる褐色土層は砂質であり、SB05のように強いて床面らしき部分を形成する必要がなかったと思われる。それはSB01～04においても同様である。ピットは4基検出している。P02～04は埋土中では確認できず、掘削を進める褐色土層になって始めて検出できた。そのことから、これらのピットは本SXに伴うものと判断した。しかしP01は、かなり下の方ではあったが、埋土中でそのプランが確認できた。P02～04とは検出状況がやや異なり、P01から出土した遺物(137)が本SXの埋土中より出土した遺物とは大きく様相を異にすることなどを考慮に入れると、P01は必ずしも本SXに伴うものとは断言できない。しかし、完全に無関係であるとも言い難いので、とりあえず本SXのピットとして番号を付し、独立させてはいない。

遺物は、320点出土した。内訳は、縄文土器7点、弥生土器15点、土師器286点、中世以降の土器類3点、石器9点である。本SXの場合、遺物は狭い範囲からまとまって出土しているので、接合率が高く、器形のわかる情報量の多い資料が提供できた。特に土師器は、時期区分という点においてまとまりを持つ。本遺構は定義上SXに分類した。それは検出した遺構から得られる情報がやや希薄で、住居跡と断言できる状況ではなかったからである。しかし、報告者（調査担当者としても）の主観では、限りなく住居跡に近い遺構であるとの見解を持っている。特に、出土遺物のまとまりという点では、住居跡に匹敵するだけの資料的価値があると思われる。本遺跡及び本遺構の性格を考える際にはこの点に留意したい。なお、本SXの帰属時期は、出土遺物から判断して古墳時代前期の可能性が高いと思われる。

SX01断面図



SX01内Pit断面図

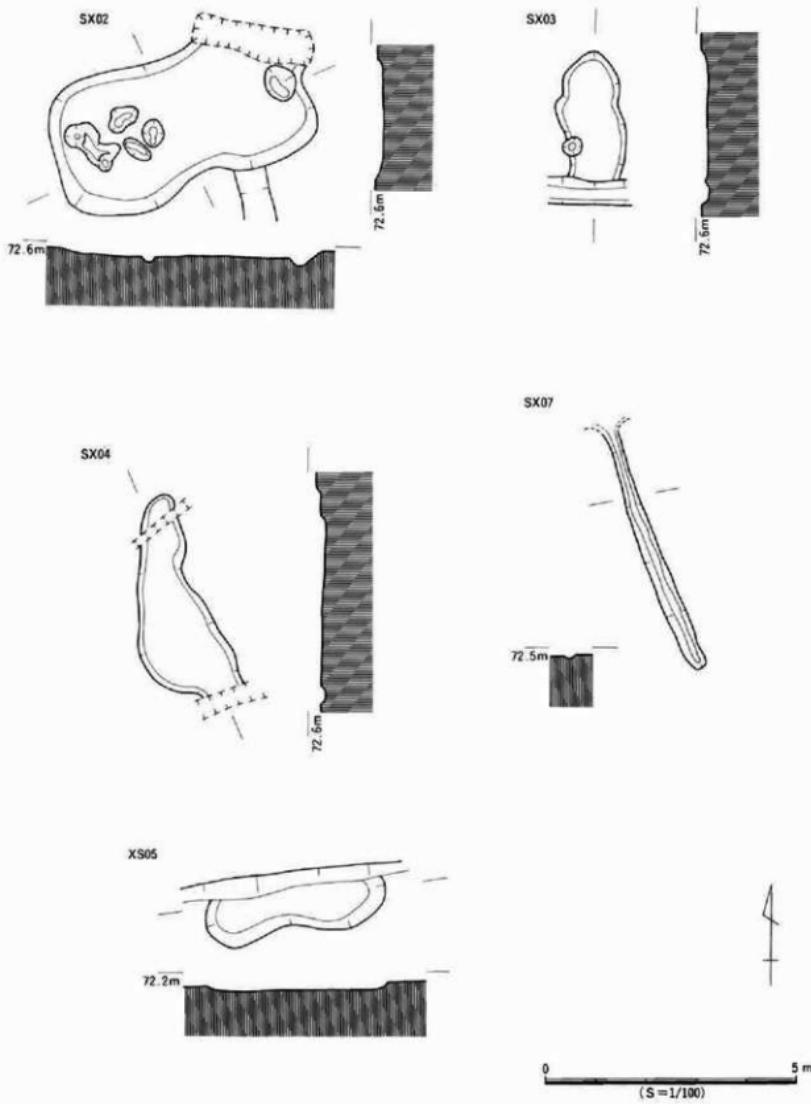


第63図 SX01実測図

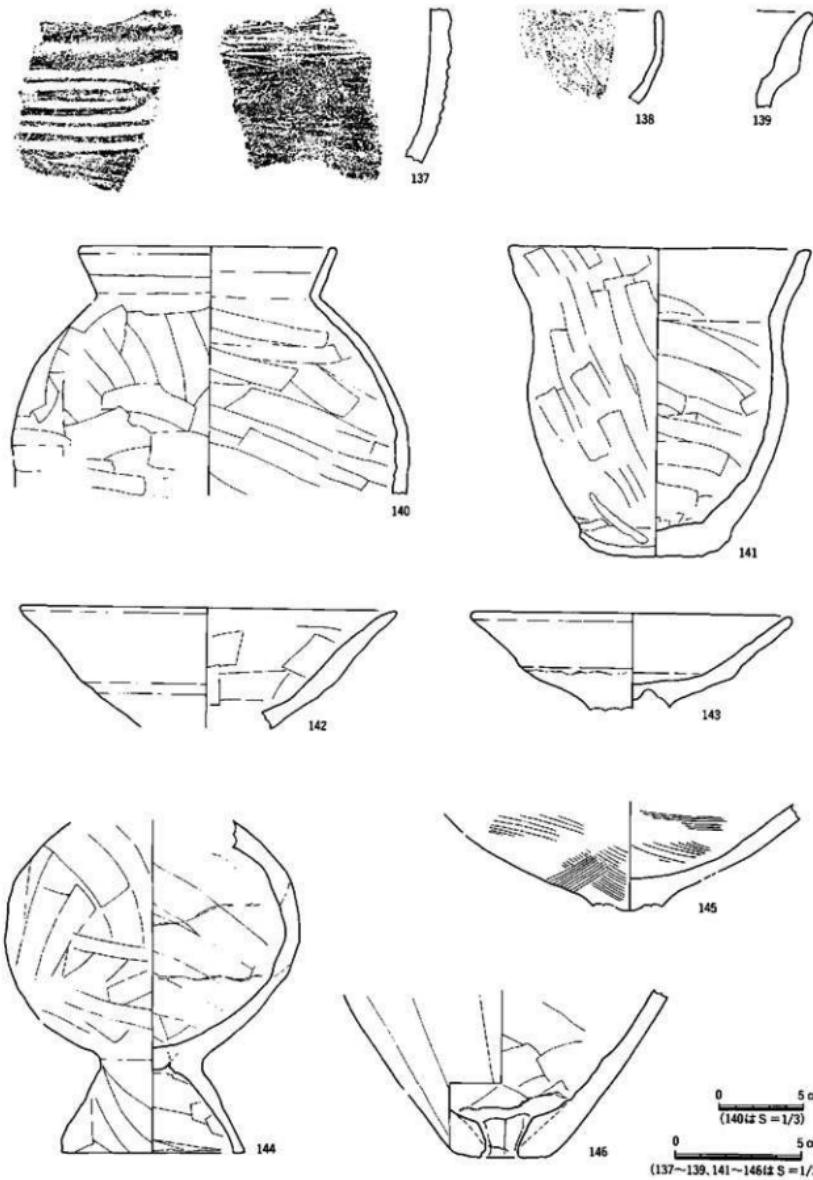
SX01遺物出土状況 (・は原則として遺物1点を表す。)



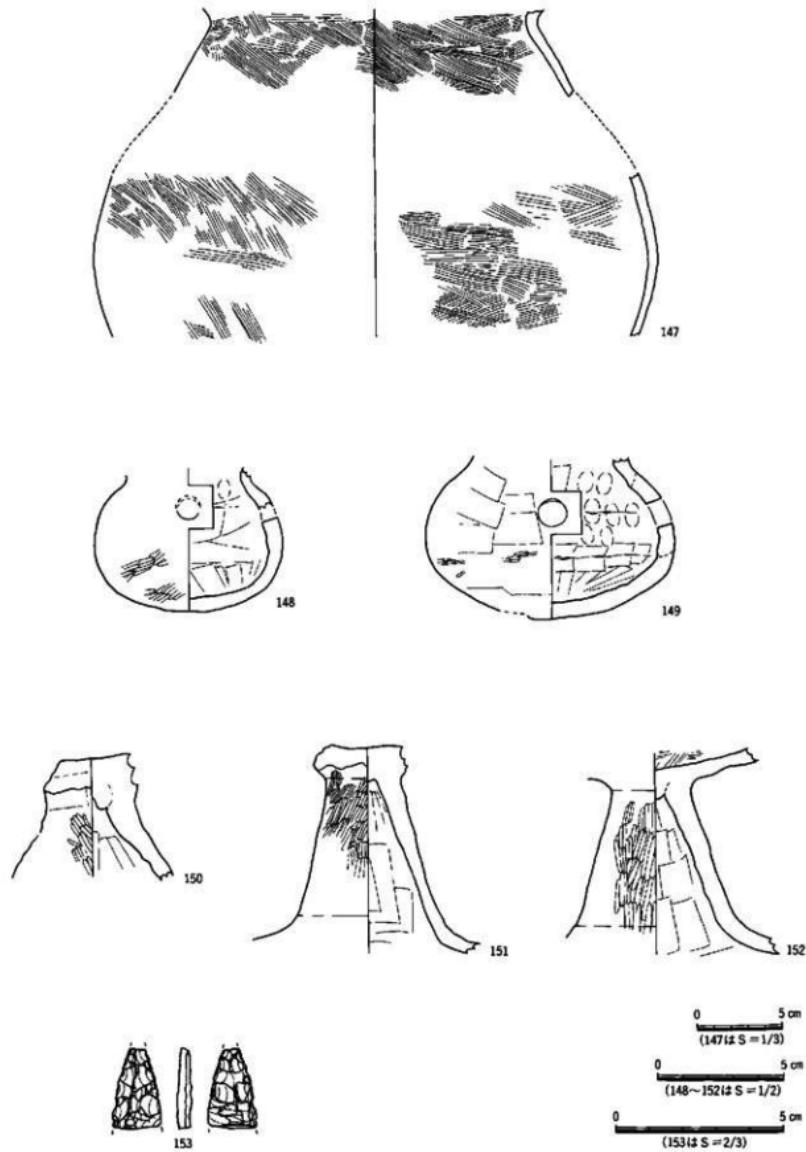
第64図 SX01遺物出土状況



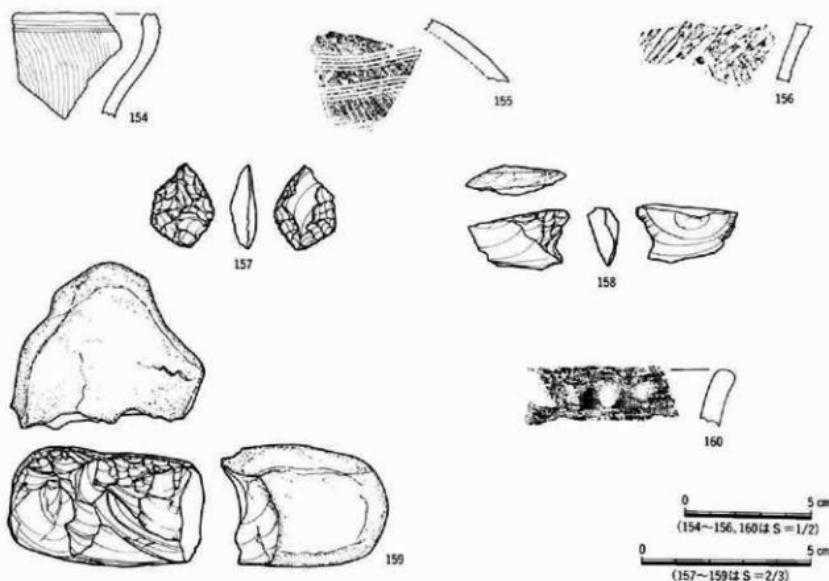
第65図 SX02~05・07実測図



第66図 SX01出土遺物(1)



第67図 SX01出土遺物(2)



第68図 SX02・04出土遺物



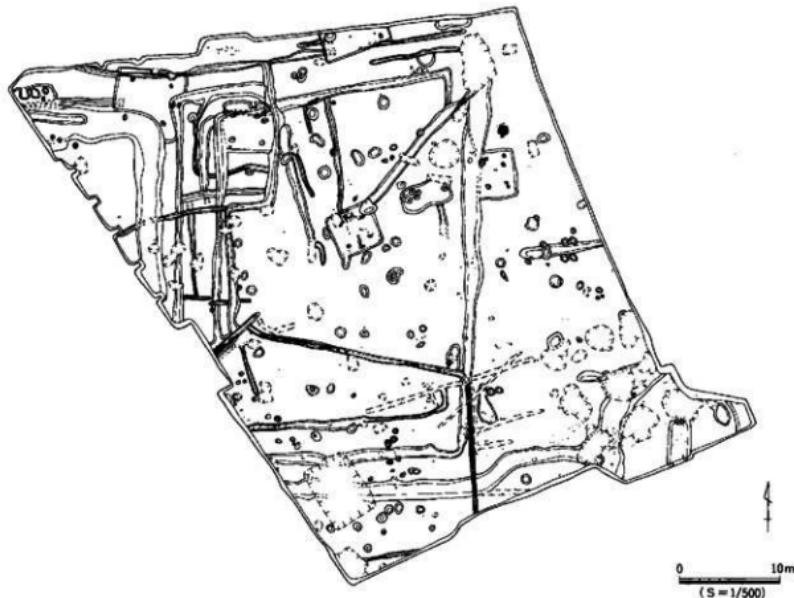
SX02 遺物出土状況



SX02 完堀状況

SX02は、SB01とSB05の間 (+1c、+2c グリッド) で検出した。本SXは、平面形が東西2.1m南北1.2mのややいびつな四辺形を呈する堅穴状遺構である。北東隅は近現代の農耕に伴う新しい搅乱(半穴)によって破壊されている。全体の平面形プランはあまり明確ではない。四分法によって掘削を進めたが、壇方の検出は困難を極めた。垂直方向の起伏は、東西のエレベーション図を掲載した。かなり浅く脈状である。本SXは、プラン確定以前の段階では、一面に黒褐色土が広がり、小片遺物が散乱している状況であった。SB01でも記述した様である。本SX内部では5基のピットを確認しているが、本SXに伴うものとは考えていない。これらのピットは、本SXの埋土を掘削し始める前から、ばんやりとではあったがその平面形プランが確認できていた。従って、本SX埋没後に構築されたピットと判断し、本SXから独立した存在であると考え処理した。なお、遺構番号は小土坑(ピット=P)として番号を付してある。また、南東隅近くにSD23が存在する。両者の関係は不明である。図上では、SD23を本SXが破壊しているように図化しているが、それらの新旧関係は明確ではない。

遺物は、156点出土している。内訳は、弥生土器7点、土師器58点、中世以降の土器類1点、石器90点である。小片ばかりではあるが、中でも比較的良好なものを資料として図示した。しかしそれらは、本SXの帰属時期や性格を決定づけるものではない。本SXの出土遺物全体を概観しても、それらには、まとまりを見いだすことはできない。本SXは規模的には大きく出土遺物点数もほかより多いが、SX01とは異なり不確定要素が多い。従って詳細不明と言わざるを得ない。



第69図 SX位置図

第3節 遺物

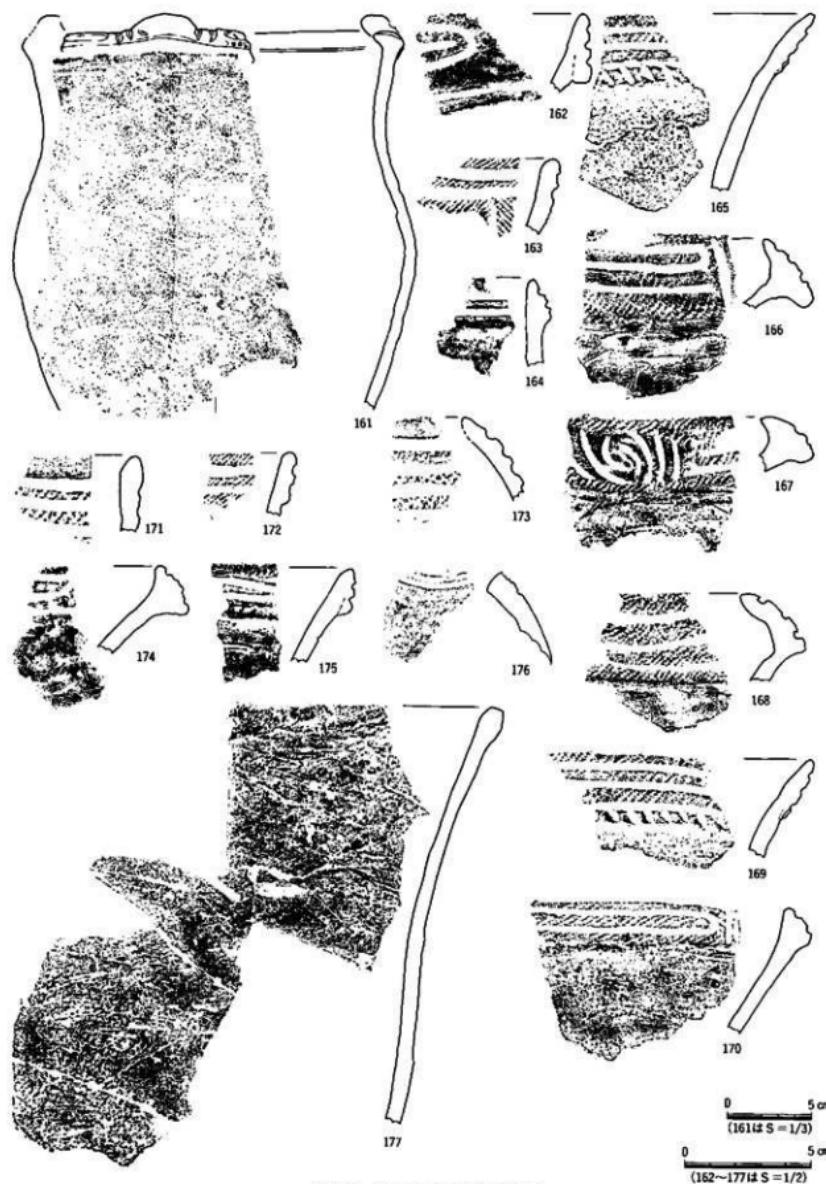
平成11年度に調査したII区からは、11,638点の遺物が出土している。内訳は、縄文土器2,196点、弥生土器2,165点、土師器2,258点、須恵器427点、山茶碗1,130点、中世以降の土器類159点、石器2,120点、そのほか74点、不明土器1,109点である(出土点数は、すべて接合前破片数。以下も同様)。遺物の状態は、大きさという点では小片が多く、遺存状態という点では比較的劣化が少ない。II区は前述のように、出張所の跡地で大規模な発掘によって破壊されている箇所も少なくない。そのため遺物も完形で出土することがほとんどなかった。遺構内より出土したものは復原可能なものも多いが、遺構外出土の遺物は小片故にその部位ですらも特定できず、詳細不明のものが多い。ただ、遺物が埋没している上層は砂質であるため、強固な岩盤を掘り込んで遺構を形成しているような遺跡から出土する遺物よりは、表面的な摩滅が少ないと思われる。特に、縄文土器、弥生土器、土師器はそうである。しかし、遺物全体の状況は豊富とは言い難い。検出できた遺構数の違いもあるが、隣接するI区と比較すると、量・質ともに劣ると言わざるを得ない。

出土した遺物のうち、421点(図示点数は接合後破片数。以下も同様)を図示した。基本的に土器類は、縮小率を $S = 1/2$ とした。紙面の制約上、大きめのものは $S = 1/3$ または $S = 1/4$ で閑化した。径が推定復原可能なものについては、図上で復原した。また、径が不明のものについては平面・断面図を掲載した。断面図は見通し断面とした。赤彩が明瞭であるものについては、その部位を表示した。石器については、器種によってその縮小率は異なる。石鎌、剥片石器、石核、尖頭器、石槍、石錐、石剣類は $S = 2/3$ 、打製石斧、石鎌、原石類は $S = 1/2$ 、石鎌、砥石類は $S = 1/3$ 、礫石器類は $S = 1/4$ とした。しかし、サイズによってはこの限りでないものもある。それぞれ図示したページには、スケールとともにその縮小率が表示してある。以上、出土遺物全体の状況と図示の方法について記した。

以下では、II区で出土した遺物について、それぞれの種別ごとに大きく概観し、特記すべき事項についてのみ詳細な説明を加えることとする。なお、遺物の詳細については種別に応じた基準にもとづき観察した。観察結果については、別表(第17-20表)にまとめた。『野雀遺跡I』では、出土した遺物を中心にして帰属時期を17期に区分している。本報告書では、すべての遺物についてではないが一部で対応させているところがあるので、その区分を第1表として掲載した。

縄文土器 (1・27・28・37~39・48~50・66・70~72・88~91・97・102・103・116 ・124~127・129~132・136・137・161~246・282・283)

出土した縄文土器の多くは無文の胴部片である。それらの破片は土器であるということ以外に、何ら有益な情報を提供するものではなかった。また、弥生土器、土師器も同様な状況で、種別以外には詳細不明のものばかりであった。ゆえにこれら三者は、その胴部片を見る限りでは非常に近似しており、判別は容易ではなかった。分類にあたっては、破片1点1点を慎重に観察しながらその胎土・焼成等に着目しながら選別した。しかし、それは報告者の主觀に基づくものであり、誤認もあり得る。縄文土器、弥生土器、土師器の出土点数については、その点を考慮に入れて取り扱いをした。



第70図 造精外出土繩文土器(I)

0 5 cm
(161はS=1/3)

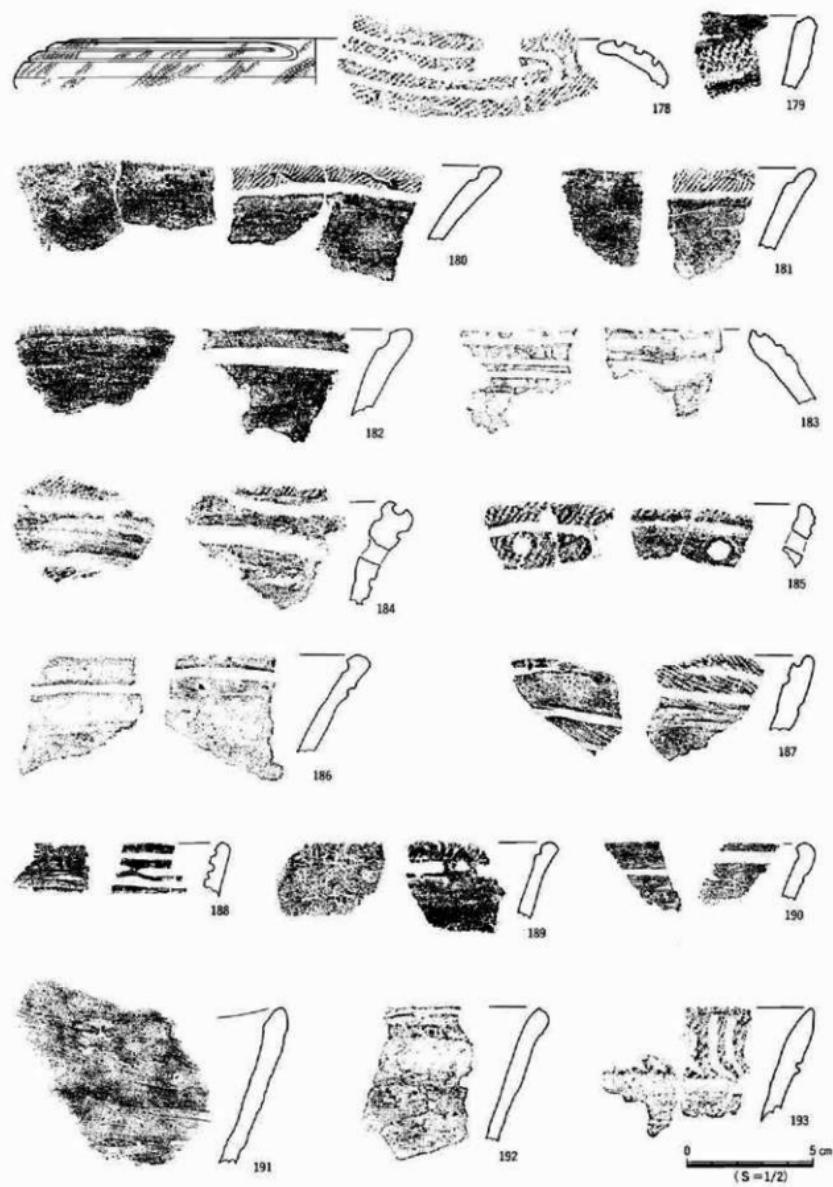
0 5 cm
(162~177はS=1/2)

第1表 野籠遺跡I区における時期区分(『野籠遺跡I』より)

野籠	遺構	遺物	時期	土器型式による細分
1期		○	縄文時代中期末	咲焼・醍醐I・船元・里木V・加曾利EII
2期	○	○	縄文時代中期末	咲焼・醍醐II
3期	○	○	縄文時代中期末	咲焼・醍醐III
4期		○	縄文時代後期	称名寺～加曾利B、福川KII～縄帶文系
5期		○	縄文時代晚期	
6期		○	弥生時代前期	遠賀川
7期	○	○	弥生時代中期前葉	朝日
8期		○	弥生時代中期中葉	貝田町
9期			弥生時代中期後葉	高藏
10期	○	○	弥生時代後期	山中
11期	○	○	弥生時代終末期	欠山・道間I
12期	○	○	古墳時代前期	
13期	○	○	古墳時代後期	
14期	○	○	古代	
15期	○	○	中世前期	山茶碗 第3～6型式
16期	○	○	中世後期	山茶碗 第7～11型式
17期	○	○	近世・明治時代	

ここでは、主に情報量の多い有文の縄文土器片を中心に119点図示した。出土した縄文土器は、中期末葉から晚期のものばかりである。中でも最も充実しているのは後期の上器で、I区からも良好な資料が多く出土している。前述のように、今回出土した縄文土器は情報量の少ない破片資料が主である。したがって、すべてにわたってさらなる時期的・形式的分類は行っていない。また、一括して掲載しているので時期的に前後する記述があるかもしれない。その点については予め断っておきたい。

1は、口縁部片である。焼成は良好である。27も口縁部片で、やや内湾する。28は、底部片で外側面にナデ調整が確認できる。37・38は、ともに口縁部片で同一個体の可能性がある。沈線文系土器の深鉢かと思われる。39は、横位の低い突帯が1条あり、その下にはやや細めの沈線文が施されている。突帯上には細かな刺突がある。48は、口縁部破片で、外面上方に突出状の貼りつけがある。下方には横位の沈線が見える。49・50は、沈線文系土器の胸部片である。50は、沈線による区画内に斜縄文で充填されている。49・50は、ともに中期末葉と思われる。66は、磨消縄文を伴う胸部片である。70・71は、口縁部である。70は、無文である。71は、端部に刻みを持つ。72は、胴部片で細かな縄文が施されている。88～90も同様で、後期に属すると思われる。91は、晚期の浮線文系土器の口縁部片である。小片ながら遺存度は良好である。97は、口縁部外面にカッコ状の沈線による文様を持つ。遺構外出土の193と同一個体の可能性もある。口縁部以下については不明である。102は、口縁端部に半截竹管状工具による刺突が施されている。以下は不明である。103も端部に逆C字状の刺突がある。外面は黒く煤けており、焼成は良好である。晚期に属すると思われる。116も同じく晚期の口縁部片である。



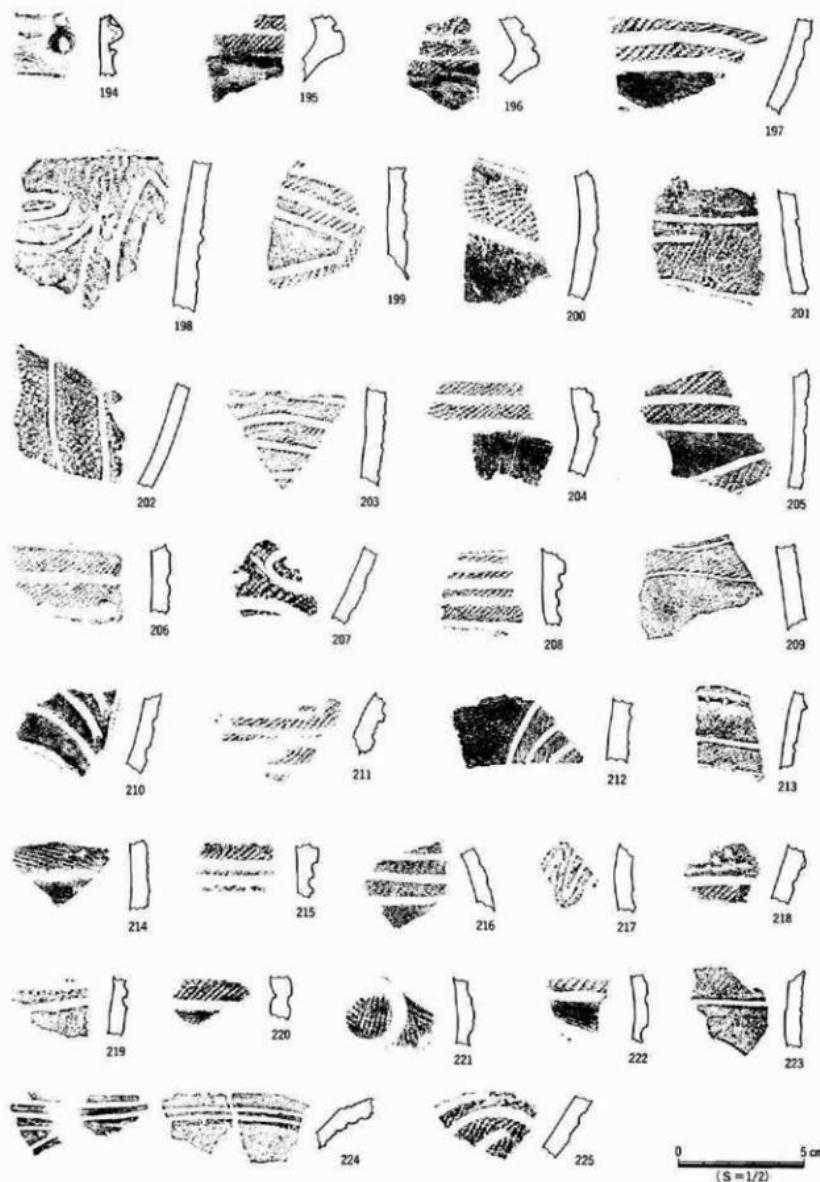
第71図 遺構外出土繩文土器(2)

91に似た浮線文系土器と思われる。124は、やや張り出した胴部片である。表面に刺がれがあり見にくくい部分もあるが、横位の沈線が2条確認できる。125・126は、ともに口縁部片である。斜縞文を施し横位の沈線を2~3条入れている。126は、下に粘土紐の貼りつけがあり、上には斜方向の刺突を施している。後期前葉のものと思われる。127は底部片、129は胴部片である。130・131は、口縁部片でやや緩やかな波状口縁と思われる。後期の粗製土器である。132は、詳細不明である。

136は、II区で出土した縄文土器の内では最も良好な資料である。この土器は、その出土状況が示すように SD09の底面で検出したP51の南側縁から出土した。出土した際には、中に成人の拳大の蝶が入っていた。そのために破損したと思われ、胴部下半から底部にかけての破片を核として、周囲に口縁部から胴部上半の破片が散乱していた。二次整理の結果、一部分で口縁部から胴部上半の部位が欠損しているだけで、ほとんど完形に近い状態に復原できた。サイズは小さめの深鉢である。口縁部には、晩期後半の土器に見られる特徴ある「区画系工字文」と呼ばれる文様が施されている。口縁部で主文様の構成要素とされている沈線は、部分的に底部に向かって垂下している。しかし、どれも胴部中央付近で消滅している。底部外面には明瞭な網代痕が確認できる。「二本越え二本潜り一本送り」である。137も晩期後半の浮線文系土器である。口縁端部は欠損しているが、かなり近い部位と思われる。低めの隆線と浅めの沈線によって口縁部文様帯が形成されている。内面には横位の条痕が上半に見られる。以上が遺構出土分である。

161~246は、遺構外出土分である。その出土地に特定の集中は認められなかったが、強いて言えば、調査区の南半分からの出土が多かったと言える。有文土器を中心に時期が判明するもの多くは、中期末葉から後期前半であった。

161は、II区遺構外出土の縄文土器片としてはサイズ的に最も大きい。口縁端部と拓影で表現した範囲がこの破片の面積である。外面を上にして出土した。周辺を丁寧に精査したが、遺構の存在は確認できなかった。下部に反対側の面があることを想定し慎重に掘削したが、これ以上の破片は出土しなかった。端部は肥厚させて加飾してあり、それ以下は無文である。口縁部下でややくびれ胴部中央でやや膨らむ器形を呈する。底部は不明である。焼成は良好で、胎土はやや粗めである。162~193は、端部が確認できる口縁部片である。194~196も端部こそ欠損しているが、口縁の一部と判断できる。これら口縁部片の内、162~175・178に共通するのは、口縁部外面に縄文と沈線による文様帯を持つことである。またその文様帯は横位が基調で、幅はあまり広くない。口縁部片であるため不明な点はあるが、口縁部以下は無文であろうと思われる。これらの土器は口縁部の形状によって大きく三通りに分けられる。一つ目は、ほぼ直線的に外側へ開いていくタイプである。端部は丸められたりつまみ上げられたりと違いはあるが、明確に面を作出している感じではない。163・165・169・171・172がそうである。二つ目は、端部が発達して面を作出しているタイプである。「く」の字状に端部が内折するものと、端部周辺が胴部の器壁と垂直方向に発達し断面が「T」字状になるものがある。168・173・178・195・196が前者に該当し、166・167・170・174が後者に該当する。三つ目は、それらの中間に当たるもので、口縁部がやや肥厚し始めているタイプである。162・164・175がそうである。いずれも後期の縁帯文系土器である。176は、不明である。口縁端部のラインから内側に傾くと判断した。177・192は、後期の粗製土器である。平口縁ではあるが、130・131と同様のタイプである。なお191も同じで、130・131よりやや波状がはっきりしている。179は、外側の一部に縄文が確認できるが、それ以上の手掛か



第72図 遺構外出土縄文土器(3)



第73図 遺構外出土縄文土器(4)

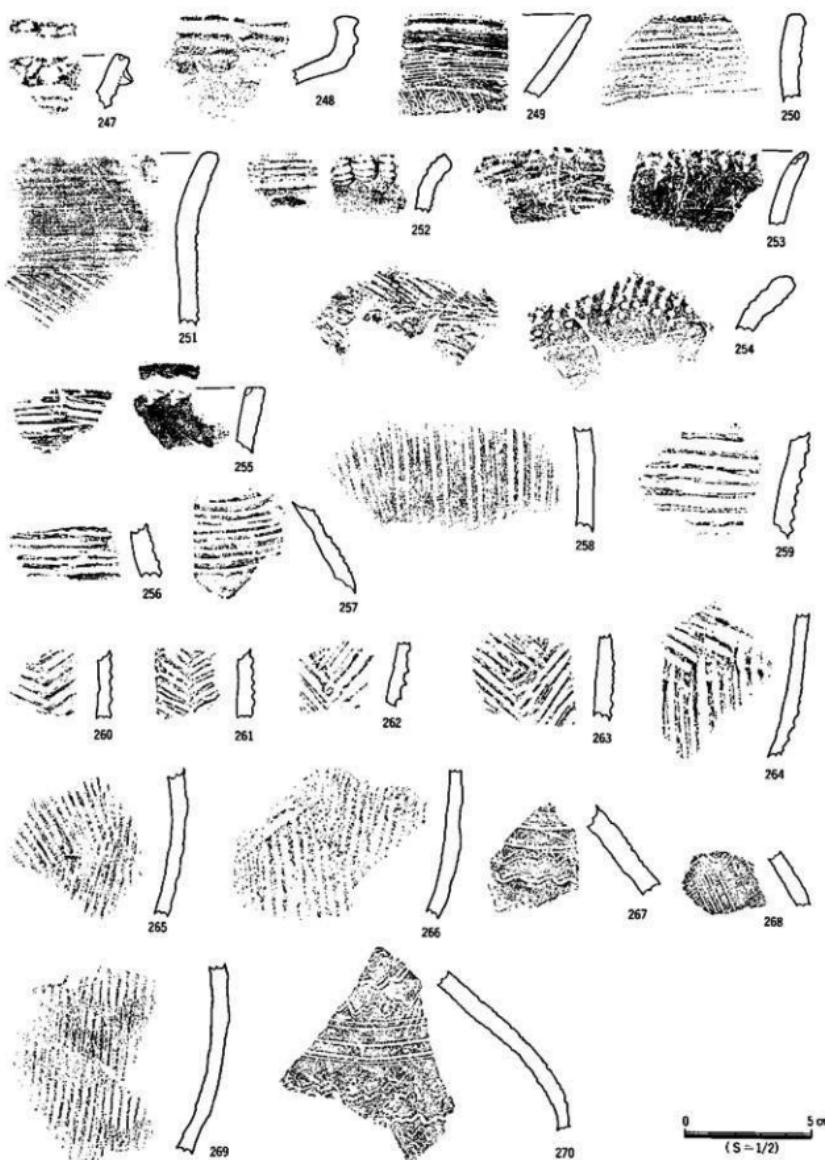
りはない。180~190は、口縁部片のなかでも内面に加飾を持つものである。主に横位の沈線が施されている。180・181・185は、口縁部の内側に1条の横位沈線を持ち、沈線から端部にかけての部分には繩文が充填されている。しかし、同様な形状であるにもかかわらず182・186・189・190には繩文帯がない。内面の沈線が単純でないものは187~189である。187は、縄文と沈線の混成による文様帶である。188は、複数の沈線で文様を構成している。189の沈線は、一点鎖線状である。183は、端部のラインから内傾としたが、詳細は不明である。185には、補修孔がある。194は、後期の土器に特徴のある「8」の字状突起が口縁部外面に貼り付けられている。197~245は、胴部片である。部位は口縁部に近いものもあれば底部付近のものもある。詳細不明のものもあるが、概ね中期末葉から後期前葉にそのピークが認められる。ほとんどの破片が縄文と沈線によって文様帶を構成しており、中には磨消部分を伴うものもある。これらの胴部片については、帰属時期等の判明する事項は觀察表に譲り、ここでの記述は割愛する。246~282・283は、底部片である。282と283は、紙面の関係と弥生土器との比較から第73図に掲載した。246は、底面から一度内側に屈曲して外側へ開くように胴部に向かう器形を呈する。側面からは台が付いているように見える。底面には、わずかに痕跡が見られる。詳細は不明である。282・283の底面には、網代痕がある。282は、やや不鮮明ではあるが、「一本越え一本潜り一本送り」のいわゆる「平織り」である。283は、136と同様に「二本越え二本潜り一本送り」である。

弥生土器（2~11・51~56・67・68・73・74・92~94・99

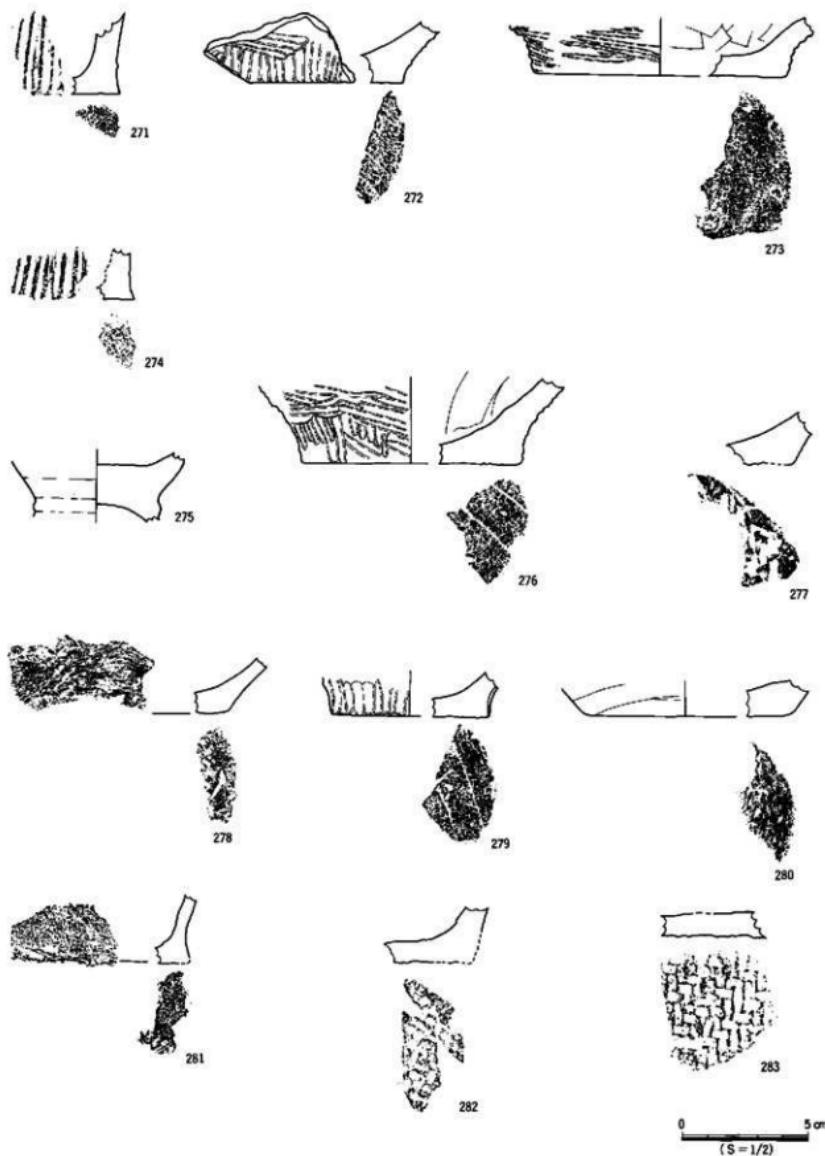
・104・113・114・117・121・128・154~156・160・247~281）

微細な破片も含め全部で2,165点出土した。ここでは、そのうちの69点（接合後の点数）を図示した。前述のように出土した遺物は小片がほとんどであり、掲載するに耐えないものが多い状況である。従って調整及び文様等によって、その特徴がわかるもののみを選定し図化した。

2~11は、SB01から出土している。II区出土の弥生土器の中では、遺存状態が最も良好でまとまりがある。核となるのは11である。接合できたのは口縁部から胴部中央辺りまでであった。破片としては1/2個体分ほど出土している。緩やかに湾曲しながら外側へ開き気味に立ち上がる器形を呈する。口縁端部外面に斜方向の刻みがあり、その下は横位・斜方向の調整が施されている。中期の条痕系甕である。6も同一個体かと思われるほど酷似している。10も同一個体で11の底部にあたると現地調査の段階では考えていたが、二次整理の結果、口径と底径の差に不自然を感じがあり、確認に欠けるので、ここではとりあえず別個体として報告することにした。底面外部には布目压痕が見られる。3・7は、壺の胴部である。8は、壺の口縁部から頸部である。4・73・264~266は、甕の胴部片で横羽状の調整痕が、また67・93・99・260~263には、縱羽状の調整痕がある。9・74は、底部片である。詳細は不明である。51・117・154・248・256・257は、壺の口縁~頸部片、52・92・113・155・267・268・270は、壺の肩部~胴部片である。53~55は、甕の胴部片である。249~255は、甕の口縁部である。そのうち252~255には、内面端部付近に刺突がある。56・94・271~274・276~281は、甕の底部で、側面には斜方向もしくは縱方向の調整痕が見られるものもある。68には、底部外面に布目压痕がある。160は、口縁部、104・156は、胴部片である。ともに詳細不明である。121・247は、条痕文系土器の口縁部である。128は、中期条痕甕の口縁部である。内面端部付近には刺突が見られる。275は、高坏の接合部であろうと思われるが不明である。



第74図 遺構外出土弥生土器(1)



第75図 遺構外出土弥生土器(2)

土師器 (22・24・25・29・30・40・41・75・105・138~152・284~293)

出土した土師器のうち、特徴あるものを選定し掲載した。図示したのは、接合後の点数で34点である。胴部以下の破片は調整痕以外にはほとんど不明であるため、ある程度器形がわかるものや口縁部を中心に図化した。それでも口縁部から底部まで存在する資料は41の1点しかないため、残念ながら出土点数の割には部分的な資料としてしかなり得ていない。

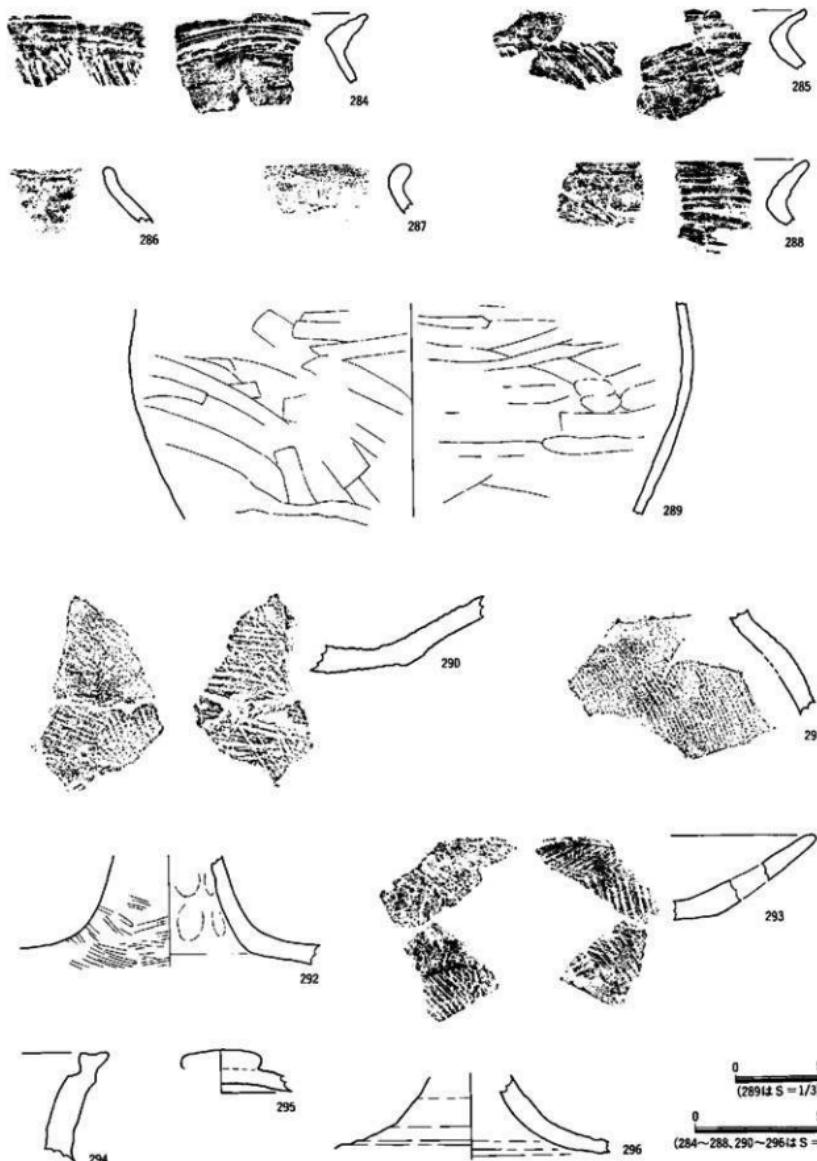
土師器全体としては、大きく二つに分けられる。古墳時代前期の一群と、古墳時代後期から古代に至る時代のものである。前者は、SX01の一括資料である138~152ほかが該当する。後者は、SB02~05から出土している長胴甕に代表される資料で、22・24・25・29・30・40・41・75・105・284~289が該当する。SX01から出土したのは、甕・壺・高坏が中心である。138は、製塙土器ではないかとの指摘もあるが、小鉢である可能性もある。140は、甕の口縁部から張り出した胴部まで残存している。141は、小ぶりな深鉢である。一部分だけが口縁部から底部まで残存している。しかし、状況は良好ではなく表面はぼろぼろである。144は、台付き甕の頸部以下の部位であり、これもやや小ぶりである。142・143・145・150~152・290・292・293は、高坏である。142~145・290・293は、壺部である。145以外は、比較的明瞭な段がつく。150~152・292は、脚部である。150以外は、欠損していて判別不能だが、いずれも接地面付近で外側へ屈曲する器形と思われる。146は、瓶である。高坏にも見えるが穿孔状況から判断した。147は、同一個体と思われる2破片を図上で復原した。詳細は不明である。148・149は、甕である。口縁部は欠損しているため不明であるが、胴部には明瞭な穿孔が確認できる。土師器の出土例は少ない。三重県の城之越遺跡出土の類例がある。

22・24・25・29・40・41・285・285・288・289は、いわゆる長胴甕である。出土したものは胴部のみの破片が主であり、詳細が不明のためここでは口縁部と底部付近の破片を中心に掲載した。完形の資料は、前述した41のみである。24・25も破片としては大きいが全体の器形は判然としない。29は、胴部片のうちでも底部に近い部位である。下端で底面部との接合部分が見える。これは、「牧野系甕」に見られる「相欠はぎ接合」である。それは、25・41でも確認できる。また、III区から出土した土師器甕でも確認できるものもあった。

須恵器 (23・26・31・42・43・57~59・294~305)

ここでは、器形がわかるものを中心に20点掲載した。

23は、壺蓋である。端部が欠損しているため、詳細は不明である。SB02のカマド付近から出土している。26・31・297は、壺身である。26は、受け部からの立ち上がりがほぼ垂直であるが、31はやや傾斜しており、297はさらに傾いている。その点から判断すると、この中では26が最も古い様相を呈していると思われる。42は、碗である。SB05から出土した。白色化しており、生焼けであった可能性もある。表面の劣化が激しく、一部が出土地帯に剥がれ落ちて散乱していた。詳細は不明である。43は、II区から出土した須恵器の中では最も良好な資料である。42と同様にSB05から出土している。脚部は全く確認できなかった。やや大きめの有蓋高坏の壺部で、外面にはほぼ全面にわたり緑色の釉が付着している。脚部は欠損しているが、接合部分がわずかに残存しており、その部分から三方向の透かしがあることがわかる。帰属時期はおそらく6世紀ごろと思われる。I区でいう13期に該当する。なお、この高坏は23の土師器長胴甕と共に共伴して出土している。



第76図 遺構外出土土師器・須恵器(1)・山茶碗(1)

上記の6点が古い様相を呈しているのに対して、そのほか14点は、比較的新しい様相である。碗類の底部片が中心であり、古代のものと思われる。I区の14期に帰属するものがほとんどである。59は、环蓋の破片である。詳細は不明である。

なお、小片に至るまで丹念に検討したが、何ら迷いもなく提示できる灰釉陶器は確認できなかった。おそらく存在したであろうが、遺物の遺存状況が良好でないため、また微細な小片となってしまったために確認できなかったに過ぎない。従って、このことから灰釉陶器を使用した時期や集団が、この地では確認されなかつたとするのは早計であろうと思われる。そのことは、少ないながらI区では灰釉陶器の存在が確認されていることからも判断できる。

山茶碗（60・62・69・76・86・106～108・306～321）

25点掲載した。器種は碗と皿がある。61・106・309・315は皿で、そのほかは碗であろうと思われる。61は、底面部がやや厚手で、体部は薄手である。106はやや厚手、309は全体に厚手である。315は、底面が厚手である。底面外側には明瞭な糸切り痕が確認できる。

碗は、体部の立ち上がりが緩やかなものばかりである。107・310の高台は、やや高めであるが、はつきりしないものもある。また、高台部分には粗筋痕が見られるものが多い。

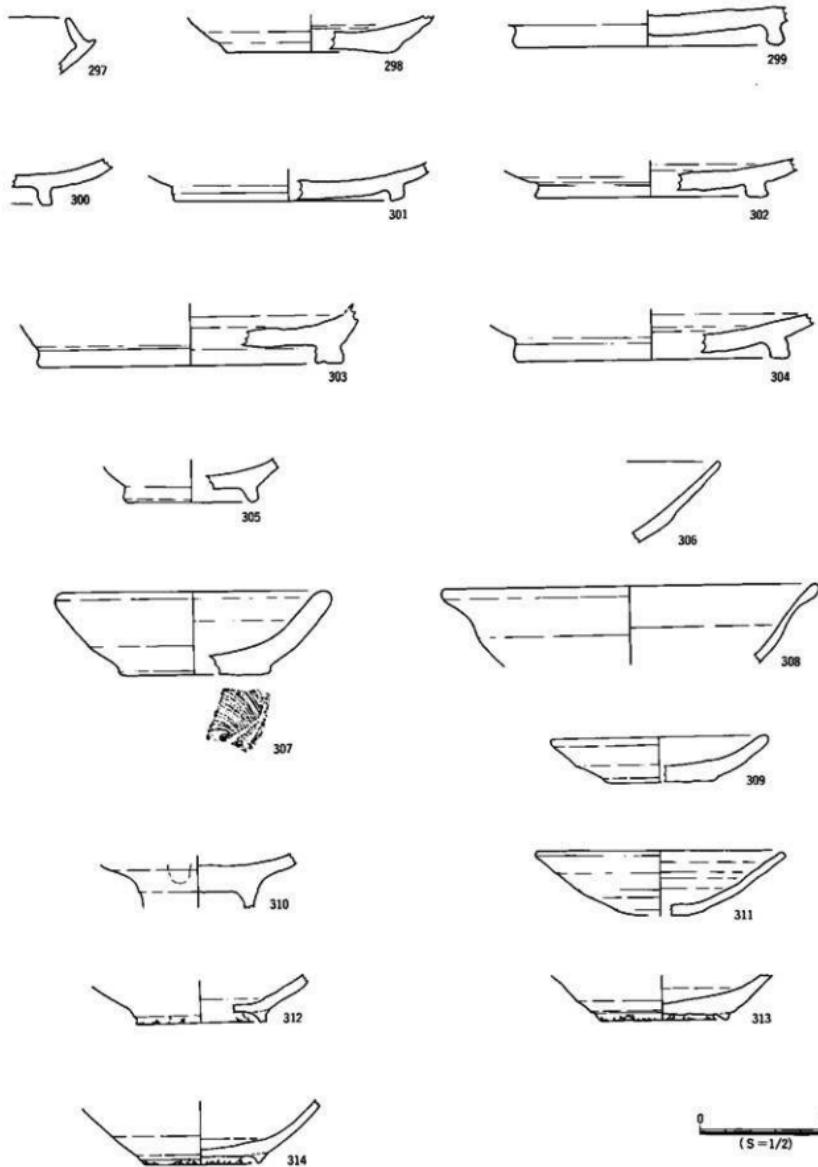
中世以降の土器類（109・110・322・323・325～335）

山茶碗を除いた中世から近世の土器類はかは、159点出土した。そのうち良好なものを15点掲載した。109は、盤である。内面に刻文らしきものがあるが解読できない。常滑の赤物で18世紀中頃ではないかとの見解もある。110は、徳利の底部である。底面に墨書がある。322は、灰釉が施された丸碗である。323は、飴釉が施された湯呑みである。ともに18世紀のものであろう。325～328は、中国磁器で、328のみ盤であるが、ほかは碗である。325は、底部片である。龍泉窯系と思われる。12世紀後半から13世紀頃のものであろう。326も胎土は粗いが龍泉窯系と思われる。327には、蓮弁文が施されている。15世紀後半頃のものと思われる。328は、II区から出土した中近世の遺物の中では最も資料価値が高いとの指摘がある盤の口縁部である。同じく龍泉窯系で14世紀頃のものと思われる。329は、灰釉が施された古瀬戸産の縁釉小皿である。330は、同じく古瀬戸産の釜で、飴釉が見られる。329・330は、ともに15世紀後半のものと思われる。331は、18世紀頃の香炉である。飴釉が施されている。332は、古瀬戸の釜であろうと思われ、時期そのほかは不明である。333は、連房の天日茶碗である。17世紀前半頃のものと思われる。334は、大窓の天日茶碗である。16世紀後半頃のものと思われる。とともに口縁部で内外面に鉄釉が見られる。335は、火鉢である。外面には銅線釉が施されている。文様は3種類の印花文で構成される。18～19世紀頃のものであろう。

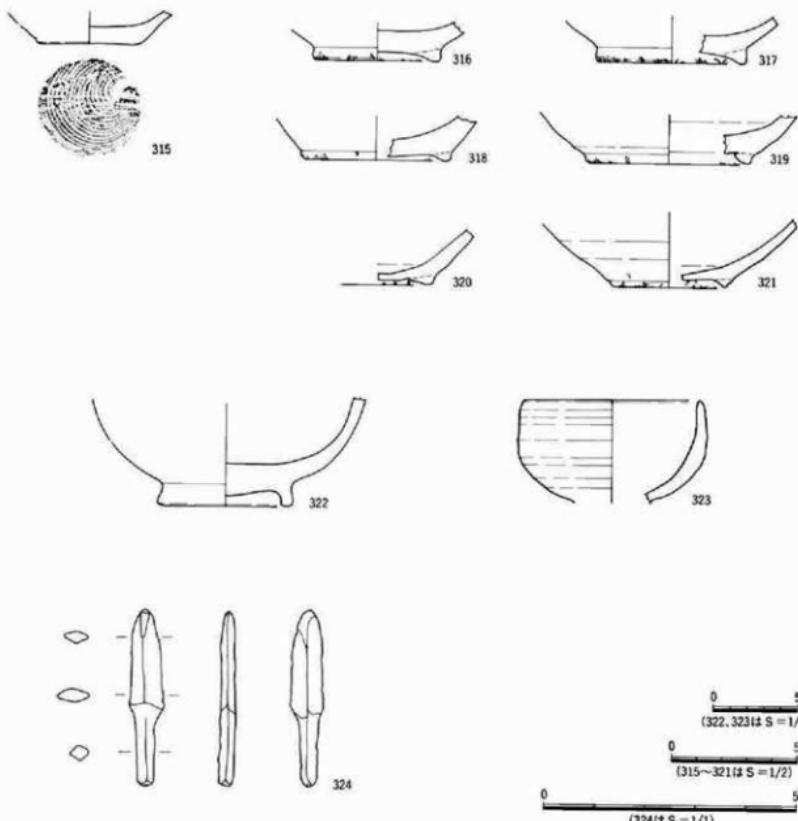
石器（12～21・32～36・44～47・63～65・77～85・87・95・96・98・100～101

・111・112・115・118～120・122・123・133～135・153・157～159・336～421）

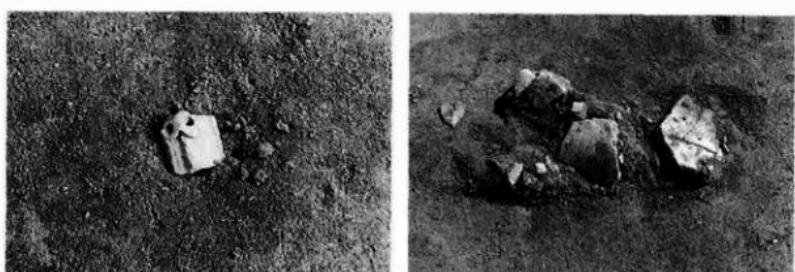
出土した2,120点の内訳は、別表(第14表)とし、ここには石鎚31点、石槍12点、尖頭器1点、石錐6点、石鏃2点、剥片石器10点、スクレイバー3点、打製石斧35点、磨製石斧1点、石鎌1点、石錐1点、石核24点、敲石4点、凹石1点、砥石1点、台石1点、偽石器1点、原石3点の138点を掲載した。



第77図 遺構外出土須恵器(2)・山茶碗(2)

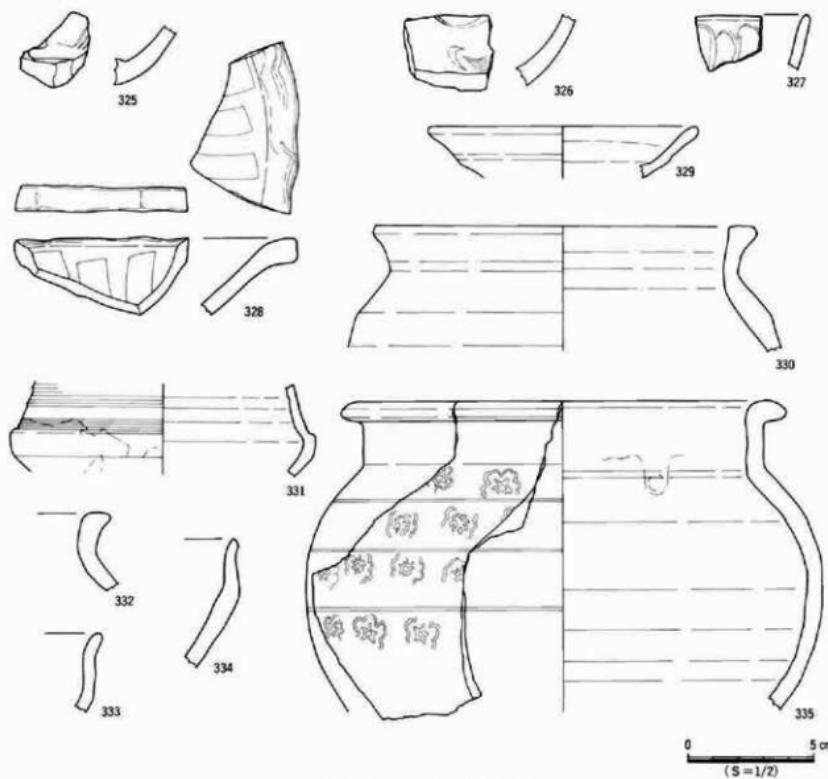


第78図 遺構外出土山茶碗(3)・中近世陶器(1)・銅鏡



遺構外遺物出土状況(1)

遺構外遺物出土状況(2)



第79図 造構出土中近世陶器(2)



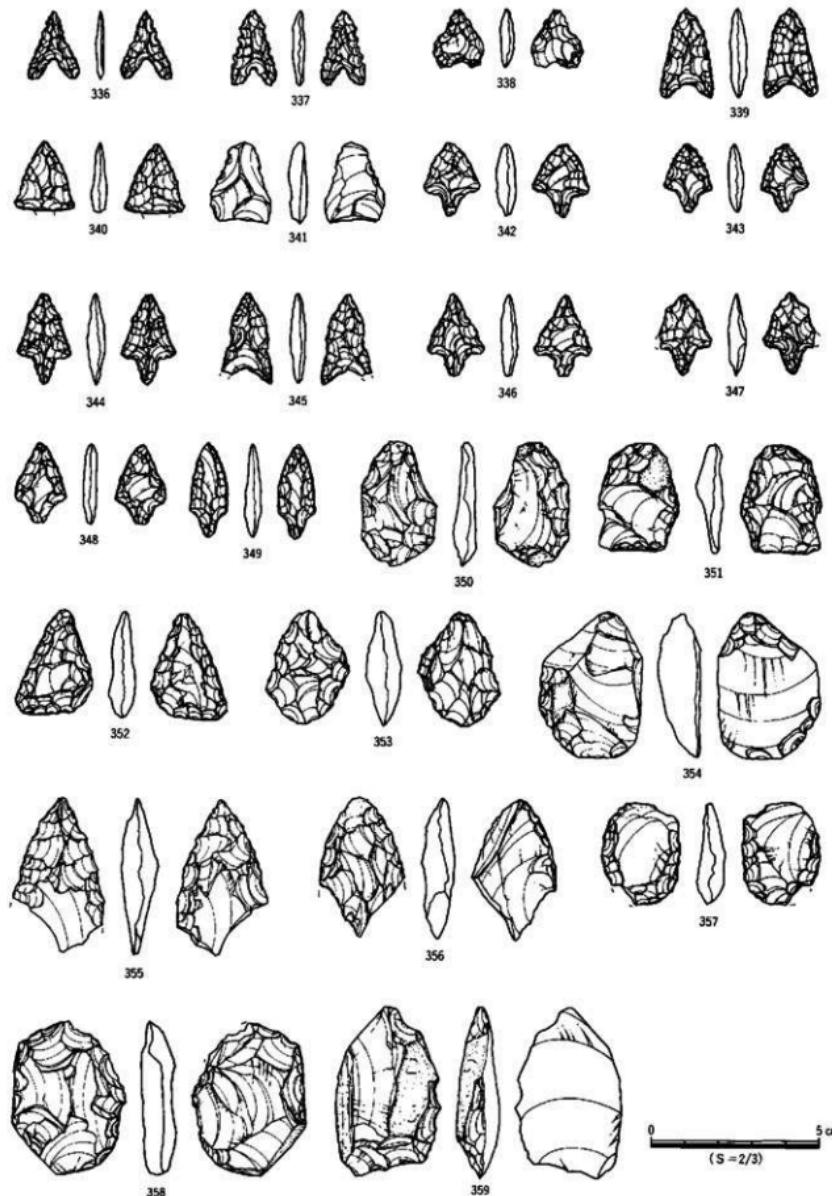
計測値等については観察表を参照のこと。

石鎌は、12・14、32・33・44・77～79・87・336～340・342～349である。63・115・135・157・341・350・351も石鎌であろうと思われるが、未製品である。製品のうち有茎は16点で円基は7点である。石材は下呂石製のものが多く、時期的には弥生時代と思われるものが過半数以上を占めている。素材技術や素材形態は不明なものが多い。石槍は、34・352で、80・95・100・353～359はその未製品であろうと思われる。下呂石製のものが多い。111は、未製品であるが、その形態等から尖頭器であろうと判断した。石錐は、360～365で、珪岩製のものがほとんどである。弥生時代のものである可能性が高い。361は、断片ではあるが、先端部の摩耗状態から判断した。363には、つまみ部がある。石鍤は、83・96のわずか2点である。河川に近いという立地条件から、おそらく縄文時代以降漁労活動が盛んであったと推察されるが、意外にも石鍤は少量しか出土していない。I区でも同様である。III区は、I・II区より一段高い段丘上であるためその性格は異にするかもしれない。II区は、最も河川寄りであるにもかかわらず、こうした状況であることは今後検討すべき課題の一つであろう。剥片石器は、45・64・65・112・158・372・373・369～371である。371のみ使用痕が確認できた。スクレイバーは、366～368の3点で、いずれもノッチドスクレイバー（挿入削器）である。ほかには、明瞭なスクレイバーと思われる石器はほとんど確認できなかった。打製石斧は、35・46・85・123・133・374～403である。すべてその平面形は短剣型で、石材は46の1点を除きすべてホルンフェルスである。横長剥片を素材としているものが多く、縄文時代の所産であろうと思われる。磨製石斧は、404の1点のみの出土である。破損しているが、側面にきちんと面取りをした定角式である。84は石鎌、405は石鍤である。ともにII区からの出土は量的に少ない。石核は、15・36・47・81・82・98・101・159・410～421と122・407～410である。前者は、下呂石の剥片及び円礫等を素材とした石核である。後者は、同じく下呂石の小円礫を素材とした両極石核である。とともに下呂石製のものは弥生時代のものである可能性が高い。17～20は、敲石である。硬質砂岩の円礫を素材としている。134の砾石は細粒砂岩製である。

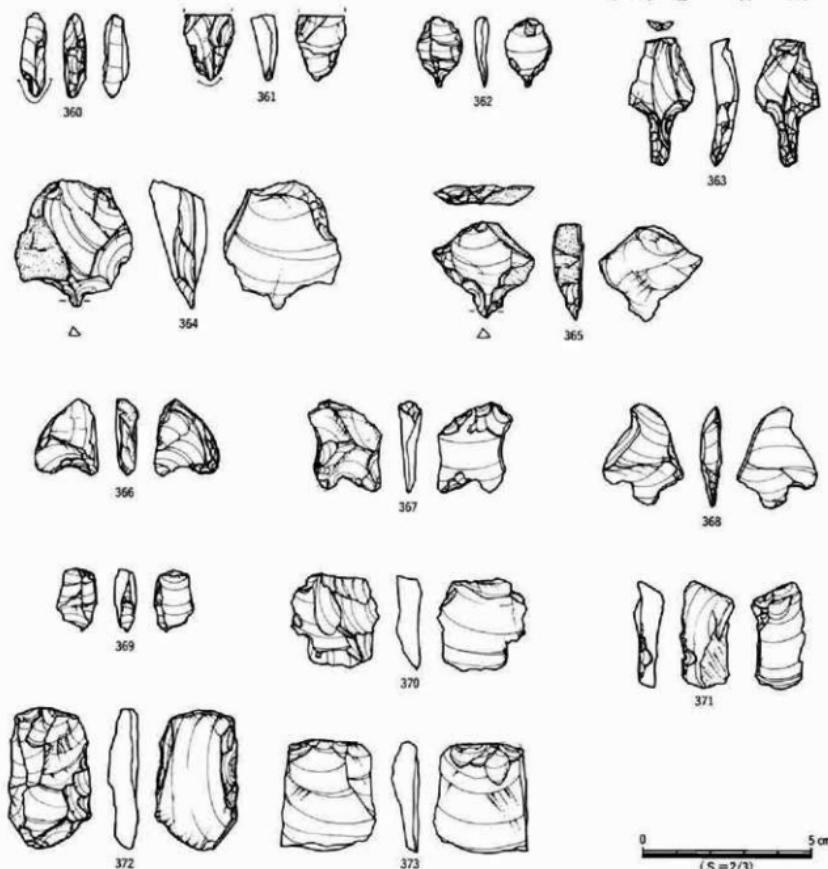
全体的に石材は、下呂石の占める割合が高い。器種による違いも見られるが、それが意味するところは今後検討の余地であろう。

その他の遺物

上記以外の遺物としては、炭化物・金属製品・銭等がある。木製品は出土していない。金属のうち鉄製品は数点出土しているが、いずれも遺構外からの出土である。しかも、表面の状態から比較的新しいものであろうと思われる。従って、ここでは出土したことのみを報告するにとどめる。図示に値する遺物としては、銅鎌が1点出土している。324である。出土したのは、SB04の北側でSD09との間である。出土地周辺を丹念に精査したが、遺構の存在は確認できなかった。他の遺物との共伴もなく、単独の出土であった。表面は劣化がすすみ、緑青で変色している。本体の形状を忠実に復原するのは困難であるが、やや細身である。こうしたタイプのものは、古墳時代前期の土器と共に伴する事例があるとの指摘もある。詳細は不明である。



第80図 造構外出土石器・石槍



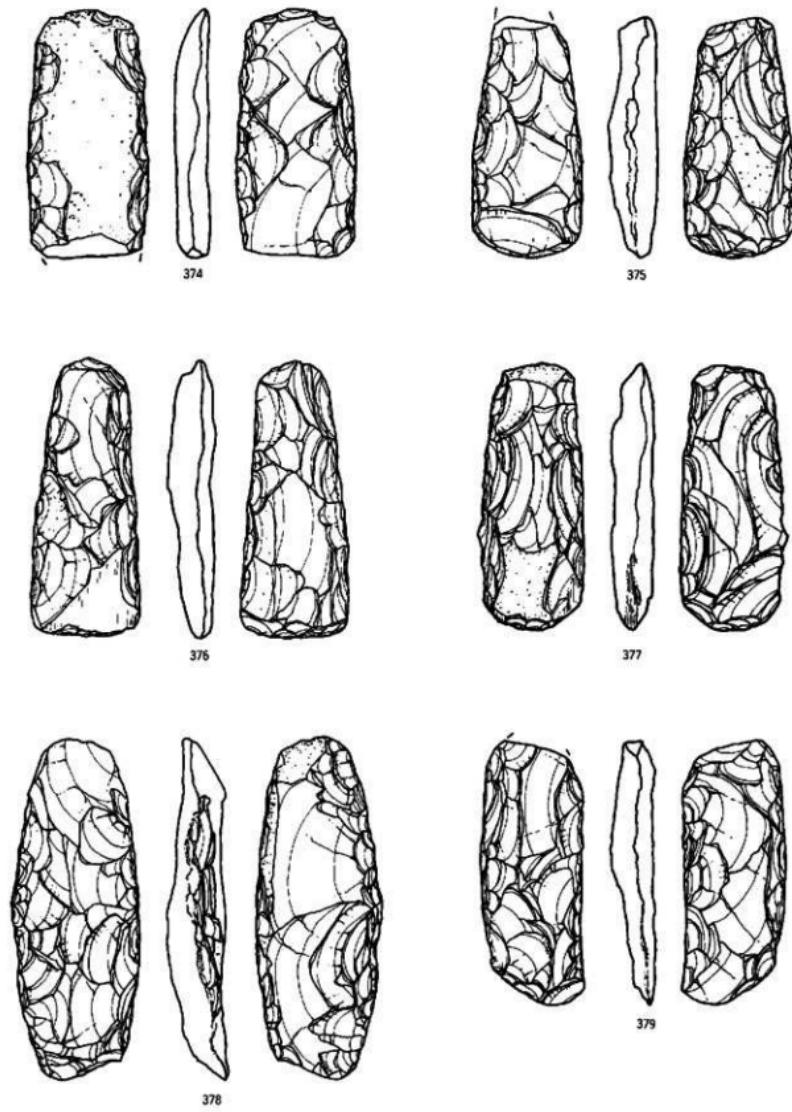
第81図 遺構外出土石錐・ノッチ・剝片



遺構遺物 出土状況(3)

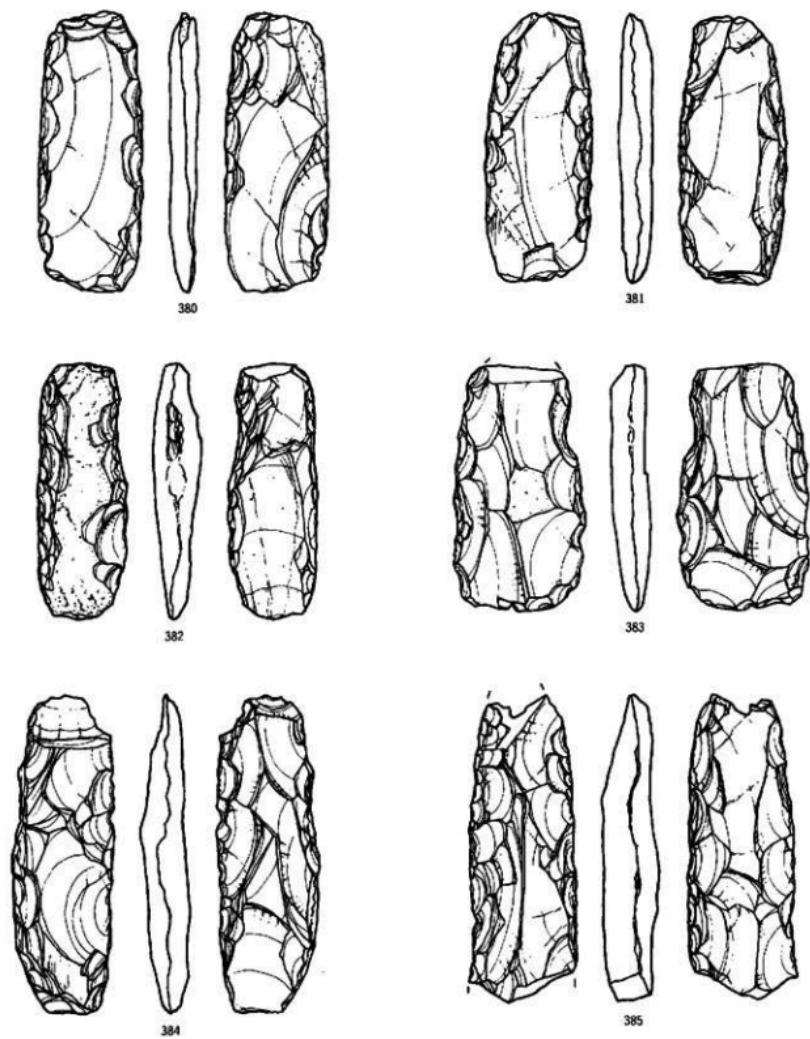


下呂石製の石器



0 5 cm
(S = 1/2)

第82図 遺構外出土 打製石斧(1)



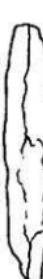
第83図 遺構外出土 打製石斧(2)



386



387



388



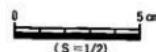
389



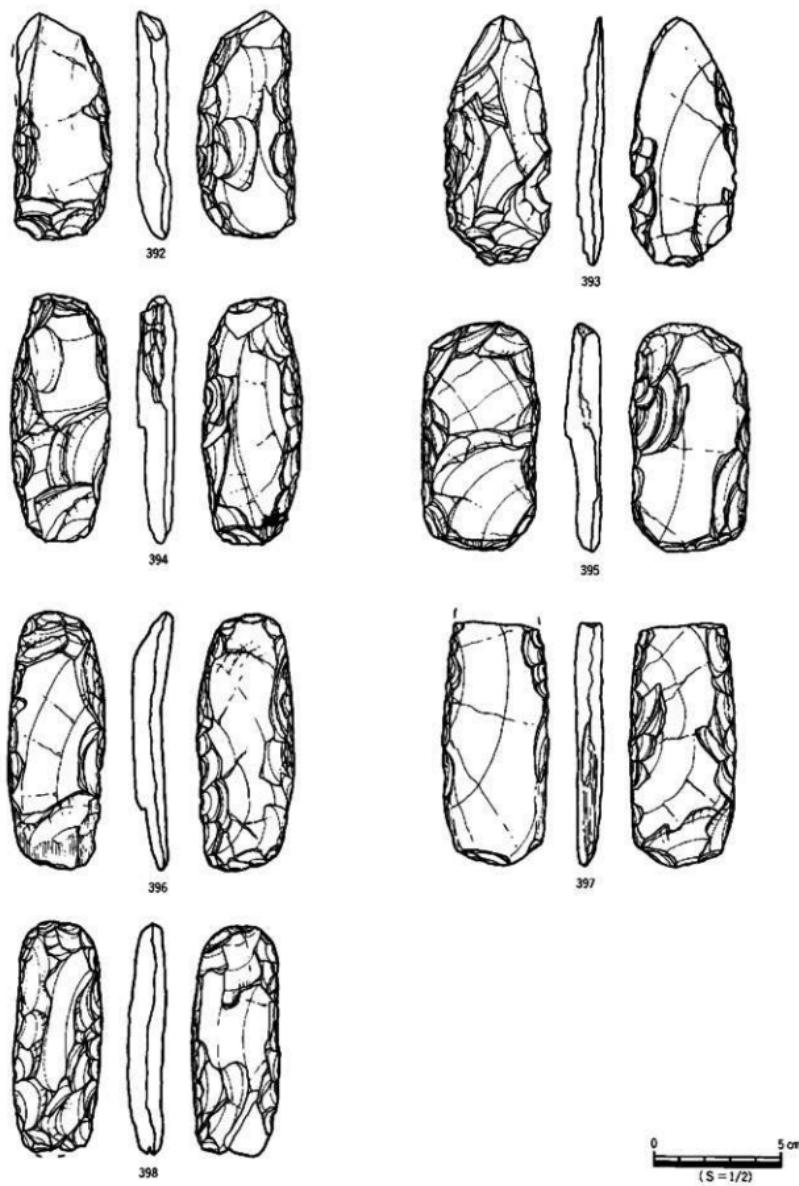
390



391



第84図 遺構外出土 打製石斧(3)



第85圖 遺構外出土 打製石斧(4)



399

401

402

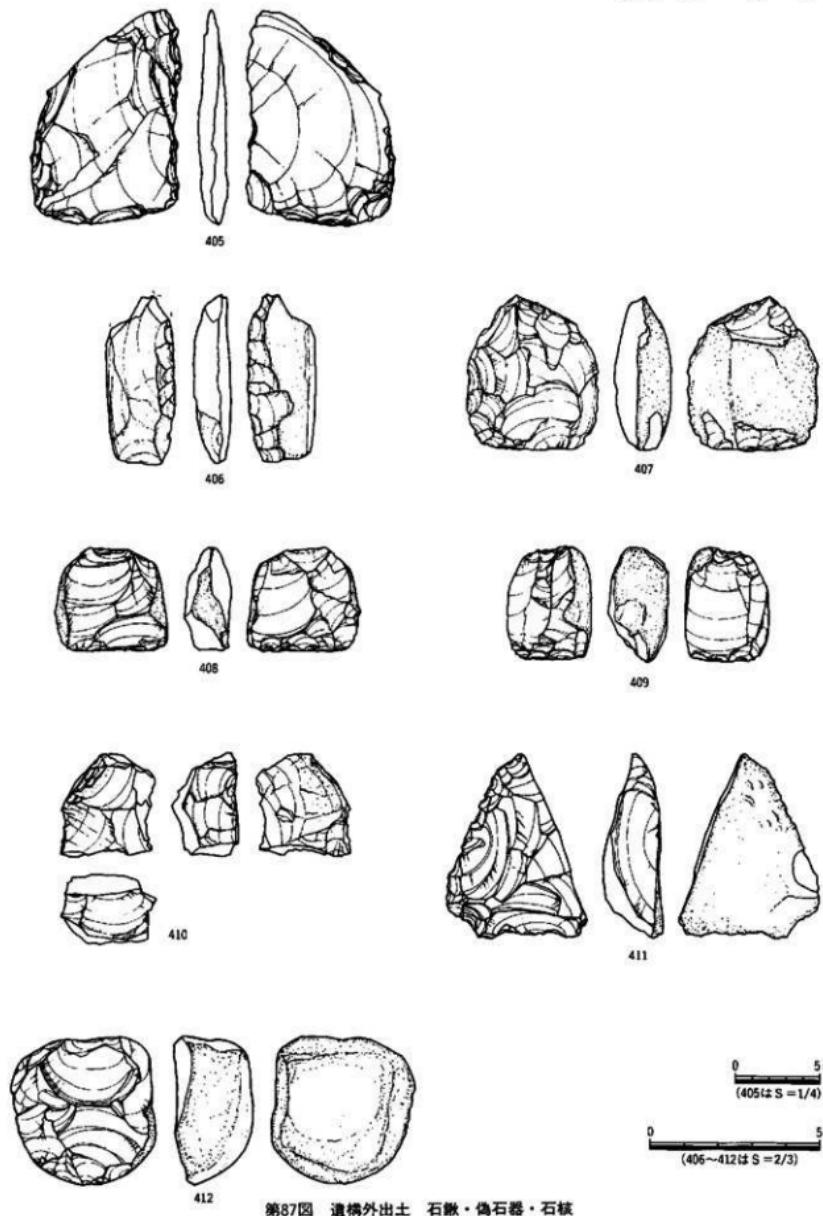
403

404

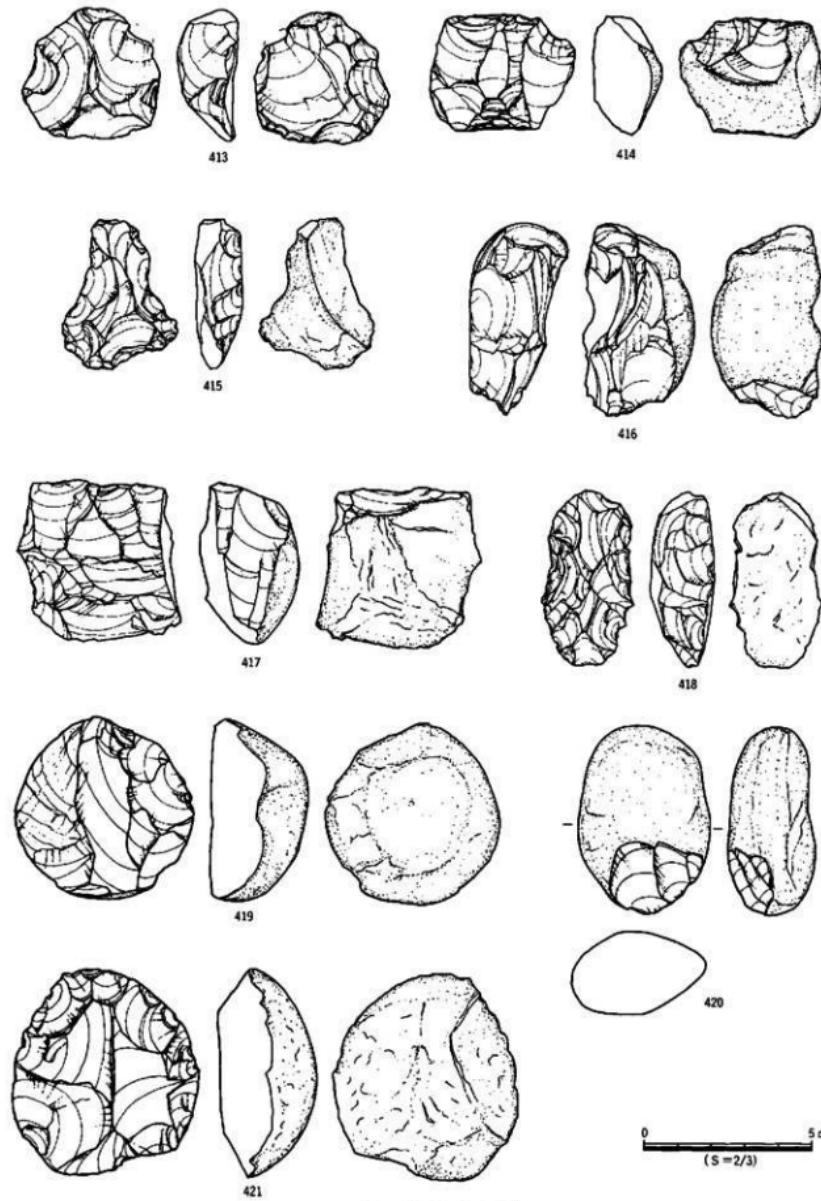
400

第86図 遺構外出土 打製石斧(5)・磨製石斧





第87図 遺構外出土 石獣・偽石器・石核



第88図 遺構外出土 石核

野笛遺跡III区



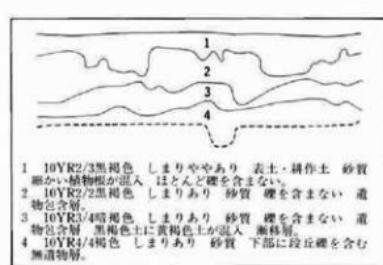
第4章 野籠遺跡III区

III区は、一般国道248号線道路建設予定地である。路面は高架式になっているため、調査の対象は橋台・橋脚部分と側道部分である。試掘確認調査の結果、工事範囲の南東半分が遺跡として確認されたので、北側の側道部分と橋脚2基分・橋台1基分を調査した。III区は以前、住宅密集地であった。そのため現代の家屋による搅乱も少なくなかつた。そのことは試掘確認調査の結果からも知り得ていたが、実際に調査をしてみると、特に北西部には大規模な搅乱があった。しかし、

南東に向かうにつれてその堆積状況は安定しており、後世において人為的に搅乱されている部分は少なかった。ただ一部に大きな立木があり、その根によって遺構等が破壊されている箇所もあった。また、南側の側道部分については、その範囲の大部分に家屋が存在していたことが予め把握できていた。試掘確認調査の際に家屋による搅乱を数ヶ所で確認し、予想以上の広さで遺物包含層及び遺構面が破壊されていることがわかっていたので、南側は調査対象とはしなかった。III区は、橋台部分のIII b区と橋脚・側道部分のIII a区からなる。両者は連続する堆積面を持つが、様相はやや異なる。



III区近景



第89図 範囲確認調査のTPI東壁



第90図 III区堆積状況模式図

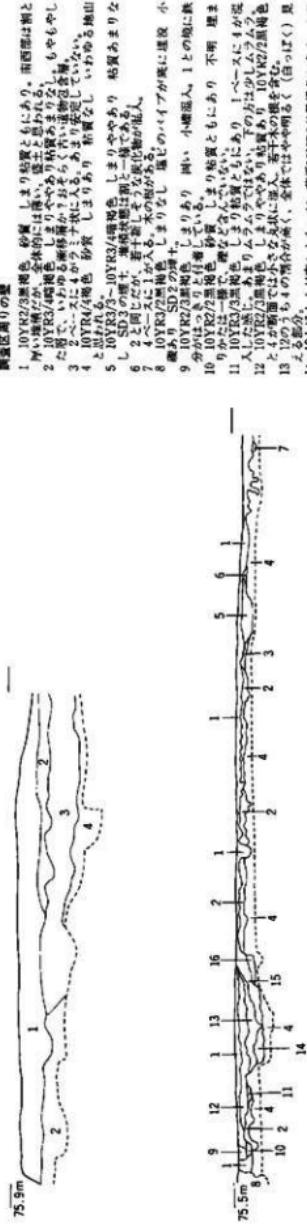
第1節 基本層序

III区の基本層序は、第89図に示す4層より形成されている。III a区とIII b区は、層位において連続性が認められる。III a区の方が第2・3層の堆積が厚い。それは、基盤層がIII a区では低くなるためである。調査範囲外とした北西部では、基盤層が高くなることから、III a区は小規模な谷である可能性がある。

第1層は、表土である。植物根が多く入り込んでいる。第2層は、近現代における耕作土である。比較的新しい時代の遺物を包含し、芋穴と思われる土坑の堀方が確認できる。第3層は、暗褐色土で、黒褐色土から褐色土に至る漸移層であろうと思われる。III区では、最も遺物を多く包含しており、この層で遺構面が確認できる。第4層は、基盤となる褐色土層、いわゆる「地山」である。第2～4層の土質は、他の地区と同様に砂質である。小さな礫を含む

0
(S=1/100)

- 第1断面図 川区地盤状況図
1. 10YR2/3黒褐色、砂質、しまり粘質ともにあり。雨西側は樹と竹の根が入り、土中には砂、粘土、砂土、砂質よりなり。
 2. 所有権標記がなく、地質的には砂、粘土、砂質よりなり。
 3. たる場にて、砂、粘土、砂質よりなり。
 4. 2~3.5m厚、砂質よりなり。
 5. 10YR4/6褐色、砂質よりなり。
 6. 2と同じだが、若干崩落しそうな風景がある。
 7. 4~5m厚、木の根がある。
 8. 10YR3/2褐色、木の根がある。
 9. 10YR2/3黒褐色、しまり砂、小礫混入、1.5m厚に軟
 10. 10YR2/2褐色、砂質、しまり粘質ともにあり、不明、變数。
 11. 10YR3/3黒褐色、しまり粘質どちらか。
 12. 10YR2/2褐色、木の根でない、下の方は少しおもろい。
 13. 4.5m厚に小さな木根がある、全体はやや崩落する。(ぼっこ)見
 14. 12.5m厚に木の根がある。
 15. 12.13m厚に木の根がある、木の根によく見える。右上の方に大きな木の根がある。
 16. 10YR2/3黒褐色、しまりなし。
 17. 10YR2/2褐色、しまりなし。
 18. 1.5m厚に木の根がある。
 19. 1.5m厚に木の根がある。



第91図 川区地盤状況図

まり含まず、粘質はほとんどない。また吸水性が高く、夏季には表面近くで水分を失い乾燥するため、砂漠のようになる。

第2節 遺構

III区は前述したように、平成11年度に調査した60m²(III b区)と翌年度の平成12年度に調査した570m²(III a区)から構成されている。年度が違うことや調査区が連続していないことなどから、現地調査の段階では別々の地区として遺構・遺物の番号を付していた。しかし、両区は隣接しており同一段丘面であることから、整理作業の段階で両区を通じた一連の新しい遺構・遺物番号を付した。なお、遺構番号は便宜上、III a区からIII b区にかけて若い番号とした。

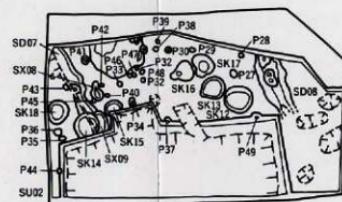
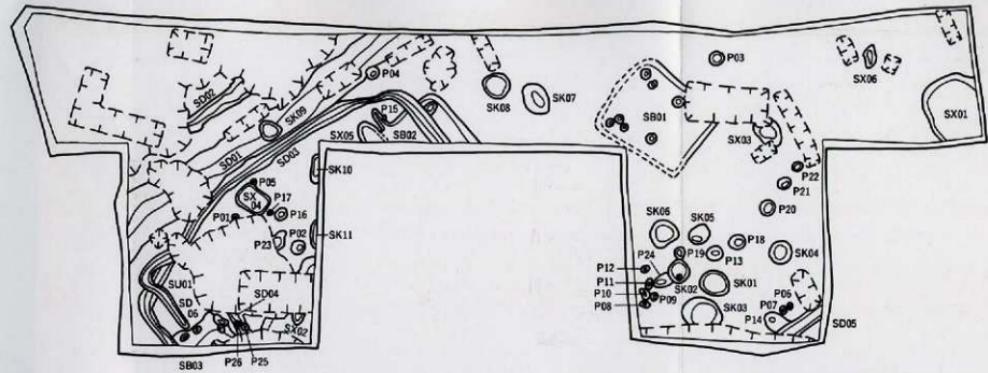
III区では、住居跡3軒、溝8条、土坑67基、不明遺構9基、遺物集積2基を検出した。内訳は、III a区では、住居跡3軒、溝6条、土坑37基、不明遺構6基、遺物集積1基、III b区では溝2条、土坑30基、不明遺構3基、遺物集積1基である。III区も基盤となる土層は褐色上層である。しかし、調査区全体が均一ではなく、III a区の北西部は同じ褐色上層でもやや粘質がある。それ以外の部分は、II区と同様に砂質である。従って、自然作用によって埋没・破壊されて検出できなかった遺構も少なからず存在した可能性がある。また、調査範囲に制約があるため、遺構を検出してもその全容を解明することができない例もあった。ここでは検出できた遺構の全体もしくは一部から、知り得た情報を報告者の主観も含みながら記述することにした。以下、順に説明を加えることにする。なお、各遺構の定義や量化の基準についてはII区と同様であるため、この節での記述は割愛した。第3章第2節を参考のこと。また、各遺構の規模等を示す測量値については、別表にまとめた(第7~10表)。出土遺物についての記述の中に挙げられている遺物点数は、接合前の破片数を示す。

住居跡 (SB)

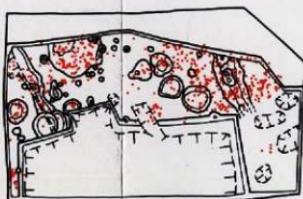
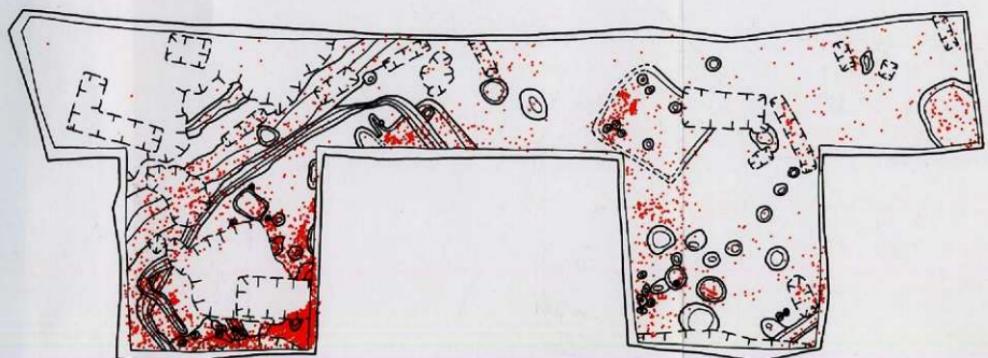
3軒検出した(すべてIII a区)。どの住居跡もカマドを有する。1軒はほぼ全面にわたって調査できたが、ほか2軒は一部分のみの検出に留まった。以下、順に説明を加える。

第1号住居跡 (SB01)

本住居跡は、III a区内南東部の橋脚部分と側道部分の接合箇所である22c'-22b'グリッドにわたる範囲で検出した。黒褐色上中よりカマドの基礎となる礫が検出され、平面形プランが確定する以前から、その存在が確認できた。また、試掘確認調査の段階で、第1試掘坑(以下、試掘坑を「TP」)の北西隅で比較的大きな遺構の存在を想定させる土色・土質の違う部分が確認されていた。さらに本住居跡の南辺の東側は明瞭に確認できたので、それらを手がかりに平面形プランを想定し、四分法によって調査を進めた。しかし、平面形プランを確定するのは容易ではなく、最終的には想定ラインしか検出できなかった部分もあった。その妨げとなつた原因は二つある。一つは、本住居跡の北東にある箇所にあった地上高3mほどの立木である。地中部分におけるその影響は予想以上に大きく、本住居跡の北辺周辺では基盤となる褐色土層に達するレベルに至つてもなお黒く、その掘方を確認することはできなかった。幸いにもカマドの礫が遺存していたため、北辺を想定することができた。もう一つは、西辺部付近における不自然な堆積状況である。北辺のように明らかではないが、本住居跡の

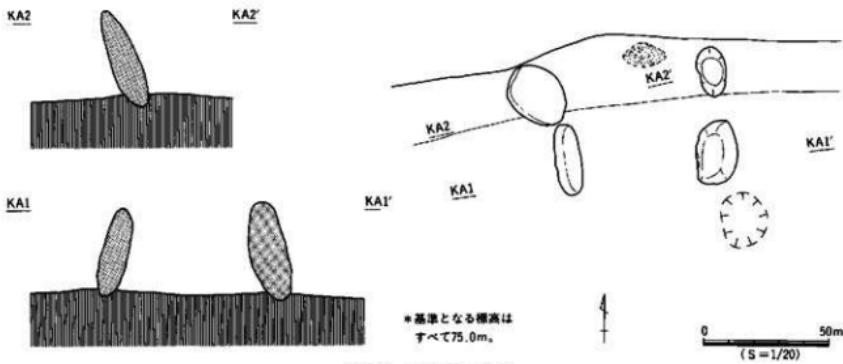
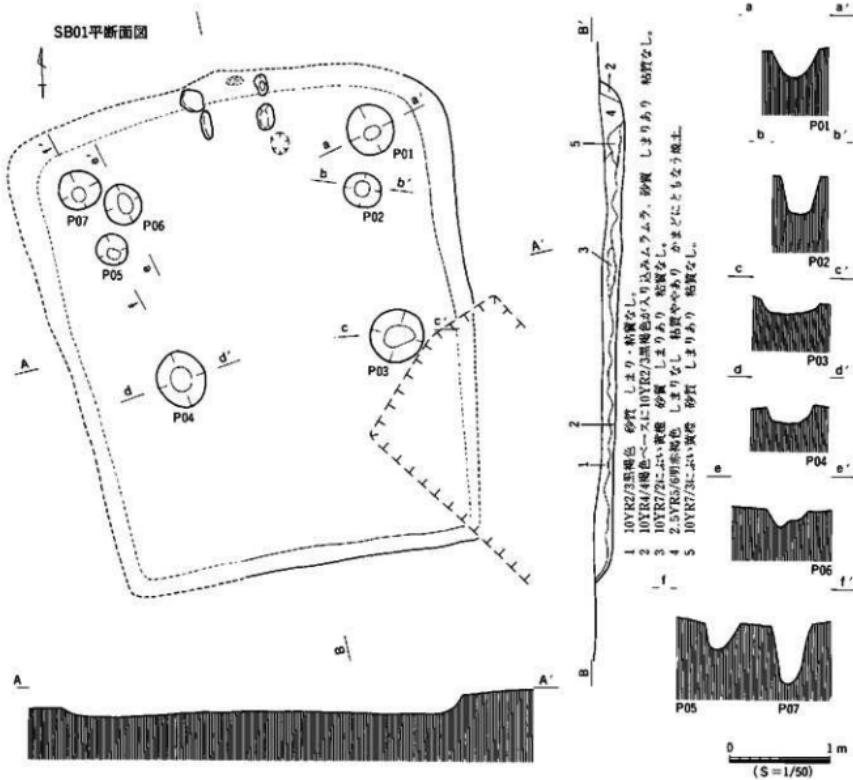


第92図 III区遺構配置図



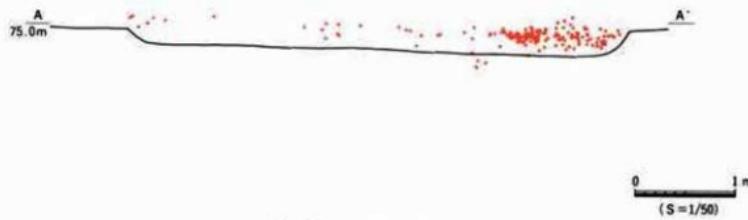
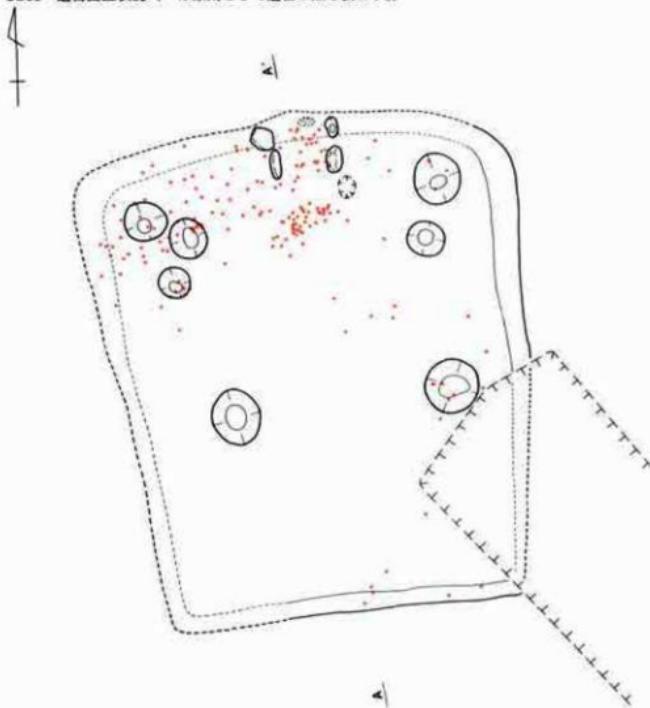
第93図 III区遺物出土位置図

0
(S = 1/200)
50m

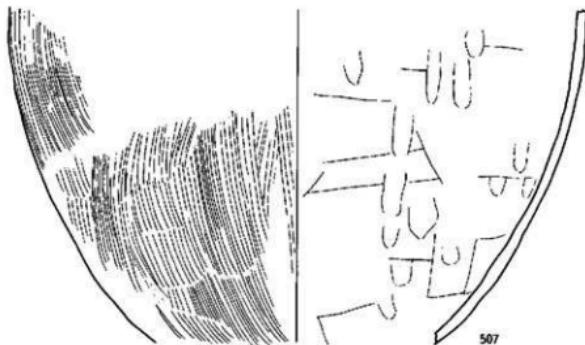
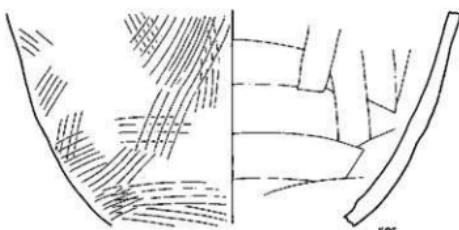
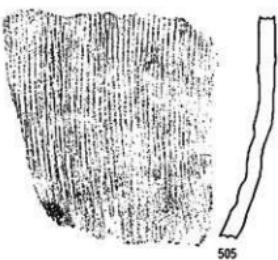
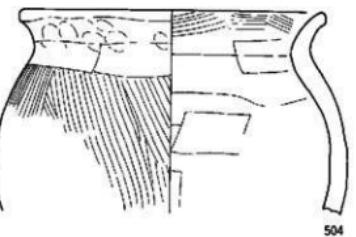
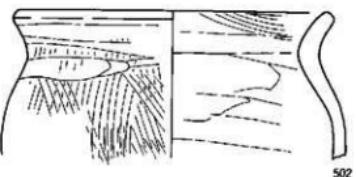


第94図 SB01実測図(1)

SB01 遺物出土状況 (・は原則として遺物1点を表わす。)



第95図 SB01実測図(2)



0 5 cm
(507はS=1/3)

0 5 cm
(501~506, 508はS=1/2)

第96図 SB01出土遺物

南西隅からSK06にかけての部分は、北辺周辺と同様に黒く、何かが存在する可能性があった。しかし、それが後世の搅乱であるのか、自然作用によるものか、それとも遺構であるのかは判別できなかった。ただその部分からは、かなり良好な状態で遺物が出土している。682がそれである。そのことから判断すると、住居跡等の遺構が存在した可能性もあるが、明瞭なプランや遺構と判断できるだけの手がかりは見つからなかった。以上の理由により、平面形プランの全体は確定されていない。ゆえに、実測図では点線で想定ラインを図示した。

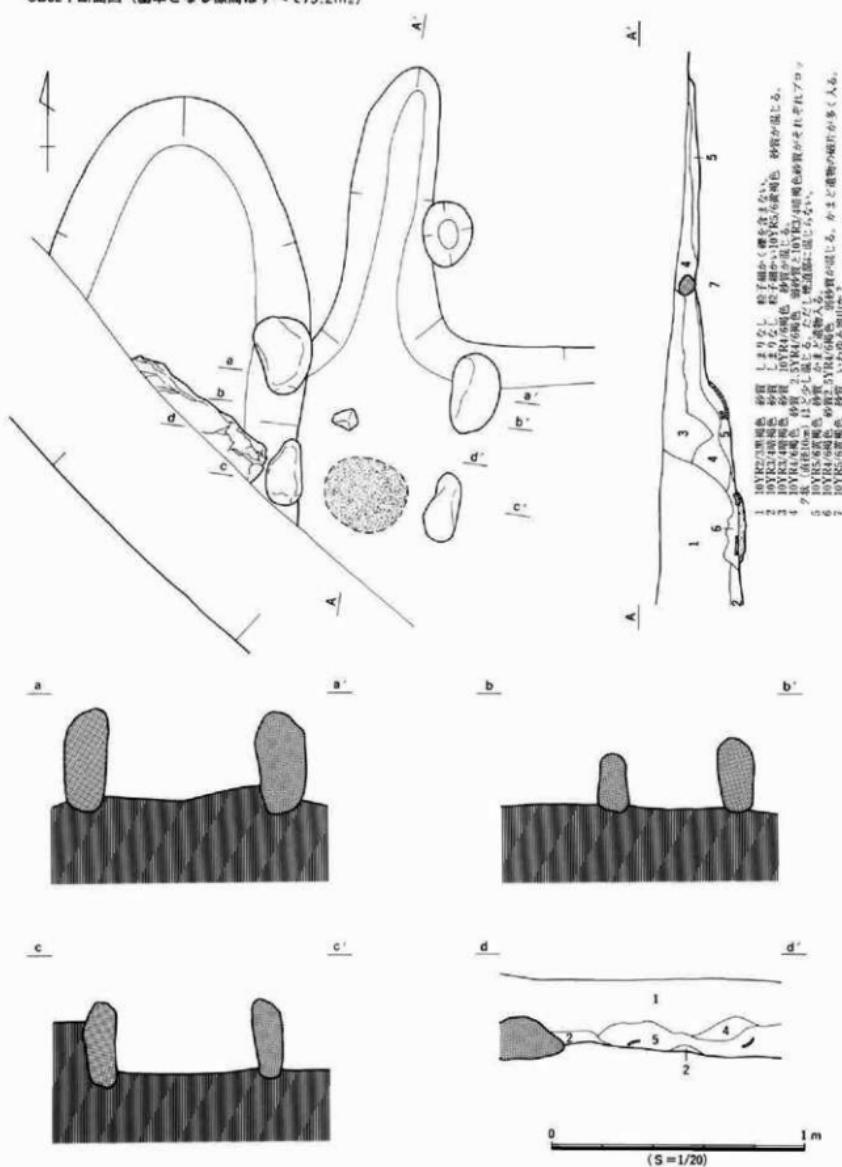
明確に床面と判断できる部分はなかった。ただ一部変色した硬化面はあった。それが床面に伴うものかどうかは不明である。ピットは、7基検出した。全体に北側に寄っている。P03・04は、主柱穴とするにはやや浅い感じがする。カマドは、基礎となる礎を3個検出した。礎は、II区で検出した住居跡に伴うカマドの軟質なものとは異なり、付近を流れる木曾川の河川敷でよく見かけるような円碟であった。遺存していたのは、北西・南西・南東に位置する3個であった。対応する北東の位置にも同様の円碟が存在していたことが、その痕跡からわかる。ちょうど使用されている円碟が立てて納まるほどの小土坑が1基確認できた。南側にある2個の礎は、上方が内側を向いており、その断面形は「ハ」の字状である。それに比べ、北西の礎は外側を開いている。北東の礎がないことと合わせて考えると、やはり北辺部は破壊された可能性が高いと思われる。原位置で遺存している礎には、内側が被熱して変色している部分が確認できた。

遺物は、258点出土した。内訳は、繩文土器18点、弥生土器19点、土師器195点、須恵器11点、山茶碗2点、石器13点である。土師器がその主体を占めている。埋土からの出土がほとんどで小片が多い。しかし、カマドの中央部分からは土師器の502・504といった、本住居跡のうちでは、比較的良好な土器が出土している。前述したように、本住居跡はその一部をTP1が破壊している。TP1出土遺物の内、良好な資料は715・719である。いずれも本住居跡の想定ラインの外側の位置で出土が確認されているため、ここでは本住居跡とは無関係の遺物とする。なお、TP1の西角からは現代の獸骨と思われる破片が出土した。明瞭に上層からの掘り込みが確認できたので、その事実のみを記載し、ほかは割愛することとする。なお、本住居跡の帰属時期は、構造及び出土遺物などから判断して古墳時代後期である可能性が高い。

第2号住居跡（SB02）

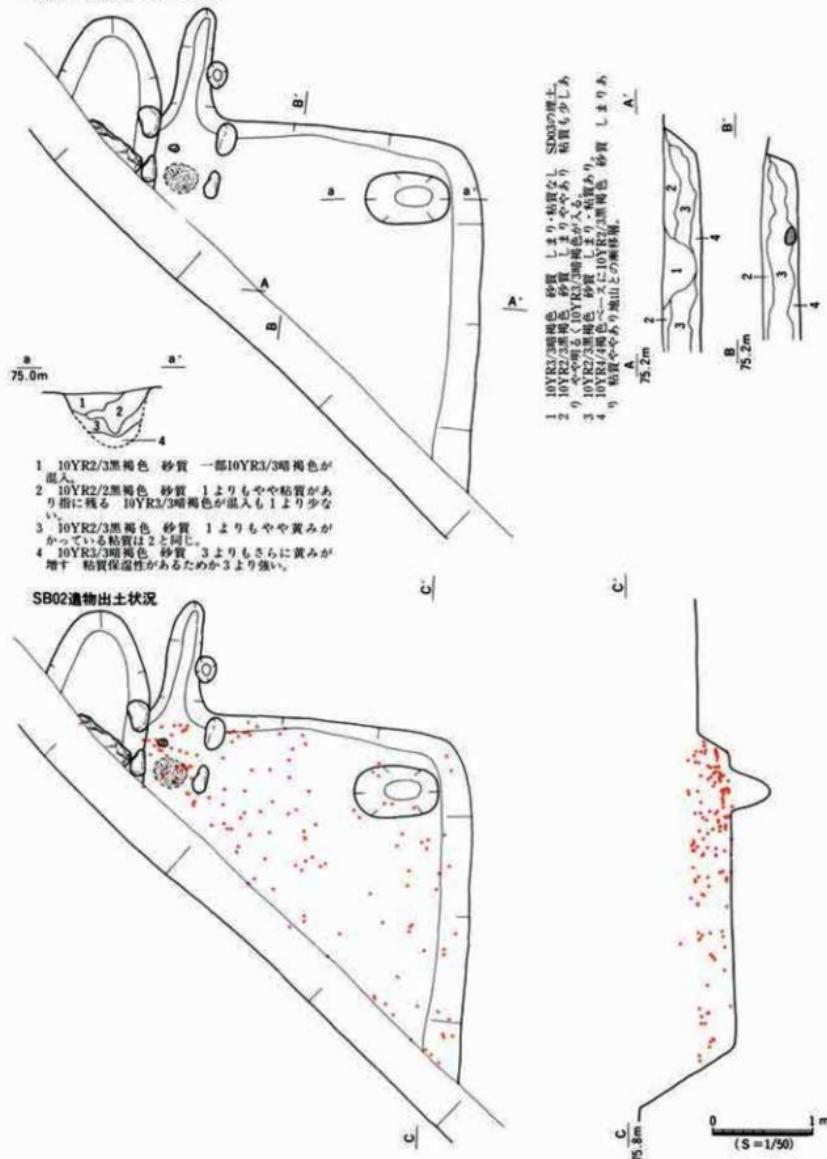
本住居跡は、III a区のほぼ中央部である23c'グリッドで検出した。主軸は、II区で検出したカマドを有する住居跡と同じく、ほぼ南北方向である（II区のSB05のみやや西へ傾いている。）。調査区の主軸が南北方向から西へ約45°傾いていることから、調査区の壁面付近である本住居跡は三角形状にしか検出できなかった。本住居跡の検出できた平面形プランはいたって明瞭であった。東側には、SD03が通過していたり、カマドの西側には、詳細不明なSX05によって破壊されたりしているが、東辺ははっきり確認できた。その形から、カマドの検出を待たずして住居跡の可能性が高まっていた。他の住居跡の場合、平面形プラン確定以前にカマドを検出していることに起因するかもしれないが、本住居跡は堀方がしっかりとおり竪穴も深い。他の住居跡のように、カマドの礎が先に確認できるということは、本来の堀方より下で住居跡の竪穴が検出されている可能性がある。その分、本住居跡の方が深いのは当然と思われるかも知れないが、そのことを考慮に入

SB02平面図（基準となる標高はすべて75.2m。）



第97図 SB02実測図(1)

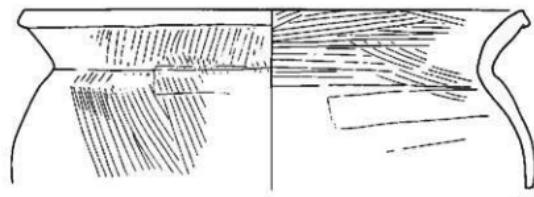
SB02・SB02内Pの平面図



第98図 SB02実測図(2)



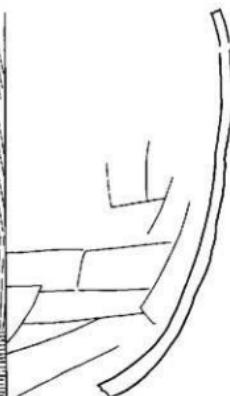
509



510



511



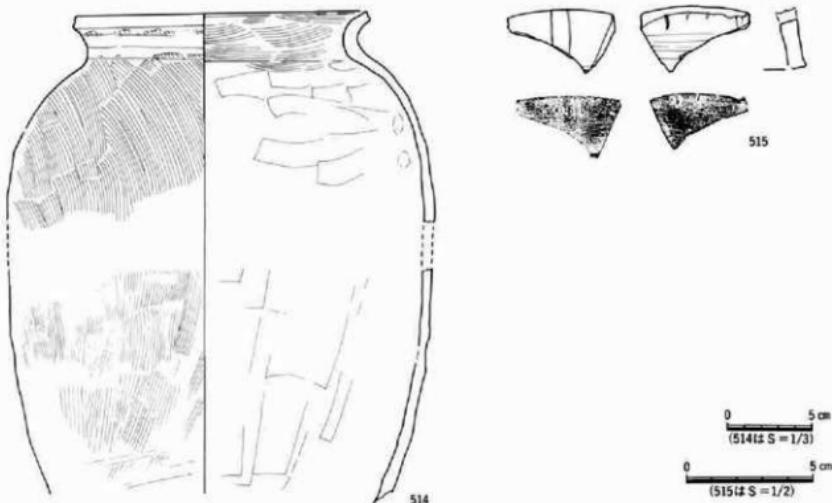
512



513

0
(S = 1/2) 5 cm

第99図 SB02出土遺物(1)



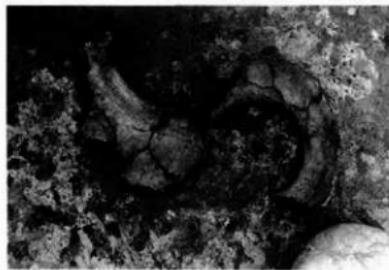
第100図 SB02出土遺物(2)



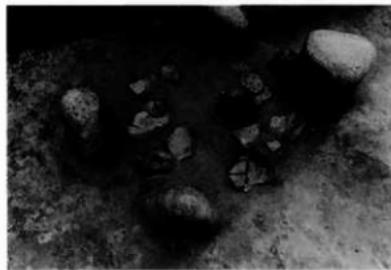
SB02遠景



SB02カマド



SB02カマド遺物出土状況



SB02カマド遺物出土状況

れたとしても竪穴の構造はしっかりしていたと言えよう。床面は確認できていないため、カマドの蹕が置かれていた面を該当する面とした(このことは他の住居跡でも同様である)。SD03は、断面が「V」字状で、本住居跡の床面近くまで食い込んでいた。しかし、その通過部分には本住居跡に伴うと思われる遺構は確認できなかった。従って、検出できた遺構はP01のみである。P01は、比較的深い。その規模・位置から主柱穴と成りうるかどうかは不安が残る。カマド付近であるため、貯蔵穴の可能性もあるとの指摘もあった。いずれにしても詳細不明である。

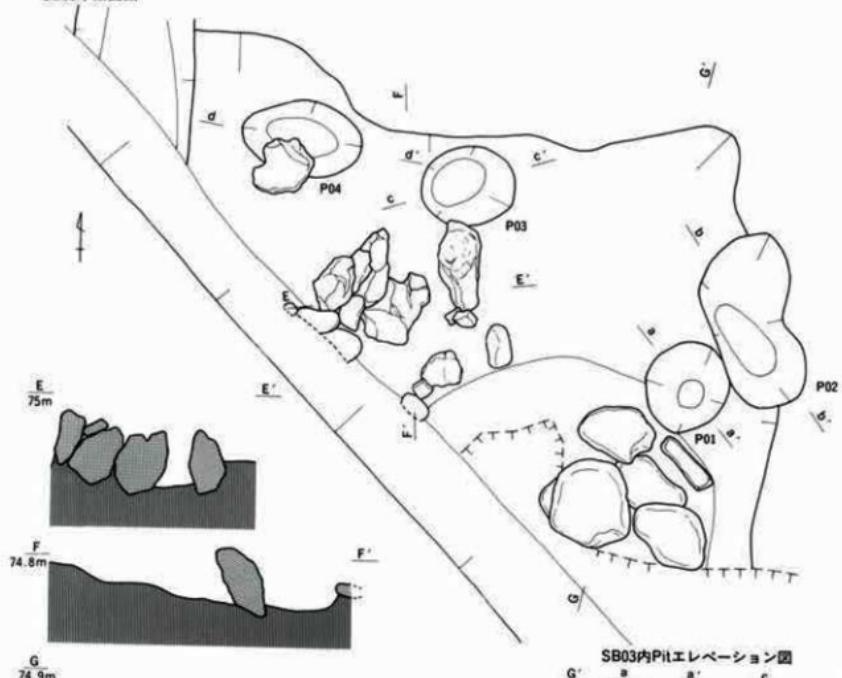
カマドは、SB01同様に川原石のような円礫を利用している。4個確認しているが、SB01と違い、原位置を保っていると思われる。左右対称に南北に2個ずつ置かれ、正方形の四隅を形成している。長辺を縦方向にし、最も平坦な面を内側に向けて据えられている。上部がやや内側に向けられ、断面が「ハ」の字状に置かれている状況はSB01のカマド(南側の櫻)と同様である。ただ異なるのは、据えられたそれら4個の蹕のほぼ中央部分に、成人の握り拳大よりやや小さめな礫が1個置かれていたことである。おそらく立柱石であろう。下に土を盛り、その上に置かれていた。SB01のカマドは、前述のように北側半分ぐらいが破壊されていたために確認できなかったが、こうした石が存在した可能性もある。また、本住居跡ではカマドに付随する施設である煙道が確認できた。他の住居跡ではあまり明瞭には確認できず、ただ少し凹んだ部分がカマドの外側にある程度で、それらは煙道と呼べるような構造ではなかった。しかし、本住居跡の煙道はカマドの北辺からさらに北方向へまっすぐ伸び、長さは1m以上にもなる。断面形は図示しておいたが、なだらかな傾斜である。煙道部分には小ピットP15がある。このピットは、本住居跡及び煙道とは無関係のものと判断し、ピット独自の遺構番号を付した。このように本住居跡は、他の住居跡では確認できなかった要素(深い竪穴・カマドの立柱石・煙道)を発見することができた。それは、攪乱による破壊を受けず、より上層で検出されたからである。他の住居跡の場合でもこれらの条件が満たされれば、本住居跡のように良好な資料提示ができるかもしれない。

遺物は、185点出土した。調査できた面積が少ないために遺物量は多くない。内訳は、縄文土器24点、弥生土器35点、土師器106点、須恵器13点、山茶碗1点、石器6点である。SD03やSX05は、比較的明瞭に検出できたので、遺物の混同は避けられていると思っている。埋土からも出土しているが、良好な状態の遺物はカマド付近からが多い。510・514などがそうである。これらは、カマドの内部と思われる位置や、カマドに隣接する外側でも床面に該当するレベルから出土しており、本住居跡の時期や性格を考える上では貴重な資料である。なお、本住居跡の帰属時期は、その構造や出土した遺物から判断して古墳時代後期である可能性が高い。

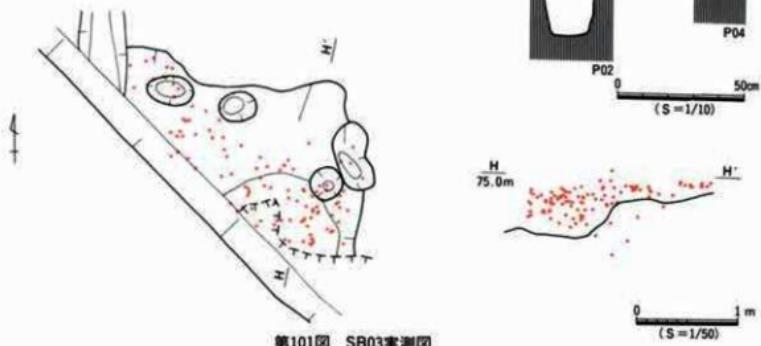
第3号住居跡(SB03)

本住居跡は、III a区の北西橋脚部分の南西壁際の25cmグリッドで検出した。SB02と同様に調査範囲の制約上、北東隅を頂点とする三角形状にしか検出できなかった。ただSB02と異なるのは、本住居跡の場合、調査できなかった部分は既に隣接する橋脚建設の際の大規模な掘削によって破壊されていたということである。そのことは、北西橋脚部の南西壁で確認できた。その影響もあって、本住居跡はあまり良好な状態では検出できていない。当初は住居跡とは判断できず、不明遺構(SX)として処理していた。しかし、方形らしき平面形プランがあり、カマドらしき石組みがその北辺に確認できるこ

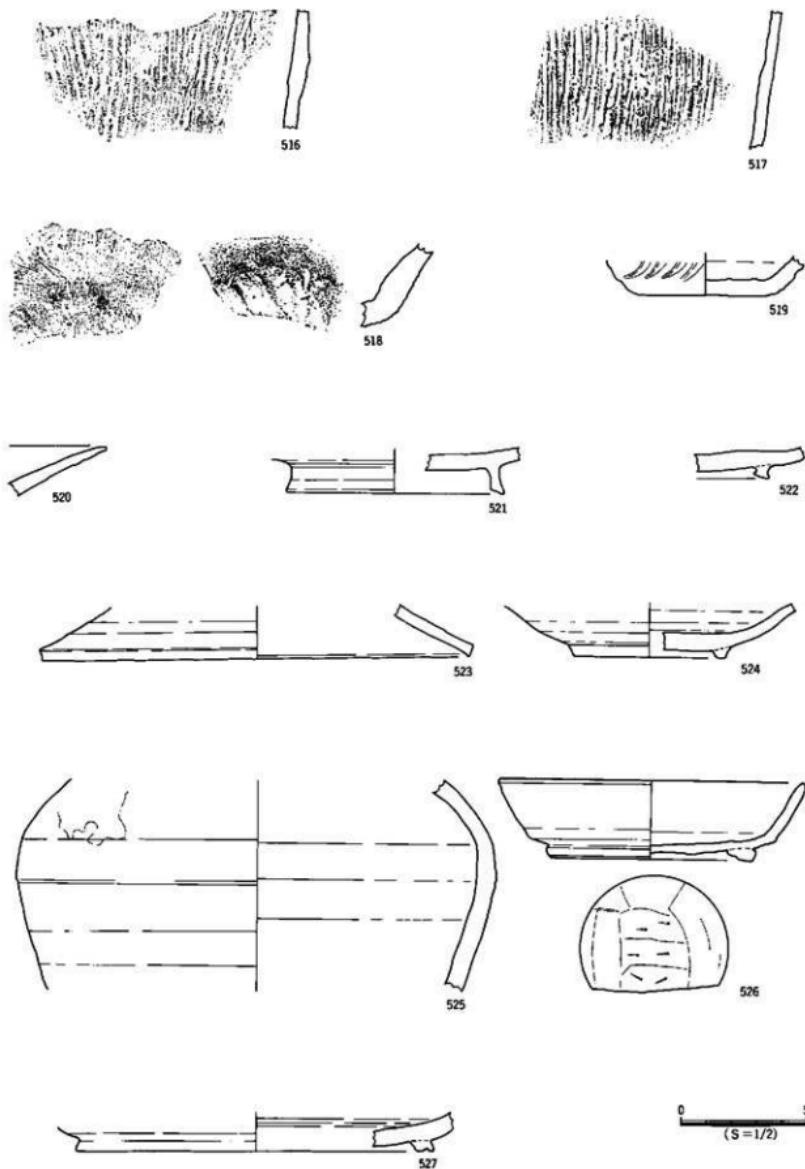
SB03断面図



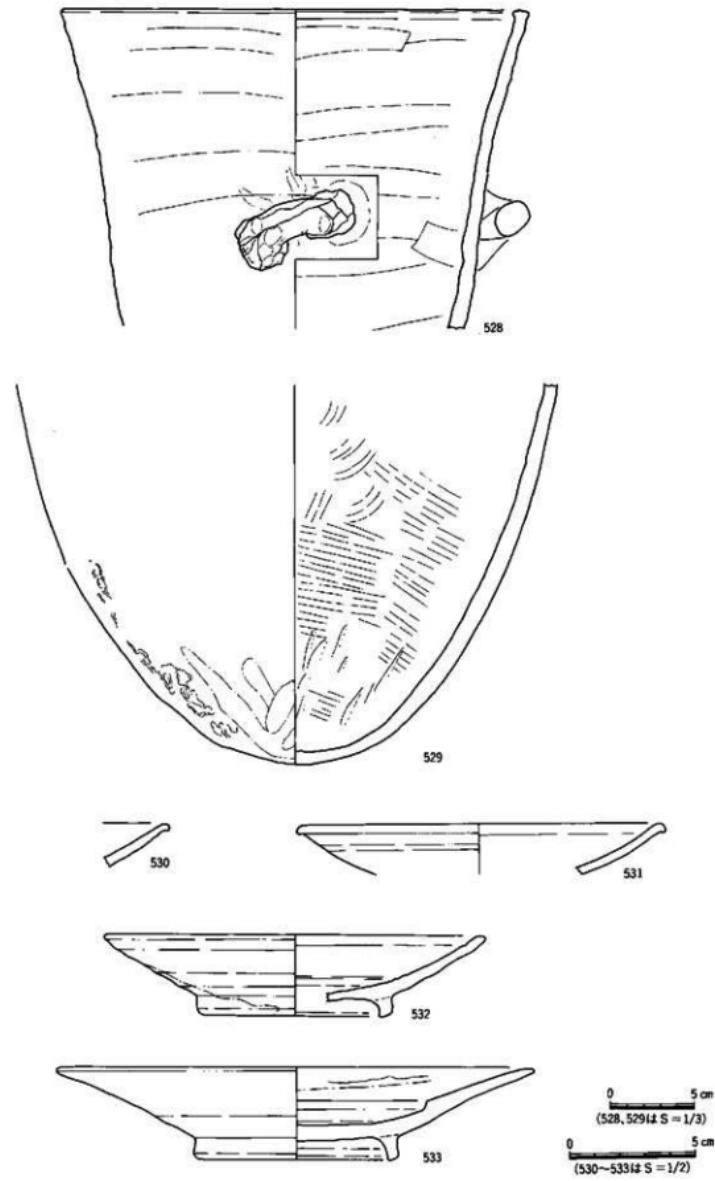
SB03遺物出土状況



第101図 SB03実測図



第102図 SB03出土遺物(1)



第103図 SB03出土遺物(2)

とから、住居跡と判断しここに掲載することにした。従って不明な点が多い。カマドも辛うじて礫が散乱している部分から原位置と思われるものを確認したに過ぎず、床面も定かではない。本来竪穴の範囲と思われる部分でピットを4基検出しているが、本住居跡に伴うものかどうか判断に苦しむものもある。ただP01は、須恵器の甕(529)が立てられていた痕である。529自体は、上部が既に失われていたが、このP01の上に正位で置かれていた。須恵器は尖底であるため、P01を掘削し、そこに据えて使用していたと思われる。水甕であったとの指摘もあるが、内容物についてはその痕跡を確認できなかったので、用途は不明と言わざるを得ない。カマドは、基礎となる石組みを検出した。II区同様に軟質な礫が使用されている。やや扁平な礫を平行に並べて配置された部分をそれとしたが、破壊が進んでおり、詳細不明な点が多い。ただ、本地点で検出した住居跡3軒のうち、本住居跡だけがカマドに軟質な礫を使用している。しかし、I・II区で検出した住居跡のほとんどはこの軟質な礫を使用しており、円礫を使用する方が割合的には少ない。そうした点から考えると、カマドに使用する礫の違いが何を意味するのかが疑問となってくる。さらなる検討が必要となってくるが、これ以上の検証はここでは割愛し今後の課題としたい。

遺物は、118点出土した。内訳は、土師器58点、須恵器46点、灰釉陶器9点、石器5点である。遺構として認識される以前(検出面よりさらに上層)から小片の遺物はたくさん出土していた。搅乱によって破壊されて散乱した可能性もあり、その上層で確認した遺物が本住居跡に関連のあるものかどうかは不明であるため、ここでは除外してある。なお、本住居跡に関しては、その帰属時期や性格については不確定要素が多いため、あえて言及しないこととする。今後に検討を要する。

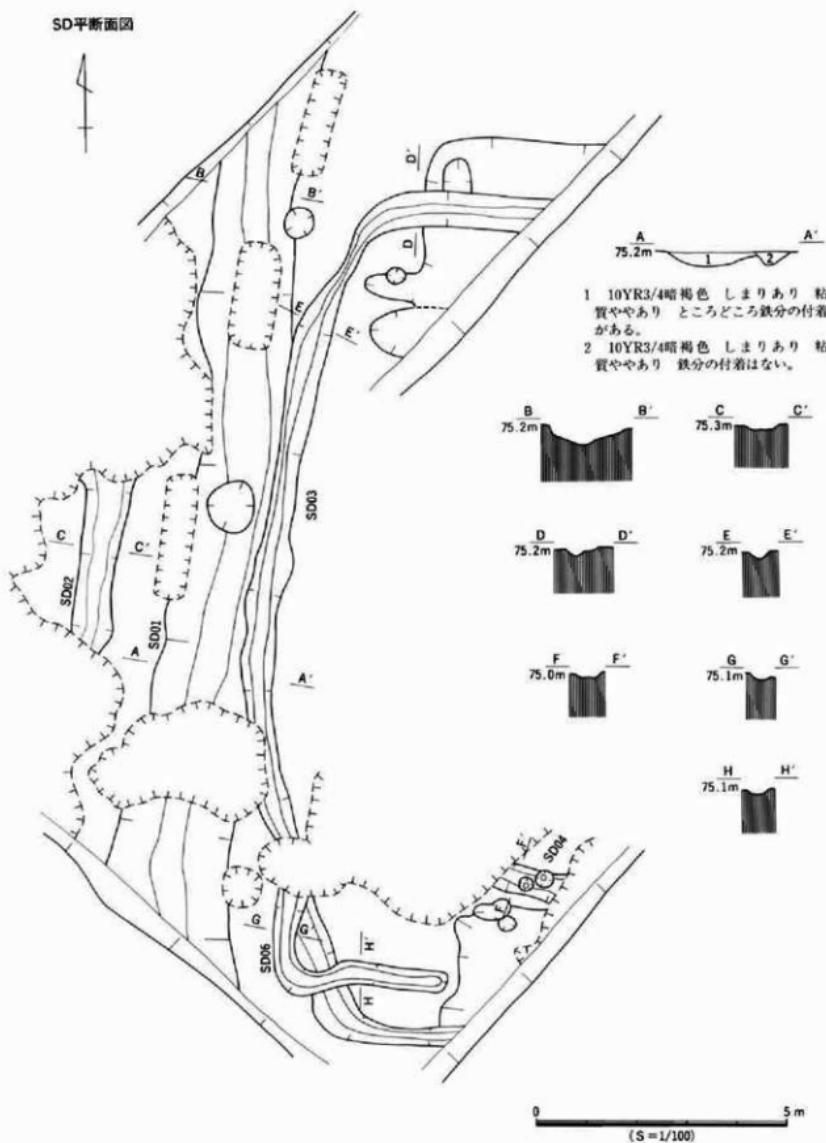


第104図 SB位置図

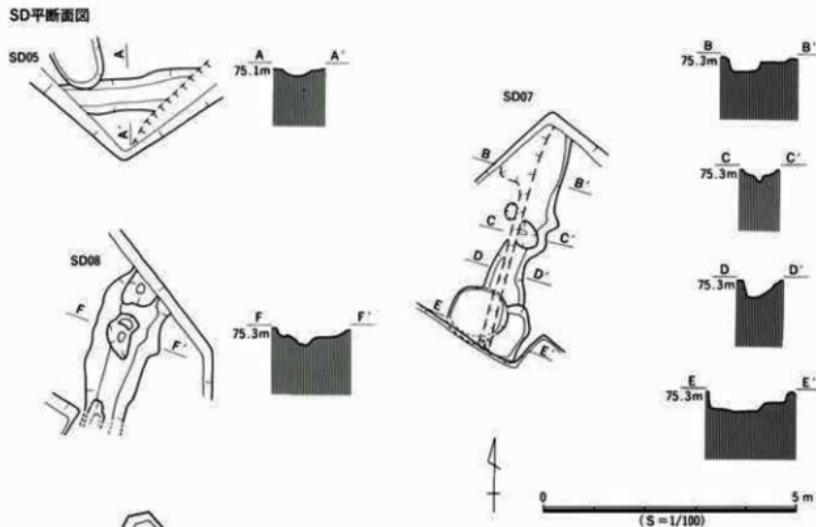
溝 (SD)

8条検出した。SD01~06は、III a区、SD07~08はIII b区である。本区で検出できた溝はいずれも規模的にはあまり大きくない。また、その帰属時期や性格が明らかになったものはない。順に説明を加える。SD01は、調査区北部を東西に横断する。一部は搅乱によって破壊されているが、比較的明瞭に検出できた。本区では、最も方向性や規模という点において計画的に構築されたと思われる溝である。遺物は、須恵器や山茶碗が主体となって出土している(第125図)。しかし、SD01自体が割と浅く埋土と底面との判別は容易ではなかったため、出土遺物による時期決定は困難である。こうした方向性のある溝は、隣接するI-D区でも検出されており、それらとの関連が今後の課題となりそうである。また、方向性があることから区画溝であったのではないかとの指摘もある。SD02も東西に横断してい

SD断面図



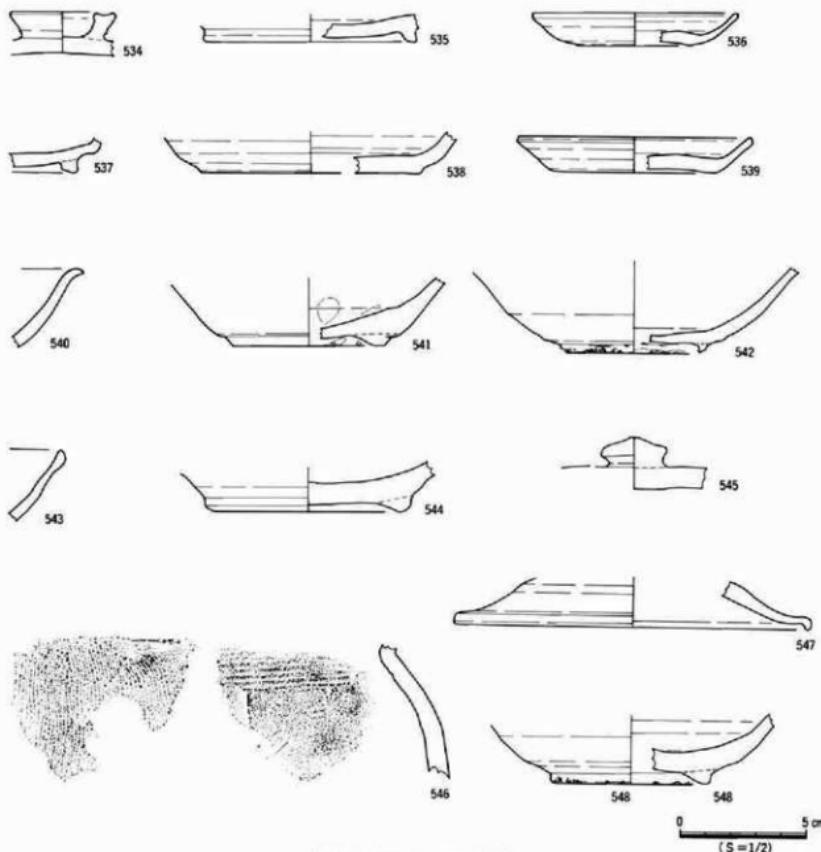
第105図 SD01~04・06実測図



第106図 SD05・07・08実測図

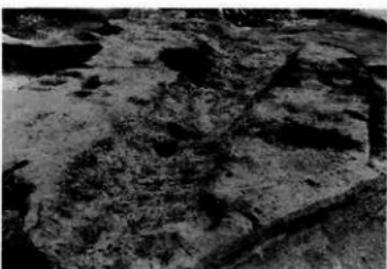


第107図 SD遺物出土位置図

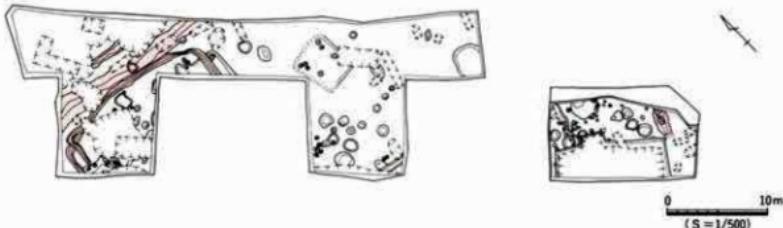


第108図 SD01~03出土遺物

0 5 cm
(S = 1/2)



る。SD01の北隣に位置しており、大部分が調査区の北角を占める大規模な搅乱によって破壊されている。規模はSD01よりかなり小さく、幅は半分以下である。しかし、方向性はありSD01に平行している。遺物は小片のものが微量に出土している。SD03も一部分はSD01と平行する。しかし、全体は直線的ではなく方形に屈曲する。検出できた範囲では南側に聞く「コ」の字状である。東側ではSB02を貫き、中央部ではSD01の南縁を破壊している。また西側でもSB03の一部を破壊している。詳細は不明な点が多いが、そうした遺構の新旧関係から判断すると、構築時期は比較的新しい可能性がある。SD04・05は、ともにわずか1・2mほどの長さしか検出できなかった。調査した断面から溝であると判断したが、それ以上の情報は得られなかった。なお、SD04内で検出したP25・26は、上層からそのプランの一部が確認できたため、本溝に伴うものではないと判断し、ピット独自の番号を付した。SD06は、不明な点が多い。屈曲した東側は搅乱によって破壊されている。南側はSB03に向かっているが、その寸前のところで見えなくなってしまった。ここで急に浅くなつたために削平された段階で消滅したのかもしれない。現時点では不明と言わざるを得ない。SD07・08は、ほぼ南北方向に縱走している。SD07は、SK14・SX09等によって南側は大きく破壊されている。また、同一方向の中央部には現代の配管による掘削が行われた形跡がうかがえる。SD08は、底面に凹みが確認できるが、上層では確認できなかったことから本溝に伴うものと思われる。詳細は不明である。

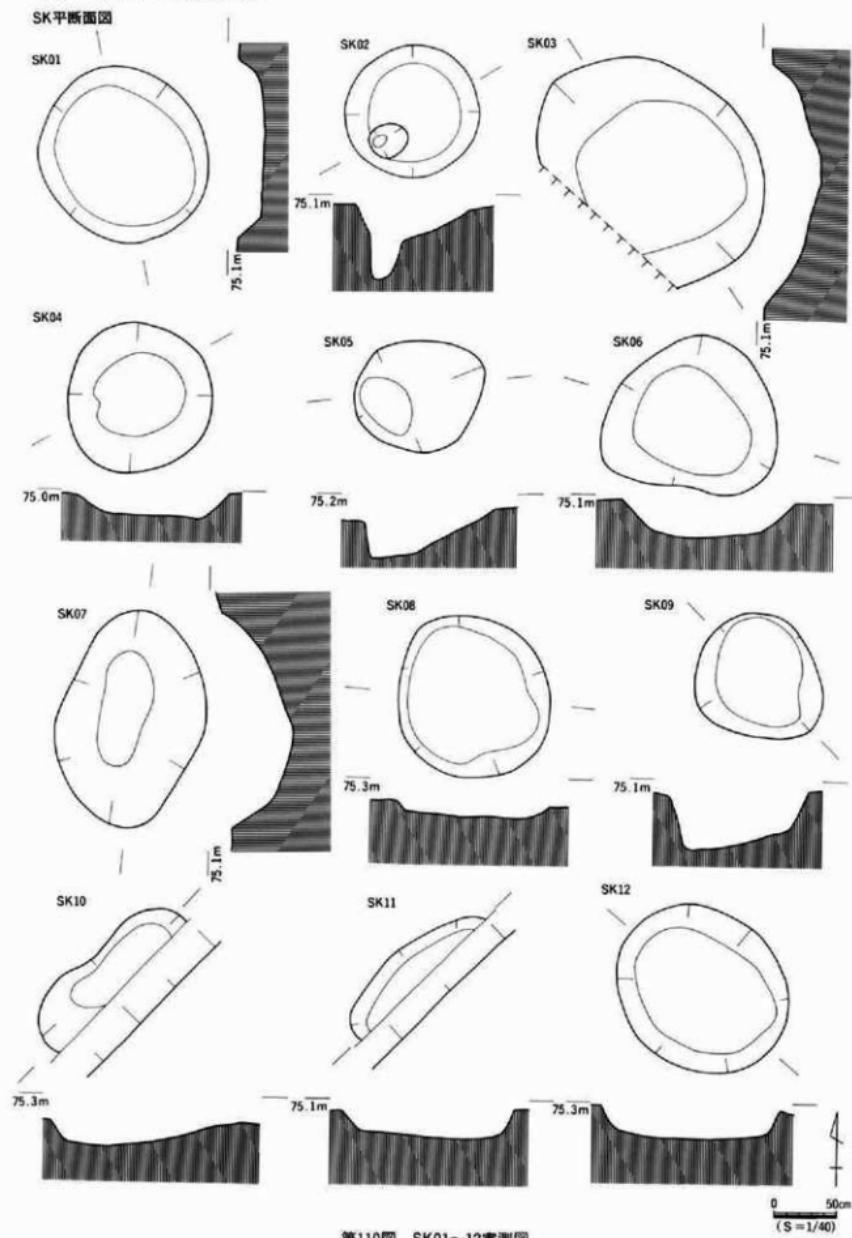


第109図 SD位置図

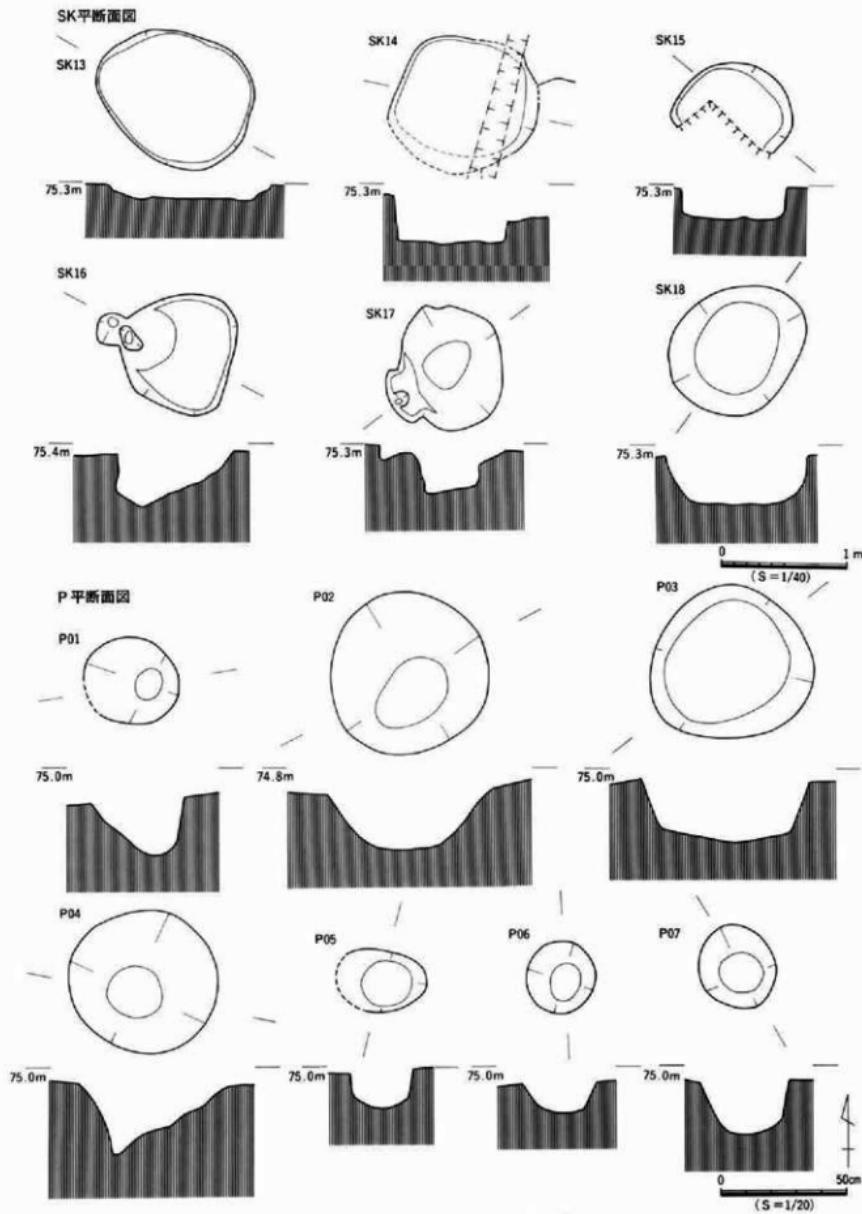
土坑（SK・P）

67基検出した。II区で定義したようにその規模によって大土坑（SK）とピット（P）に分類した（第3章第2節参照）。それぞれの検出数は、SKが18基、Pが49基である。SK01～11がIIIa区、SK12～18がIIIb区、P01～26がIIIa区、P27～49がIIIb区での検出である。これらSK・Pもほとんどが詳細は不明である。遺物が出土しているものもあるが、手掛かりとなるものは少ない。ここでは、特に説明を加える必要があると報告者が判断したものについてのみ記述することにする。

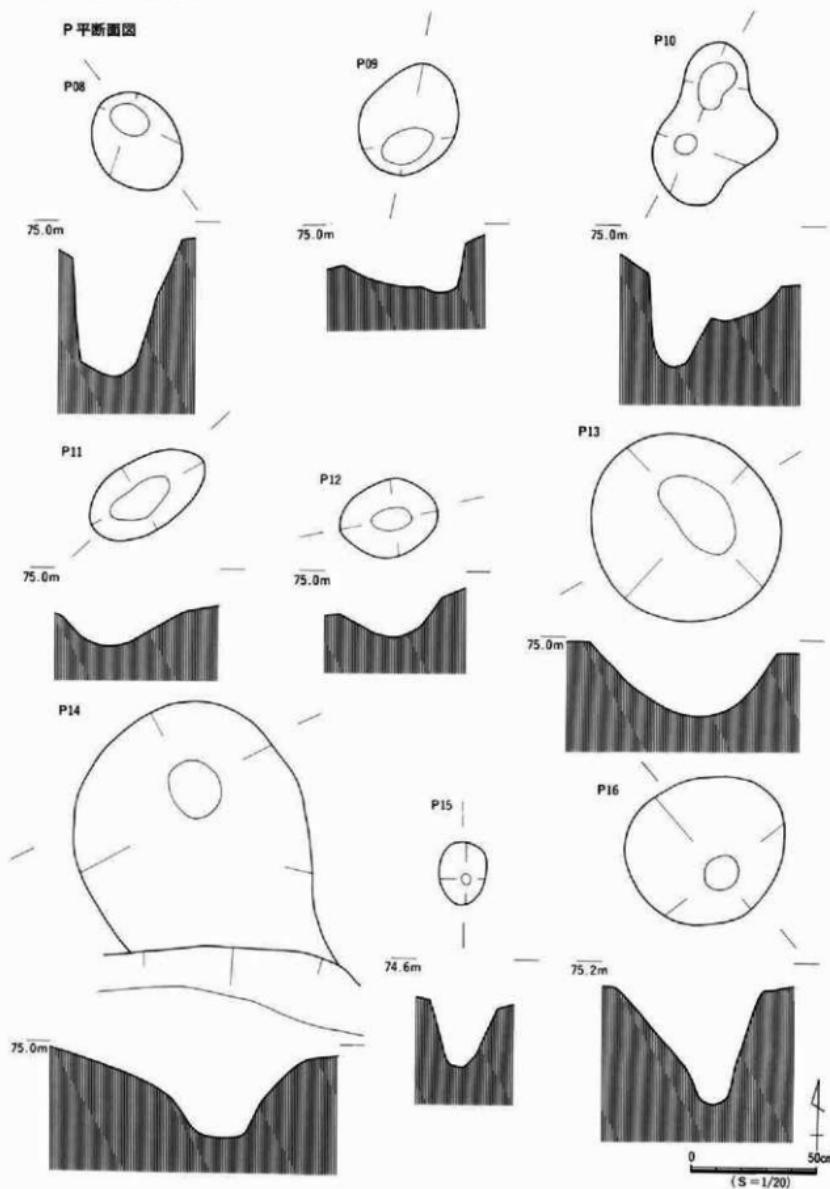
IIIa区北西橋脚部分の中央部にやや大きめの搅乱があり、その東側にはP02・23がある。これらのピットは基盤となる褐色土層で確認されている。検出以前の段階は一面が黒褐色土に覆われ、一部被熱しているところもあった。その辺りには遺物が散乱しており、遺構の存在をうかがわせた（第105図参照）。しかし、慎重に遺物の出土位置や焼土の範囲を記録しながら掘削を進めたが、大型の遺構を検



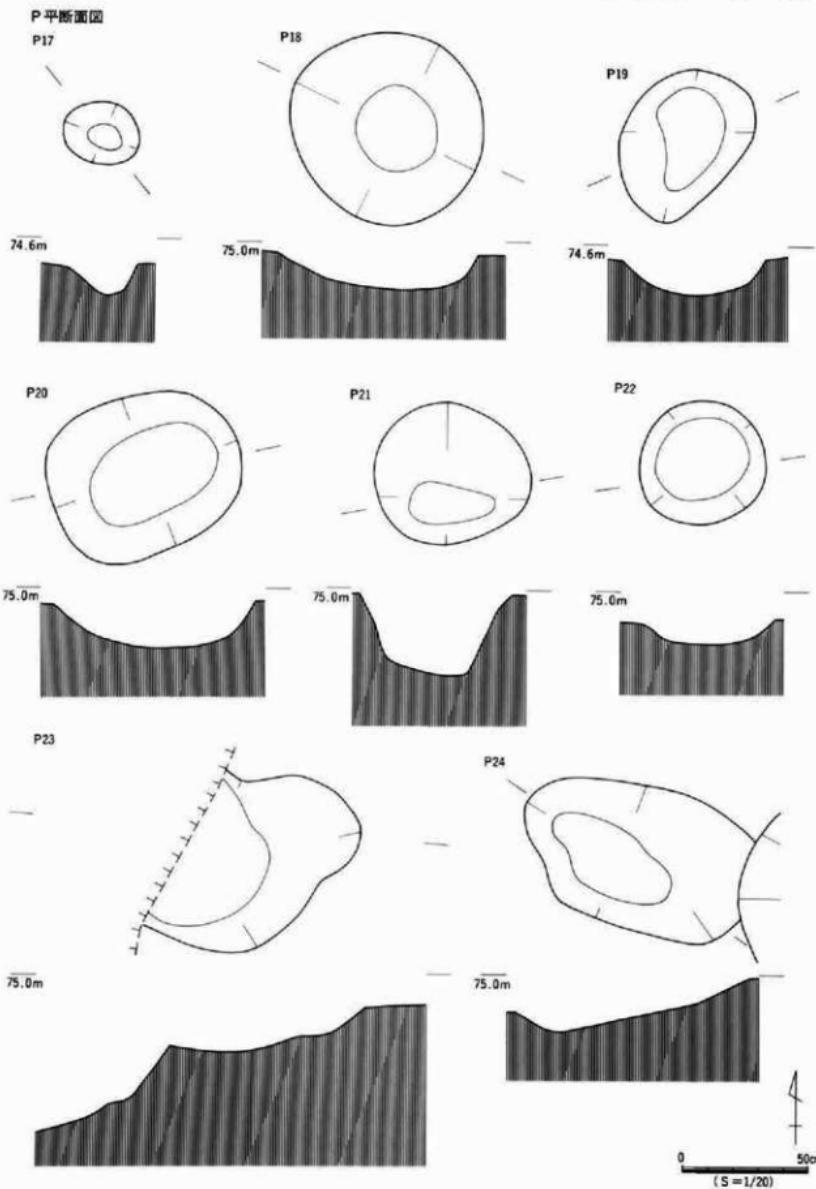
第110図 SK01～12実測図



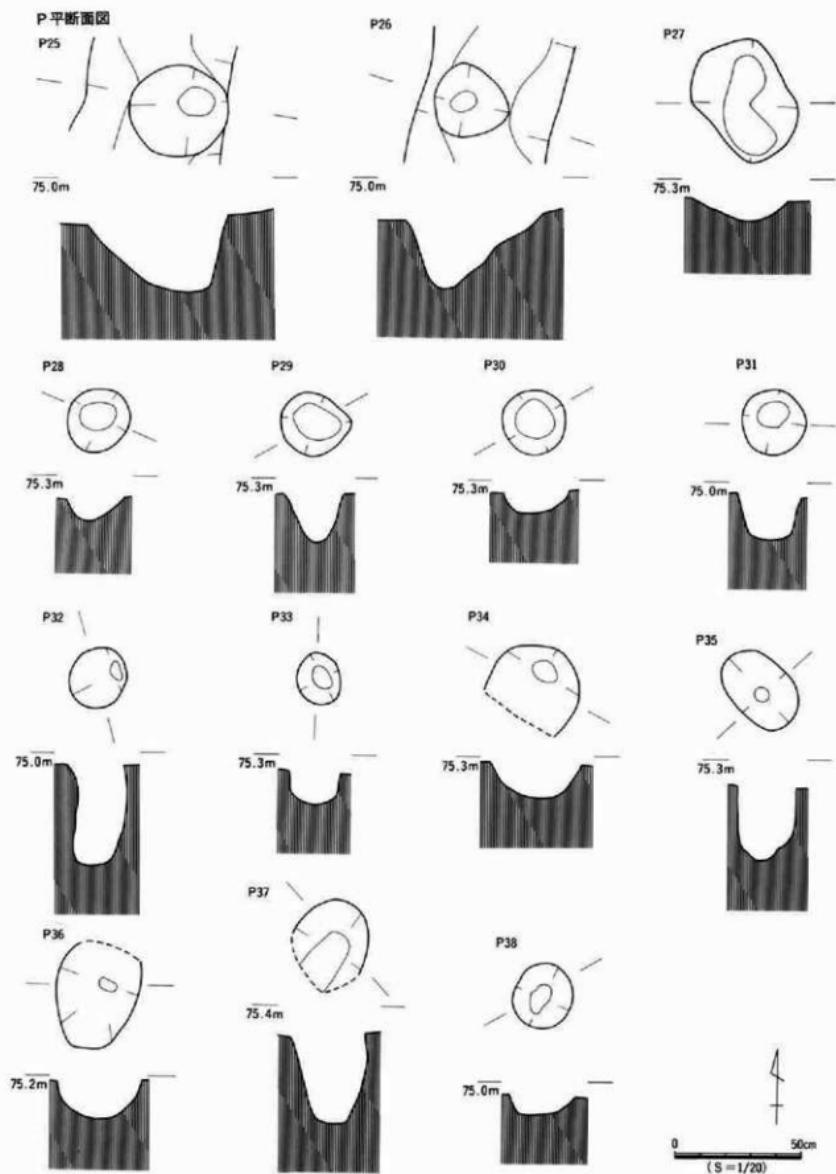
第111図 SK13~18・P01~07実測図



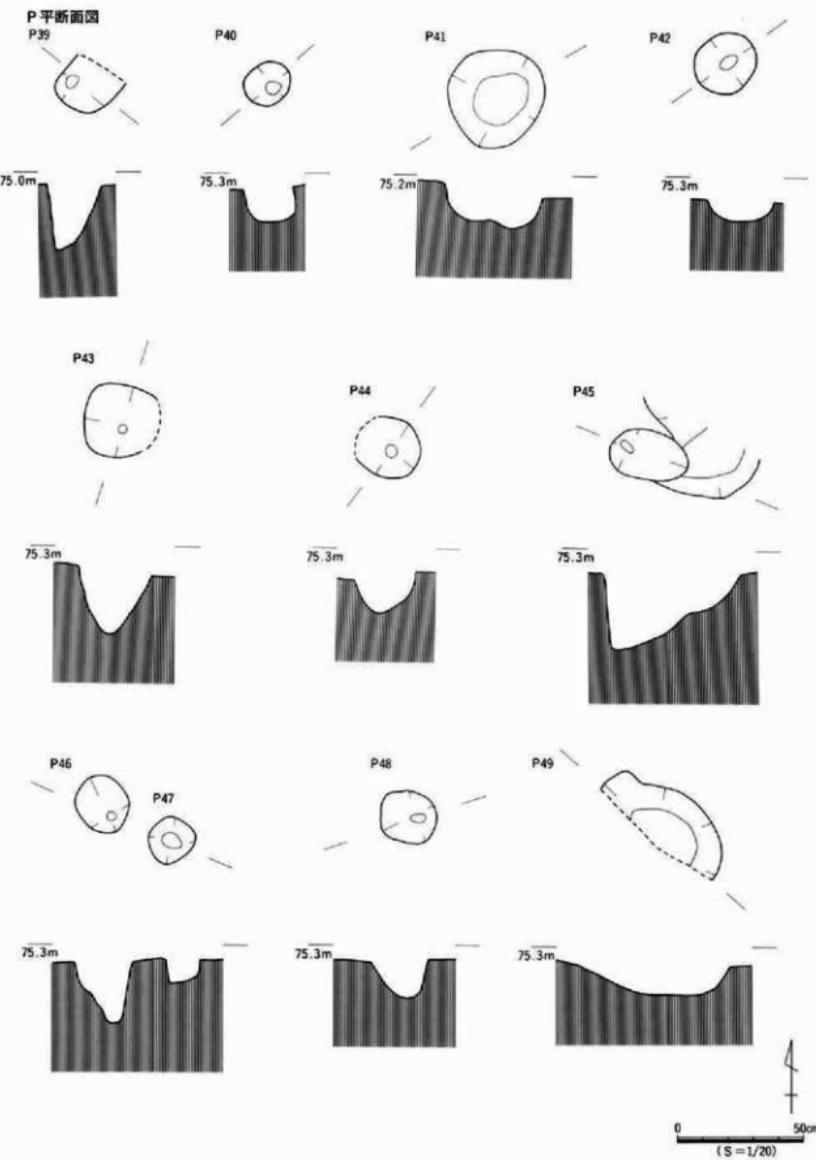
第112図 P08~16実測図



第113図 P17~24実測図



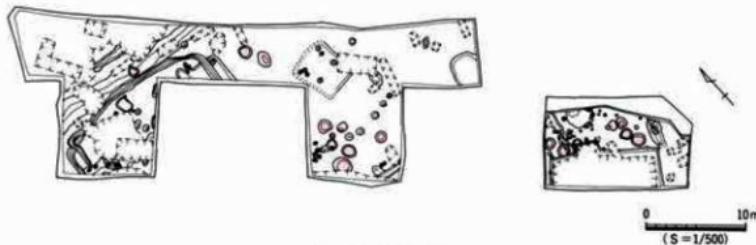
第114図 P25~38測定図



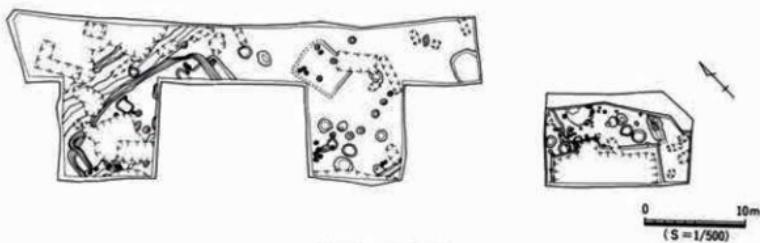
第115図 P39~49実測図

出することはできなかった。擾乱や試掘坑(TP)の影響が大きい一帯であるがゆえに、確認することができなかつた可能性もある。遺物は、渾然一体となって出土している。異種のものが混在しているなど、まとまりがあるとは言い難い状況である(出土遺物参照)。同じく、IIIa区の南東橋脚部分でもSKやPが集中している箇所がある。どの土坑も埋設と判断できるような遺物を包含していない。P13・18・20・21・22は、その配置において、平面的に列をなしているように見えるが、それ以上は不明である。

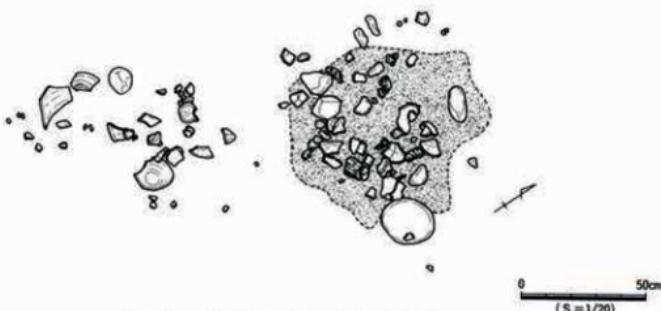
IIIb区では、SK12から遺物が出土している。壠方西側の法面上に、内側に向いた状態で横位にはば完形の山茶碗(550)が出土している。本SKの詳細は不明である。この山茶碗は本SKに伴うものと判断できる。



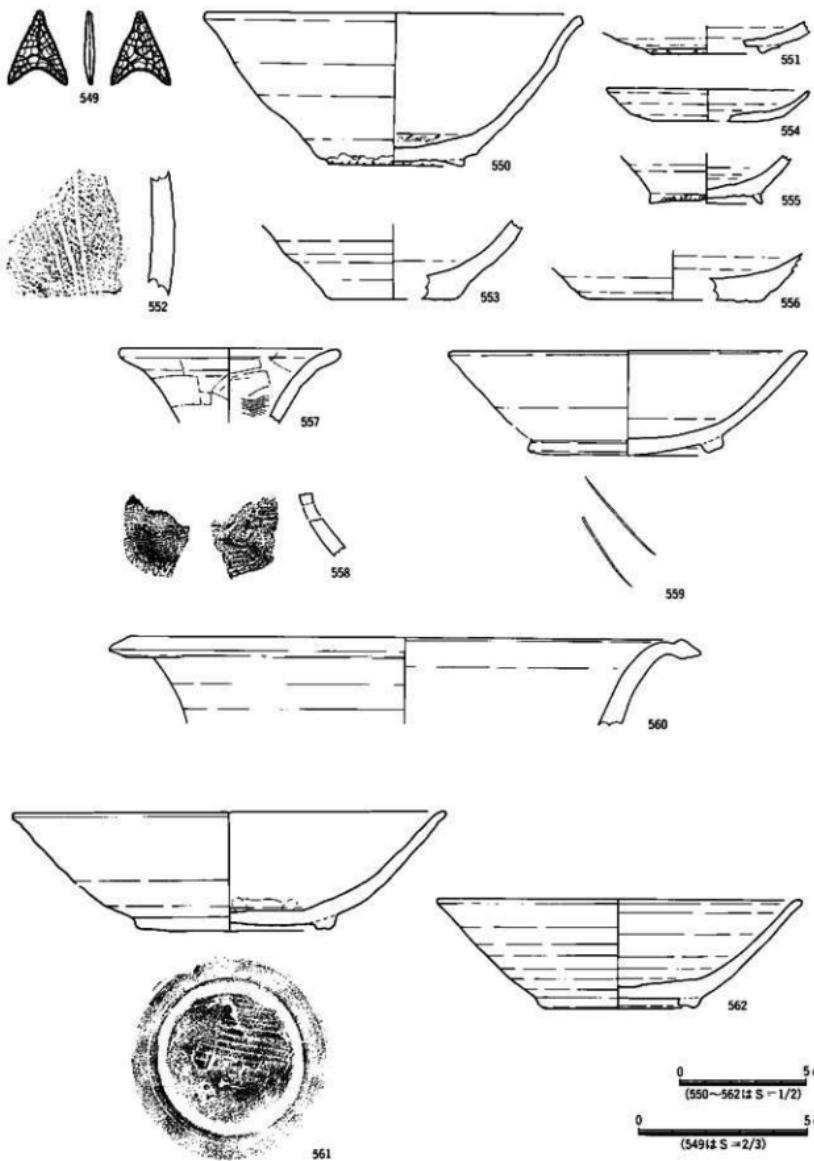
第116図 SK位置図



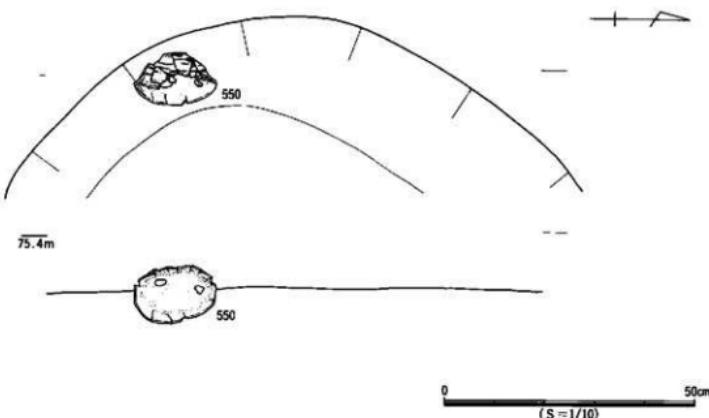
第117図 P位置図



第118図 P02・23上層で出土した遺物の平面図



第119図 SK07・12・14・17・18・P02・23出土遺物



第120図 SK12遺物出土状況

遺物集積 (SU)

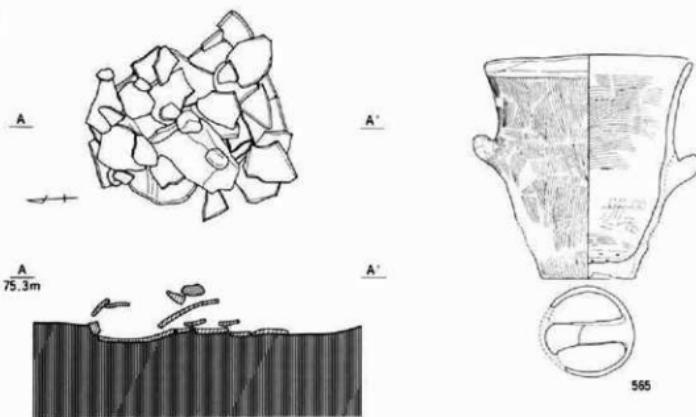
2基検出した。SU01は、III a 区北西橋脚部分の搅乱西側から出土している。黒褐色土中で確認した。本遺物集積は、1個体分の土器の瓶(565)であり、他の異物の混入は認められなかった。丹念に周辺を精査したが、土坑等のプランは確認できず565単体の出土となつた。周辺には、SB03等の遺構が存在するが、それらとの関係は不明である。SU02は、III b 区北西隅で検出した。黒褐色土中で数個体分の山茶碗が散在するのを確認した。慎重に精査を繰り返したが、関連のあると思われる遺構は検出できなかつた。出土した遺物は566~569である。

不明遺構 (SX)

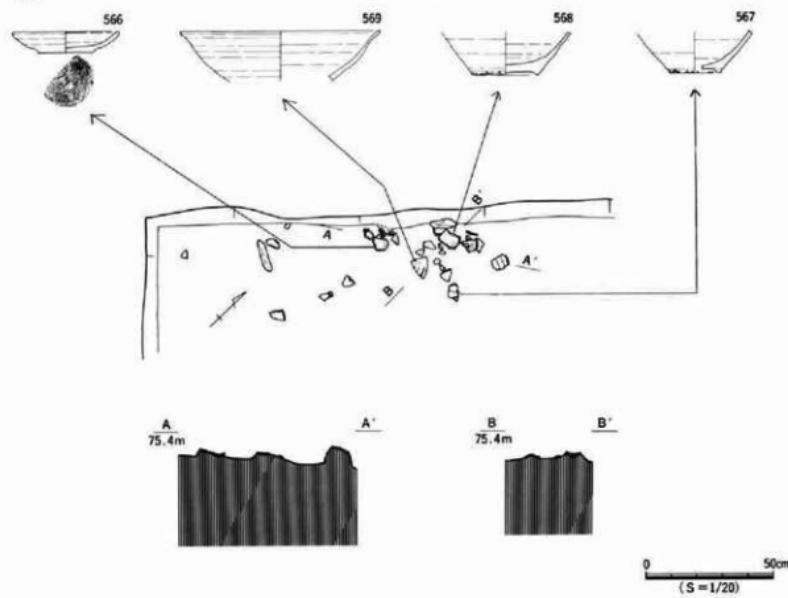
9基検出した。SX01~06をIII a 区で、SX07~09をIII b 区で確認した。SX02以外はあまりまとまって遺物は出土しておらず、いずれも小片である。従つて、ここでは SX02についてのみ記述することにする。ちなみに、SX01・07も比較的大きめの土坑状遺構ではあるが、それ以上は不明である。

SX02は、III a 区北西橋脚部分の南端で検出した。大きめの搅乱とTPによってそのほとんどを破壊されており、平面形プランさえままならぬ状態である。しかし、堆積状況は安定しており、かなり良好な遺物が出土している(第122~124図参照)。調査できた範囲が狭く、しかも破壊された部分が多いために不明遺構と言わざる得ない状況ではあるが、遺物の出土状況を見る限りでは住居跡並みと言える。TP横の壁面では焼土も確認している。しかし、基盤となる褐色土層から判断するとややレベル的に高い位置にあるため、必ずしも本SXに伴うものとは断言できない。よって図化していない。TP東で本SXの東側の堀方は確認できたが、上部は削平された部分もあり不明である。

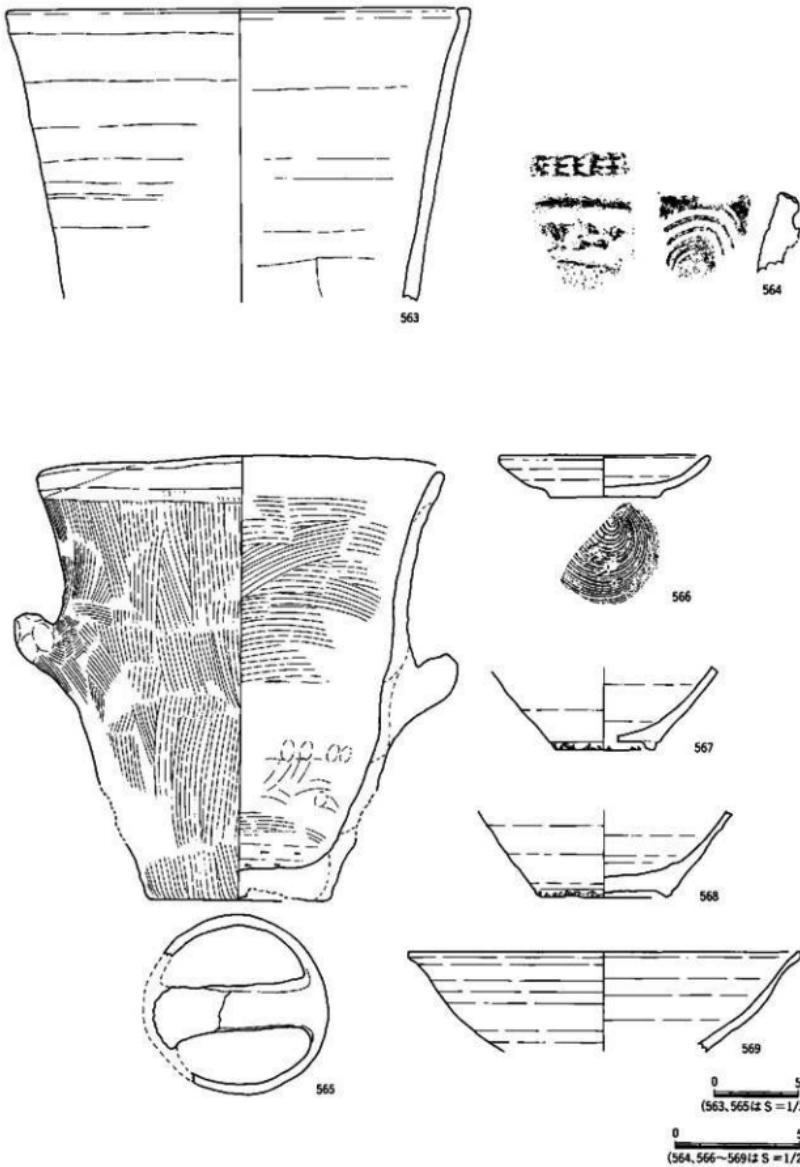
SU01



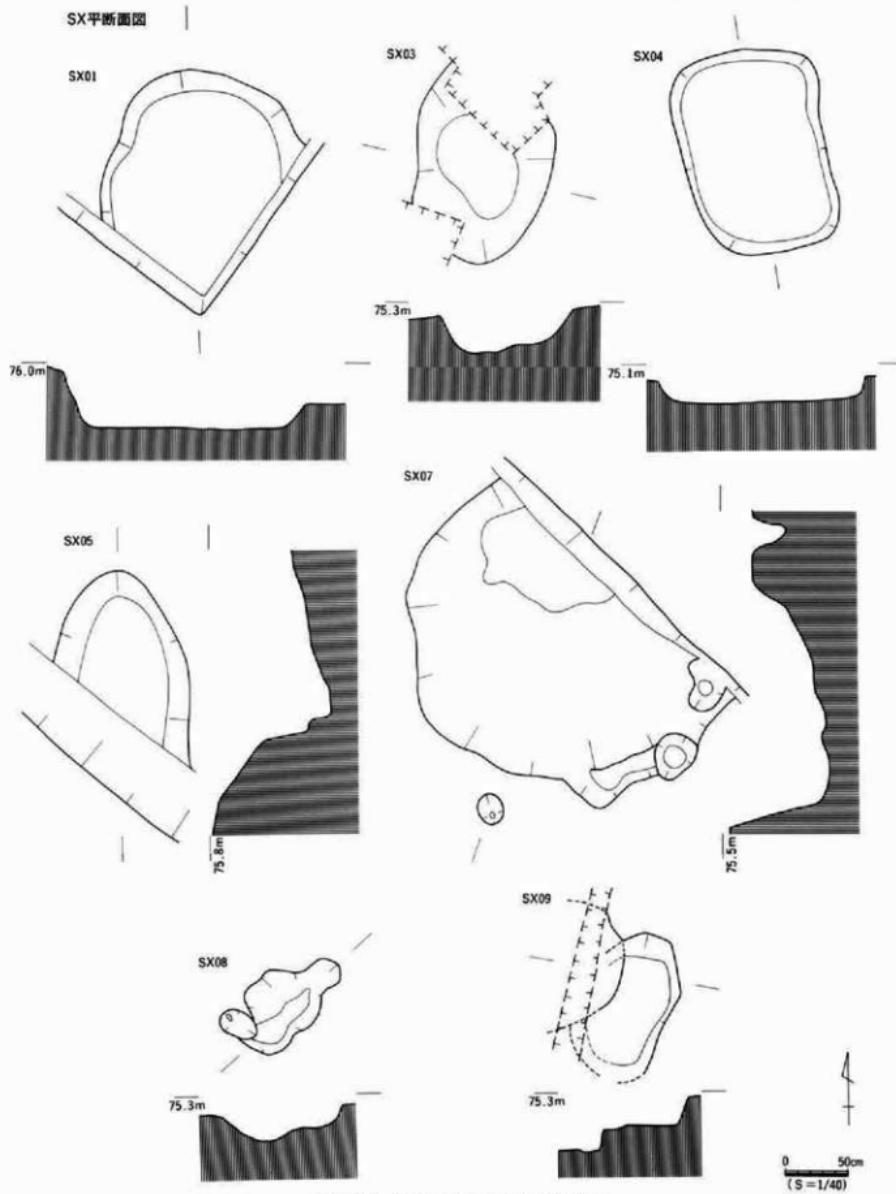
SU02



第121図 SU実測図

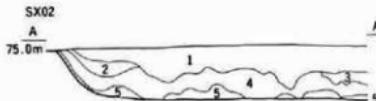
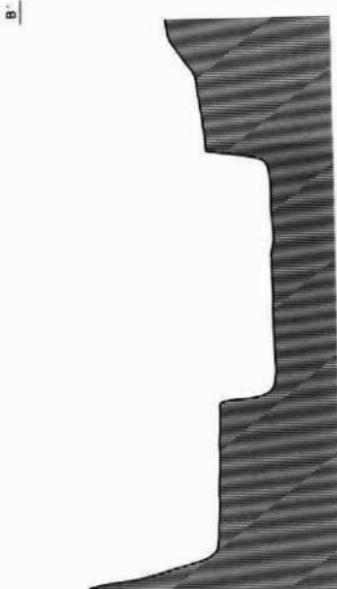
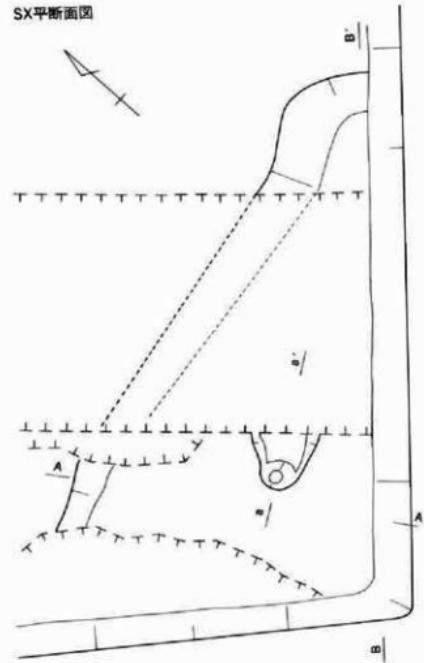


第122図 P23・41・SU01・02出土遺物

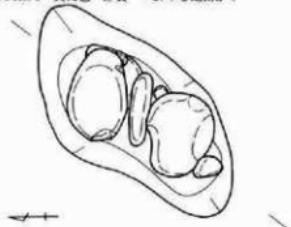
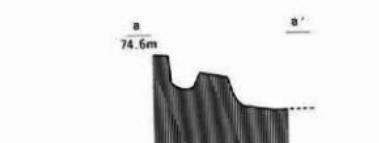


第123図 SX01・03~05・07~09実測図

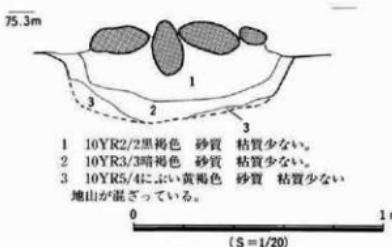
SX断面図



- 1 10YR2.5/3黒褐色 砂質 粒子細かく礫を含まない
ガラス質の粒が入る。
- 2 10YR3/4暗褐色 砂質 1に比べてわずかに粒子が粗
い。
- 3 10YR3/4暗褐色 砂質 5YR4/6褐色が混じる カマド
の焼土か?
- 4 10YR5/6黄褐色 砂質 2と混じり。
- 5 10YR5/6黄褐色 砂質 いわゆる地山か?



SX06



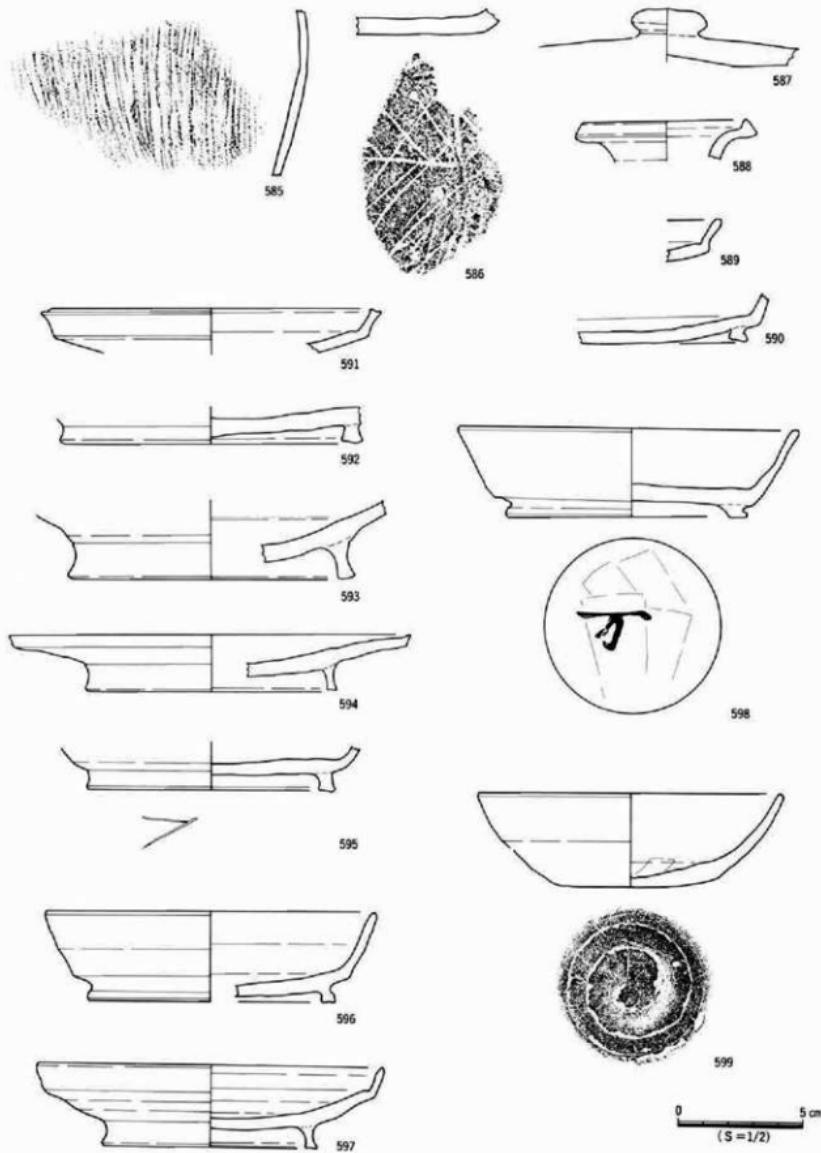
- 1 10YR2/2黒褐色 砂質 粘質少ない。
- 2 10YR3/3暗褐色 砂質 粘質少ない。
- 3 10YR5/4いわゆる黄褐色 砂質 粘質少ない
地山が温っている。

0 1m
(S = 1/50)

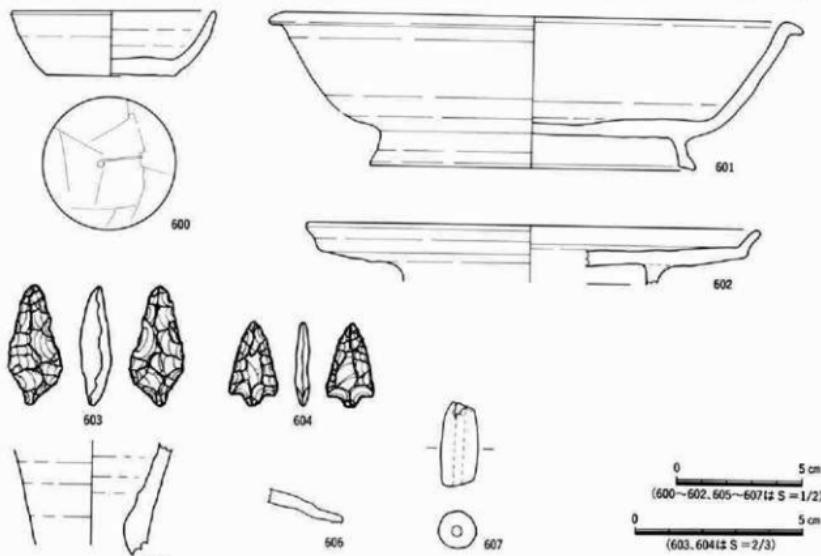
第124図 SX02・06実測図



第125図 SX01・02出土遺物



第126図 SX02出土遺物



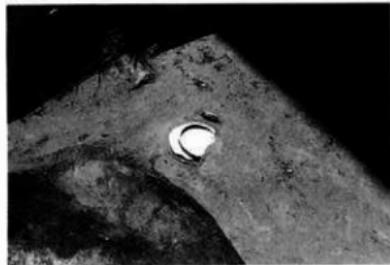
第127図 SX02・07・09出土遺物



SX01 調査中



SX02 完壠状況



SX02 遺物出土状況(1)



SX02 遺物出土状況(2)

第3節 遺 物

平成11・12年度に調査したIII区からは、6,718点の遺物が出土している。内訳は、縄文土器156点、弥生土器439点、土師器2,778点、須恵器1,133点、灰陶陶器86点、山茶碗386点、中世以降の土器類1,361点、石器152点、そのほか11点、不明土器216点である(II区と同様に出土点数はすべて接合前破片数。以下も同じ。)。遺物の状態は、II区と同様な状況で小片だが劣化は少ない(第3章第3節参照)。出土遺物全体の概要是、I・II区とやや異なる様相を呈する。I区では若干確認されているが、II区にはほとんどない8世紀後半から9世紀にかけての遺物にまとまりがある。特に須恵器がそうである。灰陶陶器も須恵器に比べると量的には少ないが出土している。一方、それに比べ石器類が少ない。試掘確認調査の段階でも9世紀に至るような遺物が出土していた。そのことからこうした傾向は予想された。しかし、隣接するI・D区からは弥生土器の良好な資料が出土しており、試掘確認調査のトレンドからも縄文土器・弥生土器や石器類も出土していたので、中心となる時期はI・II区と大きく異なるであろうと思われていた。ただ、今後検討を要するのは、III区には明確なこの時期の遺構が確認できていないということである。遺構・遺物を踏まえたIII区全体の考察については、第6章で若干触れる。

出土した遺物のうち、229点(図示点数は接合後破片数。以下も同様。)を図示した。図化の方法等は、II区と同様にしたので参照のこと。以下順に出土状況も織り交ぜながら説明することにする。

縄文土器 (552・573~575・608・609・712)

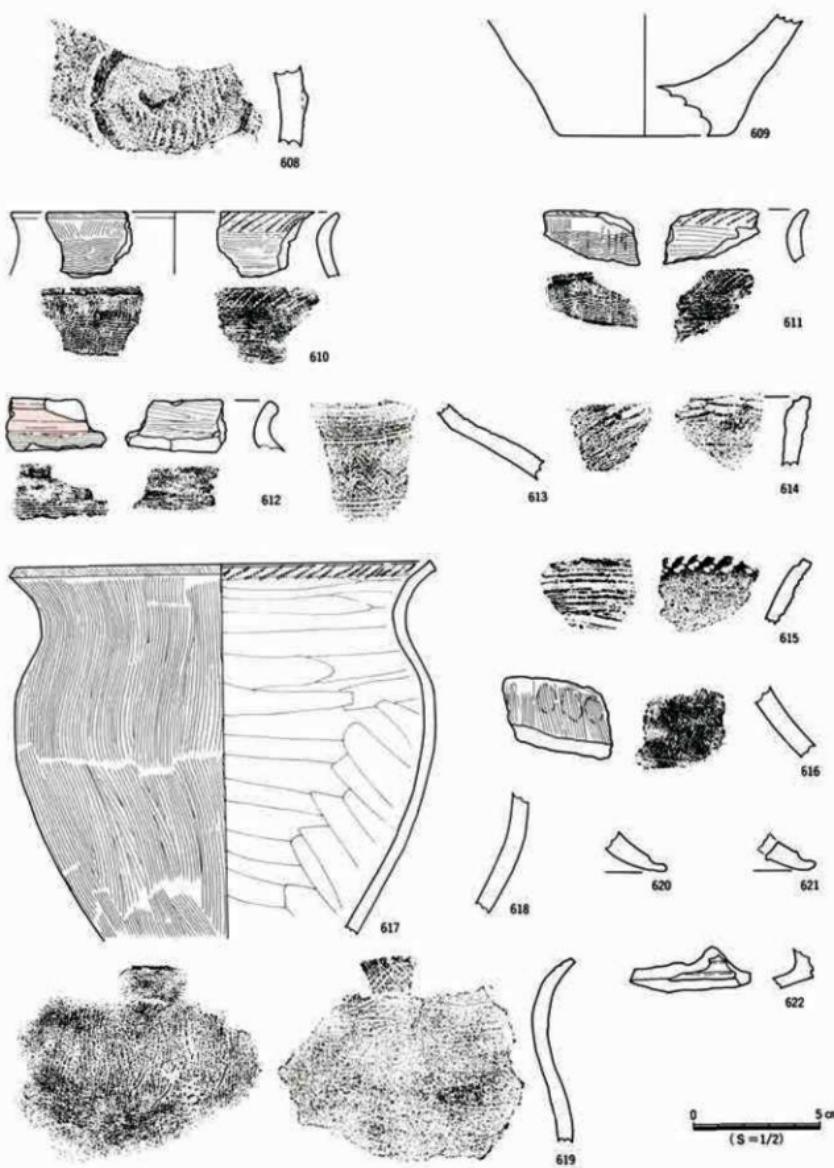
7点掲載した。552は、縄文地に縦位の沈線が数条見える。胴部片である。中期末葉の可能性が高い。573~575は、端部が確認できる口縁部片である。いずれも端部は面を作り、やや外側へ開く。573・574は、内外面に調整痕が見られる。後~晩期の可能性がある。608は、胴部片である。緩やかな隆帯で撇手状文が描かれている。中期に属すると思われる。609は、底面を欠損しているが、底部片である。底面部はやや厚めである。712は、口縁部である。くびれた頸部から一旦外に開き、口縁端部に向かって凸状に湾曲する器形を呈する。口縁部は内外面で肥厚されている。縄文地に隆帯と沈線で撇手状文を形成している。608同様に中期に属すると思われる。

I・II区と比較すると、III区で出土している縄文土器は、出土量もさることながら質的にも豊富とは言えない状況である。破片間の接合状況も良好ではない。確定な遺構の存在も認められないことから判断しても、III区固有のものとは考えにくい面がある。

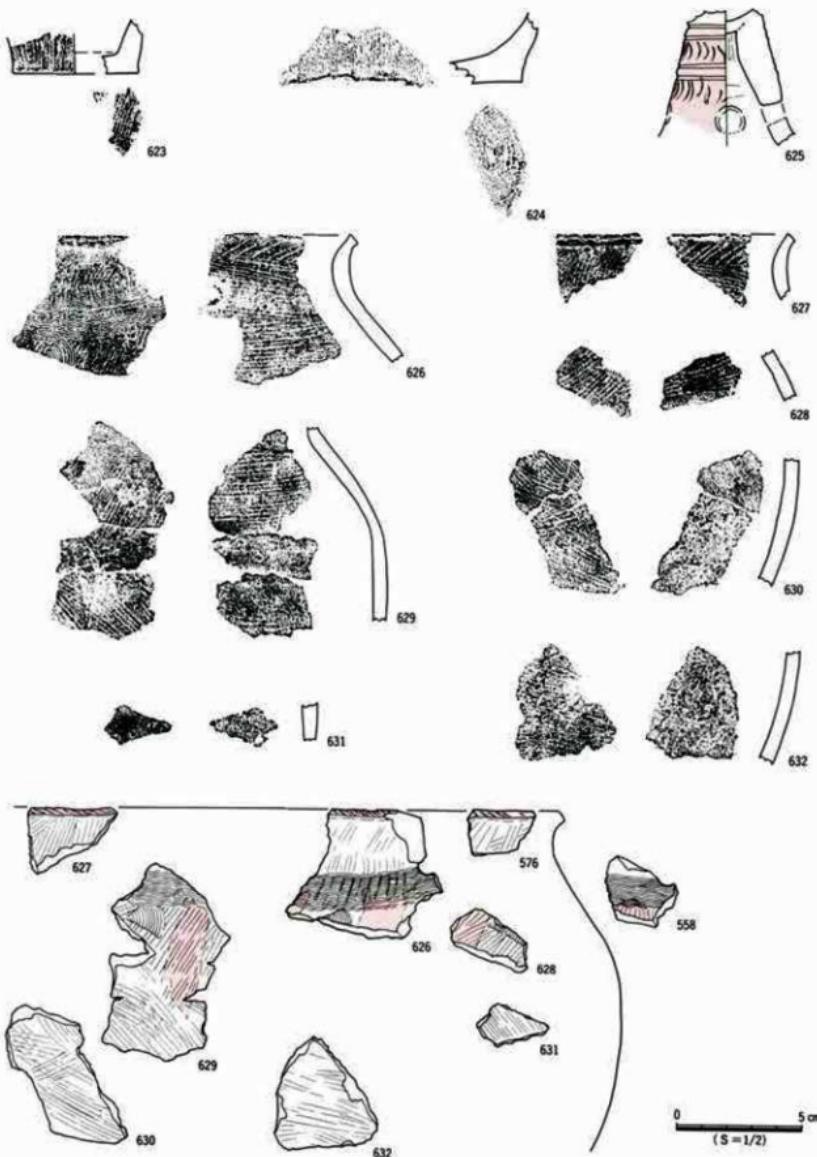
弥生土器 (509・557・558・564・576・610~632・713)

29点掲載した。基本的には破片資料である。同一個体と思われる数点の破片が、比較的近い範囲から出土している。二次整理で丁寧に調査したが接合はできなかった。それらについては詳細不明な点も多いが、図上復原を行ってみた。しかし全体的には、隣接するI区から出土したような良好な資料は確認できなかった。

509は、中期条痕文系甕の口縁部である。この種の破片は野籠遺跡では数多く出土している。この破片は、SB02から出土している。SB02は、カマドを伴う住居跡であるから、後世の流入によるものであ



第128図 遺構外出土繩文土器・弥生土器(1)



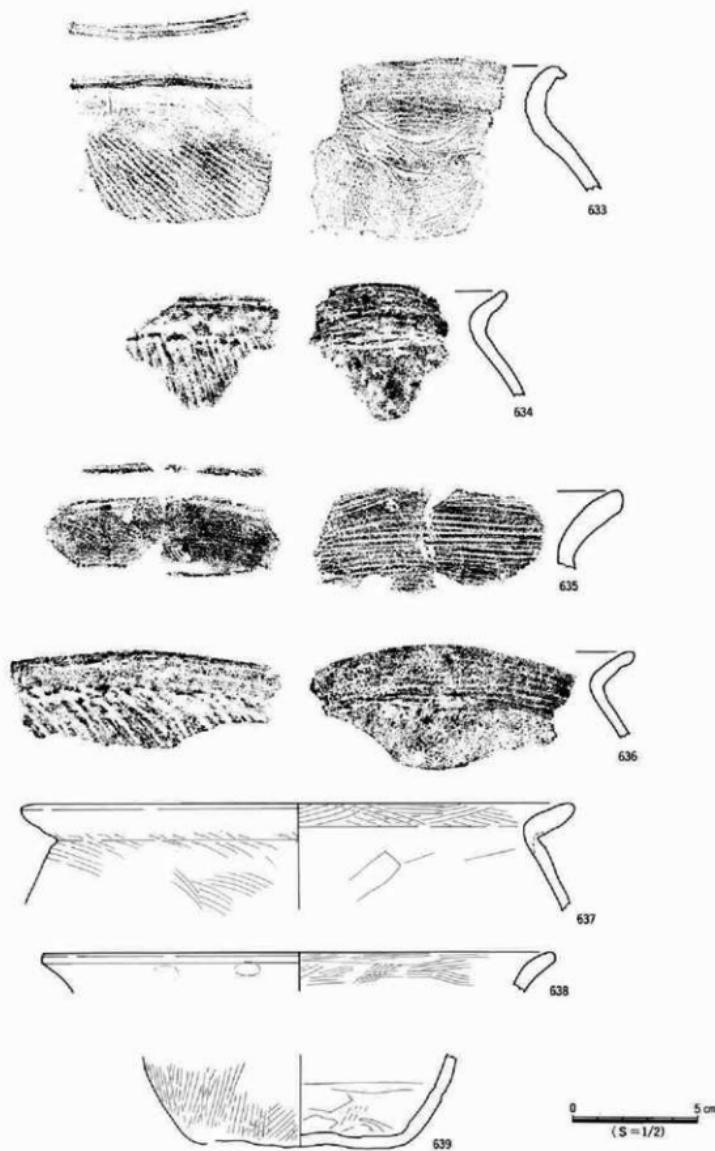
第129図 遺構外出土弥生土器(2)

うと思われる。557は、長頸壺の口縁部である。横方向の調整が確認できる。564は、壺の口縁部で、条痕文系土器であろうと思われる。1区の6期に該当する。610と611は、同一個体である。甕の口縁部である。口縁部内面には斜方向に櫛状工具による刺突列が施されている。576にも見られる。610・611と同一個体である可能性もあるが断言できない。612も甕の口縁部と思われるが、内面の刺突列ではなく、端部の成形も異なる。613は壺の肩部片である。614・615は、口縁部片である。614は、中期前半の壺である可能性がある。615の内面には、刺突列がある。616は、不明であるが、外面に指頭圧痕が見える。617は、III区出土の弥生土器では最も遺存状況が良好な破片である。底部は失っているものの、全体の三分の一ほどが残存している。破片は接合できなかったものも含めると比較的多く、図上復原できる資料である。外側に向けられた口縁端部は面取りし、そこから胴部下半に向かって連続的に調整が施されている。口縁部の内面には刺突列がある。胴部内面上半は横方向の板ナデ調整であるが、膨らんだ胴部中央以下になると、斜方向の調整が加わる。618は、胴部片である。外面に赤彩が施されている。619は、ほんの一部分だけ端部が確認できる。詳細不明である。調整痕は明瞭ではなく、617のくびれが弱い器形であるかもしれない。620・621は、高环脚部の先端部である。621には、穿孔が見られる。622は、壺の口縁端部である。623・624は、底部片で、ともに底面部に布日压痕が確認できる。625は、高环脚部である。外面には横位の沈線と爪形文によって加飾されている。脚部中央には径約1cmの透孔が、十字方向の4カ所で確認できる。外面には赤彩が施されている。558・626～632は、同一個体である。甕の口縁部から胴部の破片で、底部は確認できなかった。接合できる部分は少なかったため、第129図のように破片をそれぞれの部位に置き、器形を想定してみた。口縁部の破片を見る限りでは、610・611と近似しているが、同一個体ではないと判断した。口縁部内面には刺突列が、またくびれた頸部には横位の櫛描文が見られる。外面には赤彩が確認できる。713は、胴部片という以外は不明である。

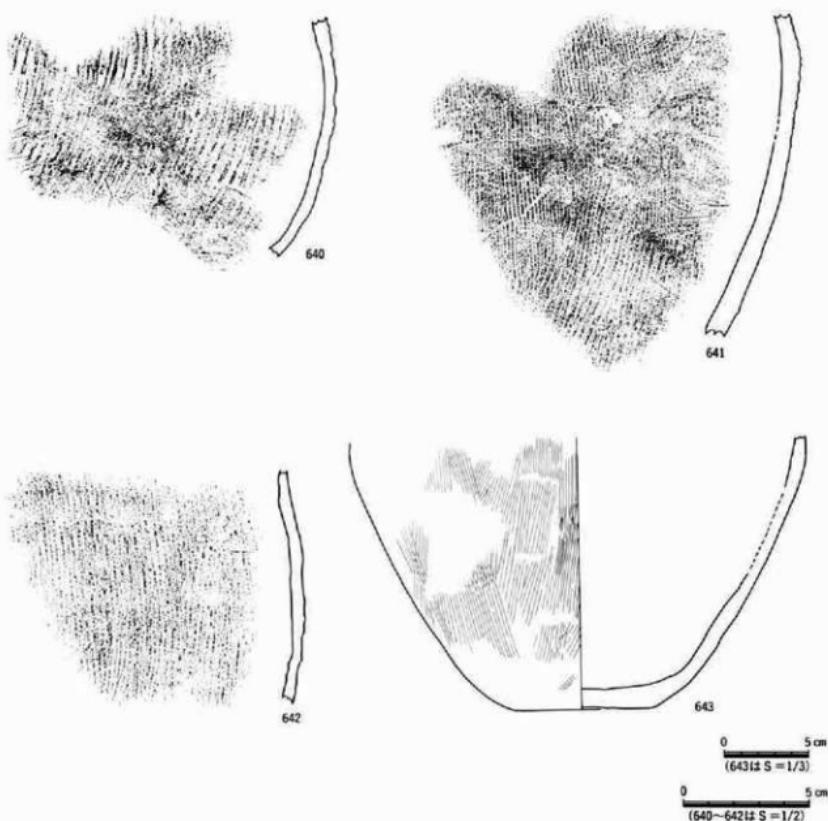
土師器 (501～507・510～514・516～519・546・565・577～586・633～643・714・715)

41点掲載した。III区で出土した土師器は、ほとんどが古墳時代末から古代にかけての甕である。部位としては、口縁部から胴部にかけての破片がほとんどで、完形になるものは少ない。また、確認できた底部片も少量で、ここに図示できたものはわずかに518・519・586・639・643の5点である。ちなみに、掲載した甕と思われるもののうち、口縁端部が確認できるものは、501・502・504・510・514・577～580・582・583・633～638である。出土した土師器のうち、全体の器形が判明しているのは、565の甕と581の小鉢である。514も図上ではある程度の復原が可能ではあるが、破片間接合はできなかった。甕は遺物集積として出土状況図(第118図)を示した。ほぼ1個体分の破片がつぶれるようにして出土した。出土した位置は、SB03付近の遺構外である。SB03との関係は不明である。581の小鉢は口縁部から胴部を半分以上失っており、辛うじてその器形が復原できた。口縁部の屈曲部はやや肥厚しているが、胴部の器壁はかなり薄い。底面には木葉痕が確認できる。

そのほかの詳細は、観察表に譲る。



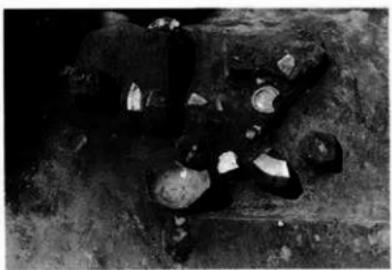
第130図 遺構外出土土器(1)



第131図 遺構外出土土師器(2)



遺構外遺物 出土状況(1)



遺構外遺物 出土状況(2)

須恵器 (508・515・520～529・534・535・537～539・543～545)

・547・553・559～563・570・587～601・605・606・644～674・716～721)

出土した破片のうち、復原可能なものや遺存状態が良好なものを中心に72点を図化し掲載した。前述したように、III区の出土遺物の中で最もまとまりがあり良好な状態で出土しているのは須恵器である。I・II区でも須恵器は出土しているが、量的に全体に占める割合は低い。また、その中心となる時期は6～7世紀であり、8～9世紀のものと思われるものは少ない。その点、このIII区から出土している須恵器は、8～9世紀にかけてのものがほとんどであり、統く灰釉陶器への連続性もうかがわせている。

出土地として注目されるのはSX02である。第4章第2節でも記述したが、不明遺構ながら完形の須恵器碗をはじめとしたかなり良好な遺物を包含していた。596～601がそうである。出土したものの中種は、碗、皿、盤、壺類が主であり、少ないながら高环、壺、瓶なども確認できる。508は、壺蓋である。胎土その他から判断すると、やや古い様相を呈している。SB01から出土しており、共伴する土師器との関係が深いと思われる。716の環身は試掘確認調査の際に出土したものであり、同様にやや古相である。515は、盤の脚部である。外面に縱方向二本の沈線がある。折損部にわずかながら透孔も確認できる。523は、高环の脚部先端である。547も高环脚部先端で、確認できた高环はこの2点のみである。528・563・674は、瓶である。いずれも北西橋脚部からの出土であり、土師器の瓶(565)も含めると、比較的古い範囲から4個体の瓶が出土することになる。534は、佐波理蓋である。つまみ部しか残存していないが、唯一確認できた。この蓋は599のような碗とセット関係であろうと思われる。560は、広口壺の口縁部である。657は、有耳壺であろうと思われる。719は、8世紀末葉から9世紀初頭に属する盤である。底面にヘラ刻みが確認できるのは559・595の2点である。また、墨書を有するものが2点ある。598と654である。598は、底面が全面残存しているため、墨書されたのが「万」の一字のみであったことがわかる。一方654は、碗の口縁部片であり、ちょうど「家」の一字分しか残存していない。わずかに「家」の上に文字があった痕跡が認められるが、残念ながら不明である。書体はしっかりしている。

このIII区から出土した須恵器は、ほとんどが美濃須衛産であろうと思われる。しかし、547・587・590・592・665などは、その高台の長さや胎土等から老洞古窯産である可能性もある。

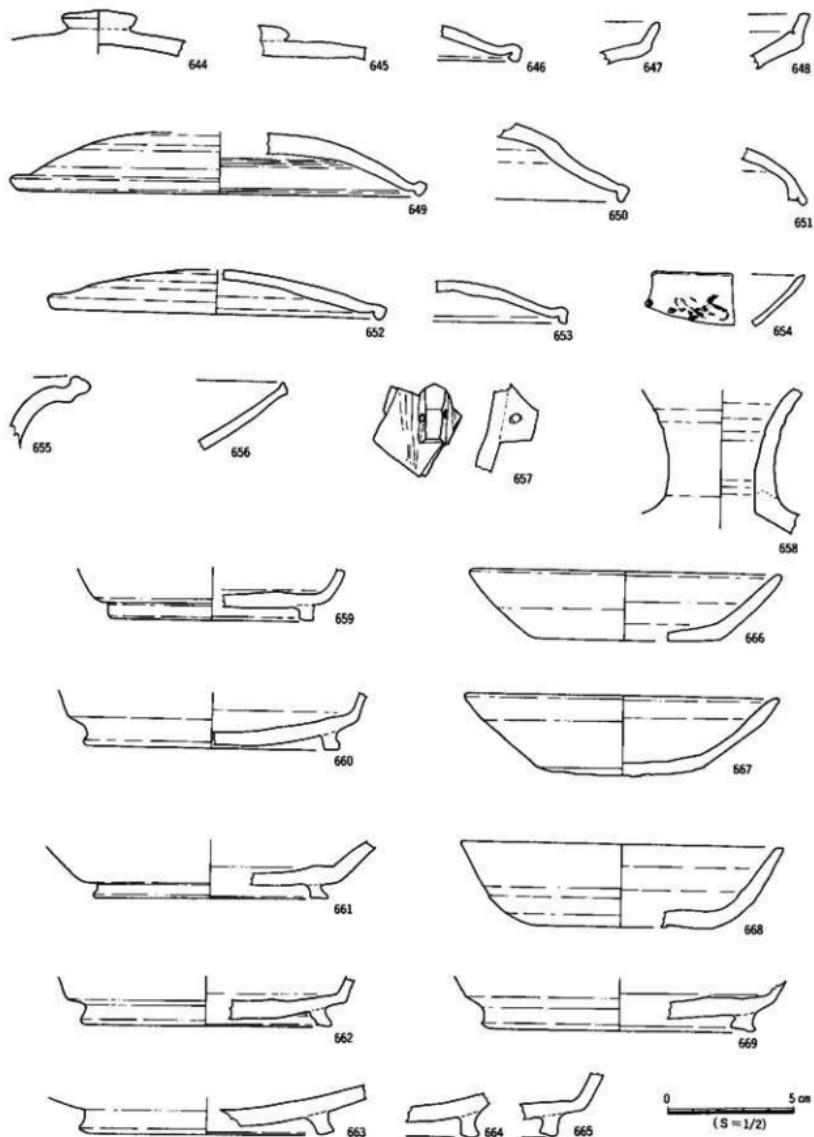
灰釉陶器 (530～533・602・675～684)

15点掲載した。須恵器にまとまりがあることは先に記述したが、灰釉陶器も野籠遺跡の中では充実していると言える。碗皿類の底部片を中心として器形のわかる資料が多い。

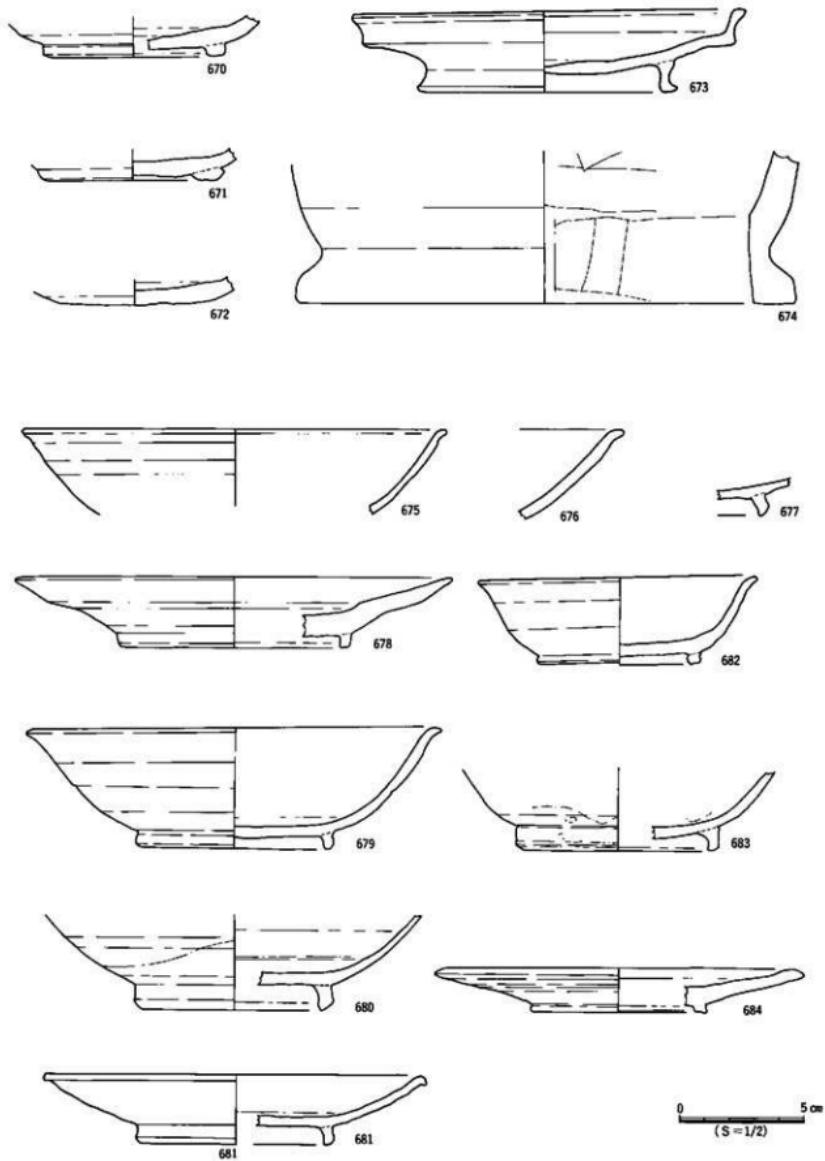
530は、小さな口縁部片である。531・681と同様に口縁端部が外側へ突き出し三角状を呈する。533・678は、ともに段皿であるが、高台の形状が異なる。602は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部が垂直方向に立ち上がる器形である。以下は観察表に譲る。

山茶碗 (536・540～542・548・550・551・554～556・566～569・571・572・685～690・722～725)

26点掲載した。完形のものは、550の1点である。器種は碗と皿がある。540～542・548・550・551・555・556・567～569・571・687～690・722～725の20点が碗で、536・554・566・572・685・686の6点



第132圖 遺構外出土須惠器(1)



第133図 遺構外出土須恵器(2)・灰釉陶器

が趾である。碗のうち550・567・568・690は、比較的体部の立ち上がりが強く、ほかはやや緩い。高台は、丁寧とは言えない感じがするが、輪穂痕が確認できるものが多い。556は、平底である。一方、皿は底面がやや厚めのものが多い。554・572は、薄目であるが、ほかはやや厚く盛り上がっている。口縁端部は、丸められているものが多い。572の底面外側には墨書きがある。欠損しているので詳細は不明であるが、残存している部分からは「十」の可能性を考えられる。685の底面外側には明瞭に糸切り痕が確認できるので、実測とともにその拓影を掲載した。

中世以降の土器類（695～704）

ここでは、山茶碗を除いた中世～近世に属する遺物のうちで、良好な状態のもの10点を掲載した。695は、備利の底部である。江戸時代のものと思われる。696は、鉢の底部であろうと思われる。内外面に釉薬が見られることから、上下逆にした蓋の可能性もある。697は、湯呑みである。698は、五井花文の染め付けがある丸碗である。19世紀頃のものと思われる。699は、羽釜である。700は、陶器壺である。底面に墨書きがある。701は、行平である。700・701は、ともに18世紀末から19世紀のものであろうと思われる。702は、十能である。柄を接着する部分には、小さな孔が見られる。柄を固定するために釘等を差し込んで使用したのではないかと思われる。703・704は、擂り鉢である。両者は酷似しており、破片を見るだけでは同一個体かと思われたが別個体である。ともに18世紀末から19世紀にかけての時期に属すると思われる。

石器（549・603・604・705～711・726～729）

石器は、全部で161点出土している。内訳は石鎌5点、打製石斧21点（破片も含む）、石核7点、石錐1点、砥石1点、磨製石剣1点、剥片類125点である。そのうちの10点を図化し掲載した。また、試掘確認調査の際に出土した石器類の中から4点を選出し同様に図示した。

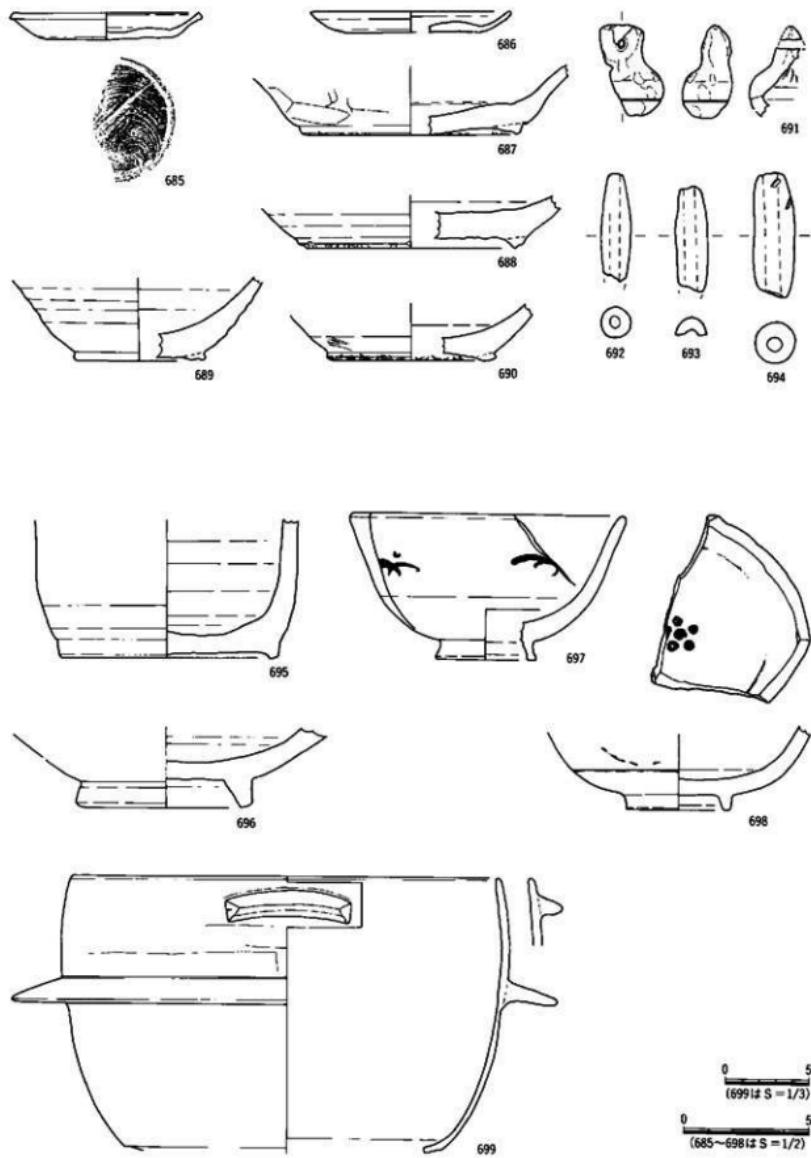
549・603・604・705・706は、石鎌である。そのうち603・604・705は、有茎石鎌である。これらは、縄文時代晩期のものである可能性がある。549は、円基鎌である。706も基部を折損しているがおそらく凹基鎌であろうと思われる。707は、磨製石剣である。直接打撃により加工した後、研磨している。708・709は打製石斧、710は砥石、711は石錐である。711は、刃部を折損している。磨製石剣、砥石、石錐は弥生時代のものである可能性が高い。打製石斧は、時期不明である。出土した剥片類の石材は、その70%弱が下呂石製である。下呂石製の製品は、わずかに603・604のみである。

試掘確認調査出土分のうち、726～728は、打製石斧である。728は、薄いがやや大きめである。729は、ほぼ完形の円基鎌で、先端部と脚部に微細な折損がある。

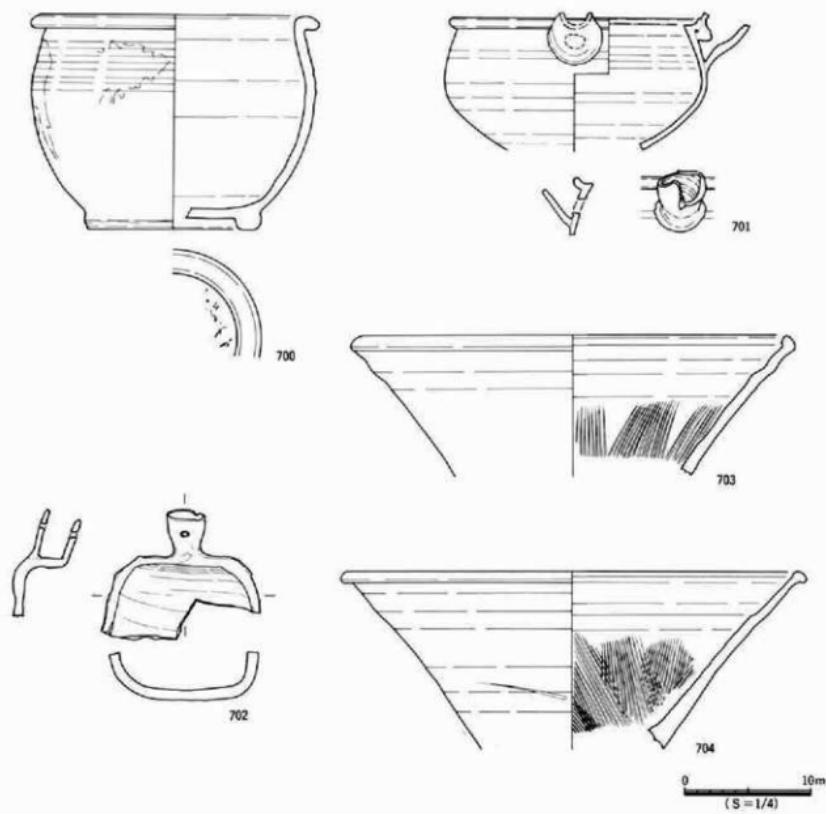
その他の遺物（607・691～694）

ここでは、上記のどの分類にも当てはまらない出土遺物を一括した。全部で11点出土したものの中訳は、炭化物2点、鉄製品3点、土製品5点である。そのうちの土製品5点を図化し掲載した。

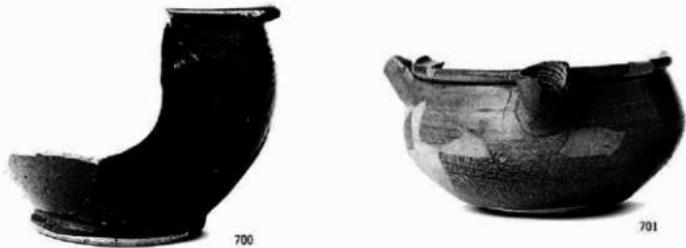
607・692～694は、土錐である。691は、土鉢である。ともに時期その他の詳細は不明である。

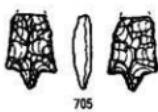


第134図 造構外出土山茶碗・土製品・中近世陶器(1)

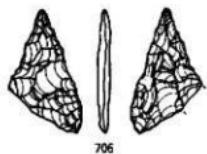


第135図 遺構外出土中近世陶器(2)

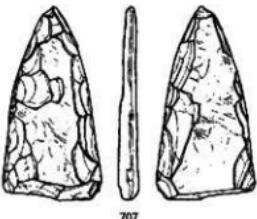




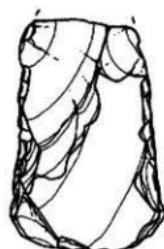
705



706



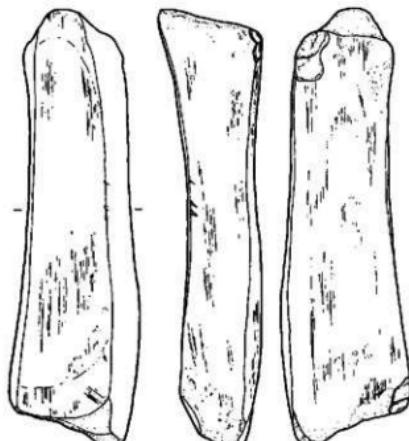
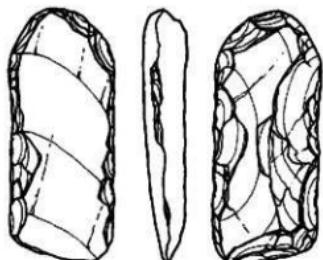
707



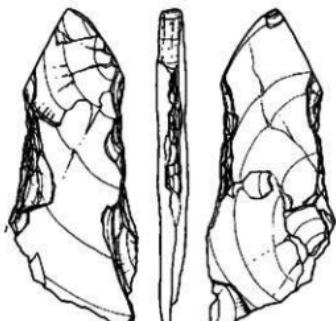
708



709



710



711

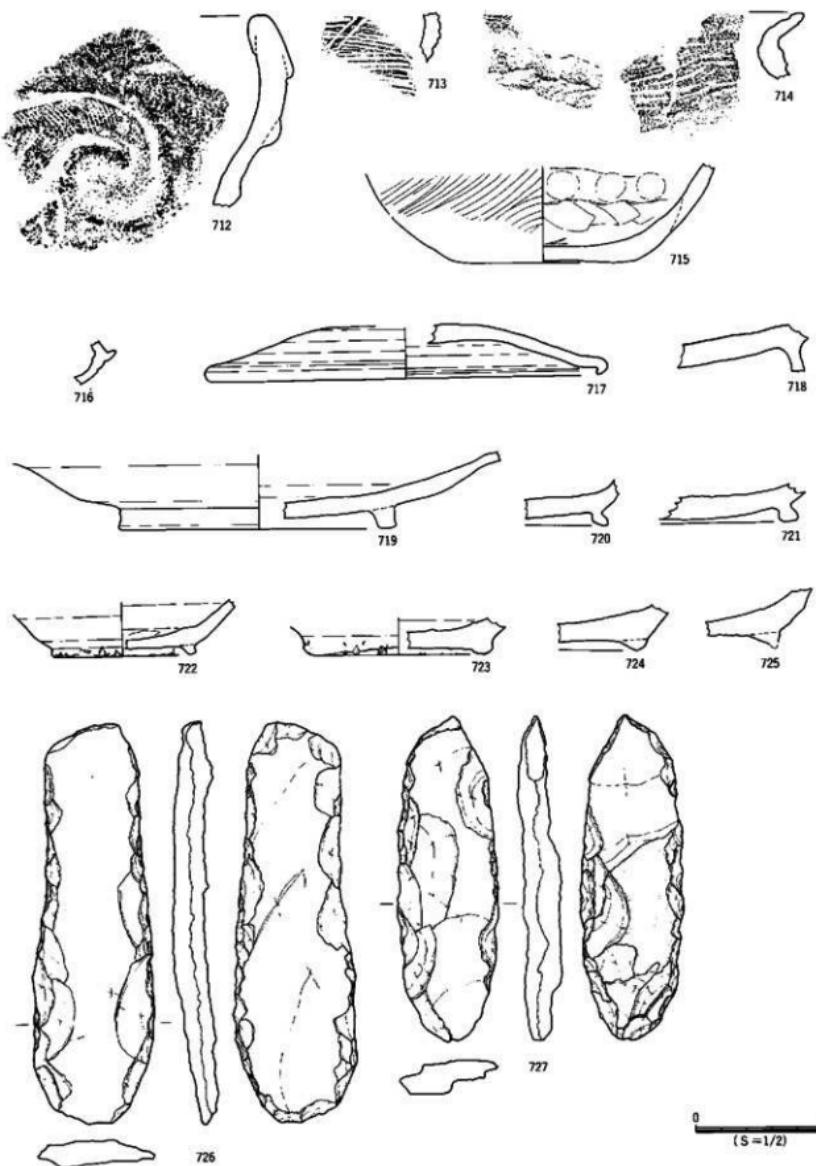


0 5 cm
(710, 711は S = 1/3)

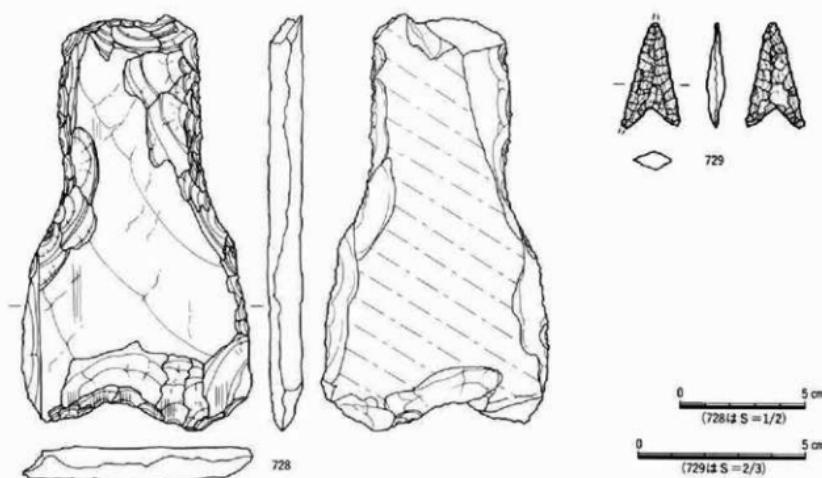
0 5 cm
(708, 709は S = 1/2)

0 5 cm
(705~707は S = 2/3)

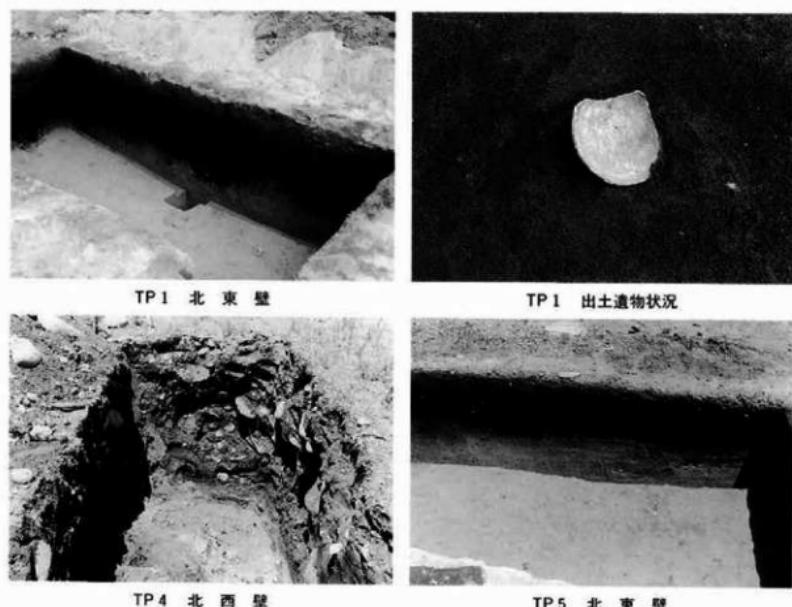
第136図 遺構外出土石器



第137図 III区範囲確認調査出土遺物(1)



第138図 III区範囲確認調査出土遺物(2)



赤池 4 号古墳



第5章 赤池4号古墳

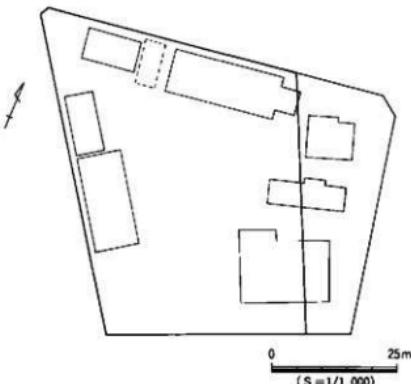
赤池4号古墳は前述のように、平成11年度の野籠遺跡II区の本発掘調査中に発見された。その経緯については、第1章で簡単に触れた。ここでは重複する記述もあるが、再度その経緯について説明を加えることとする。

赤池4号古墳は、野籠遺跡II区の南東隅の位置で発見された。確認できた施設は、石室と周溝である（それらについては、以下の節で詳細に記述するのでここでは避ける）。最初に確認できたのは周溝である。本古墳が所在する位置には、出張所の中心的建物となる庁舎があった。平屋建てながら15m×17mの広さを持つ、鉄筋構造のしっかりした建物であった。それだけの建物であるため当然その基礎構造もしっかりしており、地下1.5mにも及ぶコンクリートの塊が埋設されていた。解体作業の際には立ち会い、その埋設状況を確認した。その時の印象としてはこの庁舎一帯の範囲に存在する道構はすでに破壊されており、検出するのは困難であろうと思われた。本発掘調査に着手する段階になり、この部分の盛土及び包含層の一部を基盤となる褐色土層の直上まで慎重に掘り下げた。さらに、基礎で破壊されている搅乱部分を確認し重機を用いて掘り抜いた。基礎は、基盤の日状に配置されており、西側部分の8カ所が確認できた（第3図参照）。北側の盛土除去作業を行う傍らで、人力によりこの部分を清掃した。小片ではあったが、遺物も出土した。そして、その搅乱部分を縫うようにして1条の半円形を呈した溝があるのを確認した。それが、本古墳の周溝であった。当初その平面形から占墳の周溝の可能性を想定し、トレンチ掘削を行ってみた。壁面で確認した断面は、意外と浅く傾斜もなだらかであった。それゆえに、周溝と判断するのは早計と考え、保留することにした。その後3か月ほどを経て溝の調査に着手した。遺物は出土したが、比較的上方でしかも小片が主であった。この作業と平行して調査区南壁面を精査した。その際に、この位置に古墳が存在する可能性があると判断できる事項を確認した。それは以下に示す2点である。

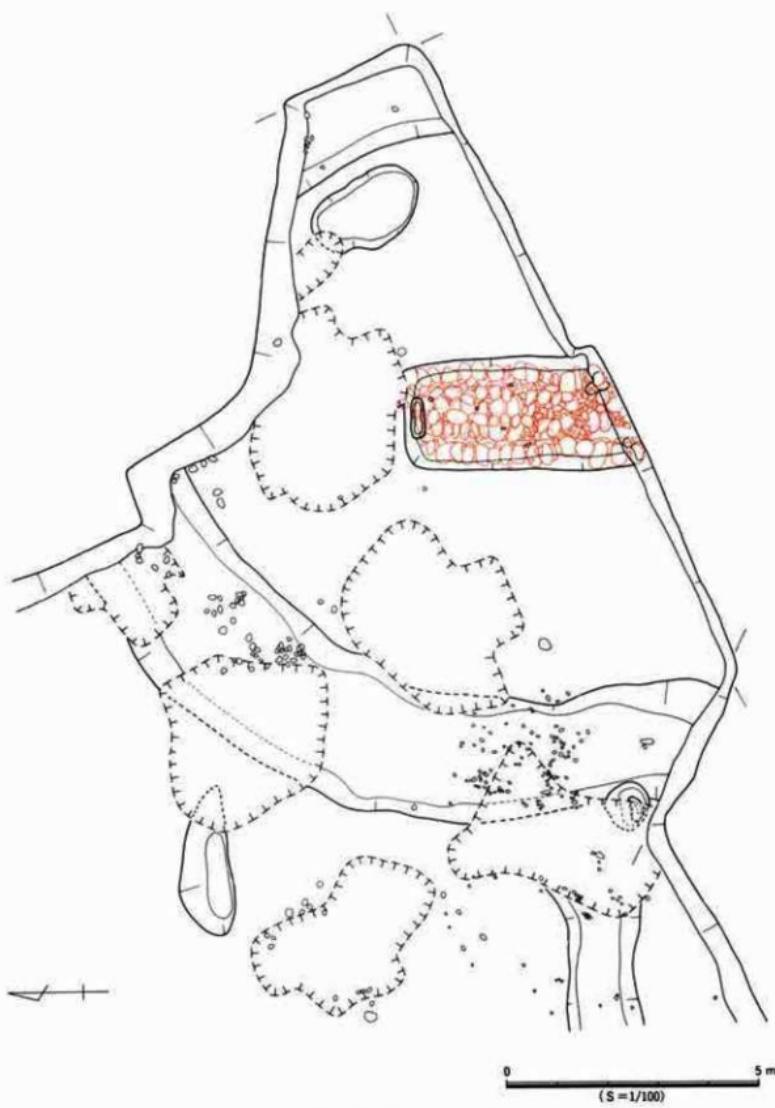
- (1) 調査区南壁面の東隅に数個の円礫があり、それらは、「L」字状に組まれているように見える。さらに、そのうちの北側の扁平礫は立てられているように、また西側の礫は面を揃えて並んでいるように見える。これらを石室の奥壁と側壁の一部と考えることができる。

- (2) 調査区南壁面で旧表土と思われる黒褐色土より上層からの掘り込みが確認できた。これを石室構築の際に形成される墓坑の掘方と考えることができる。

確証をつかむべく、「L」字状に組まれた石列の内部を掘削したところ、須恵器の平瓶（821）が1点ほぼ完形の状態で、敷き詰められた石組みの上に横たわるようにして出土した。このことを機に、この検出した石組みは石室の一部であり、半円形を呈した溝はそれに伴う周溝であるとの確信を得た。これが本調査に至る経緯である。

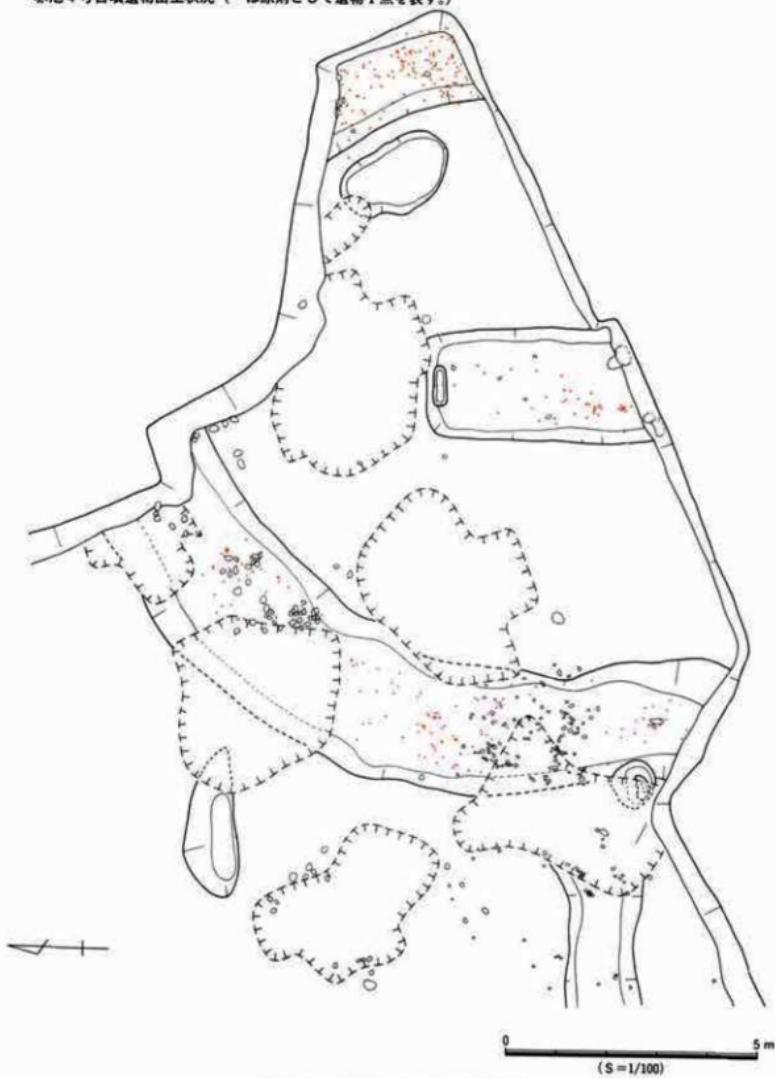


第139図 出張所建物配置図



第140図 赤池4号古墳測量図

赤池4号古墳遺物出土状況 (・は原則として遺物1点を表す。)



第141図 赤池4号古墳遺物出土状況

第1節 外部施設

ここでは、本古墳の墳丘と周溝について記述する。

墳丘

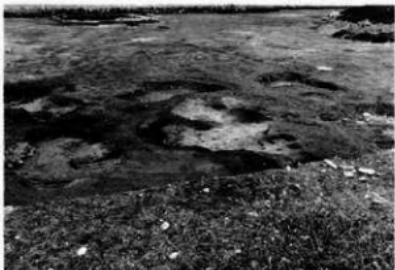
推定できる墳丘の規模・形状は、直径約12mの円形を呈するものであろうと思われる。前述したように、本古墳の上部は後世の削平によって大きく破壊されている。内部構造（第2節）については後に詳述するが、その削平は内部にまで及ぶ大規模なものであった。よって、墳丘についての詳細は不明と言わざるを得ない状況である。先に記した規模・形状は周溝（後述）の内径及びその平面形から判断した。

墳丘部分の上方は、削平された上に後世の盛土が敷かれている。そのため、一見しただけではどこまでが墳丘の盛土であるのかを判別することは困難であった。本古墳は、今回の調査区からさらに南側へ広がっているため、調査できた範囲は、古墳本体の北側半分でしかない。調査区南壁面で確認できた堆積状況は、表土、盛土、暗褐色砂質土、黒褐色土、暗褐色砂質土、黄褐色砂質土の順であることが看取された。石室墓坑の掘り込みが、黒褐色土上面からであることが確認できたため、その黒褐色土を旧表土と判断した。よって墳丘の盛土は、その上層にあたる暗褐色砂質土ではなくろうかと推定した。しかし、拡張した調査区の南壁東隅（今回検出した石室の南端付近）では、この暗褐色土が確認できず、黒褐色土上層にわずかに残る暗褐色土中で自然堆積と思われる形跡を確認したため、明確に墳丘と断定できる部分はすでに残存していないと判断した。

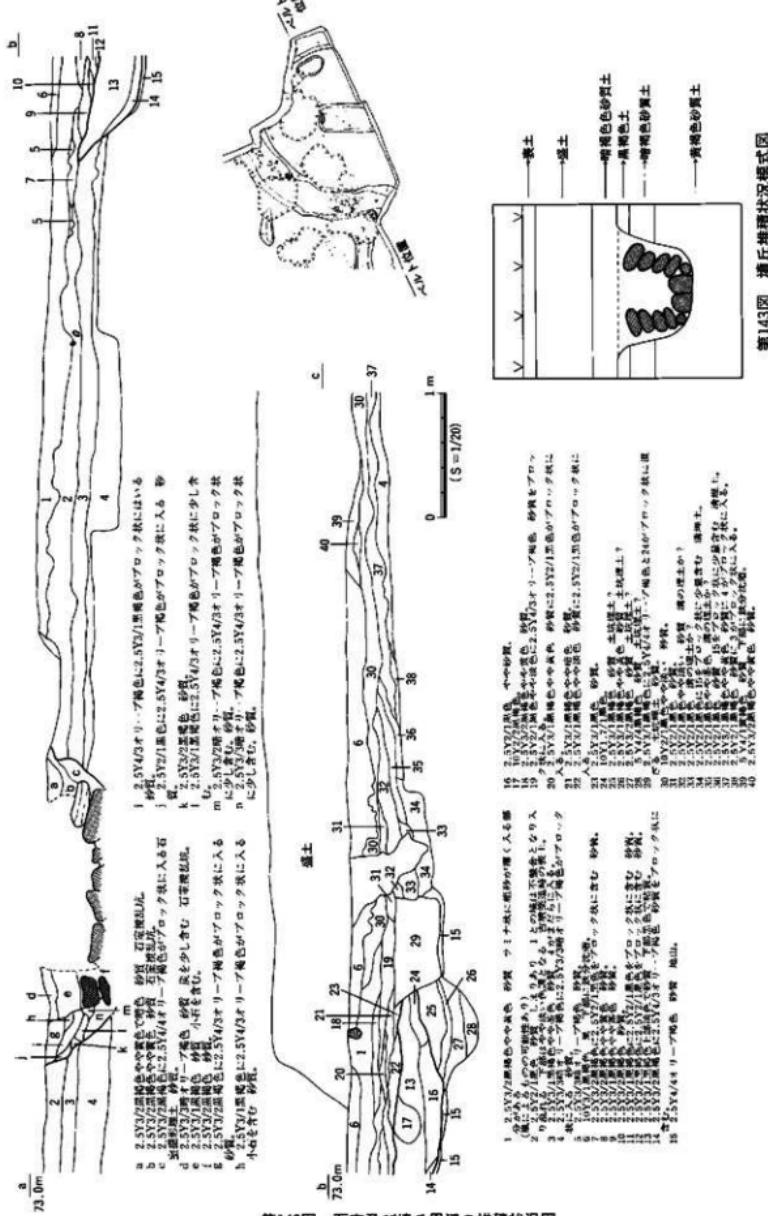
古墳本体に関わる堆積状況は、上部が削平されていることや調査範囲の制約があり、その全容を解明するのは困難であった。しかし、奥壁付近における東西方向の状況については、周溝よりさらに西方にかけての比較的幅広い範囲で確認することができた。その結果、本古墳の墓坑部分は、やや微高地帯になっている旧地形を利用して構築されたと思われる（第139図参照）。南北方向については、南半分が調査できなかったことや、奥壁から北側部分は大規模な擾乱に見舞われていたため、不明である。なお、古墳周辺や周溝の埋土からもまとまりのある砾群等が検出されていないことなどから、墳丘の周辺部には葺石や外護列石は存在しなかった可能性が高いと思われる。



調査区南壁の様子



擾乱の間を縫うようにして検出された周溝



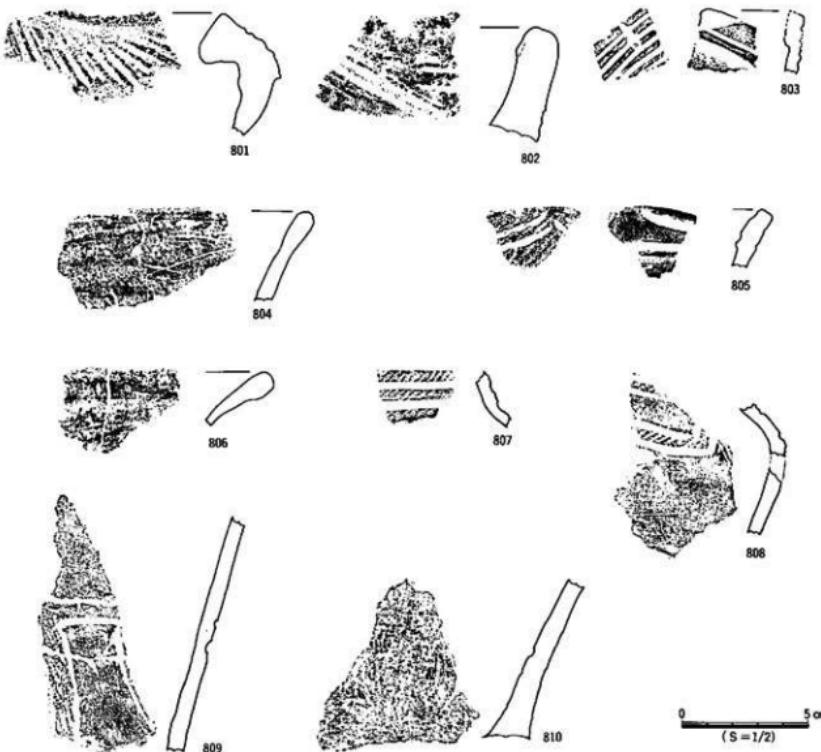
第142図 石室及び填丘周辺の堆積状況図

第143図 填丘堆積状況模式図

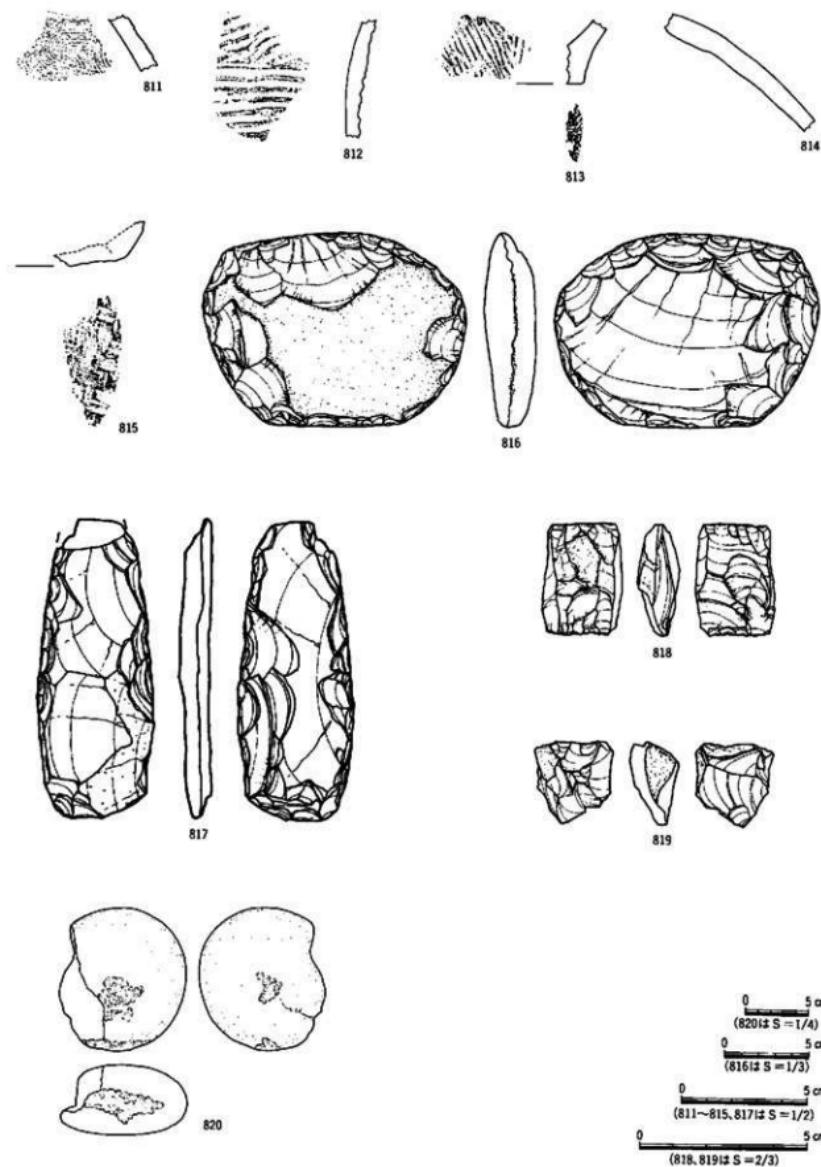
周溝

周溝(SD01)は、北から西にかけての約四分の一の範囲と、石室東側の一部を検出した。前述したように、出張所の基礎による搅乱の間を避うようにして弧状を描いていた。検出できた溝は、長さは北西部で約12m、石室東部分で約3mで、幅は下場で約2mである。深さは検出状況によって異なるが、石室の西側及び東側の堤方が確認できる部分で約0.6mである。埋土は大きく黒褐色土・黒色土の二層に分けられる(第142図)。規模は検出できた部分から復原すると、内径約12m、外径約14mである。平面形はほぼ円形を呈しているが、ややいびつである。検出できた周溝の中心がどの部分にあるのかは今後検討を要するところである。報告者の考えについては第6章で記述するので、ここでは割愛する。

遺物は、356点出土している。内訳は、縄文土器51点、弥生土器104点、土師器130点、須恵器1点、山茶碗1点、中世以降の土器類2点、石器67点である。そのうちの19点を参考までに図示した。出土位置は埋土の上方かほとんどで、本周溝の性格その他を決定づけるものではないと思われる。



第144図 周溝出土遺物(1)



第145図 周溝出土遺物(2)

第2節 内部構造

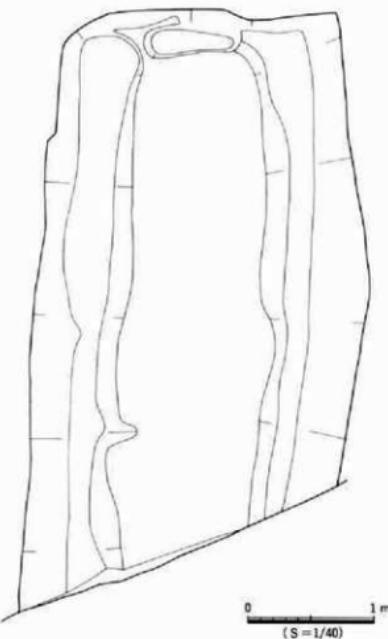
ここでは、墓坑と石室について記述する。

墓坑

本古墳の石室は、田地表面から掘り抜いた墓坑内に構築されている。墓坑は、黒褐色土の地表面から暗褐色砂質土層を掘り抜いて、基盤となる黄褐色砂質土層（いわゆる「地山」）まで達しており、安定した底面を形成している。

墓坑の正確な規模は、不明と言わざるを得ないが、主軸上では長さが奥壁背部から約4.2mまでは確認できている。また、幅は最大で約2.3m、深さは約0.6mである。墓坑の平面形は、隅が丸い長方形を呈している。奥壁部分は、不明であるが、側壁部分は、やや傾斜しながら掘り下げている。最終的に、石室の石材をすべて取り外した状態になったときには、墓坑全体は浴槽のような感じであったと言える。

墓坑の底面には、側面に沿うように浅い溝が掘られていた。それは、東西の両側に作られていた。石室のところで詳述するが、基底となる石を並べる際に利用するために形成されたと思われる。また、奥壁部分は、側壁と異なり立てかけられている状態でなければならぬため、独自の掘り込みを持っていた。それは、奥壁に使用された石2個分が立てて入るような大きさであった。墓坑全体の底面はほぼ平坦であり、開口部と思われる南側に向かって傾斜しているという感じもない。また、他の古墳等で確認され



第146図 墓坑実測図



墓坑東塙方（北より）



墓坑（北より）

るような排水溝等の施設は確認できなかった。

石室

前述のように本古墳の石室については、調査範囲の制約上その全体にわたる調査ができなかつたため、特に南側については不明である。本発掘調査の段階では、主軸上で奥壁から約4.2mのところまで調査した。その後、平成12年度の立ち会い調査の際に、さらに1mほど南側の状況を確認したが、それ以南は大規模な擾乱によって破壊されて消滅していた(詳細は後述)。従って、ここでは検出した部分から得られた情報を中心に記述していくことにする。

石室の主軸は、N-0°-Eのほぼ真北の方向である。奥壁が北側で確認できたことから、南に開口した両袖式横穴式石室であることが判明している。天井及びほぼ上半が消失しているため、石室の正確な規模は不明と言わざるを得ない。石室本体の下半については、調査によって構築時の状態に近づくことができたと思われるため、様々な情報が得られた。

奥壁は、墓坑北端の中央部をさらに掘り込み、扁平な円礫を2個立てかけて形成している。石材の大きさは、それぞれ長さが52cmと48cm、幅が36cmと28cmであった。奥壁背部には、庁舎の基礎による擾乱が数cm後ろに迫っているため、構造は不明であるが、奥壁自体は比較的小さい。奥壁と両側壁による隅角は、東側の基底部で斜めに石が置かれ丸みを帯びさせているのが確認できた。西側は破壊されているため不明だが、石が抜けた痕跡が認められ、それによると東側と同様であったことがわかる。



石室検出状況①(北より)



石室検出状況②(北西より)

側壁は、東西ともに基底部から4段目までが確認できる(一部分だけ5段目が確認できるところもある)。石材の積み方は、基底石を長手積みで奥壁から連なるように並べ、その上からは小口積みにしている。基底石は、袖部分ではやや大きめの石材を用い、他と異なる置き方をしている。側壁は、墓坑の堀方に沿うように、上へ積み上げられていくほど外側へ開いている。使用している石材が川原で見かける円礫であるため、積み上げる際には不安定な状態になる。そのため、石材間には小さめの円礫をはさみ、石材が安定するようにしている。墓坑の堀方よりも上方は消滅しているので断言できない部分もあるが、近隣に所在する近似した構造を持つ古墳の石室の例からすると、墓坑より上方へ積み上げていく場合には、小口積みにして持ち送りを行っていると考えられる。なお、壁面の傾斜角度は奥壁と袖部分の中間地点で東側壁が60°、西側壁が65°である。

敷石は、奥壁から袖部分に至る範囲で一面に施されている。基本的には、平面形が楕円状の扁平な円礫を用い、長軸方向を石室の主軸と直交させている。つまり、側壁の石材が小口積みにしているの

と同様な方向で敷かれている。比較的石材間の隙間は大きく、その部分を小さい石材でうめている箇所もあるが、すべてにわたっているわけではない。敷石は、東西二列にはほぼ規則的に並んでいる。袖を過ぎてしばらくしたところから、西側の列が確認できなくなる。慎重に精査を進めたが、石材が置かれていた痕跡は認められなかった。最初から石材がなかったと考えるのが妥当かもしれない。



敷石検出状況（西より）

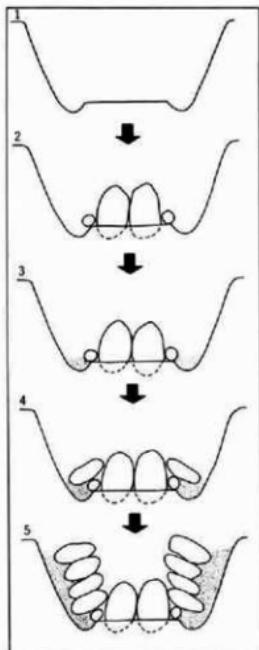


東側壁検出状況（西より）

本古墳の石室では、敷石の上にさらに同様の石材を並べた石列が確認された。第146図に示すようである。この石列は、側壁や敷石に用いられているのと同じ扁平な円礫を敷石の上に置き、奥壁から袖部分付近までの範囲で東西二列に連なっている。東側の北から三番目の石材がやや内側に位置していることや、同じく東側の南から三番目の位置に石材が欠損していることを除けば、ほぼ原位置をとどめていると思われる。

この石列が何を意味しているのかは検討の余地がある。一つの可能性は、棺台であるという見解である。通常、棺台は数個の石材が四隅を中心に点在し、このように列を成していることはあまり見かけられない。この石列の場合、置かれた石材の上面はだいたい揃っており、平坦面を成している。故に、この上面に棺を置くことも不可能ではなかったと思われる。もう一つの可能性は、この石列を石室内のある範囲の区画と見なし、そこに遺体を直葬したとする見解である。奥壁付近では、この石列の上から遺物が出土している。詳細は後述するがその出土状況を加味すると、直葬の可能性もある。いずれにしても遺体を安置する範囲を示す石列である可能性は高い。

最後に本調査の結果、この石室を構築する過程について判明したことを行程順に簡単に説明する。まず田表土面に墓坑を掘る(1)。基底石と奥壁を置く(2)。基底石の裏込めの土を入れる(3)。基底石の上に石材を積み上げる(4)。さらに上方へ持ち送りで積み上げる(5)。イメージを第147図に示した。

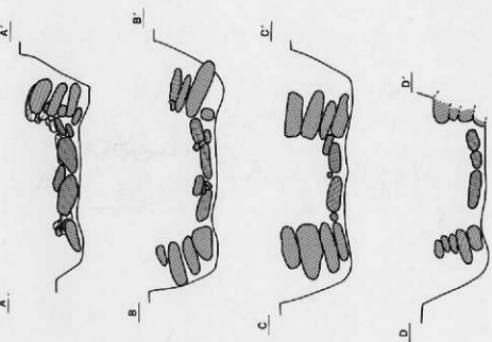
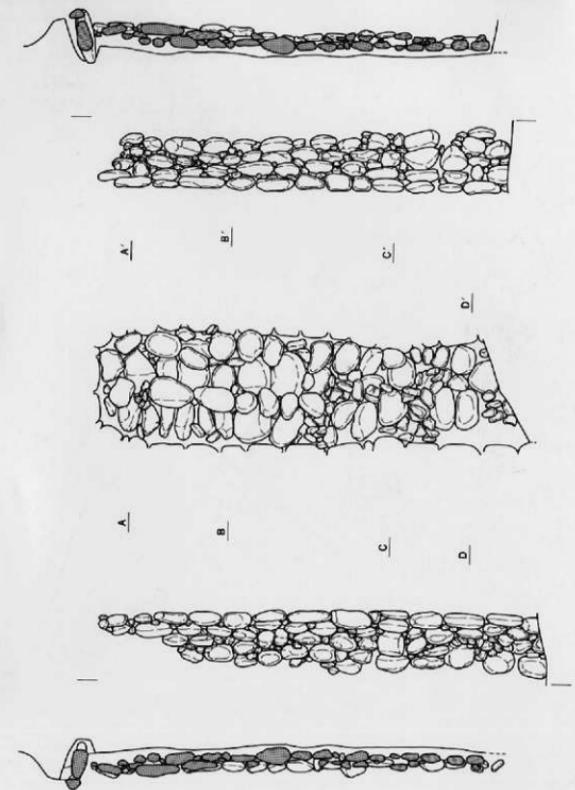


第147図 石室構築過程イメージ図

第2表 赤池4号古墳石室の石材

石材	個数	割合	備考
高純度灰岩	313	93%	透光淡紋岩類
花こう咲岩	13	3%	透光淡紋岩類
麦山岩	3	1%	
花こう咲岩	2	1%未満	
砂岩	5	2%	透光帶層岩
泥岩	1	1%未満	透光帶層岩
チート	1	1%未満	透光帶層岩
合計	338		

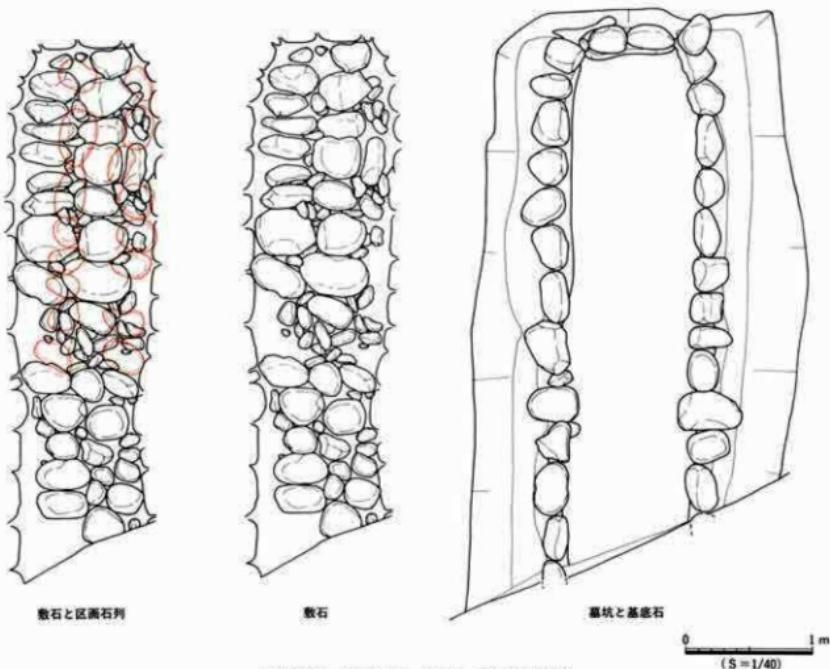
*石材割合は総個数338(セント率表示)の内個別割合による。



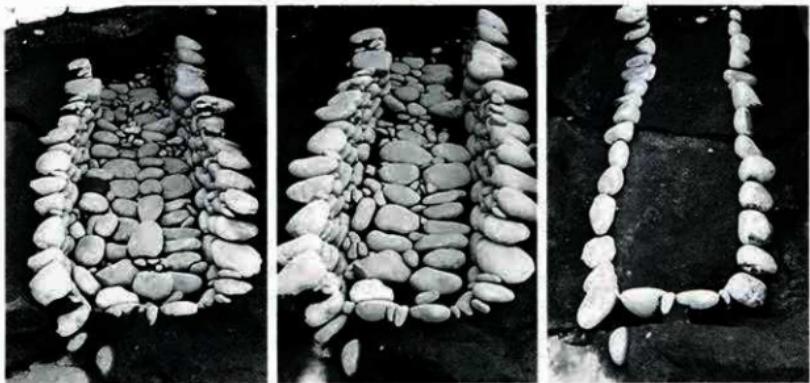
(基準となる標高はすべて73.0m)

0 1m
(S=1/40)

第148図 石室実測図



第149図 区画石列・敷石・基底石実測図

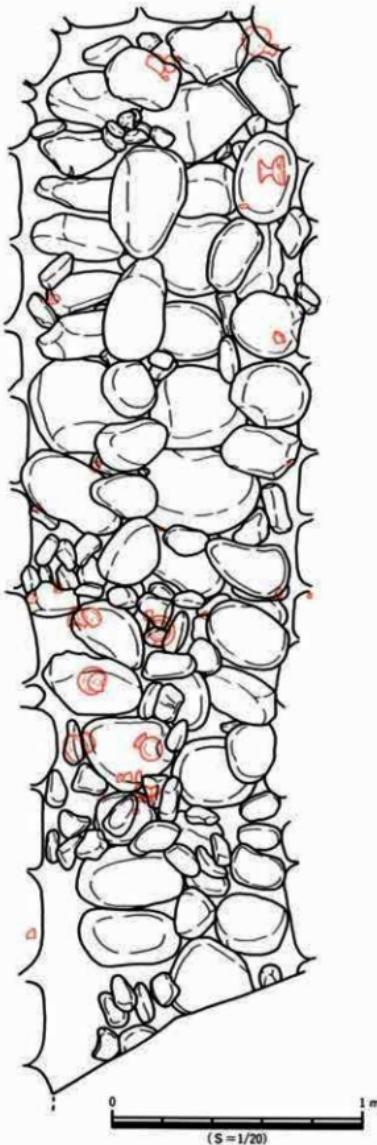


第3節 遺物の出土状況

石室内部からの出土遺物は、構築時あるいは造営期から石室に伴うものと、後世の削平によって上部が破壊された際に混入したと思われるものに二分される。前者は、ほぼ完形の9点で、後者は、小片が主体となる多数である。後者について詳細に記述することについては割愛し、ここでは前者についてのみ、その出土状況及び遺物自体についての説明を加えることとする。なお、参考のため後者の遺物は、その出土位置の模式図とともに、出土したうちの一部を図化し掲載することにした（第154図参照）。

石室内部の敷石上及び目地からは、須恵器8点と土師器1点の合わせて9点のほぼ完形となる遺物が出土している。出土位置は、奥壁付近と袖付近に大別される。奥壁付近からは、須恵器の平瓶が1点と高环が1点、さらに土師器の小鉢が1点出土している。また、袖部からは須恵器の高环6点がまとめて出土している（第150図参照）。

奥壁付近で出土した須恵器の平瓶821は、東側壁と奥壁東端のコーナー部分で出土した。状況は、口縁部を東側壁のほうへ向けて横たわっていた。遺体を安置する範囲を示す石列のうちの奥壁手前の石の上に置かれていたと思われる。同様に、須恵器の高环822もその石列の上に倒れた状態で出土した。この822も東側壁に口縁部を向けていた。ともに倒れた遺物と石との間に土砂が混入していることから、この石列上に立てて置かれていたものが上方から土砂が流入した際に倒れ、出土したような状態になったと考えられる。821は、出土したときに口縁端部の一部が欠損していた。掘削を進める段階で、その破片は1m以上離れた反対側の西側壁の下部で発見され



第150図 石室内遺物出土状況

た。倒れた際に破損し、その破片が移動した可能性が考えられる。土砂流入等による不可抗力で転倒したとの推測は、このことからも裏付けられる。

一方、土師器の小鉢823は、これらの須恵器とはやや異なる状況で出土している。小鉢が出土した位置は、石列下の敷石の目地であった。出土した段階で小鉢は割っていたが、遺体を安置した範囲を示すと思われる石列をはずすまでは確認できなかった。そのことから、この小鉢は上部からその隙間に入り込んだとは考えがたく、構築時からそこに位置していた可能性があると思われる。この奥壁付近で出土した3個体に共通性を見いだせるのは、出土位置が近いという点だけである。しかし、須恵器2点と土師器1点の微妙な出土位置の違いが何を意味するのかは、今後の課題となりそうである。



石室内須恵器（高杯・平瓶）出土状況（南東より）



石室内土師器（小鉢）出土状況（西より）

821の平瓶は、完形である。特徴的なのは、底部から胴部に向かっての立ち上がりが不明瞭で、器形が全体的に丸みを帯びていることである。黄緑色の自然釉が口縁部から胴部上半にかけてみられる。胎土及び釉薬の色等から美濃須衛産と思われる。822の高环は、口縁端部が丸くおさめられている。受け部の内面底部には、指頭圧痕が見られる。調整はあまり丁寧ではない。脚部は、下方約二分の一程から「ハ」の字状に開く。中央部に沈線があるが、半周しか巡っておらず飾りと思われる。脚部底面の端部は上方へ立ち上がる。そのため、接地はやや下方となる。右回転のクロナデ調整である。823の土師器小鉢は、手づくねである。外面全体に指頭圧痕が見られ、内面の調整は、下方が板ナデ調整で上方は指頭圧痕による成形である。底部外面には、木葉痕が施されている。底部外面の一部はやや煤けている。

袖付近で出土した須恵器の高环は、824～829である。この6個体は、図・写真（第153図・図版41）からもわかるように、形や大きさが酷似している。また、それだけでなく、胎土や成形方法等においても共通点が多いと言える。また、出土状況にも特徴があり、限定された狭い範囲からまとめて出土している。出土が確認されたのは、西側壁の袖部近くの敷石上である。辺りには破片が散乱していたが、どの個体も容易に復原が可能であるくらいに比較的良好な状態で出土した。まとめて出土した6個体の高环は、石室の主軸に沿って南北方向に二列に並べられているように見えた。奥壁付近の3個体の遺物と同様に、上方からの土砂の流入によって、若干その位置は移動している可能性はある。しかし、平瓶の口縁端部の例とは異なり、破片ではない遺物本体が広範囲で移動し、この部分に集まってきたとは考えにくい。従って、この西側壁袖付近にかたまって出土した6個の高环は、意図的にこの位置に配されたと考えられる。これらの高环は、その位置にややすれはあるが、西側に3個体、

東側に3個体が列状に置かれていた。敷石の目地付近から斜めの状態で出土したものもあるが、おそらく敷石上に置かれていたと思われる。6個体のうち、北西・北東・中央西の3個体は逆位で、残りの3個体は正位で出土した。その様子は、写真のようであったと推定できる。また、その出土位置には、敷石以外にやや規模の小さい碟が散在している。それらは敷石上にあり、しかも敷石との間に土砂の混入が認められることから、上部削平の際に流入したものではなく、石室構築時からその位置に置かれていた可能性がある。仮にそうであるとして、これらの碟の配置を平面的に見てみると、この6個体の須恵器を囲むように、「コ」の字状に置かれているように見える(第153図)。6個体は酷似していることや、配置されたような出土状況や正位・逆位の関係、遺物を包囲するように置かれた碟群などを総合的に考えると、西側壁袖付近には何らかの意図に基づいて製作された高环を、意図的に配置したと考えることができる。石室内祭祀の例として注目すべきであるとの指摘もあるが、これ以上の検討はここでは割愛し、第6章で少し触れることにする。



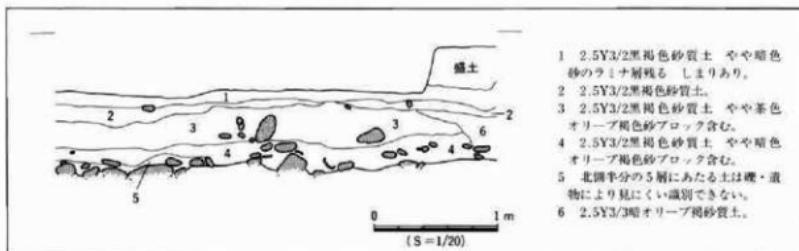
石室内須恵器（高杯）出土状況



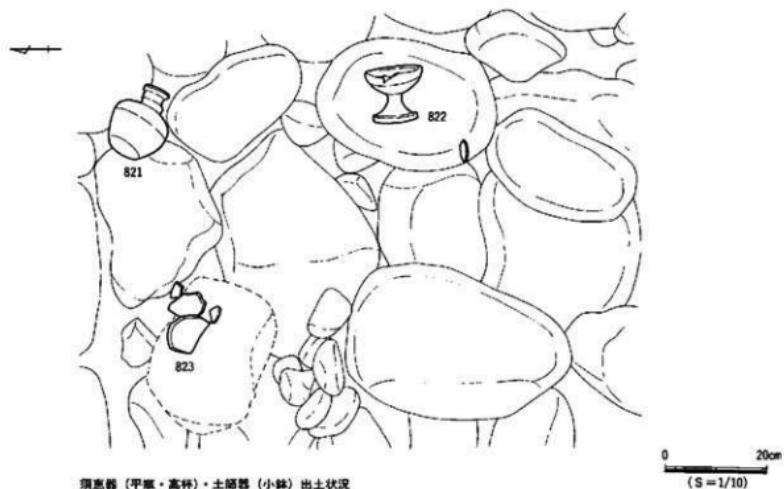
高杯出土状況（推定復原）

824~829の須恵器高环は、奥壁付近から出土した822の高环よりやや器高が低く、寸詰まりな感じを受ける。同様に石室内から出土したものではあるが、明らかに様相が違う。これら6個の高环は、829だけが脚部先端部の形状が異なるが、それを除けばほぼ同形・同質と言える。胎土・焼成という点でも酷似しており、一度に生産された可能性が高い。そうであると仮定するならば、これらの高环は、製作段階からこの古墳の被葬者への埋葬品として生産されたと考えることも可能である。

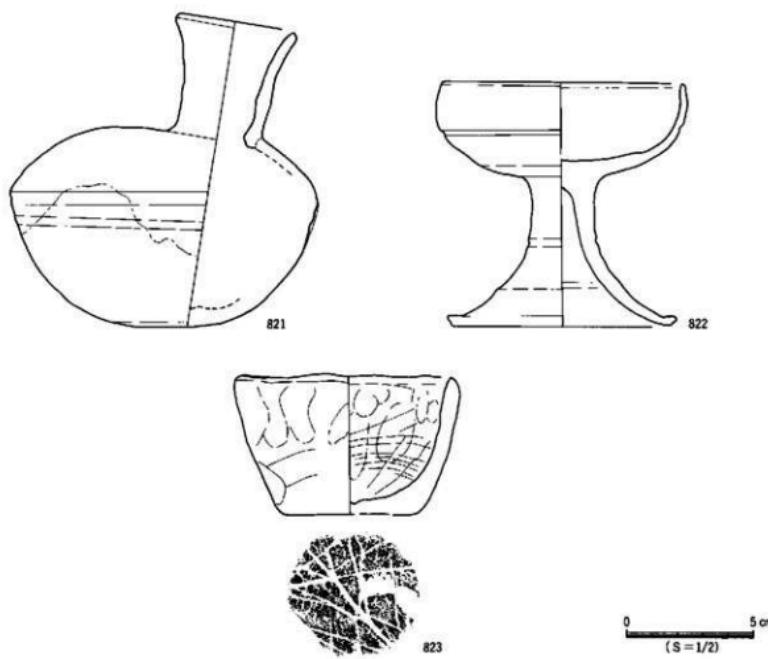
これらの高环は、7世紀後半の時期に帰属すると思われる。野並遺跡で出土している須恵器やはかの土器類とは、時期的にややずれが生じている感じがある。その点については、今後の課題としたい。



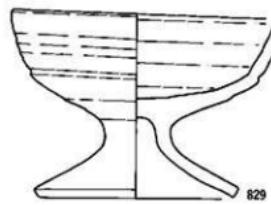
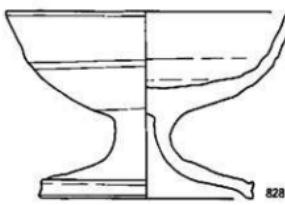
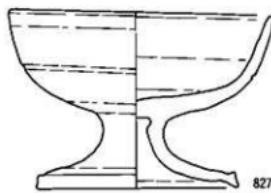
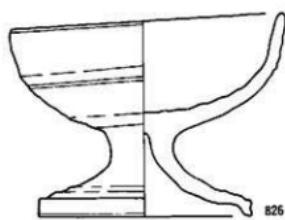
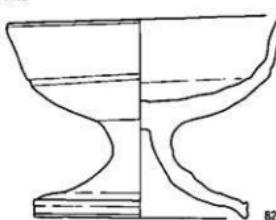
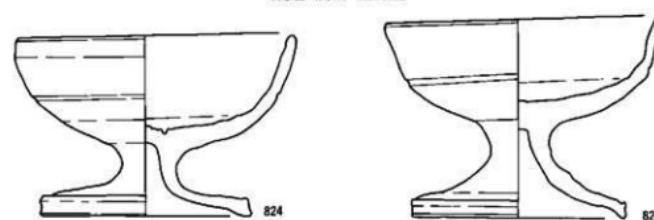
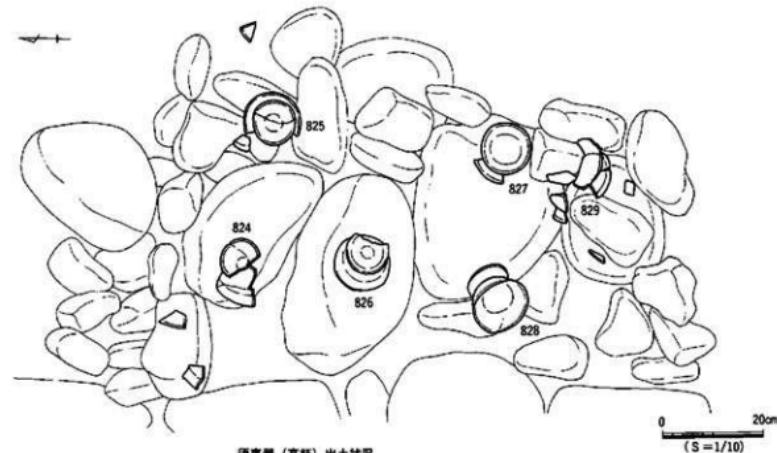
第151図 石室内埋土堆積状況図



須恵器（平底・高杯）・土器（小鉢）出土状況

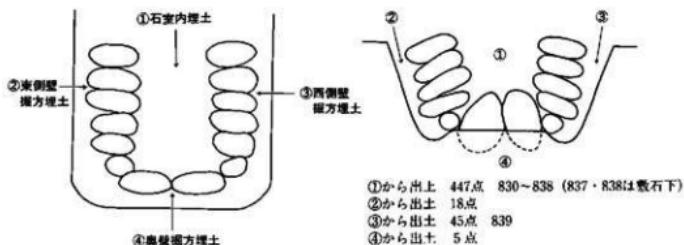
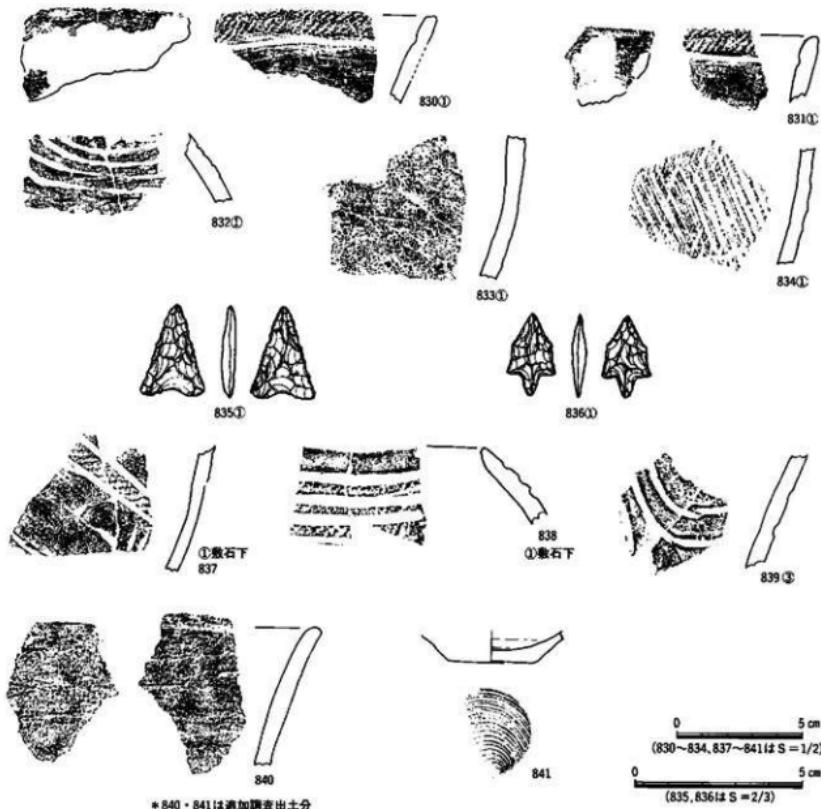


第152図 石室内出土遺物(1)



0 5cm
(S = 1/2)

第153図 石室内出土遺物(2)



第154図 石室内出土遺物(3)

追記

国道工事の本格的な開始に伴い、平成11年度の赤池4号古墳本発掘調査では、確認できなかった南側部分についての立ち会い調査を、平成12年10月に3日間実施した。わずかな期間での調査であったため十分な成果を上げることは困難であったが、判明したことを以下簡単に記述する。

工事箇所を確認の上、重機によって盛土等を除去し以下を人力で掘削した。調査員2名での作業であったため難航した。側壁部分は、最初に確認した段階では破壊によって上部から土砂とともに流入したと思われる石が多く混入しており、明確ではなかった。散乱していた礫の一つ一つが、原位置をとどめている側壁の石材であるかどうかを見極めながら、慎重に除去していった。その結果、11年度調査分の南側と思われる側壁の延長部分を確認した。それは、東西ともに基底石を含め3段目までしか残存していないかった。確認できたのは1mほどの奥行きであった。墓坑は確認できたが、その部分の敷石は検出できなかった。拡張した南側壁面下方で扁平な石材を1点確認した(写真参照)。それが敷石かどうかは不明である。検出できた側壁の延長部分は玄室部のそれとはやや様相を異にしており、その構造は主となる石材間に詰め石もなく簡素であった。南側壁面で確認できるが、今回拡張した部分より以南は、上層からの大規模な搅乱によって破壊されていた。結局、立ち会い調査でも開口部及び羨道部を含む主体部の全容は解明できなかった。ただ、図上復原はしていないが、今回の調査で検出した3個の東側壁基底石は、南側に向かうにつれて若干東側へ開いているように思われた。すでに開口している可能性もある。詳細は不明である。



墓坑と石組み（北より）



石組み（北西より）



東側石組み（西より）



西側石組み（東より）

第6章 考 察

第1節 野籠遺跡についての考察

野籠遺跡は、平成7年度の試掘確認調査から本報告書刊行に至るまで、足掛け7年に及ぶ長期間の調査を行った。発掘調査の総面積は10,355m²である。調査原因が一般国道の改良工事であるという性格上、調査できた範囲は帯状に細長い。ほぼ南北方向に伸びる調査区は、「野籠遺跡I」や第1・2章に記述したように二つの段丘にまたがっている。従って同一遺跡内であっても、位置によっては、その様相を異なる。ここでは、本書で報告した野籠遺跡II・III区の様相について、その調査結果に基づき大きく概観するとともに、その上でI区の調査成果も踏まえながら、野籠遺跡全体の概要についてまとめるこにしたい。

II区

平成11年度に調査したII区は、先行して調査が行われたI区の南側にあたり、I区で確認できた集落跡が木曾川河川敷に向かってどのように展開していくのかが、調査の主たる目的であった。本調査の結果、ところどころで後世の大規模な搅乱に阻まれながらも、数々の成果を上げることができた。大きくまとめてみると、以下の5点になる。

- (1) 住居跡5軒をはじめとして、溝・土坑・竪穴状遺構などの数多くの遺構が検出された。
- (2) 古墳時代後期の住居跡4軒の所在地から、その時期の集落跡の範囲が推定できた。
- (3) 繩文土器から現代に至るまでの様々な遺物が出土した。
- (4) I区では確認できなかった時期の遺物の存在が明らかになった。
- (5) 北側に隣接するI区と基本的には同様の性格を有する地区であることが確認できた。

このうち、特筆すべきは、(2)の集落跡の範囲の問題と、(4)のI区未確認の遺物についてである。これら2点については、詳述する必要があると思うので、順に説明を加えていくこととする。

(2)について

今回の調査で検出できた遺構のうち、比較的情報量の多いものは、住居跡5軒と住居跡に限りなく近いと思われる竪穴状遺構1基である。他にも多くの遺構が検出されたが、その時期や性格が明瞭なものは少ない。少ないなりに得た手掛かりを元にして、それぞれの帰属時期を考えてみると、

A 繩文時代後期（4期） P23	D 占墳時代前期（12期） SX01
B 繩文時代晚期（5期） P51	E 占墳時代後期（13期） SB02-05
C 弥生時代中期（8期） SB01, SK02	F 中世（15~16期） SD01

となる。なお便宜上（ ）内に示した時期区分は『野籠遺跡I』の区分（本書第1表参照）を用いた。SB01-05-SX01以外は、不確定要素が多く、ここに示した帰属時期が正確であるかどうかは不安が残るが、過ちを怖れず敢て記した。ここで言えることは、他時期の遺構も確認できてはいるが、やはりそのピークは13期の古墳時代後期にあるということであろう。野籠遺跡では、その出土する遺物からどの時代にも連続と人々が生活していた様子がうかがわれるが、この時期が最もこの地域の繁

栄した時期であったと言える。

この古墳時代後期に繁栄のピークがあったことは、II区のみに限らずI区でも同様である。I区では、調査区のほぼ中央部あたりで23軒のこの時期の住居跡が確認されている。それらの住居跡は、密集するように位置しており、II区で検出した4軒とは位置的にやや隔たりがある。しかし、その隔たり部分にあたる空白地帯には後世の溝が数条構築されている。このことを加味して考えれば、これらI・II区の同時期の遺構は一連のものと理解することができよう。もしそうであると仮定するならば、今回II区で検出した住居跡4軒は、野籠遺跡における古墳時代後期に形成された集落の南端にあたると考えられる。このことは、II区の遺構配置と旧地形からも裏付けられる。II区の旧地形（基盤となる褐色土直上レベル）は、その調査区内の中央部やや南寄りのあたりが最も高い（第8図参照）。北側に隣接するI区の集落がある位置が谷状になっていることや、南側に大河川を控えていることとあわせて考えると、この最も高い部分が自然堤防的な役割を果たしていたのではないかと考えられる。そのことは、I区で検出した溝も南北方向ではなく、木曾川と平行するように東西方向に位置していたことからもうかがえる。また、II区の主たる遺構はその高まりの北側に集中する。南側では、比較的新しい溝以外に規則的に大きな遺構は検出できなかった。後述する赤池4号古墳がこの南側に存在することも踏まえて考えると、野籠遺跡では、この古墳時代後期においては、自然堤防的な高まりを隔てて、北側が集落域で南側が墓域という認識が、不明瞭な中にも設けられていたのではないかとも考えられる。

(4)について

II区から出土した遺物は、全部で11,638点と量的にはさほど多いとは言えない。また、その状況についても小片が多く、その単体のみでは詳細まで解明するのは困難なものも少なくなかったことについては前述した。出土遺物全体の概要や個々については、第3章第3節及び観察表で記したので、ここでは特記すべき事項についてのみ触ることにした。

今回のII区の調査で出土した遺物のなかで、I区と比較して注目すべきものは弥生時代中期後葉と古墳時代前期の土器である。それは、I区では確認できなかった空白期を埋める資料である、という点で貴重と言える。I区では、弥生時代の遺物を6期弥生時代前期から11期弥生時代終末期に至る6つに区分している（第1表参照）。それぞれの区分には、該当する遺物や遺構が確認されているが、9期弥生時代中期後葉だけは遺物・遺構とともに確認できておらず、I区の弥生時代には6～8期と10～11期の二つのピークを想定している。しかし、II区からはわずかではあるが、この9期弥生時代中期後葉の高藏式土器の破片が出土している。8・267・268・270がそうである。残念ながらほとんどが遺構からの出土ではなかったが、これで今まで空白とされていたこの時期の土器の存在は明らかになった。野籠遺跡では、全時代を通して弥生時代中期（7～9期）に1つのピークを見いだすことができる。特に出土した中期の弥生土器は、詳細な研究を進めるまでの貴重な資料を提示している。今回の高藏式土器の発見は、単にI区の空白期を埋めるというだけではなく、この時期の条痕甕のさらなる検討に貢献できるのではないだろうか。

I区から出土している12期古墳時代前期の遺物は、S字甕のみが確認されている。しかしII区では、S字甕と思われる遺物はなく、12期の遺物としては、松河戸式土器がSX01からまとまって出土している。140～152がそうである。SX01は、第3章第2節で詳述したが、住居跡に限りなく近い遺構である

と判断している。140～152は、その南辺付近からまとまって出土した一括資料である。このことが何を意味するのかは不明ではあるが、これらの遺物はこの後大きく繁栄する13期を考える上では有益な手掛かりとなりうると言えよう。

III区

III区は、I-D区の北側隣接することから、調査以前はおそらく弥生時代の集落が広がるだろうと考えられていた。しかし本調査を行ったところ、弥生時代の遺構は確認できず、検出できた時期が確定できる遺構は、I・II区で最も繁栄する古墳時代後半のものであった。ただ、このIII区にはI・II区と異なる様相も若干ある。その点も含めて成果を整理してみると、以下のようになる。

- (1) 住居跡3軒をはじめとした集落跡の一部が確認できた。
- (2) 繩文土器から現代に至る様々な遺物が出土した。
- (3) I・II区では確認できなかった時期の遺物や遺構の存在が明らかになった。

ここに挙げた3点のうち、(3)については説明を加える。

II区からは、縄文時代中期から現代に至るまでの遺物が出土しているが、灰釉陶器だけはその存在を確認できていない。I区からは、わずかではあるが出土しているが、遺構に伴うものではなく、混入ではないと言い切れるだけの確認はない。しかし、III区では9世紀後半から10世紀にかけての灰釉陶器が出土している。530～533・602・675～684がそうである。特に530～533は、遺構(SB03)からの出土である。SB03は、一部分しか検出できなかったため、その全容を解明するのは困難であった。しかし、カマドに使用していたと思われる軟質な礎の存在などから考えても、住居跡であった可能性は極めて高い。529のように伴う遺物も確認できている。SB03は、近くに不明遺構のSX02がある。このSX02からも灰釉陶器が出土している(602)。また、同様に近隣に位置するP02・23の上層部の焼土からも出土している(679・680・684)。残念ながら、このSB03・SX02・P02・P23が位置する一帯は、基盤となる褐色土層に至る大規模な改変によって搅乱されている。そのため遺構が破壊されており、不明な点が多い。しかし、この一帯の灰釉陶器の出土状況から見ても、SB03を中心としたこの時期の人々の生活の営みの一端を伺い知る手掛かりとなろう。

灰釉陶器は、全部で86点出土している。図化・掲載したもの以外は小片である。接合率はあまり高くなく、確認できた個体数が多い。搅乱によって破壊されてしまい小片となってしまったが、個体数としてはまとまって存在していたと考えられる。しかも、出土地はIIIa区北半分が多い。IIIa区の北側では、遺物包含層は確認できない。試掘確認調査の際に入れたトレンチでそのことは判明している。灰釉陶器がこのSB03を中心とした範囲でしか確認できないとなると、かなり限られた範囲に密度の高い分布状況であると言える。IIIa区は、灰釉陶器だけでなく、須恵器の出土も北側部分からが多い。須恵器は、II区のものとはまた様相を異にしており、9世紀後半のものが主である。灰釉陶器との関係からしてもこの時期の遺物の密度は高く、SB03他以外の遺構も多く存在していた可能性もある。調査範囲の制約と大規模な搅乱に阻まれて、現状では不明な点が多いと言わざるを得ないのは残念である。

野籠遺跡全体について

野籠遺跡から出土した遺物は、縄文時代中期の土器から近現代陶器等に至るまで多種多様である。石器類においても木曽川流域で採集できる下呂石や濃飛流紋岩を石材としており、まさにこの地の風土に密着した様子がうかがえる。出土した遺物が認められる時代には、必ずこの地で人々が生活していたと想定するならば、まさにこの野籠遺跡には連鎖と途切れることなく人々が住み続けていたと言えよう。しかし、「遺物の出土=人々が生活」という構図は短絡的であり、遺跡を評価するにあたっては十分検討されなければならない点であろう。その点について野籠遺跡の場合を考えてみると、遺物・遺構のピークが三時代で認められる。

まず第一のピークは、弥生時代中期である。I区では、7期（弥生時代中期前葉）の遺物量が最も多く、遺構としても松菊里型類似住居や壇塚墓が確認されている。II区でもやや時期的に下るが、8～9期（弥生時代中期中葉～後葉）の遺物や遺構が確認されている。周辺の地でも弥生時代前期から後期にかけての遺物や遺構が確認されている遺跡もある。野籠遺跡で確認できたこの時代の遺構は、遺物量に比較してさほど多くない。従って、遺構の存在という点からは、集落跡の存在を裏付けることは難しい。しかし、周辺にまで目を向けるとその様相は必ずしも貧弱ではない。この野籠遺跡を取り巻く一帯は、弥生時代には多くの人々が住む集落が営まれていたと、想定することはあながち暴挙ではないと言えよう。いずれにせよ、野籠遺跡においては大きなピークとなる時代と言える。

第2のピークは、古墳時代後期である。この時代については、説明の必要のないほど明らかと言える。I区では23軒、II区では4軒、III区でも2軒の住居跡が確認されている。I区の住居域は中央部付近に集中しており、その点からみるとII・III区の住居跡はやや位置的に離れているという課題はあるが、営まれていた時期は出土する遺物から判断して、どれも6世紀末葉～7世紀前葉にかけての時期である。これらを結びつきの深い集団であると仮定すれば、ここに大集落が形成されていたと考えができる。後述する赤池4号古墳もそうであるが、野籠遺跡周辺にはこの時期の後期古墳が多く存在した形跡がある。I区の考察では、この集落の形成について「政治的な力が働いていた可能性がある。」と記述している。II・III区の調査を終えた現段階でもこの課題は解決されたわけではないが、この集落とこれら後期古墳との結びつきはかなり深いものであったことがわかつてきたと言えよう。

さらに第3のピークは、中世である。中世の遺物は量的にも多い。遺構は、その可能性を持つものも含めれば数基が該当する。しかし、直接人々の生活拠点となる集落とは結びつくものではなく、ほとんどが溝である。I区にその代表とも言える敷石遺構を作り大溝が検出されている。II区でも企画性がはっきりとした溝が確認できた。III区の遺構で中世のものであると言い切れる遺構はない。しかし、SD01は、その規模・方向性から可能性がある。そのように考えていくと、直接人々の生活と結びつくものは希薄であるが、その生活を支えた形跡は認められる。

『野籠遺跡I』では、本遺跡の特徴を語るキーワードは「河岸段丘」と「木曽川」であると結んでいる。確かに本遺跡を語る上でも、この立地を無視することはできない。しかし、本遺跡で大きく発展するこの3つのピークとこの立地条件がどのように関連しているかは未だ不明と言わざるを得ない。紙面の関係上、本遺跡全体の外観は時期的なピークに焦点を当ててしか行えなかった。今後、機会があればさらなる検討を進め、この一帯の歴史解明に貢献できればと考える次第である。

第2節 赤池4号古墳についての考察

赤池4号古墳の本調査は、野籠遺跡II区の本調査と同時並行の形で進められたが、調査範囲などの関係によって、最終的にはその全貌を解明することはできなかった。石室は南側を擾乱によって破壊されており、周溝は国道下の調査範囲外へ大きく広がっているため、全体の1/2ほどしか掘削・検出できなかった。しかし、得られた情報は決して少なくなく、大きな成果が上げられた。それらを整理すると以下のようになる。

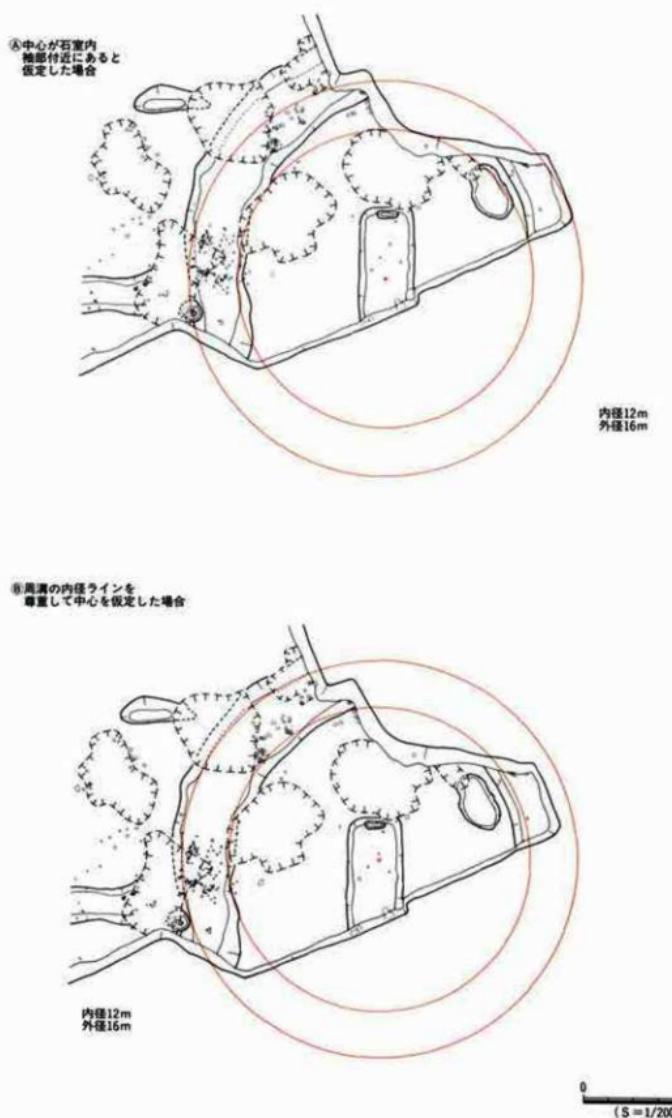
- (1) 石室の構造は、両袖式横穴式石室であることを確認した。
- (2) 外周の直径が約16mのはば円形を呈する周溝を検出した。
- (3) 石室の構築方法が明らかになった。

これらの成果については、第5章の本文中で説明を加えたので、繰り返し記述するのは避ける。ここで加えたい考察は二点ある。一点は、石室・周溝を中心とした赤池4号古墳本体の構造についてであり、もう一点は、本古墳を含む赤池古墳群の様相についてである。順に考察していくことにする。

赤池4号古墳について

本古墳について今後検討を要する課題は二点ある。一点は、石室の構造が単室か複室かという点である。もう一点は、西側壁袖部分近くから出土した遺物のまとまりとその区画の意味は何かという点である。前者の問題から考えていきたい。

今回調査した石室は追加調査のところに記したが、羨道部分を含めた開口部が確認できていない。従って単室か複室かの議論に対する決定的な答えはない。しかし、調査者の主観では単室である可能性が高いと考えている。その根拠は二つある。一つ目は、袖部分より南側の敷石がそれより北側に比べて整然としていないということである。つまり、奥壁から袖部分までが玄室にあたり、それ以南は徐々に開口した羨道部分になるのではないかと考える。12年度に行った追加調査の範囲には、敷石にあたる石組みは確認できなかった。破壊された可能性もあるが、東西両側壁はおそらく原位置を保っているであろうと思われる位置にあった。側壁は破壊されず、敷石だけが除去されるのは不自然である。そうするとやはり南側には敷石ではなく羨道部分であり、単室構造であった可能性が高い。二つ目は、周溝の中心の位置である。周溝は、その全体を検出できていないので、中心は不明である。しかし、仮に周溝の内側にラインが構築当時の状況であったと仮定すると、そのラインに最も適合するのは中心が奥壁から袖の中間地点の主軸上に位置するときである。第155図Bがそうである。袖部分から南は開口していくのであれば、中心から南はさほど長くなくてもよい。しかし、複室であるとしたならば、中心の位置をさらに南に下げて袖部分あたりにしないと、石室が墳丘に納まらなくなる。そう仮定した場合が第155図Aである。しかし、Aの場合、周溝との合致状況をみるとあまり芳しくない。周溝も人間の所産であり、いくら計画的に構築されたと言っても、いびつな形になってしまう場合も当然ある。しかし、より妥当性があるのはBの場合であり、そのことから石室が単室構造であったと推測することは甚だ飛躍した当て推量ではないと思う。



第155図 赤池4号古墳範囲推定図

後者のまとまりのある遺物については本文中でも少し触れた。問題は、6個の酷似した高坏とその出土状況やその周りに作られた方形区画の意味である。石室袖部分に遺物が集中することは珍しくなく、追葬の際には先に埋納された副葬品を入り口近くとか袖部分にかためてしまうことがある。今回の例は、それには当たらないと考えたい。根拠は、出土状況にある。本文中でも詳述した、明らかに意図的に置かれたという状況である。また、方形区画についても同様である。石室内には上部が破壊された際に入り込んだと思われる小砾が多くあった。それらは、慎重に掘削を進める中で確実に混入と判断できるものは除去していった後に残ったものである。配置された6個の高坏と方形区画を積極的に評価するとなると、明らかにその位置に意図を持って埋納されたと考えることができよう。奥壁付近から出土した高坏と平瓶は生前に被葬者が愛用したものであり、袖部分には埋納を目的として製作された高坏が石室内祭祀に使われたとする指摘もあるが、最終的には詳細不明と言わざるを得ないと思われる。なお、敷石日地から出土した土師器小鉢についても儀式用であったとする見解もあるが、ここではそうした指摘もあったということを記載するにとどめる。

赤池古墳群について

赤池古墳群は、『美濃加茂市史』にその記載がある。赤池古墳は、1～3号まで確認されており、「ド古井赤池上国道南下。」「川石のふき石が一段あったという」などの説明が加えられている。また古墳時代のこの一帯の状況を以下のように記述している。

○赤池地区 「龜淵の東方に続くものであって、現存する古墳は二基に過ぎないが、明治初期までは相当数の古墳があったと考えられる。さらに隣接の字二ツ塚、字塚原も含めての群集墳と考えられる。」

○龜淵地区 「岐阜県史でいう加茂南部古墳群の中の一つ、木曾川北岸グループの支群の一つである。太田橋と川合ダムの間、国道四一号線沿いに昭和六年当時小川栄一の調査によると、一六基の群集墳があったが、現在はすべて消滅し、出土遺物も四散し、その性格はほとんど不明であるが、墳丘の規模は、ほとんどが径一〇メートル前後であり、横穴式石室の石材は、川石が多かったという。後期後半と考えて間違いないであろう。(後略)」

○赤池上古墳 「林・小川の調査の時点では(明治三七年、昭和六年)三基の古墳が木曾川右岸段丘にあった。中央の一基は、墳丘が二段になっており、基底部と中腹部には葺石があったといふが、現在では基底部の一部にその跡を留めるのみで、……。(後略)」

これらの記述は、主に明治末から昭和の初めのころの記録を基にしている。すでにその時点で消滅してしまった古墳も多くあったようであるが、この野並～龜淵～赤池のかけての一帯にはかなりの数の古墳が群集していたと考えられる。それらがいつ消滅したのかは不明であるが、本古墳もまさにその一つであったと言えよう。『美濃加茂市史』の記載にある、「横穴式石室」「川石」「後期後半」「径一〇メートル前後」といった特徴が本古墳にも当てはまる。これららの特徴が、この一帯の群集墳特有の指標と言えるのではなかろうか。対岸の可児市には川合古墳群がある。それらとの関係は、今後の課題である。また木曾川の水運との関係を指摘する声もある。今後のさらなる調査によって、この地域の歴史が解明される日もそんなに遠い先のことではないと期待したい。

計測表・観察表

第3表 野笠遺跡II区 SB 計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸の方位	備考
SB01	+ 2 b, + 3 b, + 2 c, + 3 c	4.92	(3.62)	0.33	N-4.5° -W	溝に西側が切られる。
SB02	4 b	6.8	(4.08)	0.32	N-12.5° -W	半分は調査区外。
SB03	2 a, 3 a, 2 b, 3 b	7.32	4.84	0.28	N-5° E	
SB04	2 b, 1 b	7.68	(5.28)	0.44	N-0° -E	南側が溝に切られる。
SB05	+ 1 c, + 1 d	4.84	4.66	0.32	N-25° -W	

第4表 野笠遺跡II区 SD 計測表

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
SD01	3 b, 4 b, 3 c, 3 d	28.3	3.0	0.3	縄文・弥生・土師器・須恵器・山茶碗他	
SD02	1 f, + 1 f, + 2 f, + 3 f, + 4 f, 1 g, + 1 g, + 2 g, + 3 g	29.8	2.1	0.6	縄文・弥生・土師器他	
SD03	+ 2 e, 1 f, + 1 f, + 2 f	56.5	1.8	0.3	縄文・弥生・土師器他	
SD04	+ 2 e, 1 f, + 1 f, + 2 f	21.7	1.2	0.4	弥生・土師器他	
SD05	+ 1 g, + 2 g	6.0	0.5	0.2		
SD06	1 e, + 1 e, + 2 e, + 2 f, + 2 g	36.7	0.5	0.2	縄文・弥生・土師器他	
SD07	+ 3 c, + 4 c, + 3 d	8.1	1.1	0.4	縄文・弥生・土師器他	
SD08	- 2 a, + 2 b, + 1 c	14.8	1.0	0.2	縄文・弥生・土師器・山茶碗他	
SD09	1 a, 2 a, 1 b, 2 b, 1 c, 2 c, 2 d	46.6	0.9	0.1	縄文・弥生・土師器他	
SD10	2 b, 2 c	9.0	1.0	0.2	縄文・弥生他	
SD11	- 1 a, + 2 a, 1 b, 2 b, 2 c, 2 d, 2 e	48.2	0.9	0.2	縄文・弥生・土師器・山茶碗他	
SD12	3 b, 4 b	9.8	0.8	0.2	弥生・土師器・山茶碗他	
SD13	1 a, 2 a, 3 a, 4 a, 1 b, 1 c, 2 c, 2 d, 2 e	48.0	1.0	0.3	土師器・山茶碗・中世陶器他	
SD14	1 b, 2 b, 1 c, 2 c	14.9	0.4	0.2	弥生	
SD15	+ 1 b, + 1 c	11.5	0.7	0.3	縄文・弥生・山茶碗	
SD16	1 b, 1 c	4.6	0.4	0.2	縄文	
SD17	1 a, + 1 a, + 2 a	20.2	0.8	0.2	山茶碗・中世陶器	
SD18	1 a	3.0	0.4	0.2		
SD19	1 d, 2 d, 2 e	6.0	0.6	0.2	弥生	
SD20	+ 1 a, + 2 a	9.1	0.5	0.3	縄文・弥生・土師器	
SD21	1 b	2.8	0.4	0.2	弥生	
SD22	1 d, 2 d	4.2	0.4	0.2		
SD23	+ 2 c	3.2	0.6	0.2	縄文・弥生・土師器	
SD24	2 c, 2 d	9.6	0.4	0.1		
SD25	2 c, 3 c	11.2	0.5	0.2		
SD26	1 c, 2 c	8.3	0.5	0.1		
SD27	2 d	2.7	0.4	0.2		

第5表 野籠遺跡II区 SK・P計測表

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
SK01	+ 3 e	1.85	(1.30)	0.32	縄文	擾乱に切られる。
SK02	+ 3 d	2.45	2.40	0.75	縄文・弥生・土師器	
SK03	- 3 c	1.23	1.08	0.48	縄文・弥生・土師器	
SK04	+ 1 d	1.73	1.50	0.23	弥生・土師器	
SK05	+ 4 e	2.98	1.10	0.85	縄文・弥生	
SK06	+ 1 b	1.33	1.13	0.35	縄文・土師器	
SK07	1 c, + 1 c	1.23	1.20	0.14		
SK08	1 b	1.86	0.85	0.45	縄文	
SK09	+ 1 f	1.08	0.90	0.35	山茶碗	
SK10	1 f	1.04	0.85	0.28	弥生	
SK11	+ 1 e	1.00	.078	0.19	弥生	
SK12	+ 3 c, - 3 d	1.06	0.76	0.40		
SK13	+ 3 d	1.07	0.49	0.15	縄文	
SK14	1 b	1.22	(0.95)	0.25		
SK15	+ 1 c, + 2 c	1.12	0.30	0.34	土師器	
SK16	+ 1 c	1.11	0.77	0.20	土師器	
SK17	2 e	1.37	(0.46)	0.30		
SK18	2 e	1.22	0.83	0.10		
SK19	+ 1 c	1.08	0.94	0.19	弥生	
SK20	+ 1 g	1.05	0.83	0.27		
SK21	+ 1 g	1.12	0.73	0.25		
SK22	+ 1 d	1.40	0.70	0.26	弥生・土師器	
SK23	+ 1 b	1.39	1.01	0.33	縄文	
SK24	1 e	1.00	0.80	0.08		
SK25	+ 1 d	(1.15)	0.78	0.16	縄文・弥生・土師器	SB05に切られる。
SK26	+ 1 c, + 2 c	1.20	0.70	0.08		
SK27	+ 1 b	1.72	0.93	0.34		
SK28	1 d	1.06	0.84	0.47	土師器	
SK29	+ 1 c	1.70	1.40	0.76	縄文・土師器	
SK30	1 b	1.52	0.63	0.25	縄文・弥生・土師器	
SK31	+ 1 d	1.27	0.75	0.11	土師器	
SK32	+ 2 a	1.78	(1.23)	0.17	弥生・土師器	他
SK33	+ 3 b	1.38	0.90	0.27	弥生・土師器	
SK34	1 c	1.32	1.03	0.23		
SK35	+ 5 f	2.31	1.36	0.13		
P01	- 4 d	0.68	(0.37)	0.35	縄文	擾乱に切られる。
P02	+ 1 g	0.73	0.67	0.33		
P03	+ 1 g	0.51	0.43	0.08		
P04	+ 2 g	0.61	0.53	0.09		
P05	+ 2 g	0.83	0.64	0.20	縄文・土師器	
P06	+ 1 f	0.49	0.37	0.14		
P07	+ 1 f, + 2 f	0.61	0.37	0.12		
P08	+ 2 f	(0.69)	0.56	0.09		
P09	+ 2 f	0.62	0.51	0.15		
P10	+ 1 f	0.48	0.45	0.15		
P11	- 3 f	0.91	0.86	0.22	縄文・土師器	
P12	+ 4 e	0.57	0.48	0.17	弥生	
P13	+ 1 f	0.40	0.29	0.14		

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
P14	+ 1 e	0.48	0.35	0.10		
P15	+ 2 d, + 2 e	0.75	0.53	0.15		
P16	+ 1 e	0.82	0.72	0.43	弥生	
P17	+ 4 c	0.67	0.43	0.18	弥生	
P18	2 c	0.76	0.72	0.18	中世陶器	
P19	+ 1 g	0.87	0.56	0.24		
P20	+ 4 c	0.59	0.48	0.14		
P21	1 f	0.59	0.51	0.14		
P22	+ 3 d	0.48	0.38	0.10		
P23	+ 3 c	0.94	0.82	0.23	繩文	
P24	+ 3 c	0.62	0.17	0.28		複数に切られる。
P25	+ 1 e	0.92	0.85	0.29	弥生	
P26	+ 2 e	0.86	0.44	0.14	山茶碗	
P27	+ 3 c	0.60	0.56	0.12	弥生	
P28	+ 4 c	0.60	0.52	0.16		
P29	+ 4 d	0.77	0.51	0.24	繩文・土師器	
P30	+ 3 d, + 4 d	0.75	0.61	0.21	弥生	
P31	+ 3 d	0.42	0.51	0.14	弥生	
P32	+ 1 b	0.39	0.36	0.62		
P33	4 b	0.56	0.55	0.22		
P34	+ 2 c	0.61	0.45	0.13	弥生	
P35	+ 2 c	0.55	0.41	0.14	弥生	
P36	+ 2 c	0.61	0.29	0.12	弥生	
P37	+ 4 f	0.90	0.80	0.37		
P38	+ 2 c	0.78	0.65	0.22	弥生・土師器	
P39	+ 1 c	0.77	0.71	0.14	弥生	
P40	+ 1 g	0.86	0.82	0.29		
P41	+ 1 c	0.53	0.29	0.17		
P42	+ 2 b	0.75	0.73	0.27	弥生	
P43	1 c, 2 c	0.77	0.53	0.11	繩文・弥生	
P44	+ 1 b	0.57	0.51	0.15	弥生	
P45	+ 1 b	0.44	0.38	0.11		
P46	+ 1 b	0.56	0.44	0.14		
P47	1 a	0.85	0.75	0.23		
P48	1 a	0.92	0.65	0.34	弥生・土師器	
P49	1 a	0.71	0.55	0.23	弥生・須恵器	
P50	2 b	0.54	0.33	0.21		
P51	2 b	0.48	0.39	0.46	繩文	
P52	+ 1 f	0.63	0.48	0.09		
P53	+ 1 f	0.58	0.54	0.11		
P54	+ 1 f	0.84	0.63	0.36		
P55	+ 1 f	0.62	0.59	0.24		
P56	1 f	0.66	0.47	0.15		
P57	1 f	0.47	0.35	0.14		
P58	1 f	0.58	0.43	0.14		
P59	1 f	0.35	0.29	0.08		
P60	1 e	0.61	0.45	0.11		
P61	2 e	0.46	0.37	0.09		
P62	1 e, 2 e	0.36	0.27	0.12		
P63	2 e	0.43	0.38	0.04		
P64	2 d	0.40	0.35	0.11		
P65	2 d	0.44	0.38	0.10		
P66	+ 2 e	0.41	0.34	0.34		
P67	+ 3 e	0.82	0.73	0.19	繩文	

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
P68	+ 4 d	0.42	0.39	0.07		
P69	+ 4 d	0.48	0.37	0.08		
P70	+ 4 d	0.68	0.41	0.10	縄文	
P71	+ 4 d	0.83	0.65	0.29		
P72	+ 2 a	(0.54)	0.73	0.18	縄文・弥生	溝に切られる。
P73	+ 1 K	0.89	0.73	0.24		
P74	2 d	0.88	0.61	0.24	土師器	
P75	2 b	0.88	0.85	0.28	土師器	
P76	- 2 e	0.81	0.77	0.22	弥生	
P77	+ 4 c	0.95	0.68	0.29	縄文・弥生	

第6表 野笠遺跡II区 SX 計測表

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
SX01	1 a, + 1 a	7.08	2.84	0.38	縄文・弥生・土師器他	
SX02	+ 1 c, + 2 c	5.20	2.42	0.18	弥生・土師器他	
SX03	+ 2 c	(2.62)	1.28	0.18	土師器・山茶碗	
SX04	+ 2 e, + 3 e, + 2 f, + 3 f	(3.88)	1.32	0.18	弥生・土師器	溝に切られる。
SX05	+ 2 a	3.58	(1.26)	0.14		搅乱に切られる。
SX06	1 e, 2 e	5.26	0.28	0.06		溝に切られる。
SX07	+ 3 e	0.70	0.65	0.08		
SX08	1 c, 1 d	2.35	0.42	0.08	縄文	溝状。

第7表 野笠遺跡III区 SB 計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸の方位	備考
SB01	22 c', 22 b'	5.08	4.12	0.28	N 7.5° -W	
SB02	23 c'	4.88	4.14	0.38	N-8.5° -E	南側は調査区分。
SB03	25 c'	2.55	1.77	0.46	N-12° -E	南側は調査区分。

第8表 野笠遺跡III区 SD 計測表

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
SD01	23 d', 24 d', 25 d'	16.5	2.3	1.0	弥生・上師器・須恵器・山茶碗他	
SD02	24 d'	3.3	0.8	0.1	土師器・須恵器・山茶碗他	
SD03	23 c', 25 c', 23 d', 24 d', 25 d'	21.6	0.7	0.1	土師器・須恵器・山茶碗他	
SD04	25 c'	1.1	0.6	0.1	土師器・須恵器・山茶碗	
SD05	22 a'	2.0	0.6	0.2		
SD06	25 c', 25 d'	4.5	0.5	0.1	土師器・須恵器・灰陶器	
SD07	21 Z	3.7	0.7	3.5	弥生・土師器他	
SD08	20 Y, 21 Y	3.0	1.4	3.0	土師器・山茶碗・中世陶器他	

第9表 野笠遺跡III区 SK・P 計測表

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
SK01	22 a'	1.42	1.30	0.12	土師器・須恵器・山茶碗他	

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
SK02	23 a'	1.10	1.08	0.60	弥生・土師器・須恵器他	
SK03	23 a'	2.01	(1.37)	0.73	土師器・須恵器他	横乱に切られる。
SK04	22 a'	1.22	1.18	0.22		
SK05	22 a'、22 b'	1.11	0.93	0.40	須恵器・山茶碗	
SK06	22 b'、23 b'	1.43	1.31	0.30	土師器・須恵器	
SK07	22 c'、23 c'	1.76	1.18	0.56	石鏡	
SK08	23 c'	1.38	1.24	0.13	土師器・須恵器	
SK09	24 d'	1.11	1.00	0.46	須恵器他	
SK10	24 c'、24 d'	1.50	(0.34)	0.22		溝に切られる。
SK11	24 c'	1.41	(0.31)	0.25	土師器	溝に切られる。
SK12	21 Y	1.47	1.26	0.27	土師器・山茶碗他	
SK13	21 Y	1.29	1.03	0.13	山茶碗	
SK14	22 Y	1.23	1.10	0.42	土師器・山茶碗	
SK15	21 Y	1.01	(0.50)	0.28	弥生・土師器・山茶碗	横乱に切られる。
SK16	21 Y	1.10	0.97	0.45	土師器・中世陶器他	
SK17	21 Y	1.05	0.84	0.41	範文	
SK18	21 Z	1.18	0.96	0.40	弥生・土師器・山茶碗	
P01	24 d'	0.39	0.35	0.25	土師器	
P02	24 c'	0.65	0.64	0.29	弥生	
P03	21 b'、22 b'	0.65	0.63	0.25		
P04	23 d'	0.60	0.57	0.30	土師器	
P05	24 d'	0.37	0.25	0.17	土師器	
P06	22 a'	0.29	0.27	0.13		
P07	22 a'	0.35	0.31	0.23		
P08	23 a'	0.43	0.33	0.56		
P09	23 a'	0.46	0.37	0.24	山茶碗	
P10	23 a'、23 b'	0.66	0.41	0.45	須恵器・山茶碗	
P11	23 a'、23 b'	0.52	0.28	0.16		
P12	23 b'	0.41	0.30	0.21		
P13	22 a'	0.79	0.73	0.31		
P14	22 a'	0.97	0.94	0.36		溝に切られる。
P15	23 c'	0.21	0.19	0.28		
P16	24 c'	0.66	0.59	0.48		
P17	24 c'	0.31	0.25	0.13		
P18	22 a'	0.81	0.77	0.16		
P19	22 a'、23 a'、22 b'、23 b'	0.69	0.46	0.15		
P20	23 a'	0.78	0.63	0.19		
P21	22 a'	0.63	0.58	0.33		
P22	22 a'	0.52	0.50	0.10		
P23	24 c'	(0.76)	(0.50)	0.53	弥生・土師器・須恵器他	横乱に切られる。
P24	23 a'	(0.93)	0.59	0.23	土師器・須恵器	横乱に切られる。
P25	25 c'	0.39	0.38	0.34		
P26	25 c'	0.31	0.29	0.33		

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
P27	21Y	0.48	0.34	0.10		
P28	20Y	0.27	0.24	0.10		
P29	21Y	0.26	0.24	0.20		
P30	21Y	0.26	0.26	0.09		
P31	21Y	0.26	0.25	0.19		
P32	21Y	0.25	0.22	0.41		
P33	21Y	0.21	0.18	0.14		
P34	21Y	0.37	0.31	0.14		
P35	22Y	0.35	0.22	0.30		
P36	22Z	0.43	0.33	0.26		
P37	21Y	0.35	0.31	0.37		
P38	21Y	0.26	0.23	0.07		
P39	21Z	0.23	0.20	0.26		
P40	21Y	0.19	0.16	0.15		
P41	21Z	0.40	0.38	0.18	繩文	
P42	21Z	0.26	0.23	0.09		
P43	21Z	0.30	0.29	0.29		
P44	22Y	0.27	0.25	0.17		
P45	21Z	0.32	0.20	0.33		
P46	21Y	0.25	0.20	0.25		
P47	21Y	0.19	0.17	0.10		
P48	21Y	0.23	0.21	0.15		
P49	21Y	0.58	0.23	0.14		

第10表 野籠遺跡田区 SX 計測表

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	備考
SX01	21 a'	(1.96)	1.76	0.48	弥生・土師器・山茶碗他	南側は調査区外。
SX02	24 c'、25 c'	(5.50)	(3.43)	0.14	弥生・土師器・須恵器他	南側は調査区外。
SX03	22 b'	(1.64)	1.01	0.31		擾乱に切られる。
SX04	24 c'、24 d'	1.66	1.14	0.20	土師器・須恵器他	
SX05	23 c'	(1.84)	1.01	0.94		南側は調査区外。
SX06	21 b'	0.97	0.57	0.28	土師器	
SX07	21 Z	2.68	(2.00)	0.79	弥生・土師器・山茶碗他	北側は調査区外。
SX08	21 Z	0.97	0.54	0.24		
SX09	21 Y	1.24	(0.67)	0.23	山茶碗	擾乱に切られる。

第11表 野籠遺跡II区出土土器類別点数一覧表

	SB	SD	SK・P	SX	遺構外	合計
縄文土器	179	108	165	7	1,737	2,196
弥生土器	370	406	89	173	1,127	2,165
土師器	501	360	62	303	1,032	2,258
須恵器	149	21	1	0	256	427
灰釉陶器	0	0	0	0	0	0
山茶碗	21	162	5	1	941	1,130
中世以降の土器類	2	78	1	4	74	159
その他	13	10	0	2	49	74
合計	1,235	1,145	323	490	5,216	8,409

* 小片のため、縄文土器か弥生土器か土師器か不明な土器片が1109点あったが、その数は含んでいない。

第12表 野籠遺跡III区出土土器類別点数一覧表

	SB	SD	SK・P	SX	遺構外	合計
縄文土器	42	1	3	7	103	156
弥生土器	54	16	21	25	323	439
土師器	359	84	83	674	1,578	2,778
須恵器	70	83	54	168	758	1,133
灰釉陶器	9	6	3	4	64	86
山茶碗	3	27	43	23	290	386
中世以降の土器類	0	27	7	3	1,324	1,361
その他	0	1	1	1	8	11
合計	537	245	215	905	4,448	6,350

* 小片のため、縄文土器か弥生土器か土師器か不明な土器片が216点あったが、その数は含んでいない。

第13表 赤池4号古墳出土土器類別点数一覧表

	石室内	墓坑	周溝	合計
縄文土器	33	5	51	89
弥生土器	39	12	104	155
土師器	192	63	130	385
須恵器	68	0	1	69
灰釉陶器	0	0	0	0
山茶碗	1	0	1	2
中世以降の土器類	2	0	2	4
その他	2	0	0	2
合計	337	80	289	706

* 小片のため、不明な土器片が54点あったが、その数は含んでいない。

第14表 野籠遺跡II区出土石器種別点数一覧表

	SB	SD	SK・P	SX	造構外	合計
石鎌	6	6	1	2	16	31
石槍	1	3	0	0	8	12
石錐	0	1	0	0	6	7
石鍤	0	1	0	0	1	2
剥片石器	1	3	0	0	4	8
使用痕剥片石器	0	0	0	0	1	1
スクレイバー	1	0	0	0	3	4
尖頭器	0	1	0	0	0	1
打製石斧	5	12	11	4	54	86
磨製石斧	0	0	0	0	1	1
石歛	0	0	0	0	2	2
石鑿	0	1	0	0	0	1
石核	7	12	1	1	37	58
敲石	4	0	0	0	0	4
凹石	1	0	0	0	0	1
磨石	1	0	0	0	0	1
砥石	0	0	1	0	0	1
台石	1	0	0	0	0	1
偽石器	0	0	0	0	1	1
原石	2	0	3	0	0	5
剥片	219	347	119	92	1,115	1,892
合計	249	387	136	99	1,249	2,120

第15表 野籠遺跡III区出土石器種別点数一覧表

	SB	SD	SK・P	SX	造構外	合計
石鎌	0	0	1	2	2	5
打製石斧	3	2	0	0	10	15
石歛	0	0	0	0	1	1
石核	2	0	0	3	2	7
砥石	0	0	0	0	1	1
磨製石剣	0	0	0	0	1	1
剥片	19	8	4	29	62	122
合計	24	10	5	34	79	152

第16表 赤池4号古墳出土石器種別点数一覧表

	石室内	墓坑	周溝	合計
石鎌	2	0	0	2
打製石斧	1	0	7	8
石核	4	0	3	7
直線刃石器	0	0	1	1
敲石	0	0	1	1
剥片	57	24	55	136
合計	64	24	67	155

*「剥片」は石器製作時に生じる、いわゆるフレイクをさす。

*それぞれの種別点数には、完全な製品だけでなく未製品や断片も含んでいます。

第17表 野谷遺跡II区土器その他観察表(1)

名	測定 No.	河川 km	出土地	種類・器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	断面・調査	約 土	地成	色 調	風 味
1	13	9	SD01	陶文				内面底反文2本、内部底反方向の 底で。	灰、径1cm程のチャートをいく つも含む。	良好	淡黄、2.5YR7/4	白練鏡片
2	13	9	SD01	弦文				外表面底で、内部底側で、 内部底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、石英、 長石、石墨等を多く含む。	良好	赤褐、5.5VR4/6	白練鏡片
3	13	9	SD01	弦文				外表面底で、斜底の底部で、内部 底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、石英、 長石、石墨等を多く含む。	良好	赤褐、7.5YR6/6	外青一郎原色、 條紋化
4	13	9	SD01	丸点・横縞				外表面底で、内部底側で、内部 底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、石英、 長石、石墨等を多く含む。	良好	赤褐、7.5YR5/6	外青一郎原色、 條紋化
5	13	9	SD01	弦文、縦				外表面底で、斜底の底部で、内部 底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、石英、 長石、石墨等を多く含む。	良好	赤褐、7.5YR5/6	白練鏡片
6	13	9	SD01	弦文、横縞				外表面底・斜底の底部で、内部 底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、砂岩を 多く含む。	良好	明褐、7.5YR5/ 6	112.3回一削体。
7	13	9	SD01	縦				外表面底、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、石英を 多く含む。	良好	赤褐、7.5YR4/4	
8	13	9	SD01	朱文、直	19.1			外表面底内斜面ハサ、口端底反方 向の底で。	小中粒、徑1cm以下の底石を多 く含む。	普通	赤い、7.5 7.5YR7/4	風痕
9	13	9	SD01	朱文、縦	(7.5)	(3.4)		外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	小中粒、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR4/6	赤褐、一部高色、 風痕
10	13	9	SD01	朱文、縦	8.4	(4.0)		外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	小中粒、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR5/6	部底、赤風痕
11	14	9	SD01	朱文、直	28.1			外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石をわずか に含む。	普通	赤い、7.5 7.5YR5/6	風痕
22	22	10	SD02	土器基、直	(5.8)	(3.4)		外表面底、内部底反方向底で。	灰、徑1cm以下の底石をいく つも含む。	良好	赤褐、5 5YR5/6	方削形、直、ハ セイヨウヒンジ
23	22	10	SD02	直筒形、横	(19.8)	(2.1)		大腹外斜底内斜面ハサ、内部 底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石をいく つも含む。	良好	赤褐、2.5YR5/ 6	
24	22	16	SD03	土器基、直	18.8			外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR7/4	に上い黄、16
25	22	16	SD03	土器基	8.9	(22.4)		外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、2.5YR5/ 6	牧野系
26	22	18	SD03	直筒形、林	(11.6)	(3.1)		外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR5/6	
27	26	19	SD04	陶文、直筒	(21.8)			外表面底内斜面ハサの下端部、 内部底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR6/6	白練鏡片
28	26	19	SD04	陶文				外表面底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、5 5YR6/6	外青一郎原色、 内青、わずかに 付化
29	26	19	SD04	土器基、直				外表面底、内部底反方向ハサ	灰、徑1cm以下の底石、石英を 多く含む。	良好	赤褐、7.5YR5/ 6	
30	26	19	SD04	土器基				外表面底内斜面の腰部分、 内部底反方向ハサ	灰、徑1cm以下の底石、石英を 多く含む。	良好	赤褐、7.5YR5/ 6	
31	26	19	SD04	直筒形、杯	(16.2)	(4.6)	(3.7)	外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、2.5YR5/ 6	外表面底
37	29	11	SD05	陶文、直筒				外表面底内斜面ハサ	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	普通	赤褐、7.5VR7/6	近江文化、 近江文化、 近江文化
38	29	11	SD05	陶文、直筒				外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR6/6	37回一化、 化粧、 白練鏡片
39	29	11	SD05	陶文				外表面底内斜面ハサ	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、2.5YR5/ 6	
40	29	11	SD05	土器基				外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、石英、 長石を多く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR6/6	赤褐色、全田 化粧
41	29	11	SD05	土器基、直	16.0	9.0	32.4	外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、石英、 長石を多く含む。	良好	赤褐、2.5YR5/ 6	引井形、牧野 系
42	29	11	SD05	直筒形、直	12.6	4.8	6.5	外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	不良	赤褐、2.5YR5/ 6	生漆塗(白生)
43	29	11	SD05	直筒形、直	(18.2)			外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	灰白、5.5YR1/ 2	丹波、暗
48	36	12	SD01	陶文				外表面底内斜面ハサ、腰部分、 内部底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石、石英、 長石を多く含む。	普通	赤褐、5.5 5YR6/6	白練鏡片
49	36	12	SD01	陶文				外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、5.5YR6/ 6	中原系
50	36	12	SD01	陶文				外表面底内斜面ハサの腰部分に 調文、内部底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	普通	赤褐、7.5 7.5YR7/4	
51	36	12	SD01	弦文、直				外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR7/4	113回一化、 113回一化
52	36	12	SD01	弦文、直				外表面底内斜面ハサの腰部分に 調文、内部底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	普通	赤褐、5.5 5YR6/6	113回一化、 113回一化
53	36	12	SD01	弦文				外表面底内斜面ハサ	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	普通	赤褐、5.5 5YR7/4	
54	36	12	SD01	弦文				外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR7/4	外青塗瓦
55	36	12	SD01	弦文				外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	普通	赤褐、7.5 7.5YR7/4	逃遁鏡片
56	36	12	SD01	弦文				外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR7/4	
57	36	12	SD01	陶文、構	(5.4)	(1.2)		外表面底内斜面ハサの腰部分、 内部底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、2.5YR6/ 7	白練鏡片
58	36	12	SD01	直筒形	(5.6)	(1.4)		外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、2.5YR6/ 7	
59	36	12	SD01	直筒形、直				外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、2.5YR6/ 7	
60	36	12	SD01	直筒形	(12.6)	(2.5)		外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	普通	赤褐、7.5 7.5YR6/6	白練鏡片
61	36	12	SD01	直筒形、直	(8.6)	(1.8)		外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、5.5 5YR7/3	
62	36	12	SD01	直筒形	(13.2)	(2.2)		外表面底内斜面ハサ、内部底反 方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、5.5 5YR7/3	
66	37	12	SD01	陶文、直筒				外表面底内斜面ハサの腰部分、 内部底反方向の底で。	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、7.5 7.5YR7/4	外青底付帯、無 色
67	37	12	SD02	朱文、直				外表面底内斜面、内部底側で	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	無色、10 10YR3/1	
68	37	12	SD02	朱文				外表面底内斜面の腰部分、内部 底側で、底部外斜面代用	灰、徑1cm以下の底石、石英、 長石を多く含む。	良好	赤褐、7.5YR6/ 7	
69	37	12	SD02	山形柄				外表面底内斜面で	灰、徑1cm以下の底石を多 く含む。	良好	赤褐、2.5YR6/2	

第17表 野笠遺跡II区土器その他観察表(2)

No.	H	D	川土器	縦輪・横輪	口徑(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	剖面	特徴・構造	地質	色調	備考
79	37	12	SD05	縦文、深鉢				内面側面方向の無い、口縁が膨らむ 外曲線部、口縫型斜文	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。 小尖端。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	1.2cm×1.4cm、10 YHS/2	良好
71	37	13	SD03	縦文				外曲線部、口縫型斜文	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。 小尖端。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	標。SYR6/6	II層鏡面
72	37	13	SD03	縦文				外曲線部、口縫型斜文	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。 小尖端。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	標。SYR6/6	II層鏡面
73	37	13	SD03	弦文、垂				外曲線部、内面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。 小尖端。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	標。SYR6/1	良好
74	37	13	SD03	弦文、垂				外曲線部で、内面側面方向の板状	やや厚。底1cm以下の板状を 多く含む。	良好	標。SYR6/1	良好
75	37	13	SD03	土師器、黄				外曲線部のハケ、内面側面方向 のハケ	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。 小尖端。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	6cm×5cm、約 10cm×8cm YHS/2	山外曲線凹凸特 性。SYR6/1
76	37	13	SD02	山手柄	4.2			内外曲線斜面で、底膨らみ回転 刃切り	底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。 小尖端。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	標。2.5YR4/ 5	底源外及び層 底
86	46	13	SD04	山手柄	(11.4)			外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。 小尖端。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	底1cm、2.5YR4/ 5	内面側面
88	40	13	SD07	縦文				外曲線方向の波立文、縦文	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。 小尖端。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	白 白	白
89	40	13	SD07	縦文				外曲線方向の波立文、縦文	やや厚。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	標。YRS6/6	II層鏡面
90	40	13	SD07	縦文				外曲線方向の波立文、縦文、内 面側面	やや厚。底2mm以下の板状を 多く含む。	良好	標。7.5YR6/6	
91	40	13	SD07	縦文、深鉢				外曲線部、口縫型波立文	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10YRS/1	
92	40	13	SD07	弦文、垂				外曲線方向のハケ、横伏状	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10YR2/4	良田向
93	40	13	SD07	弦文				外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。YRS/2	良好
94	40	13	SD07	弦文				外曲線方向の波立文、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。7.5YR6/6	1983-1-1-鉢形 底層鏡面
95	40	13	SD09	縦文、深鉢				外曲線部、口縫型波立文	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。7.5YR6/6	方型の外曲線
99	40	13	SD11	弦文				内面側面	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。7.5YR4/ 5	
102	41	14	SD13	縦文、圓輪	(5.0)			口縫型波立文と直縫型竹筒状Y字に よる波立文	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	底1cm、7.5YR4/ 5	良田向
103	41	14	SD13	縦文				外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	標。SYR6/6	内曲面
104	41	14	SD13	弦文				外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	標。7.5YR6/6	1983-1-1-鉢形 底層鏡面
105	41	14	SD13	土師器				内面側面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	底1cm、7.5YR4/ 5	底源外及 其層鏡面
106	41	14	SD14	弦文、圓輪	(6.0)			口縫型波立文と直縫型竹筒状Y字に よる波立文	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	底1cm、7.5YR4/ 5	良田向
107	41	14	SD13	山手柄				外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	底1cm、7.5YR4/ 5	底源外及 其層鏡面
108	41	14	SD13	山手柄				外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	底1cm、7.5YR4/ 5	底源外及 其層鏡面
109	41	14	SD15	土手柄、深 鉢形	26.8	8.6	22.0	外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	標。10YR4/4	「片」の内曲 面
110	41	14	SD13	中背臼				外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	底1cm、2.5YR4/ 5	内曲面下止 部、内曲面斜面
113	41	14	SD20	弦文、垂				外曲線斜面の外側、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	底1cm、7.5YR6/6	牛糞下-水槽
114	41	14	SD20	弦文、高杯				外曲線斜面の外側、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	底1cm、7.5YR6/6	牛糞下-水槽
116	37	14	SK02	縦文				外曲線斜面で、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	標。10YR4/1	内曲面斜面下止 部及底
117	57	14	SK02	充土、垂				外曲線斜面、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	標。7.5YR4/ 5	中間中央
121	57	14	SK03	充土				外曲線斜面、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	底1cm、10 YH2/3	11層鏡面、基底 文
124	57	14	SK03	縦文				外曲線斜面の外側、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。7.5YR4/ 5	11層鏡面
125	57	14	SK03	縦文				外曲線斜面の外側、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	標。7.5YR6/6	後期余器
126	57	14	SK03	縦文				外曲線斜面の外側、内面側面	やや厚。底2mm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。7.5YR6/6	後期余器
127	57	14	SK02	縦文				内曲面	やや厚。底2mm以下の板状を多く含 む。	良好	標。7.5YR6/6	底源外
128	57	15	P11	弦文				外曲線方向の斜縫、口縫型斜文	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10YR2/1	11層鏡面
129	57	15	P23	縦文				外曲線斜面、縦文、内曲面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。2.5YR4/ 5	良好
130	57	15	P23	縦文				内外曲面方向の斜縫で、内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。SYR7/8	後期、成狀J2
131	58	15	P23	縦文				外曲線斜面の外側、内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10 YR2/4	地盤
132	58	15	P23	縦文				外曲線斜面の外側、内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10 YR2/4	地盤
136	58	15	P51	充土、小量 砂	11.5	5.5	12.2	内曲面側面で、内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。黑褐。10 YR4/2	地盤
137	64	17	SK01	縦文、深鉢				外曲線斜面、斜方側面。内曲面側 面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10YR4/1	11層鏡面、埴 地。P012-1 出土
138	64	16	SK01	土師器				内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。7.5YR2/6	11層鏡面
139	64	16	SK01	土師器				内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。7.5YR2/6	11層鏡面
140	64	17	SK01	充土、垂	(35.4)			外曲線斜面方向の斜縫、内曲面側 面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。2.5YR4/ 5	複数件、縫合 れ。我々から、本体 は複数件、縫合 れ。
141	64	17	SK01	土師器	(12.0)	5.5	12.3	休面内外曲面方向へ削り	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10YR4/6	複数件、縫合 れ。我々から、本体 は複数件、縫合 れ。
142	64	16	SK01	充土、杯	15.2			外曲線斜面で、内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10 YR2/4	内曲面側面
143	64	17	SK01	土師器、杯	12.0			外曲線斜面の外側、内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。SYR6/6	内曲面側面
144	64	16	SK01	土師器、白 骨質	(13.3)			外曲線斜面で、内曲面側面	やや厚。底1cm以下の板状。石 英、チャートを多く含む。	良好	標。10 YR3/4	内曲面とも一部 骨質化

第17表 野籠遺跡II区土器その他観察表(3)

No.	断面 No.	断面 No.	出土地	種類・特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	基盤 (cm)	形状・調査	期 I	地城	色 調	備考
145	84	17	SX01	土器部					外周表面	今期の、厚さ1mm以下の底径。チークが多く、底2mm以下の底径を多く含む。	今期	SYR8/8	
146	84	16	SX01	土器部、底	(3.9)	(6.5)				今期の、厚さ1mm以下の底径。チークが多く、底2mm以下の底径を多く含む。	今期	SYR7/4	外周一部底付着
147	65	16	SX01	土器部、底						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR6/4	圓筒合成
148	65	16	SX01	土器部、は う	2.0	(5.7)				今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR6/4	圓筒合成
149	65	17	SX01	土器部、は う	4.0	(6.5)				今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR6/6	
150	65	16	SX01	上端部、西	(5.2)					今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	脚部片
151	65	16	SX01	上端部、高	(8.3)					今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	脚
152	65	16	SX01	上端部、高	(8.3)					今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/7	脚
153	66	15	SX02	底部、東						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	系縄部
154	66	15	SX02	底部、東						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	系縄部
155	66	15	SX02	底部、東						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	内周灰付
156	66	15	SX02	底部、東						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	内周灰付
157	66	15	SX02	底部、東						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	内周灰付
158	66	15	SX02	底部、東						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	内周灰付
159	66	15	SX02	底部、東						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	内周灰付
160	66	15	SX02	底部、東						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR7/6	内周灰付
161	68	18	+ 2 d	縦文、深鉢	(22.6)					今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
162	68	18	+ 4 d	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
163	68	18	+ 3 i	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
164	68	19	+ 3 d	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
165	68	18	+ 1 b ¹	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
166	68	18	+ 3 d	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
167	68	18	+ 3 c	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
168	68	18	- 1 b	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
169	68	18	1 b	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
170	68	18	口縫部連続縦文、横縫	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
171	68	18	+ 4 c	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
172	68	18	+ 3 d	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
173	68	18	+ 1 x	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
174	68	18	+ 1 c	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
175	68	18	+ 1 d	縦文						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
176	68	18	+ 2 b	縦文、深鉢						今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内周下部付着
177	68	18	+ 4 d	縦文、深鉢	(16.7)				内外周的指向の施す、口縫肥厚	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	内外周化物
178	69	18	+ 1 b	縦文	(26.6)				外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
179	69	18	+ 5 f	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
180	69	18	- 5 i	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
181	69	18	+ 2 e	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
182	69	18	+ 5 b	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
183	69	18	1 c	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
184	69	18	+ 1 a	縦文、深鉢					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
185	69	18	- 5 f	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
186	69	18	+ 1 b	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
187	69	18	+ 3 c	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
188	69	18	+ 4 f	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
189	69	18	+ 2 d	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
190	69	18	- 1 b	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
191	69	18	2 c	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
192	69	18	+ 4 c	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
193	69	18	1 b	縦文、深鉢					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
194	70	19	+ 2 k	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/4	白縫
195	70	18	亂	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
196	70	18	- 1 a	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
197	70	18	2 c	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/6	白縫
198	70	19	+ 1 k	縦文					外周肥厚なし、縦文、内周肥厚なし	今期の、厚さ1mm以下の底径。チーク多く含む。	今期	SYR8/4	中筋末～接縫

第17表 野谷遺跡II区土器その他観察表(4)

No.	測定 No.	測定 No.	出土地	埋深、地盤	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	参考、調査	土	地成	色、調	備考
199	70	19	+ 4 d	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	黄灰、2.5YR4/1		
200	70	19	+ 3 d	縄文				外底波状文・縄文	良好	7.5VR6/6		
201	70	19	+ 1 c	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石、石英、 サトウカワ等を含む。	普通	2.5VY6/10	外底波状文	
202	70	19	+ 2 c, 3 c	縄文、波紋				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石、チー トカシ含む。	良好	7.5VR6/6	中筋本、波紋織 物	
203	70	19	+ 2 b	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多く含 む。	良好	2.5VY6/10	外底波状文	
204	70	19	+ 1 a	縄文				外底波状方向の波紋文・縄文	良好	7.5YR6/6		
205	70	19	+ 5 f	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5VY6/10		
206	70	19	+ 3 d	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	7.5VR6/6	後期前段	
207	70	19	+ 2 c	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5VY6/10	縫合	
208	70	19	+ 1 b	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	普通	2.5VY6/10		
209	70	19	+ 2 c	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	7.5VR6/6		
210	70	19	+ 2 f	縄文、波紋				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以上の底石を多く含 む。	良好	3.5YR6/6	後期前、外底波 状文波紋文	
211	70	19	+ 1 b	縄文				外底波状方向の波紋文・縄文、内 面織物で構成。底 1 cm 以下の底石 を多く含む。	良好	2.5VY6/6		
212	70	19	+ 1 b	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5VY6/3		
213	70	19	+ 2 d	縄文				外底波状方向の波紋文・縄文、内 面織物で構成。底 1 cm 以下の底石 を多く含む。	良好	2.5YR6/4		
214	70	19	+ 3 c	縄文				外底波状方向の波紋文・縄文、内 面織物で構成。底 1 cm 以下の底石 を多く含む。	良好	7.5VR6/6		
215	70	19	+ 3 b	縄文				外底波状方向の波紋文・縄文、内 面織物で構成。底 1 cm 以下の底石 を多く含む。	良好	7.5VR6/6		
216	70	19	+ 4 f	縄文、波紋				波紋文、縄文	良好	2.5VY6/10	後期前、良好	
217	70	19	+ 2 d	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	普通	2.5YR6/6		
218	70	19	+ 2 c	縄文、波紋				波紋文、波紋文、縄文	良好	2.5VY6/10	後期、波紋織片	
219	70	19	倪	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	10YR4/1		
220	70	19	- 1 a	縄文				外底波状方向の波紋文・縄文	良好	7.5YR6/6		
221	70	19	+ 5 f	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5VY6/10		
222	70	19	+ 2 c	縄文				外底波状方向の波紋文・縄文、内 面織物で構成。底 1 cm 以下の底石 を多く含む。	良好	2.5YR6/6		
223	70	19	+ 1 c	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	7.5VR6/6		
224	70	19	1.5 f	縄文				外面織物で	良好	2.5VY6/10		
225	70	19	+ 5 f	縄文				片面波状文、縄文、波紋、内面 織物で構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5VY6/10	同じと同一個体	
226	71	19	+ 2 f	縄文				片面波状文の波紋文・縄文、内 面織物で構成。底 1 cm 以下の底石 を多く含む。	良好	7.5YR6/6	後期前段	
227	71	19	- 1 c	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5YR6/6		
228	71	19	- 5 e	縄文、波紋				外底波状文で構成。底 1 cm 以 下の底石を含む。チー トカシ含む。	良好	2.5VY6/10	後期前段	
229	71	19	- 1 d	縄文				波紋文、縄文	良好	7.5VR6/6	中筋本、縫合	
230	71	19	+ 3 d	縄文				外底波状文・縄文、波紋、内面 織物で構成。底 1 cm 以下の底石を 多く含む。	良好	7.5YR6/6	縫合、外底、縫合	
231	71	19	+ 1 a	縄文				外底波状文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5YR6/10	小筋本・後期初	
232	71	19	- 2 c	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5YR6/10		
233	71	19	+ 2 c	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	10YR3/1		
234	71	19	+ 1 b	縄文				外底波状文・縄文、内面織物で 構成。底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5YR6/6		
235	71	19	+ 4 d	縄文				溝織文の跡付付	良好	2.5VY6/10	縫合付糸付列 縫合。	
236	71	19	+ 2 c	縄文				小筋本、底 1 cm 以下の底石を多 く含む。	良好	2.5YR6/6		
237	71	19	1.5 b	縄文				外底波状方向の波紋文、内面 織物で構成。底 1 cm 以下の底石 を多く含む。	良好	7.5YR6/6		
238	71	19	- 1 b	縄文				外底波状方向の波紋文、内面 織物で構成。底 1 cm 以下の底石 を多く含む。	良好	2.5YR6/10		
239	71	19	+ 2 a	縄文				外底波状、内面織物方向のハケ 付。	良好	2.5YR6/6		
240	71	19	+ 2 d	縄文				外底波状方向の波紋文・縄文 付。	良好	2.5YR6/6		
241	71	19	+ 3 b	縄文				外底波状、内面織物付。波紋文、 縄文、サトウカワ等を含む。	良好	2.5YR6/6		
242	71	19	- 5 f	縄文				外底波状文・波紋文、内面織物 付。	良好	2.5YR6/10		
243	71	19	- 2 f	縄文				外底波状付・縫合付、内面織物 付。内面織物の波紋文付。	良好	2.5YR6/4		
244	71	19	2 b	縄文				外底波状方向の糸付。	良好	2.5YR7/3		
245	71	19	麻	縄文				外底波状方向の其殺糸痕、内面 織物方向の糸痕。	普通	2.5VY6/10		
246	71	19	- 1 d	縄文	(4.2)	(3.4)		外底波状方向の底縫、内面織物 付。	良好	2.5VY6/10	内面糸、縫合	
247	72	20	+ 1 b	縫合				外底織物に糸痕、内面織物付。	良好	2.5YR6/10	内面糸、縫合	
248	72	20	+ 3 b	縫合				外底波状付・縫合付、内面織物 付。内面織物の糸痕。	良好	2.5YR6/4		
249	72	20	+ 4 d	縫合				外底波状方向の糸痕、内面織物 付。	良好	2.5YR6/4	内面糸	

第17表 野笠跡遺II区土器その他観察表(5)

編號	形態	内面	外上部	被覆・器蓋	口徑 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴・要綱	地質	色調	標号	
250	72	29	+ 2 b	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。 外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。 外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好 良好 良好	灰 灰 灰	7.SYR6/6 11細繊片	
251	72	29	-	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。 外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	7.SYR6/6 11細繊片	
252	72	20	+ 5 f	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	7.SYR6/6 11細繊片	
253	72	20	- 5 f	陶生、漆鉢				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	7.SYR6/6 6	
254	72	20	+ 5 f	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	7.SYR6/6 5	
255	72	20	+ 5 f	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	7.SYR6/6 7.5	
256	72	20	-	盛上				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	7.SYR6/6 6	
257	72	20	+ 5 f	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	2.SYR7/7	
258	72	20	+ 5 f	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	7.SYR6/6	
259	72	20	+ 5 f	陶生、漆				外表面方向の条痕、内面横擦で、 内側縁に横擦あり。	良好	灰 灰	7.SYR6/6 10	
260	72	20	3 b	陶生				内面横擦で、- 混生粘	良好	灰 灰	7.SYR7/6 7.5	断面方向の斑状地
261	72	20	+ 1 c	陶生				外表面横擦	良好	灰 灰	7.SYR6/6	
262	72	20	+ 5 f	陶生、漆				内面横擦で、内面横擦でのハリ の生地	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 7.5	
263	72	20	+ 3 d	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で の生地	良好	灰 灰	7.SYR6/6	
264	72	20	+ 3 d	陶生				外表面方向の条痕、内面横擦で の生地	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 5	外表面横擦
265	72	20	+ 5 f	陶生				内面横擦で、内面横擦で、 内面横擦での生地	良好	灰 灰	7.SYR6/6 10	外表面横擦
266	72	20	+ 3 c	陶生				内面横擦での生地、内面横擦で の生地	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 7	
267	72	20	+ 3 c	陶生				外表面横擦、内面横擦での生地	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 19	
268	72	20	-	陶生				外表面横擦、内面横擦での生地	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 19	
269	72	20	- 2 b	陶生				外表面横擦で、内面横擦での 生地	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 19	外表面横擦
270	72	20	- 3 b	陶生				外表面方向の条痕、底面横擦、 内面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.SYR6/6 10	
271	73	20	-	盛上	陶生			外表面、底面方向の条痕、底面横擦 での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 7	底部繊片
272	73	20	+ 5 f	陶生	(7.4)			内面横擦で。	伴通	灰 灰	7.SYR6/6 底部	
273	73	20	1 b	陶生	(10.0)			外表面横擦、内面横擦で。	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 3	底部繊片
274	73	20	+ 2 d	陶生				外表面横擦、内面横擦で、 底面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 底部	
275	73	20	+ 3 c	陶生、高杯				外表面横擦で。	良好	灰 灰	7.SYR7/6 6	
276	73	20	+ 5 f	陶生	(8.8)			外表面横擦で、内面横擦で、 内面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.SYR6/6 底部	
277	73	20	1 d	陶生				外表面横擦で、内面横擦で、 内面横擦で	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 19	底部繊片
278	73	20	- 5 f	陶生、漆				外表面方向の横擦で、内面横擦で	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 10	外表面黒皮付着
279	73	20	- 5 f	陶生	(6.4)			外表面方向の横擦で、内面横擦で	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 8	底部繊片
280	73	20	+ 5 f	陶生	(8.4)			外表面横擦で。	良好	灰 灰	7.5SYR7/6 底部	
281	73	20	+ 4 f	陶生	(7.2)			内面横擦で。	良好	灰 灰	7.5SYR7/6 底部	
282	73	20	+ 3 b	陶文				外表面方向の横擦で、内面横擦 での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR7/6 底部	
283	73	20	+ 3 d	陶文				内面横擦で、内面横擦で、 内面横擦で	良好	灰 灰	7.5SYR7/6 底部	
284	74	21	-	盛土	土師器、實	(7.7)		外表面横擦で、内面横擦で、 内面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 7.5	内面黑色
285	74	21	+ 2 b	土師器、漆	(2.1)			内面横擦で。	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 7.5	
286	74	21	+ 5 f	土師器				内面横擦で。	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 7.5	
287	74	21	+ 4 d	土師器	(7.4)			内面横擦で、内面横擦で、 内面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 10	
288	74	21	-	土師器、漆	(2.4)			内面横擦で、内面横擦で、 内面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 10	外表面全体付着
289	74	21	- 5 f	土師器、漆	(12.7)			内面横擦で、内面横擦で、 内面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 10	
290	74	21	+ 1 a	土師器				外表面方向の条痕、内面横擦で の条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6	
291	74	21	+ 1 c	土師器				外表面横擦でのハリ、内面横擦 での条痕	良好	灰 灰	10SYR7/2	外表面一部付着
292	74	21	+ 1 c	土師器、高 杯	(4.3)			内面横擦で、内面横擦で、 内面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6 3.5	
293	74	21	+ 1 a	土師器	(3.4)			内面横擦で、内面横擦で、 内面横擦での条痕	良好	灰 灰	7.5SYR6/6	
294	74	21	-	盛土	土師器、漆	(25.0)		内面横擦での横擦で、 内面横擦での横擦で	良好	灰 灰	7.5SYR7/2	
295	74	21	+ 2 b	陶泥器、漆				内面横擦で、内面横擦での横擦で	良好	灰 灰	7.5SYR7/2	つまみ部
296	74	21	-	盛土				内面横擦で	良好	灰 灰	7.5SYR6/2	

第17表 野笠遺跡II区土器その他観察表(6)

No.	深さ cm	底面 形	由来地	種類・特徴	口径 cm	底径 cm	高さ cm	観察・調査		約 ±	底成 立	色調	備考	
								内	外					
297	75	21	3.4 金	灰陶器、杯	(6.6)	(1.4)	内外共同輪廓で、 底面外周輪廓へ 付り立てる。	底、1cm以下の長石をわずか に含む。 底、1cm以下の長石をわずか に含む。	良好	灰白、5Y7/3				
298	75	21	盛土	罐形器	(16.3)			内	外	底、1cm以下の長石をわずか に含む。	良好	灰白		
299	75	21	2.1b	吸水器	(9.0)	(1.5)	内外共同輪廓で、 底面外周輪廓へ付り立てる。	底、1cm以下の長石をわずか に含む。 底、1cm以下の長石をわずか に含む。	良好	灰白、2.5Y6/1				
300	75	21	2.1b	吸水器	(9.2)	(1.6)	内	内	底、1cm以下の長石をわずか に含む。	良好	灰白、2.5Y7/2			
301	75	21	2.1c	吸水器	(9.0)	(1.5)	内	内	底、1cm以下の長石をわずか に含む。	良好	灰白、2.5Y7/3			
302	75	21	2.1c	吸水器	(9.2)	(1.6)	内	内	底、1cm以下の長石をわずか に含む。	良好	灰白、2.5Y7/3			
303	75	21	+2.1b	吸水器	(12.0)	(2.0)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、2.5Y7/2			
304	75	21	底土	罐形器	(10.8)	(1.8)	内外共同輪廓で、 底面外周輪廓へ付り立てる。	底、1cm以下の長石をわずか に含む。	良好	灰白、2.5Y7/1				
305	75	21	底土	底土器	(5.3)	(1.4)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。 底、1cm以上の砂粒を含む。	良好	灰白、3.5Y7/2	内	内	
306	75	22	盛土	山茶碗	(3.2)			内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/3		
307	75	22	盛土	山茶碗	(11.0)	(6.0)	3.3	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
308	75	22	盛土	山茶碗	(15.0)			内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
309	75	22	+2.1b	山茶碗	(9.6)	(4.5)	1.7	内	内	底、1cm以下の砂粒を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
310	75	22	盛土	山茶碗	(2.1)			内	内	底、1cm以下の砂粒を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
311	75	22	盛土	山茶碗	(10.0)		3.6	内	内	底、1cm以下の砂粒を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
312	75	22	盛土	山茶碗	(5.1)	(1.6)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
313	75	22	盛土	山茶碗	(5.2)	(1.7)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
314	75	22	1d	山茶碗	(4.6)	(2.3)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
315	76	22	盛土	山茶碗	(4.1)	(1.2)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
316	76	22	1d	山茶碗	(5.0)	(1.2)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
317	76	22	+1.1	山茶碗	(8.0)	(1.6)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
318	76	22	盛土	山茶碗	(6.0)	(1.6)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
319	76	22	盛土	山茶碗	(6.4)	(2.0)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
320	76	22	+2.1c	山茶碗	(4.6)		内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
321	76	22	-1.5b, +2.1b	山茶碗	(4.6)	(2.4)	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
322	76	22	盛土	山茶碗	(5.4)	(4.3)	内	内	底、0.5cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
323	76	22	1.1	山茶碗	(7.2)		1.2	内	内	底、0.5cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
324	76	25	2.0	罐形器	(26.75)	(9.23)	2.0	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
325	77	22	盛土	中近世、中 古茶碗	(1.6)			内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
326	77	22	盛土	中 古茶碗	(2.2)			内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
327	77	+1.1c	中近世、中 古茶碗	(2.2)			2.2	外	外	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
328	77	1 d	中近世、中 古茶碗	(3.1)			内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内	
329	77	盛土	中 古茶碗	(10.6)			2.6	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
330	77	4 b	中古茶碗、若 て、盛土	(15.1)			4.0	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
331	77	-3.1b, +2.1b	小近世、若 て	(3.6)			2.6	外	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
332	77	盛土	中近世、古 茶碗	(2.6)			2.6	外	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
333	77	+2.1b	中近世、古 茶碗	(2.6)			2.6	外	外	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
334	77	盛土	中近世、天 下茶碗	(5.1)			2.6	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、3.5Y6/2	内	内
335	77		中近世、大 茶碗	(37.0)			12.4	内	内	底、1cm以下の長石を含む。	良好	灰白、10YR8/2	内	内

第18表 野谷遺跡III区土器その他観察表(1)

No	測定	測定場所	種類	寸法 (cm)	計測	剖面	地質	内調	備考
501	93	26	SB01	土器部	(12.8)	(5.35)	外曲面で、内面側方向の具合様 子や幅、径、3mm以下の孔を含む。チャ ー上、茎部を含む。	普通	ジンジヤ周、7.5 YRH/3
502	93	26	SB01	土器部	(12.8)	(5.35)	内面側以下外曲面側方向のハサ。口 縁部以下外曲面側方向の直角で、口縁部 側面方向の直角。内面側方向で、	普通	ヒヨヒヨ周、10 YRH/3
503	93	26	SB01	土器部、底	(10.6)	(8.1)	外曲面で、内面側方向の具合様 子や幅、径、3mm以下の孔を含む。チャ ー上、茎部を含む。	普通	ヒヨヒヨ周、10 YRH/3
504	93	26	SB01	土器部、底	(10.6)	(8.1)	内面側以下外曲面側方向のハサ。口縁部 側面方向の直角で、口縁部以下外曲面側 方向の直角で、内面側方向で、	普通	ヒヨヒヨ周、10 YRH/3
505	93	26	SB01	土器部	(8.6)	(6.8)	外曲面方向の直角度。内面側 方向の直角度。口縁部側面方向の直角度。	普通	ヒヨヒヨ周の底面、秆部、 茎部を含む。
506	93	26	SB01	土器部、底	(8.6)	(6.8)	外曲面方向の直角度。内面側 方向の直角度。口縁部側面方向の直角度。	良好	底、7.5YRH/6
507	93	26	SB01	土器部、棒 型器	(20.2)	(10.5)	外曲面方向のハサ。内面側直角 度。口縁部側面方向の直角度。	良好	ヒヨヒヨ周、7.5 YRH/4
508	93	26	SB01	土器部、底	(10.6)	(8.1)	外曲面側方向の直角で、内面側 直角度。口縁部側面方向の直角で、内面側 方向の直角度。	普通	ヒヨヒヨ周、5 YRH/6
509	96	27	SD02	棒生	(20.4)	(7.2)	外曲面側方向の直角度。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向のハサ。内面側方向の直角度。 内面側方向の直角度。口縁部側面方向の直角度。	普通	ヒヨヒヨ周、5 YRH/6
510	96	27	SB02	土器部、底	(20.4)	(7.2)	外曲面側方向の直角度。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向のハサ。内面側方向の直角度。 内面側方向の直角度。口縁部側面方向の直角度。	普通	底、7.5YRH/6
511	96	27	SD02	土器部	(15.4)	(6.8)	外曲面側方向のハサ。内面側、直 角度。口縁部側面方向の直角度。	普通	ヒヨヒヨ周、5 YRH/6
512	96	27	SD02	土器部、底	(15.4)	(6.8)	外曲面側方向のハサ。内面側、直 角度。口縁部側面方向の直角度。	良好	底、7.5YRH/6
513	96	27	SB02	土器部、棒 型器	(15.8)	(6.8)	外曲面側方向の直角度。内面側、直 角度。口縁部側面方向の直角度。	普通	底、7.5YRH/6
514	97	27	SB02	土器部、底	17.5	(19.6)	外曲面側方向の直角度。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/6
515	97	27	SB02	頂点部、底	(2.3)	(2.3)	外曲面側方向の直角度。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
516	99	28	SD03	土器部	(5.3)	(5.3)	外曲面側方向の直角度。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、7.5YRH/6
517	99	28	SB03	土器部	(10.8)	(8.8)	外曲面側方向の直角度。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	普通	ヒヨヒヨ周、5 YRH/6
518	99	29	SD03	土器部	(8.8)	(8.8)	外曲面側方向の直角度。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、7.5YRH/6
519	99	29	SD03	土器部	(5.3)	(5.3)	外曲面側方向の直角度。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	普通	ヒヨヒヨ周、5 YRH/6
520	99	29	SD03	底部部	(8.8)	(8.8)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
521	99	29	SD03	底部部	(11.8)	(11.8)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	普通	ヒヨヒヨ周、5 YRH/6
522	99	29	SD03	底部部	(11.8)	(11.8)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
523	99	29	SD03	底部部、底	(17.2)	(14.4)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
524	99	29	SD03	底部部、底	(6.0)	(2.2)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
525	99	29	SD03	底部部	(16.8)	(16.8)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
526	99	29	SD03	底部部	(12.3)	(8.1)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
527	99	29	SD03	底部部	(11.4)	(11.5)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
528	100	29	SD03	底部部、底	(24.4)	(19.2)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
529	100	29	SD03	底部部、木 蓋	8.0	(21.9)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
530	100	29	SD03	底部部	(16.8)	(16.8)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	普通	ヒヨヒヨ周、2.5 YRH/2
531	100	29	SD03	底部部	(14.6)	(2.0)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
532	100	29	SD03	底部部、合 成部	(15.4)	(7.8)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
533	100	29	SD03	底部部、合 成部	(19.1)	(16.2)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
534	105	29	SD01	底部部、底	(14.4)	(14.4)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
535	105	29	SD01	底部部	(8.6)	(11.1)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
536	105	29	SD01	底部部、底	(8.2)	(4.0)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
537	105	29	SD01	底部部	(10.5)	(8.8)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
538	105	29	SD01	底部部	(8.8)	(8.8)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
539	105	29	SD01	底部部、底	(9.4)	(6.4)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
540	105	29	SD01	底部部	(14.4)	(14.4)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
541	105	29	SD01	底部部	(6.0)	(2.7)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
542	105	29	SD01	底部部	(5.4)	(3.6)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
543	105	29	SD02	底部部	(8.3)	(2.0)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
544	105	29	SD02	底部部	(8.3)	(2.0)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
545	105	29	SD03	底部部、底	(14.2)	(1.9)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。 内面側方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
546	105	29	SD03	底部部	(5.4)	(2.6)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
547	105	29	SD03	底部部	(5.4)	(2.6)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2
548	105	29	SD03	底部部	(5.4)	(2.6)	外曲面側方向へ向かう傾斜。内面側 直角度。口縁部側面方向の直角度。	良好	底、2.5YRH/2

第18表 野谷遺跡Ⅲ区土器その他観察表(2)

No.	測定 No.	測定 No.	出土地	種類・器形	縦径 (mm)	横径 (mm)	高さ (mm)	断面	割形・調査	底土	地成	色 号	備考
550	116	30	SK12	山高崎	15.1	5.4	6.1	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	洪武、2.5YR/3	構成重ね起立質	
551	116	30	SK14	山高崎		(4.4)		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	洪武、2.5YR/1	内面糊	
552	116	30	SK17	鳴文				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4		
553	116	30	SK18	鳴文	(5.0)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4		
554	116	30	SK18	山高崎	(7.9)	(4.2)	1.2	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	洪武、2.5YR/1	内面糊	
555	116	30	SK18	山高崎		(4.6)		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4		
556	116	30	SK18	山高崎		56.87		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4		
557	116	30	SK18	鳴文		(3.6)		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4		
558	116	30	P23	鳴文		(4.5)		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4	内面糊化物質 有効	
559	116	30	P23	鳴文	(4.2)	7.8		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4		
560	116	30	P23	鳴文	(3.5)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4		
561	116	30	P23	鳴文	(17.3)	(7.9)	(4.7)	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/2		
562	116	30	P23	鳴文	(14.6)	4.4	(6.4)	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/2		
563	119	30	P23	鳴文	(29.0)		(17.5)	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/2		
564	119	30	P41	鳴文				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の基盤をいくつか含む。	良好	1.5YR/4	自然灰	
565	119	30	SU01	土師器、板	21.5	(39.4)	28.6	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以上の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/4		
566	119	30	SU02	土師器、板	(9.4)	(4.4)	(1.0)	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
567	119	30	SU02	山高崎	(4.0)	(2.4)	(0.8)	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	内面糊化物質 有効	
568	119	30	SU02	山高崎	(5.0)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/1		
569	119	30	SU02	山高崎	(13.0)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/1		
570	122	31	SK01	鳴文	(3.6)	9.1		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
571	122	31	SK01	山高崎				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	自然灰	
572	122	31	SK01	山高崎、板	(7.3)	(4.1)	0.9	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/1	自然灰	
573	122	32	SK02	鳴文				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
574	122	32	SK02	鳴文	(21.4)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
575	122	32	SK02	鳴文				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
576	122	32	SK02	鳴文		(4.5)		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	自然灰	
577	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	自然灰	
578	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	自然灰	
579	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	自然灰	
580	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	自然灰	
581	122	31	SK02	土師器、小	(11.3)	4.4	8.0	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	内外面糊化物質 有効	
582	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
583	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
584	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
585	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
586	122	32	SK02	土師器				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
587	122	32	SK02	土師器	(2.3)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
588	122	32	SK02	土師器、板	(6.4)	(1.5)		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	内外面糊	
589	122	32	SK02	土師器、板	(1.6)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
590	122	32	SK02	土師器、板	(1.9)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
591	122	32	SK02	土師器、板	(2.7)			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
592	122	32	SK02	土師器	(12.2)	(1.5)		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
593	122	32	SK03	土師器、板	(11.6)	(3.1)		外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	自然灰	
594	122	32	SK03	土師器、板				外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
595	122	32	SK03	土師器、板	10.1			外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
596	122	31	SK02	土師器、板	(13.3)	(9.9)	(3.6)	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
597	122	31	SK02	土師器、板	14.2	3.2	8.7	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
598	122	31	SK02	土師器、板	13.7	9.6	3.6	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2		
599	122	31	SK02	土師器	12.2	6.5	3.8	外輪削除部で、底付内凹窓	底付、2 mm以下の岩石を数個含む。	良好	1.5YR/2	同心状の巻き上げ形あり。	

第18表 野籠遺跡III区土器その他観察表(3)

番号	地名	地層	地質	寸法	底径	高さ	断面	測定	地成	色調	備考
600	124	31	SX02	須佐部	6.2	5.2	2.6	外側斜面削離で、底部外周部に 内側斜面削離で、底部内周部に 内側斜面削離で、底部外周部へ 2段	良好	灰、IVY6/1	
601	124	31	SX02	須佐部、磯	(21.4)	6.1	13.0	外側斜面削離で、底部内周部へ 内側斜面削離で、底部外周部へ 2段	良好	灰質、2.SY7/2	
602	124	32	SX02	須佐部、磯	(18.2)			外側斜面削離で、底部外周部へ 内側斜面削離で、底部外周部へ 2段	普通	明灰、1.7VR8/1 10.5、SYR8/ 物、2.5	相模川、米原 津守
603	124	31	SX07	須佐部				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、SY7/1 7/4	内外窓一部缺
604	124	31	SX09	須佐部、林				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、SY7/1	
605	124	31	SX10	土師				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	普通	灰、SY7/1 10.5、SYR8/ 物、2.5	相模川、米原 津守
606	125	33	II-B	須佐部、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、SY7/1	
607	124	31	SX10	土師				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	普通	灰、SY7/1 10.5、SYR8/ 物、2.5	相模川、米原 津守
608	125	33	II-B	須佐部、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、SY7/1	
609	125	33	24c	須佐	(6.6)			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	内底扇形付着
610	125	33	II-B	須佐	須佐	(6.6)		外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	普通	灰、7.SYR5/ 6	
611	125	33	II-B	須佐	須佐	(2.5)		外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	普通	灰、7.SYR5/ 6	
612	125	33	II-B	須佐	須佐			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、SYR5/6 10.5、SYR8/ 物、2.5	相模川、米原 津守
613	125	33	II-B	須佐	須佐			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、SYR5/6 10.5、SYR8/ 物、2.5	相模川、米原 津守
614	125	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	相模川、米原 津守
615	125	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	相模川、米原 津守
616	125	33	II-B	須佐	須佐			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	相模川、米原 津守
617	125	33	24c	須佐、磯	(37.0)			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
618	126	33	II-B	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	普通	灰、7.5SYR6/6	本邦
619	125	33	24d	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、SYR6/6	相模川、米原 津守
620	125	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
621	125	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、SYR6/6 10.5、SYR8/ 物、2.5	
622	125	33	25c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
623	125	33	24c	須佐、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
624	126	33	22c	須佐	(6.2)			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	成城成村
625	126	33	II-B	須佐	須佐	(5.3)		外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6 10.5、SYR8/ 物、2.5	
626	126	33	II-B	須佐	須佐	(4.5)		外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6 10.5、SYR8/ 物、2.5	御殿山、赤形
627	126	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
628	126	33	24c	須佐		(1.7)		外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
629	126	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	御殿山、赤形
630	126	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
631	126	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
632	126	33	24c	須佐				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	
633	127	34	II-B	須佐	須佐			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	御殿山、赤形
634	127	34	23b	七郎部、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.SYR6/6	内底白色、底化 物付着
635	127	34	25d	土師器、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
636	127	34	24c	土師器、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
637	127	34	24c	土師器、磯	(22.4)			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	普通	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
638	127	34	24c	土師器、磯	(21.0)			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	普通	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
639	127	34	24c	土師器、磯	(6.4)			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
640	128	34	24c	土師器				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
641	128	34	24c	土師器				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
642	128	34	24c	土師器				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
643	128	35	25d	上絹器、磯	8.2	16.3		外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
644	129	35	24c	須佐部、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
645	129	35	22a	須佐部、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
646	129	35	25d	土師器、磯	(2.0)			外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着
647	129	35	25d	須佐部、磯				外側斜面削離で、内側斜面削離で、 底部外周部へ	良好	灰、7.5SYR6/6	内底白色、底化 物付着

第18表 野谷遺跡III区土器その他観察表(4)

No.	地名	出土地	経緯・特徴	寸法 (cm)	実測高さ	単位・測定	約束	地城	色調	備考		
648	129	35	25℃	須志原、城	(2.2)	外周回転ヘラ削り、内面回転削り	底、1.5m以下のお石をわずかに含む。	良好	黄灰、2.5VS1			
649	129	35	24℃	須志原、城	(2.4)	外周回転ヘラ削り、内面回転削り	底、1.5m以下のお石をわずかに含む。	良好	灰灰、2.5Y6/2			
650	129	35	25℃	須志原、城	(3.1)	外周回転ヘラ削り、内面回転削り	底、1.5m以下のお石をわずかに含む。	良好	灰灰、2.5Y6/1	佐治町、高		
651	129	35	24℃	須志原、城	(2.6)	外周回転ヘラ削り、内面回転削り	底、1.5m以下のお石をわずかに含む。	良好	黄灰、2.5VS1			
652	129	35	25℃	須志原、城	(3.6)	外周回転ヘラ削り、内面回転削り	底、1.5m以下のお石をわずかに含む。	良好	黄灰、2.5VS1			
653	129	35	24℃	須志原、城	(1.6)	外周回転ヘラ削り、内面回転削り	底、1.5m以下のお石をわずかに含む。	良好	黄灰、2.5VS1			
654	129	35	22℃	須志原、城	(2.17)	外周回転削り	底、1.5m以下の長い石をわずかに含む。	良好	灰灰、10VR4/1	土器下に茶葉		
655	129	36	25℃	須志原、城		外周回転削り	底、1.5m以下の長い石をわずかに含む。	良好	灰灰、2.5VS1	11mm断片		
656	129	35	22℃	須志原、城	(2.9)	外周回転ヘラ削り、内面回転削り	底、1.5m以下の長い石をわずかに含む。	良好	灰灰、2.5VS1	外周回転削りの 長い石有機物付		
657	129	36	21℃	須志原、城		外周回転削りの端面、耳の部分が削り落とし、内面回転削り	底、2.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、10.10			
658	129	36	21℃	須志原、城	(4.8)	外周回転削り	底、2.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5Y4/1	外周と内面に凹		
659	129	36	21℃	須志原、城	(8.32)	外周回転削り、内面回転削り	底、2.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5Y4/2	に凸		
660	129	36	21℃	須志原、城	(10.2)	外周回転削り、内面回転削り	底、2.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5Y4/3			
661	129	36	24℃	須志原、城	(9.43)	外周回転削り、内面回転削り	底、2.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5Y6/2			
662	129	36	25℃	須志原、城	(0.6)	外周回転削り、内面回転削り	底、1.5mの長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2			
663	129	36	18℃	須志原、城	(0.42)	外周回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、1.10			
664	129	36	25℃	須志原、城	(1.08)	外周回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2			
665	129	36	25℃	須志原、城	2.4	外周回転削りへうりきり、丸引削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、10VS1			
666	129	36	24℃	須志原、城	(12.4)	外周回転削りへうりきり、丸引削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1			
667	129	38	23℃	須志原、城	12.6	3.2	外周回転削り、底部外周削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	完全	
668	129	36	10.5	須志原、城	(12.4)	(7.23) 3.8	内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1		
669	129	36	25℃	須志原、城	(11.6)	内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2			
670	130	36	25℃	須志原、城	(3.6)	(1.4)	内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2		
671	130	36	29℃	須志原、城	(7.2)	内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	外周部少し、底		
672	130	36	25℃	須志原、城		外周回転削り、底部外周削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	底黒色、		
673	130	36	24℃	須志原、城	16.0	(1.1)	外周回転削りへうりきり、内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	付生付灰	
674	130	36	25℃	須志原、城	13.3	10.5	3.2	外周回転削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、10.7.3	
675	130	37	25℃	須志原、城	(20.2)	(6.77)	外周回転削りへうりきり、内面回転削りへうりきり、1.5mへ	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2		
676	130	37	25℃	須志原、城	(17.0)	(3.4)	外周回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2	外周回転削り、反	
677	130	37	24℃	須志原、城		(3.6)	外周回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2	-90.0付生付灰	
678	130	37	25℃	須志原、城		内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、10VS1	底出灰		
679	130	37	24℃	須志原、城	(17.5)	(9.3)	2.8	外周回転削りへうりきり、内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	
680	130	37	24℃	須志原、城	(16.2)	5.6	7.8	内面回転削りで、底部外周削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2	
681	130	37	25℃	須志原、城	18.0	(8.0)	(3.6)	内面回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、5M7/1	底の土の付生付灰
682	130	37	23℃	須志原、城	11.3	6.5	3.5	外周回転削り、内面回転削りへうりきり、丸引削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、7.5VS1	底の土の付生付灰
683	130	37	25℃	須志原、城	(6.0)	(3.2)	外周回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、7.5VS1	外周部に付生付灰	
684	130	37	24℃	須志原、城	(14.9)	(7.1)	1.7	外周回転削りへうりきり、内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、7.5VS1	底上より付生付灰
685	131	38	23℃	山根原、城	7.6	5.2	1.6	外周回転削り、内面回転削りへうりきり	底、1.5m以上の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	
686	131	38	24℃	山根原、城	(8.1)	(5.6)	2.9	外周回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	
687	131	38	24℃	山根原、城	(8.8)	(2.7)	2.6	外周回転削りへうりきり、内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、5M7/2	山古岱残灰
688	131	38	24℃	山根原、城	(8.4)	2.6	2.6	外周回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS2	
689	131	38	24℃	山根原、城	(10.4)	2.6	2.6	外周回転削りで、底部外周削りへうりきり、鉛鉱削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS3	
690	131	38	24℃	山根原、城	(7.4)	(1.6)	外周回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.3VS1		
691	131	38	24℃	土師	(3.1)	1.7	1.7	土師原、外周回転削りへうりきり、内面回転削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、7.5VS1	
692	131	38	25℃	土師	(11.5)	(4.3)	外周回転削りで、内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、7.5VS1		
693	131	38	24℃	土師	(11.5)		4.3	外周回転削りで	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、7.5VS1	
694	131	38	25℃	土師	(4.6)	4.6	4.6	外周回転削りで、内面回転削り	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、7.5VS1	2箇所上工の痕
695	131	39	24℃	土師	(8.1)	(5.5)	2.9	内面回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、7.5VS1	外周回転削りの中央に 直線的な内側へうりきり
696	131	39	24℃	土師	(7.8)	(2.9)	2.9	内面回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	内側へうりきり
697	131	39	20X	中近原、城	(11.2)	(4.6)	5.6	内面回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、5VS1	
698	131	39	20X	中近原、城		(4.2)	(2.6)	内面回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	外周回転削り 内側へうりきり
699	131	39	19Y	中近原、城	(26.2)	(19.0)	(16.5)	内面回転削りで、底部外周削りへうりきり	底、1.5m以下の長い石を含む。	良好	灰灰、2.5VS1	外周回転削り 内側へうりきり

第18表 野笠遺跡III区土器その他観察表(5)

No.	標高 m	調査 年	出土地 名	地質・岩種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	断面・調査	胎土	焼成	色調	備考
700	132	19Y	中近世、便	(23.13) (14.0)	17.0	11.0	10.0	圓錐形で、口縁、両台面削り出し	良好 良、径1.5m以下の長石をわずかに含む。	良好	灰白、灰白、10 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 4/2, 4/3, 4/4 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 6/1, 6/2, 6/3 YR 7/1, 7/2, 7/3	夷隅高地に分布する 黄褐色の粘土質砂質土。内面 削り出し、外側斜面 に凹凸がある。
701	132	19Y	中近世、な	(20.25)	11.0	11.0	10.0	内面削り出し物で、口、取っ手は 無く、平行	良好 良、径1.5m以下の長石をわずかに 含む。	良好	灰白、灰白、10 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 4/2, 4/3, 4/4 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 6/1, 6/2, 6/3 YR 7/1, 7/2, 7/3	夷隅高地に分布する 黄褐色の粘土質砂質土。内面 削り出し、外側斜面 に凹凸がある。
702	132	19Y	中近世、ト モ	2.3 (11.0)	残存	取手無 (10.4)	10.0	取手、貼り付け部削りえん、ハケ 有、径1.5m以下の長石をわずかに含む。	良好 良、径1.5m以下の長石をわずかに含む。	良好	灰白、灰白、10 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 4/2, 4/3, 4/4 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 6/1, 6/2, 6/3 YR 7/1, 7/2, 7/3	夷隅高地に分布する 黄褐色の粘土質砂質土。内面 削り出し、外側斜面 に凹凸がある。
703	132	20X	中近世、な	(25.7)	11.0	11.0	10.0	内面削り出し物で、内面削り出 しの内側	良好 良、径1.5m以下の長石、粘土を 含む。	良好	灰白、灰白、10 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 4/2, 4/3, 4/4 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 6/1, 6/2, 6/3 YR 7/1, 7/2, 7/3	夷隅高地に分布する 黄褐色の粘土質砂質土。内面 削り出し、外側斜面 に凹凸がある。
704	132	19X	中近世、煙 草器	(35.7)	14.0	10.0	10.0	圓錐形で、底盤S.5cmの削り口 有、径1.5m以下の長石、粘土、チー トを含む。	良好 良、径1.5m以下の長石をわずかに 含む。	良好	灰白、灰白、10 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 4/2, 4/3, 4/4 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 6/1, 6/2, 6/3 YR 7/1, 7/2, 7/3	18世紀終わりに より、中近世、内面削 り出し。
712	134	40	TP05	陶文				外曲面削り出し文・網文・滑面 文、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側	不良品 良、径1.5m以下の長石、石 英、粘土を多く含む。	良通	4.5 4.5YR 4/4	口縁端片
713	134	40	TP01	鉢生				外曲面削り出し文・網文・滑面 文、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側	不良品 良、径1.5m以下の長石、石英、粘 土を多く含む。	良通	4.5 4.5YR 4/4	
714	134	40	TP01	土器部				外曲面削り出し文・網文・滑面 文、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側	良通 良、底盤S.5cmの削 り口、内面削り出 しの内側	良通	4.5 4.5YR 4/4	
715	134	40	TP01	土器部、深	7.0			外曲面削り出し文・網文・滑面 文、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側	良好 良、径1.5m以下の長石、砂 岩削り出しの内側を多く含む。	良好	灰白、灰白、10 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 4/2, 4/3, 4/4 YR 5/1, 5/2, 5/3 YR 6/1, 6/2, 6/3 YR 7/1, 7/2, 7/3	
716	134	40	TP01	皿系群				内面削り出しヘラ削り	良好 良、径1.5m以下の長石をわずかに 含む。	良好	灰白、4.5 4.5YR 4/4	
717	134	40	TP01	皿系群、杯	(15.4)	12.1	10.0	内面削り出しヘラ削り、内面削 り出しの内側	良好 良、径1.5m以下の長石をわずかに 含む。	良通	4.5 4.5YR 4/4	
718	134	40	Ty07	直立器				外側削り出しヘラ削り、貼り付け高 台	良好 良、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側	良好	灰白、2.5YR 7/2	
719	134	40	TP01	皿系群、輪	11.0	(2.9)		内面削り出しヘラ削り、内面削り出 しの内側	良好 良、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側を多く含 む。	良好	灰白、2.5YR 7/2	
720	134	40	TP06	直立器				内面削り出しヘラ削り、貼り付け高 台	良好 良、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側を多く含 む。	良好	灰白、4.5 4.5YR 4/4	
721	134	40	TP06	直立器				内面削り出しヘラ削り、貼り付け高 台	良好 良、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側を多く含 む。	良通	灰白、2.5YR 7/2	
722	134	40	TP01	山形瓶	(6.2)			内面削り出し頭部で、貼り付け高 台	良好 良、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側を多く含 む。	良好	灰白、2.5YR 7/2	
723	134	40	TP01	山形瓶	(7.6)			底部削り出し切り、貼り付け高 台	良好 良、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側を多く含 む。	良好	灰白、2.5YR 7/2	
724	134	40	TP01	山形瓶				底部削り出し切り、貼り付け高 台	良好 良、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側を多く含 む。	良好	灰白、2.5YR 7/2	
725	134	40	TP01	山形瓶				内面削り出し頭部で、貼り付け高 台	良好 良、底盤S.5cmの削り口、内面削 り出しの内側を多く含 む。	良好	灰白、2.5YR 7/2	

第19表 赤池4号古墳土器観察表

No.	標印	標印	地主	種類	形	色調	備考	
	標印	標印	地主	種類	形	色調		
801	141	43	周溝	縫文	口縫外側面の魚鱗	小字記。底1mm以下の粒石、石炭を多く。底3mm以下の粒石を幾つ	普通 良好 YR7/6 10 10	口縫成り、微細 10mm
802	141	43	周溝	縫文	内外面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	普通 YR7/6 10 10	口縫成り、微細 10mm
803	141	43	周溝	縫文	内外面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	普通 YR7/6 10 10	口縫成り、微細 10mm
804	141	43	周溝	縫文、縫跡	内外面側面で、口縫外側面真に よる断面で	やや細。底2mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
805	141	43	周溝	縫文	内外面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
806	141	43	周溝	縫文、縫跡	内外面側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
807	141	43	周溝	縫文	内外面側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
808	141	43	周溝	縫文	内外面側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
809	141	43	周溝	縫文、縫跡	内外面側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
810	141	43	周溝	縫文	内外面側面で、内面側面で。	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
811	142	43	周溝	縫文	内外面側面、内面側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
812	142	43	周溝	縫文、縫跡	内外面側面、斜方側面の基部、内面側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
813	142	43	周溝	縫文、縫跡	内外面側面の基部、内面側面斜方側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
814	142	43	周溝	縫文	内外面側面で、斜方側面で、内面側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
815	142	43	周溝	縫文、縫跡	内外面側面で、斜方側面で、内面側面で	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10 10	口縫成り、微細 10mm
821	149	43	石室内	縫文部、字	4.8 4.0 12.5	内外面側面で	底1mm以下の粒石をわずか	良好 GMA 7.5YR7/1 自然地、物だま
822	149	42	石室内	縫文部、高	9.6 9.0 9.8	底部内面側面をへきり取り、底面	底1mm以下の粒石をくづかせる。	普通 GMA 7.5YR7/1 内外面側面、底面
823	149	42	石室内	縫文部、字	8.9 5.4 5.5	内外面側面の抜くで、指輪状	やや粗。底1mm以上の粒石、石炭を多く含む。	良好 GMA 7.5YR7/6 10mm
824	150	43	石室内	縫文部、高	11.2 8.4 7.1	斜面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	普通 GMA 10YR6/1
825	150	41	石室内	縫文部、高	11.1 8.5 8.0	内外面側面による凹面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 GMA 9G5/1
826	150	41	石室内	縫文部、高	10.9 8.5 8.1	内外面側面による凹面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 GMA 10G5/1
827	150	41	石室内	縫文部、高	10.9 8.1 7.2	底部内面側面をへきり取り、底面	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 GMA 7.5YR6/1
828	150	41	石室内	縫文部、高	11.4 8.5 7.6	凹面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	普通 GMA 10G5/1
829	156	41	心室內	縫文部、高	10.6 7.8 7.5	底部内面側面をへきり取り、底面	底1mm以下の粒石をくずかせる。	普通 YR6/4 2.5YR6/1
830	151	42	心室內	縫文	8.7	内外面側面、内面側面基部に縫	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 GMA 7.5YR7/6 10mm
831	151	42	心室內	縫文、縫跡	8.7	内外面側面の縫跡、以降縫痕部	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 7.5 底面凹縫跡
832	151	42	石室内	縫文	8.7	内外面側面4本、内面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 10mm
833	154	42	石室内	縫文、縫跡	8.7	内外面側面で	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 7.5 底面凹縫跡
834	151	42	石室内	縫文、縫跡	8.7	内外面側面で、内面側面の抜	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 10mm
835	151	42	石室内	縫文、縫跡	8.7	内外面側面、内面側面の抜	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR6/4 10mm
837	151	42	石室内	縫文、縫跡	8.7	内外面側面、内面側面の抜	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 10mm
838	151	42	石室内	縫文、縫跡	8.7	内外側面、開き、内面側面	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 10mm
839	151	42	石室内	縫文	8.7	内外側面大、開き、内面側面	底1mm以下の粒石、石炭を多く含む。	良好 YR7/4 10mm
840	151	42	追加分	縫文、縫跡	8.7	内外面側面の抜み	底1mm以下の粒石を多く含む。	良好 YR6/4 10mm
841	151	42	追加分	山形鈴、尾	(3.6) (1.0)	内外面側面をへきり取り	底1mm以下の粒石をわずかに含む。	良好 YR6/4 2.5YR7/2

第20表 野籠遺跡II区石器観察表(1)

番号	地図No.	認定No.	石材	出土地	時期	形態	石材	素材形態	素材技術	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	備考	
12	14	9	石頭	S801	弥生	有茎石頭	下凹石	小崩	不明	19.0	17.9	4.6		
13	14	9	石頭	S801	弥生	有茎石頭	磨石	小崩	不明	37.0	14.8	7.8		
14	14	9	石頭	S801	弥生	有茎石頭	下凹石	不明	小崩	43.0	15.0	6.7		
15	14	9	石頭	S801	縄文?		磨石	円盤	なし	39.4	60.8	40.3		
16	14	9	石片	S801	弥生?		花崗岩	不規	不明	114.3	69.2	60.9		
17	14	9	敲き石	S801	弥生?		珪質砂岩	円盤	なし	181.3	146.7	33.2	複合	
18	14	9	敲き石	S801	弥生?		珪質砂岩	円盤	なし	129.9	100.5	47.0		
19	14	9	敲き石	S801	弥生?		珪質砂岩	円盤	なし	115.7	99.9	78.2		
20	15	9	敲き石	S801	弥生?		珪質砂岩	円盤	なし	239.9	168.0	96.1		
21	15	9	石器	S801	弥生?		珪質砂岩	円盤	小崩	236.1	237.0	74.0		
32	26	10	石頭	S804	弥生	有茎石頭	下凹石	不明	不明	24.3	10.8	4.2		
33	26	10	石頭	S804	弥生	有茎石頭	下凹石	不明	不明	27.3	16.0	6.0		
34	26	10	石核	S804	弥生	平基		剝片	不明	29.7	23.3	11.8	直線打撃の鋸片を素材。素材のわかる好資料。	
35	26	10	打撲石片	S804	縄文	冠状	ホルンフェルス	長長剝片	丸棒打撃	128.2	37.7	14.8		
36	26	10	石核	S804	弥生		下凹石	剝片	不明	43.7	30.5	15.2		
44	29	11	石頭	S805	弥生	有茎石頭	下凹石	不明	不明	22.1	14.3	5.7		
45	29	11	剝片	S805			赤緑岩	剝片	直線打撃	33.1	26.7	9.4		
46	29	11	打撲石片	S805	縄文	地錫	砂岩	長長剝片	直線打撃	105.0	37.1	14.9		
47	29	11	石核	S805	弥生		下凹石	剝片	直線打撃	33.8	32.7	20.0		
63	36	12	石核未製品	S901	弥生		下凹石	剝片	不明	39.6	23.2	10.6		
64	36	12	剝片	S901	弥生		珪質砂岩	剝片	直線打撃	29.3	24.8	7.1		
65	36	12	鉗子	S901	弥生		下凹石	剝片	直線打撃	34.1	36.6	9.5		
77	37	13	石頭	S903	縄文後期?	?ニチュア?	下凹石	不明	不明	265.2	79.6	62.9	円錐形の製作方法でつくるれた有茎石頭の複造品。	
78	37	13	石頭	S903	西高		下凹石	小崩	小崩	15.6	11.8	2.8		
79	37	13	石頭	S903	弥生	有茎石頭	下凹石	不明	不明	25.6	15.5	4.9		
80	37	13	石核未製品	S903	弥生		下凹石	細長剝片	直線打撃	42.1	32.3	8.9		
81	37	13	石核	S903	弥生		下凹石	剝片	直線打撃	53.1	37.3	20.4		
82	37	13	石核	S903	弥生		下凹石	剝片	直線打撃	51.2	41.5	22.1		
83	37	13	石頭	S903	弥生?	切目石頭	砂岩	小圓錐	なし	56.5	27.7	18.4		
84	38	13	石頭	S903	弥生		片岩	種長剝片	直線打撃	161.4	56.9	15.2	刃形を半個、傷を刃溝し加えて整形している。 刃溝左側面に磨耗が見られる。	
85	38	13	打撲石片	S903	縄文	短片	ホルンフェルス	長長剝片	丸棒打撃	84.3	41.6	13.1	G-2	
87	49	15	石頭	S904	縄文後期?	門番	下凹石	不明	不明	(28.0)	18.8	4.3		
95	46	13	石核未製品	S907	弥生		下凹石	種長剝片	直線打撃	43.4	25.7	8.0		
96	46	13	石頭	S907	縄文		砂岩	小円錐	なし	50.0	41.0	9.0		
98	46	13	石核	S909	弥生		下凹石	剝片	直線打撃	77.1	74.6	25.8		
100	46	13	石核未製品	S911	弥生		下凹石	種長剝片	直線打撃	74.2	49.1	15.3		
101	46	13	石核	S911	弥生		下凹石	剝片	直線打撃	41.6	51.6	24.5		
111	41	14	尖端25系製品	SU13	弥生		下凹石	剝片	直線打撃	54.3	44.9	18.7		
112	41	14	剝片	SU13	弥生		下凹石	種長剝片	直線打撃	31.3	26.9	9.7		
115	41	14	石核未製品	SU23	弥生		下凹石	圓錐形剝片	直線打撃	21.8	22.3	8.2		
118	57	14	磨石	SK02	弥生		下凹石	円錐	なし	66.2	47.6	31.2		
119	57	14	磨石	SK02	弥生		下凹石	円錐	なし	65.0	46.5	38.9		
120	57	14	磨石	SK02	弥生		下凹石	円錐	なし	68.6	51.2	43.3		
122	57	14	兩面石核	SK03	弥生		下凹石	円錐	なし	37.8	39.4	12.7		
123	57	14	打撲石片	SK05	縄文	短片	ホルンフェルス	長長剝片	丸棒打撃	106.7	30.6	12.1		
133	58	15	打撲石片	P23	縄文	短片	ホルンフェルス	長長剝片	丸棒打撃	131.9	45.5	11.3		
134	58	15	磨石	P23	弥生?		砂岩	細長剝片	不規	なし	170.1	125.9	86.5	
135	58	15	石頭	P24	弥生?	有茎石頭	下凹石	不明	不明	35.8	15.7	7.4		
153	65	16	石頭	SK01	弥生	有茎石頭	下凹石	不明	不明	(24.4)	14.3	4.1		
157	66	15	石核未製品	SK02	弥生		下凹石	剝片	不明	25.2	18.4	8.1		
158	66	15	剝片	SK02			めのう	種長剝片	直線打撃	30.1	17.8	9.1		
159	66	15	剝片	SK02			赤緑岩	円錐	なし	35.6	58.3	47.5		
169	66	15	石核	SK02	縄文?		赤緑岩	圓錐	なし	27.2	15.8	5.3		
336	78	22	石頭	SX01	+	c	四葉	下凹石	不明	不明	20.2	15.0	2.7	
337	78	22	石頭	SX01	1 e		四葉	下凹石	不明	不明	22.0	13.1	3.3	複合端面
338	78	22	石頭	SX02	+	d	四葉	四葉	不明	17.3	15.4	4.5		
339	78	22	石頭	SX02	+	e	四葉	四葉	不明	26.1	15.9	4.9		
340	78	22	石頭	SX02	+	f	四葉	四葉	不明	20.9	17.7	4.6		
341	78	22	石核未製品	+ 2 c			下凹石	剝片	不明	24.1	18.1	6.0	直線打撃の鋸片を素材。素材のわかる好資料。	
342	78	22	石頭	+ 2 c	弥生?	有茎石頭	下凹石	不明	不明	21.7	16.9	6.1		
343	78	22	石頭	2 c	縄文後期?	有茎石頭	赤緑岩	不明	不明	20.2	14.3	4.6		
344	78	22	石頭	+ 1 b	縄文後期?	有茎石頭	赤緑岩	不明	不明	27.2	15.8	5.3		
345	78	22	石頭	3 c			四葉	下凹石	不明	(27.0)	15.0	4.6		
346	78	22	石頭	1 b	弥生?	有茎石頭	下凹石	不明	不明	24.4	16.9	5.1		
347	78	22	石頭	2 b	縄文	有茎石頭	赤緑岩	不明	不明	24.3	(15.4)	5.4		
348	78	22	石頭	+ 1 c	縄文後期?	有茎石頭	赤緑岩	不明	不明	23.9	15.1	4.3		
349	78	22	石頭	3 d	縄文?	有茎石頭	下凹石	不明	不明	28.2	11.3	5.6		
350	78	22	石核未製品	+ 3 b	弥生?	有茎石頭	下凹石	不明	不明	37.4	23.0	7.1		
351	78	22	石核未製品	1 b	弥生		下凹石	圓錐	直線打撃	32.3	23.7	8.3	石核未製品の好資料。	

第20表 野笠遺跡II区石器観察表(2)

番号	標印No.	肉眼No.	器種	出土地	時期	形態	石材	素材形状	素材技術	記	幅 (mm)	厚 (mm)	備考	
352	78	22	石核	+ 3 f	弥生?	平底	下凹石	刮削片	直線打撃	31.4	22.4	7.8		
353	78	22	石核木製品	- 3 c	弥生?	下凹石	擴長刮片	直線打撃	33.9	24.7	10.5			
354	78	22	石核木製品	+ 2 c	弥生?	下凹石	刮削片	直線打撃	42.5	29.6	12.8			
355	78	22	石核木製品	- 2 b	弥生?	下凹石	直線打撃片	直線打撃	47.0	27.4	11.1	石核木製品の好材料。		
356	78	22	石核木製品	+ 2 c	弥生?	下凹石	直線打撃片	直線打撃	41.7	25.6	9.9			
357	78	22	石核木製品	- 2 b	弥生?	下凹石	刮削片	直線打撃	30.2	23.2	8.4			
358	78	22	石核木製品	- 2 c	弥生?	下凹石	横長刮片	直線打撃	45.7	32.9	10.3			
359	78	22	石核木製品	- 1 b	弥生?	下凹石	横長刮片	直線打撃	50.4	30.9	12.8			
360	79	23	石核	+ 1 c	弥生?	砾石?	刮削片	直線打撃	辛夷石	16.6	5.2	4.7		
361	79	23	石核	+ 1 c	弥生?	砾石?	めのう	刮削片	不規	[19.6]	15.0	8.0		
362	79	23	石核	圓底	弥生?	砾石?	横長刮片	直線打撃	20.5	13.4	4.0			
363	79	23	石核	+ 5 f	弥生?	砾石?	刮削片	直線打撃	38.5	19.2	8.3	彌み付き。		
364	79	23	石核	+ 2 c	弥生?	砾石?	刮削片	直線打撃	38.2	34.6	17.3			
365	79	23	石核	+ 2 b	弥生?	砾石?	刮削片	直線打撃	28.5	30.4	9.0			
366	79	23	ノッチ	+ 1 c	弥生?	砾石?	刮削片	直線打撃	22.7	18.9	6.6			
367	79	23	ノッチ	-	弥生?	砾石?	刮削片	直線打撃	26.9	21.9	7.0			
368	79	23	ノッチ	2 b	弥生?	砾石?	刮削片	直線打撃	29.8	23.5	6.1			
369	79	23	刮削片	1 2 c	彌文?	砾石?	刮削片	直線打撃	18.7	11.9	6.9			
370	79	23	刮削片	3 b	彌文?	砾石?	刮削片	直線打撃	28.1	26.6	7.8			
371	79	23	使用痕刮片	1 2 b	彌文?	砾石?	刮削片	直線打撃	31.8	16.1	9.0			
372	79	23	刮削片	+ 2 c	弥生?	下凹石	横長刮片	直線打撃	41.9	24.8	9.1			
373	79	23	刮削片	- 1 c	弥生?	下凹石	刮削片	直線打撃	31.8	26.9	8.1			
374	80	23	打製石斧	- 3 a	彌文?	短削	ホルンフェルス	橫長刮片	直線打撃	[59.6]	48.5	14.4	刃部は折れ	
375	80	23	打製石斧	+ 5 f	彌文?	短削	ホルンフェルス	直線打撃	90.1	44.2	19.8	刃部の面に刃にかけ左側と右側には剥離が見られる。		
376	80	23	打製石斧	+ 5 f	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	110.6	43.6	19.5	刃部正面に剥離が見られる。	
377	80	23	打製石斧	1 b	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	106.4	43.0	17.5	刃部正面に剥離がみられる。	
378	80	23	打製石斧	+ 3 d	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	132.7	51.5	24.6		
379	80	23	打製石斧	+ 1 a	彌文?	短削	ホルンフェルス	直線打撃	[110.5]	41.9	18.4	刃部先端と両側面に磨耗が見られる。		
380	81	23	打製石斧	- 2 b	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	112.8	42.2	12.1		
381	81	23	打製石斧	- 3 c	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	108.4	42.9	14.3		
382	81	23	打製石斧	+ 5 f	彌文?	短削	ホルンフェルス	直線打撃	102.9	36.2	20.0	右側上面の刃溝と加工が見られる。		
383	81	23	打製石斧	+ 2 b	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	[99.2]	33.2	15.9	削出面に磨耗かられる。	
384	81	24	打製石斧	- 4 e	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	127.8	41.7	20.1	刃部前面と右側面に磨耗かられる。	
385	81	24	打製石斧	+ 4 d	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	[123.3]	43.6	22.8	基部上部と刃部に折れ	
386	82	24	打製石斧	+ 4 d	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	106.7	43.7	14.7		
387	82	24	打製石斧	+ 1 c	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	105.3	(44.9)	21.8	刃部前面側に大らく欠損している。	
388	82	24	打製石斧	+ 3 d	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	[105.5]	43.7	22.7		
389	82	24	打製石斧	- 1 d	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	109.0	48.3	19.4		
390	82	24	打製石斧	+ 3 d	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	119.4	38.6	14.7		
391	82	24	打製石斧	- 1 d	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	121.7	51.5	15.3	両側面に剥離が見られる。特に右側面の袂部分に見られる。斜面は削除によるもの。	
392	83	24	打製石斧	+ 3 f	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	91.1	(39.5)	13.5	左側上面は削除。	
393	83	24	打製石斧	+ 3 c	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	99.5	42.7	11.6		
394	83	24	打製石斧	+ 1 a	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	92.2	39.7	16.0		
395	83	24	打製石斧	+ 5 f	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	91.3	47.7	14.7	刃部に一部磨耗が見られる。	
396	83	24	打製石斧	- 1 c	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	103.5	39.2	15.9		
397	83	24	打製石斧	- 4 f	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	98.2	42.6	11.5	両側面に剥離が見られる。	
398	83	24	打製石斧	+ 2 a	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	[92.6]	35.6	15.1	刃部一部欠損	
399	84	24	打製石斧	+ 1 b	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	95.3	36.1	10.8	変化激しく剝離面の状態不明確。	
400	84	24	打製石斧	- 4 c	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	83.1	42.8	14.9		
401	84	24	打製石斧	+ 2 c	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	[93.5]	36.9	10.1		
402	84	24	打製石斧	- 1 d	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	102.1	38.3	14.5		
403	84	24	打製石斧	+ 3 c	彌文?	短削	ホルンフェルス	横長刮片	直線打撃	110.9	40.5	18.6	刃部前面に剥離。特に左側面が激しい。	
404	84	25	剥離石斧	- 1 c	彌文?	短削	ホルンフェルス	直線打撃	不規	不明	[46.0]	46.0	7.8	
405	85	25	石核	+ 2 d	彌文?	短削	安山岩	直線打撃	177.7	89.0	18.1			
406	85	25	石核	盛土			下凹石	多面削		49.5	(20.0)	11.0	典型的な偽石器。サンブルヒュニ。	
407	85	25	石核	- 3 b	弥生?		下凹石	小川削	なし	45.6	38.4	16.6		
408	85	25	石核	- 1 f	弥生?		下凹石	小川削	なし	30.4	32.5	13.6		
409	85	25	石核	- 1 b	弥生?		下凹石	小川削	なし	33.5	24.6	17.7		
410	85	25	石核	- 4 d	彌文?		石核	小川削	なし	31.4	28.9	20.2		
411	85	25	石核	- 5 f	弥生?		下凹石	直線打撃	54.2	40.9	17.3			
412	85	25	石核	- 5 f	弥生?		下凹石	直線打撃	44.3	45.4	23.8			
413	86	25	石核	3 b	弥生?		下凹石	直線打撃	39.3	41.2	16.1			
414	86	25	石核	+ 2 b	弥生?		下凹石	直線打撃	34.9	43.1	21.1			
415	86	25	石核	+ 2 b	弥生?		下凹石	直線打撃	44.6	34.1	14.3			
416	86	25	石核	+ 2 a	弥生?		下凹石	直線打撃	57.5	31.5	29.8			

第20表 野籠遺跡II区石器観察表(3)

番号	探査No.	回叢No.	器種	出土地	時期	形態	石材	素材形態	素材技術	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	備考
417	86	25	石核	+ 2 e	共生		下呂石	剝片	直接打撃	47.9	49.3	31.0	
418	86	25	石核	+ 5 f	共生		下呂石	剝片	直接打撃	51.6	26.4	18.8	
419	86	25	石核	+ 2 c	共生		下呂石	剝片	直接打撃	54.6	53.6	29.2	
420	86	25	石核	+ 1 a	共生		下呂石	円錐	なし	35.8	39.6	26.4	
421	86	25	石核	+ 5 f	共生		下呂石	剝片	直接打撃	63.6	57.0	29.8	

*石器の観察については、角張源一・高谷勝典両氏の協力を得て作成した。

*測定値の()は、現存値である。

第21表 野籠遺跡III区石器観察表

番号	探査No.	回叢No.	器種	出土地	時期	形態	石材	素材形態	素材技術	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	備考
549	116	30	石核	SK07		円錐	珪岩	不明	不明	22.3	18.0	3.0	
603	124	32	石核	SX02	縄文晚期?	有茎石核	下呂石	不明	不明	36.1	16.7	9.8	
604	124	32	石核	SX02	縄文晚期?	有茎石核	下呂石	不明	不明	25.6	14.7	4.5	
705	133	38	石核	21B'	縄文晚期?	有茎石核	珪岩	不明	不明	(22.7)	15.0	5.6	
706	133	38	石核	25C'		円錐	非珪岩	不明	不明	37.0	(22.1)	4.8	
707	133	38	打製石器	25C'	共生?	敲打器	不明	不明	不明	58.0	29.8	6.4	
708	133	38	打製石器	土壌		質	ホルンフェルス	不明	不明	(93.3)	62.1	11.9	
709	133	38	打製石器	土壌		質	ホルンフェルス	不明	不明	100.4	43.6	18.1	
710	133	38	砾石	25C'	共生?	細粒砂岩	不明	不明	不明	265.2	79.6	62.9	住上砾
711	133	38	石核	土壌	共生	質	片岩	不明	不明	(80.7)	77.6	29.4	刃部折れ。
726	134	40	打製石器	TP 5		質	ホルンフェルス	不明	不明	161.0	49.0	17.0	
727	134	40	打製石器	TP 5		質	ホルンフェルス	不明	不明	139.0	41.0	18.0	
728	135	40	打製石器	TP 5		質	不明	不明	不明	166.0	93.0	17.0	
729	135	40	石核	Tr. 2		円錐	チャート	不明	不明	(31.5)	17.0	5.1	

*石器の観察については、角張源一・高谷勝典両氏の協力を得て作成した。

*測定値の()は、現存値である。

*出土地の TP は試掘坑、Tr. 2 はレンチを表す。

第22表 赤池4号古墳石器観察表

番号	探査No.	回叢No.	器種	出土地	時期	形態	石材	素材形態	素材技術	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	備考
816	142	43	直線刃石器	周溝	共生?		砂岩	剝片	半丸剝離	115.6	159.8	31.8	
817	142	43	打製石器	周溝	縄文?	短質	ホルンフェルス	横長剝片	直接打撃	(22.1)	46.5	12.9	刃部左側辺に擦耗が見られる。正面面抜き部分は筋理に沿う新しい削離。
818	142	43	両面石核	周溝	共生?		下呂石	小円錐	なし	33.2	23.2	12.3	
819	142	43	石核	周溝	縄文?		黒曜石	小円錐	なし	25.0	23.4	14.8	
820	142	43	敲き石	周溝	共生?		硬質砂岩	円錐	なし	116.0	63.0	57.4	
835	151	42	石核	石室		円錐	下呂石	不明	不明	27.6	19.3	4.1	
836	151	42	石核	石室	共生	有茎石核	F石	不明	不明	24.5	14.4	4.1	

*石器の観察については、角張源一・高谷勝典両氏の協力を得て作成した。

*測定値の()は、現存値である。

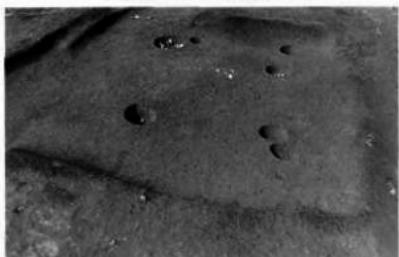
図 版



II区近景（調査前、南西より）



II区堆積状況（調査区東壁、西より）



II区 SB01（南より）



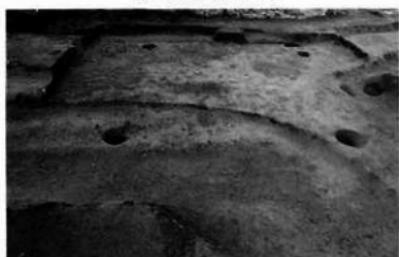
II区 SB01遺物出土状況（北東より）



II区 SB02（北より）



II区 SB02カマド（南西より）



II区 SB03（南より）



II区 SB03カマド（南より）

図版2



II区 SB04（南より）



II区 SB04カマド（南より）



II区 SB05（南より）



II区 SB05遺物出土状況（北東より）



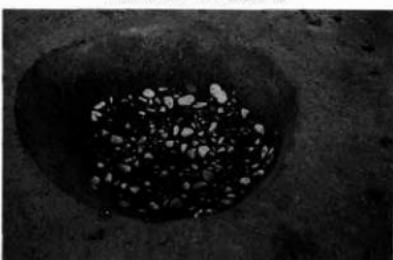
II区 SD01（東より）



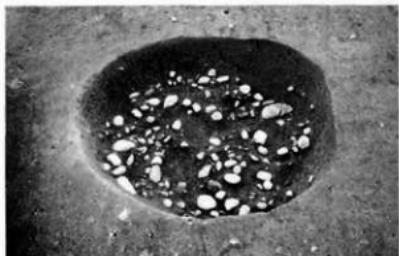
II区 SD09 - 13（南より）



II区 SD10 + 11（西より）



II区 SK02（南から）



II区 P23（西より）



II区 P51遺物出土状況（東より）



II区 SI01（南西より）



II区 SX01（北西より）



II区 SX01遺物出土状況（南より）



II区 遺物出土状況（東より）



II区 遺物出土状況（北より）



II区近景（空撮時北東より）

図版 4



III区近景（調査前北西より）



III a 区堆積状況（南西より）



III a 区 SB01（南より）



III a 区 SB01カマド（南より）



III a 区 SB02（南より）



III a 区 SB02遺物出土状況（南東より）



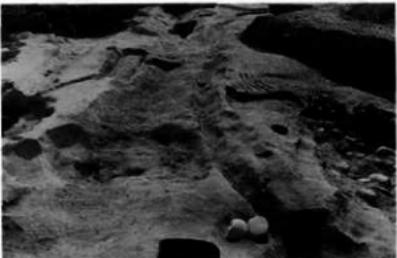
III a 区 SB02カマド（北より）



III a 区 SB03（北より）



III a区 SB03カマド（南より）



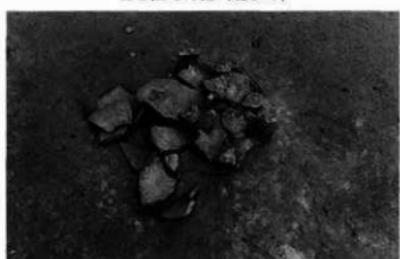
III a区 SD01・03（北西より）



III a区 SX02（北より）



III a区 SX02遺物出土状況（北より）



III a区遺物出土状況（SU01北より）



III a区遺物出土状況（東より）



III a区遺物出土状況（北より）



III a区近景（調査後、北西より）

図版 6



III b区 SD07（南より）



III b区 SX07（北西より）



III b区 SK12（南西より）



III b区 SK12遺物出土状況（南より）



III b区 遺物出土状況（SU02南東より）



III b区 芋穴検出状況（南より）



III b区 近景（調査後）西より



III b区 作業風景



赤池 4 号古墳発見時の状況（北より）



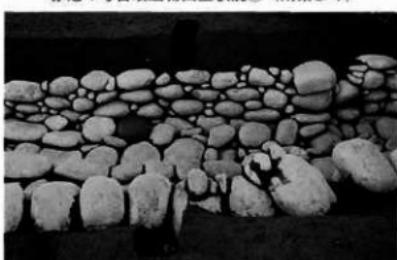
赤池 4 号古墳遺物出土状況①（北西より）



赤池 4 号古墳遺物出土状況②（南東より）



赤池 4 号古墳石室検出状況（北東より）



赤池 4 号古墳石室東側壁（西より）



赤池 4 号古墳石室奥壁（南より）



赤池 4 号古墳石室西側壁①（東より）



赤池 4 号古墳石室西側壁②（東より）

図版 8



赤池 4 号古墳遺物出土状況③（西より）



赤池 4 号古墳石室敷石検出状況①（北より）



赤池 4 号古墳石室敷石検出状況②（北より）



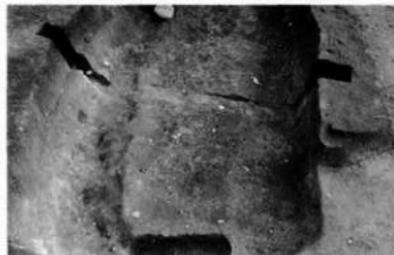
赤池 4 号古墳石室東側壁と基底石（西より）



赤池 4 号古墳石室西側壁と基底石（東より）



赤池 4 号古墳石室基底石（西より）

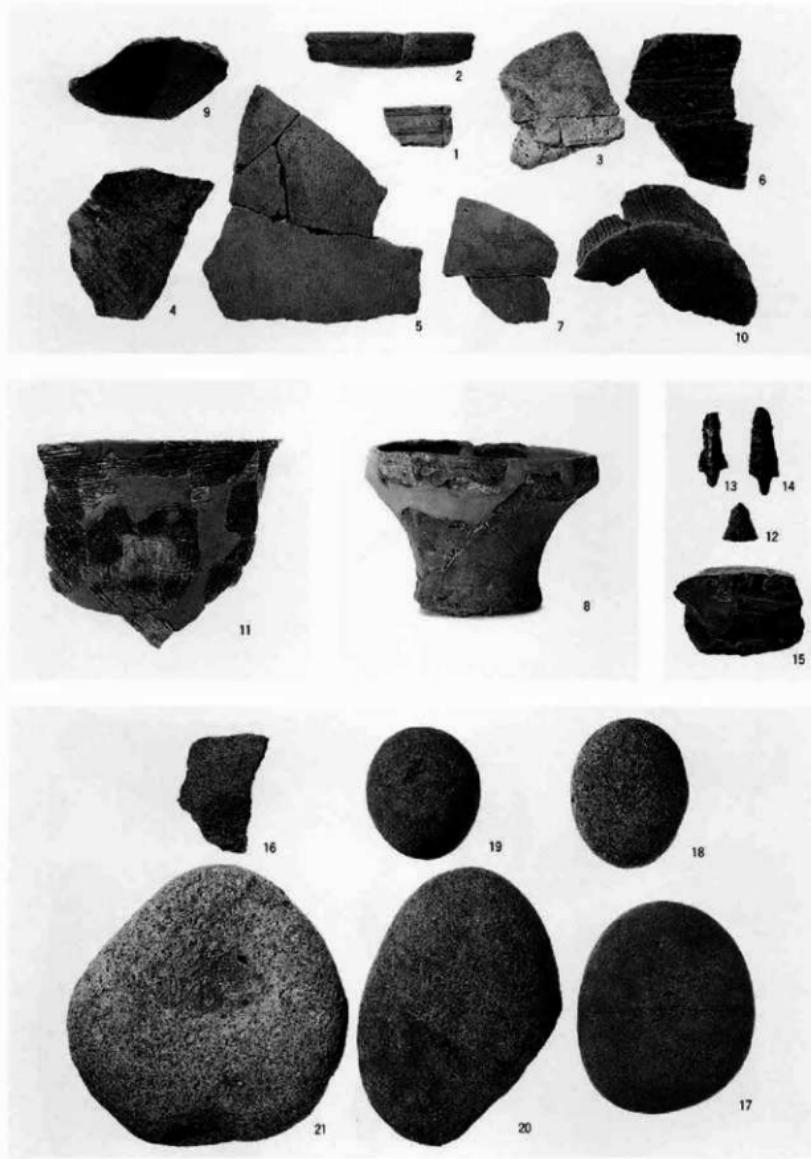


赤池 4 号古墳石室墓坑（北より）



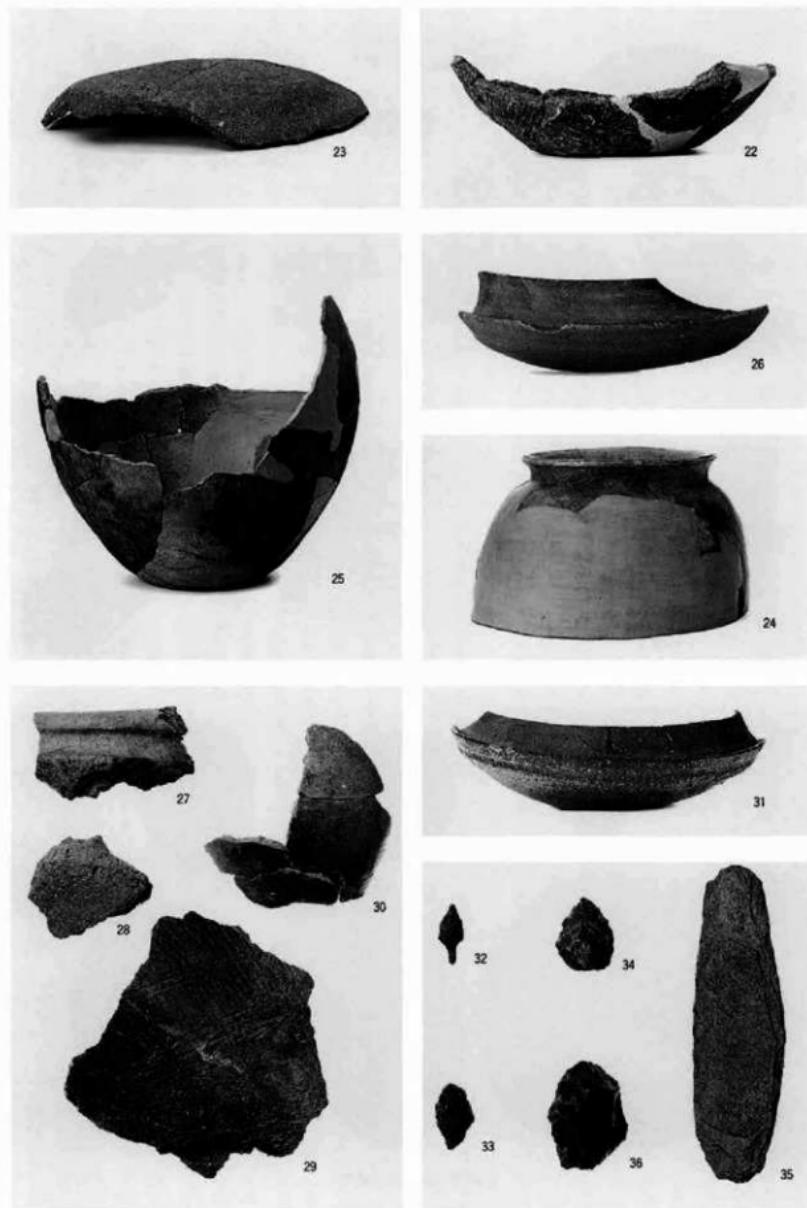
赤池 4 号古墳石室追加調査区（北西より）

図版 9



NZ II - SB01出土遺物

図版10

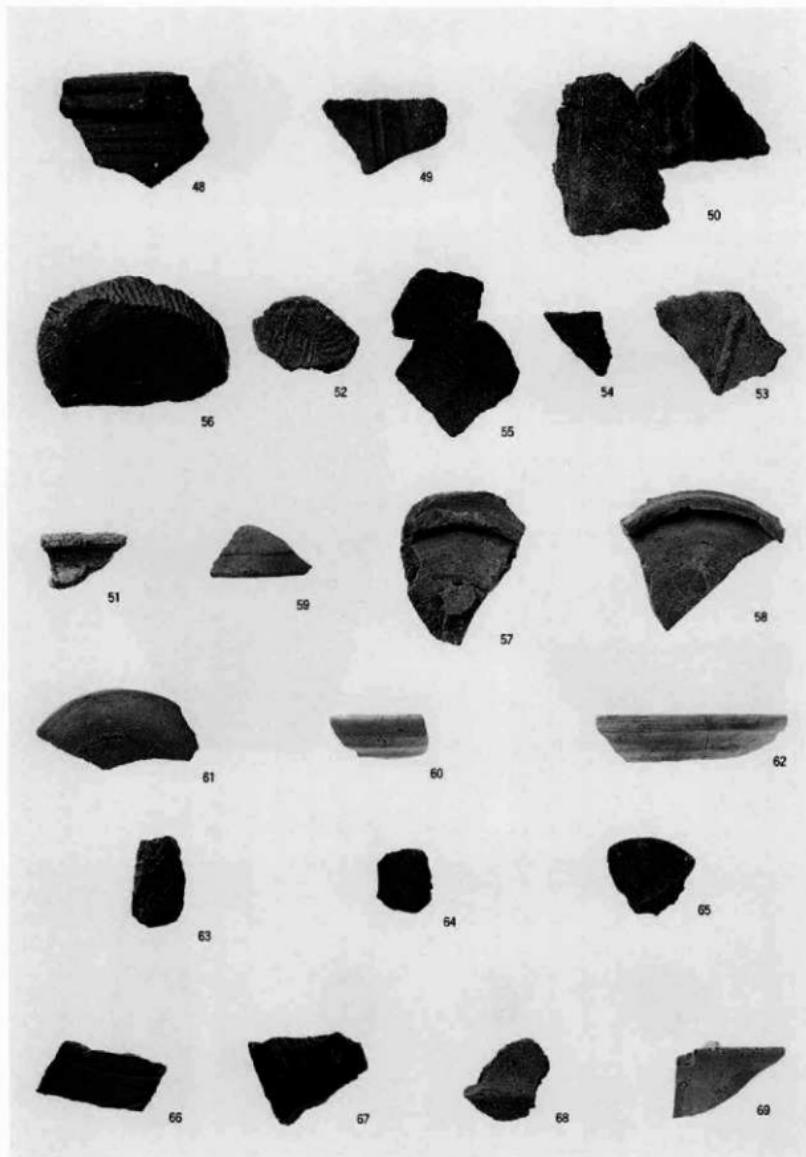


NZ II -SB02・03・04出土遺物

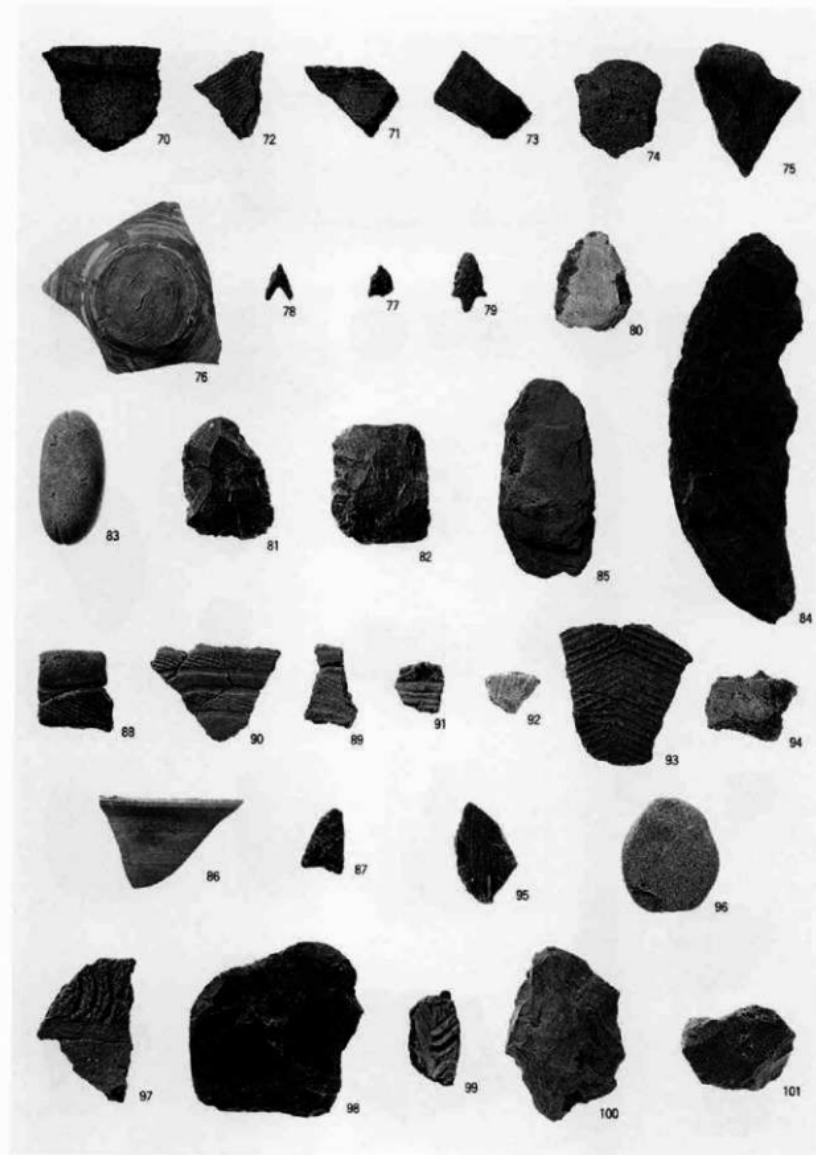


NZ II-SB05出土遺物

図版12

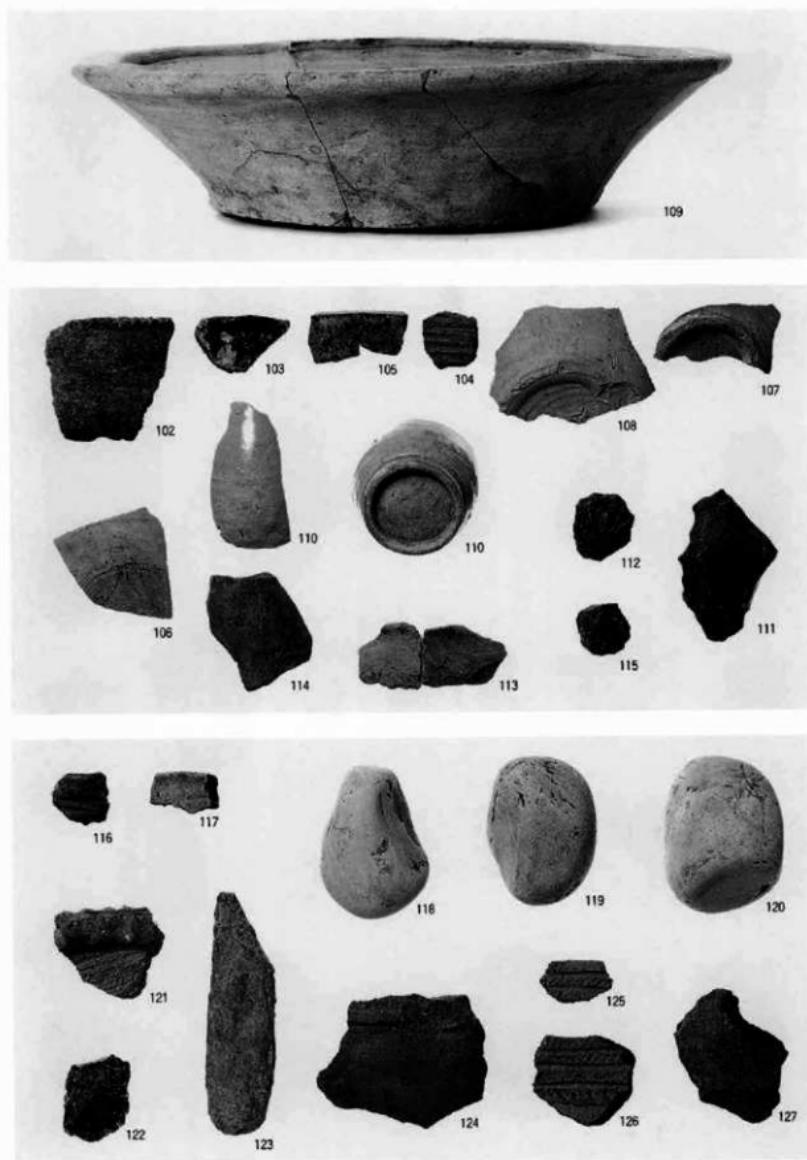


NZ II -SD01・02出土遺物

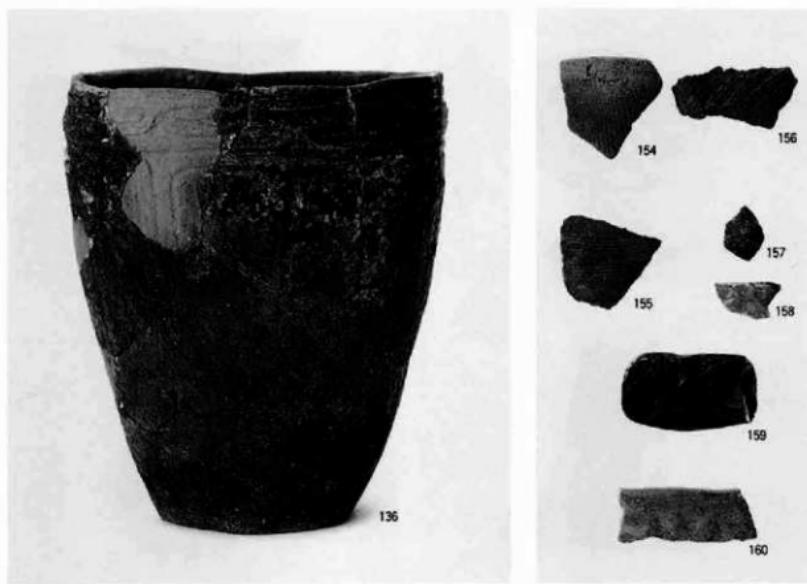
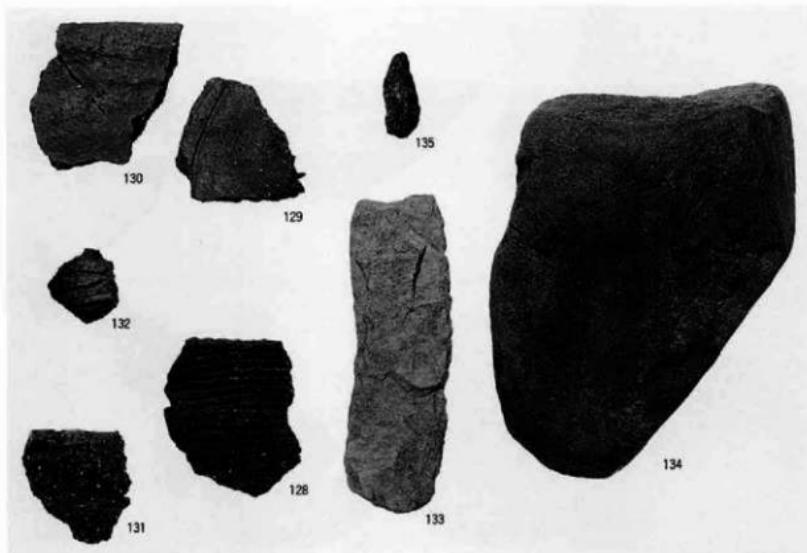


NZ II -SD03・04・07・09・11出土遺物

図版14

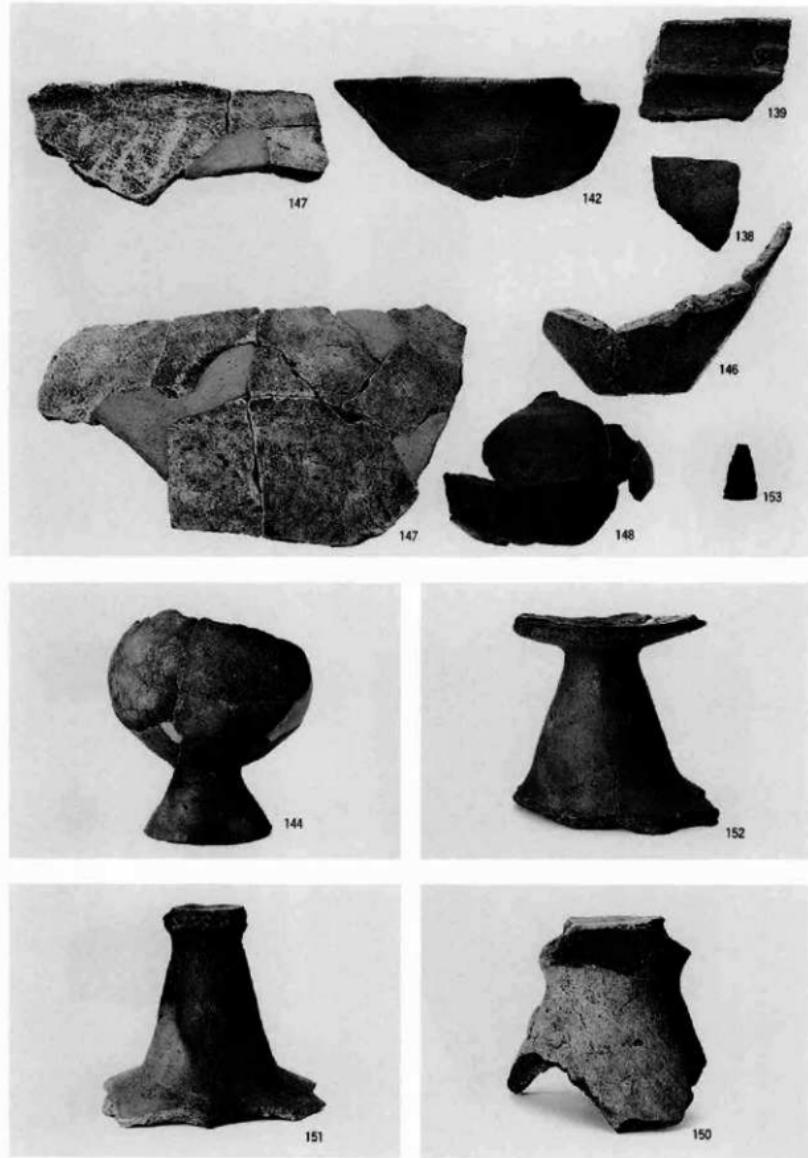


NZ II - SD13・20・23・SK02・03・05・23・30・32出土遺物

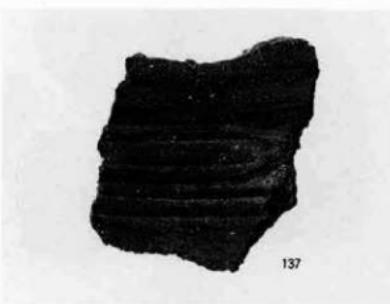
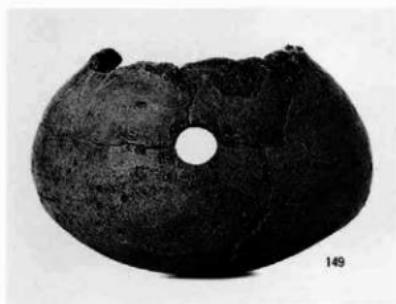
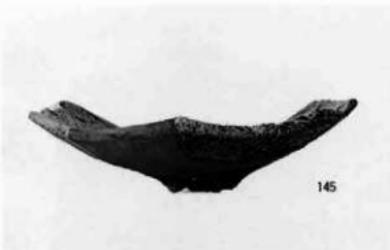


NZ II - P11・23・48・51・SX02・04出土遺物

図版16

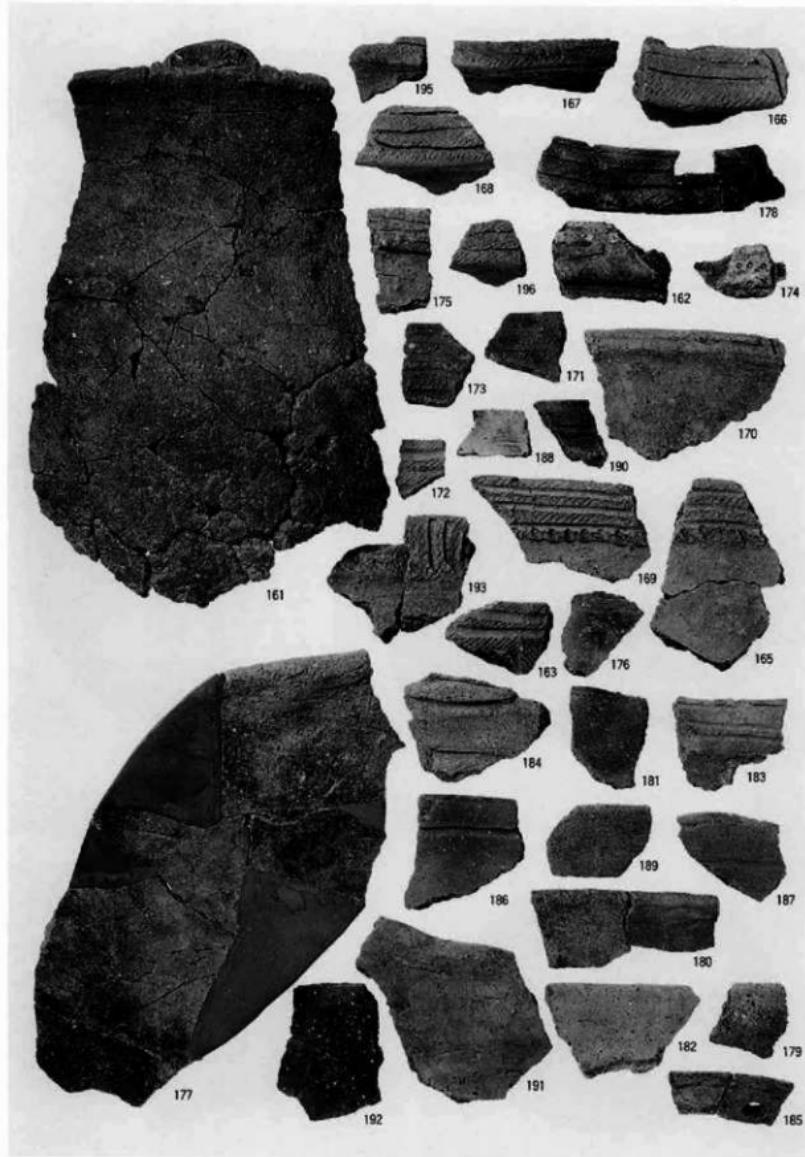


NZ II-SX01出土遺物(1)

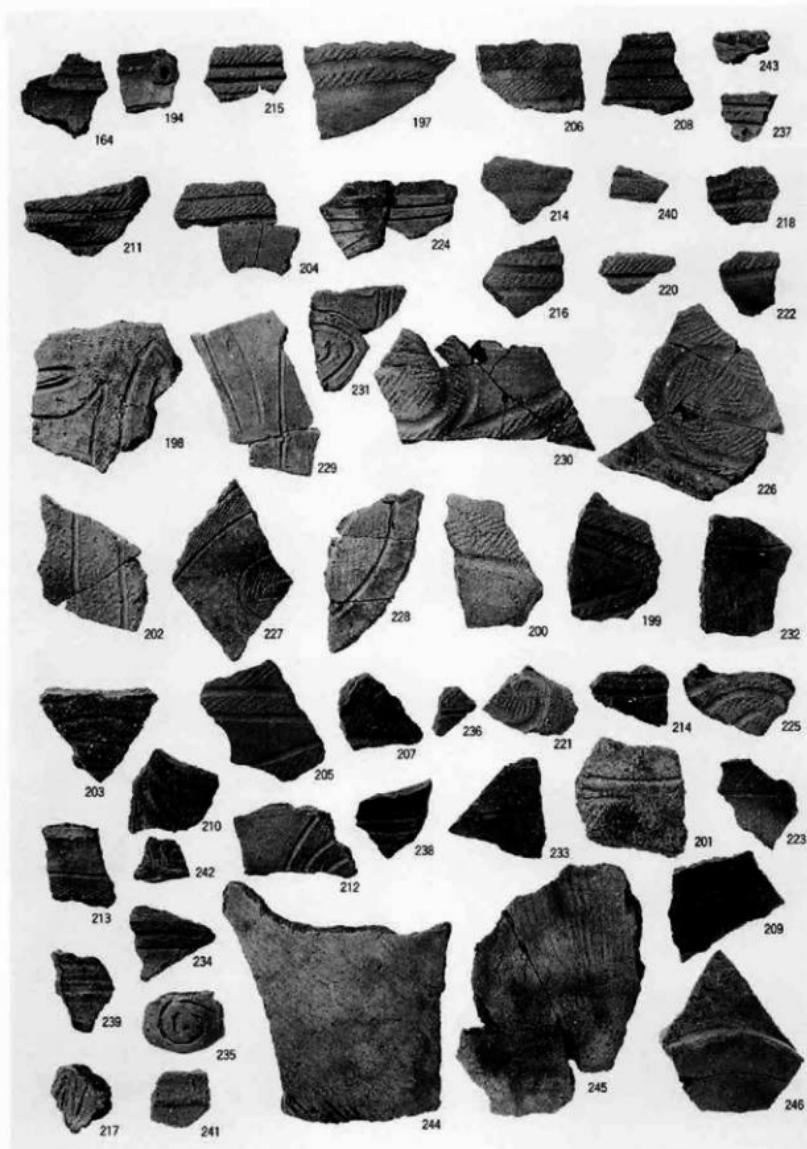


NZ II -SX01出土遺物(2)

図版18

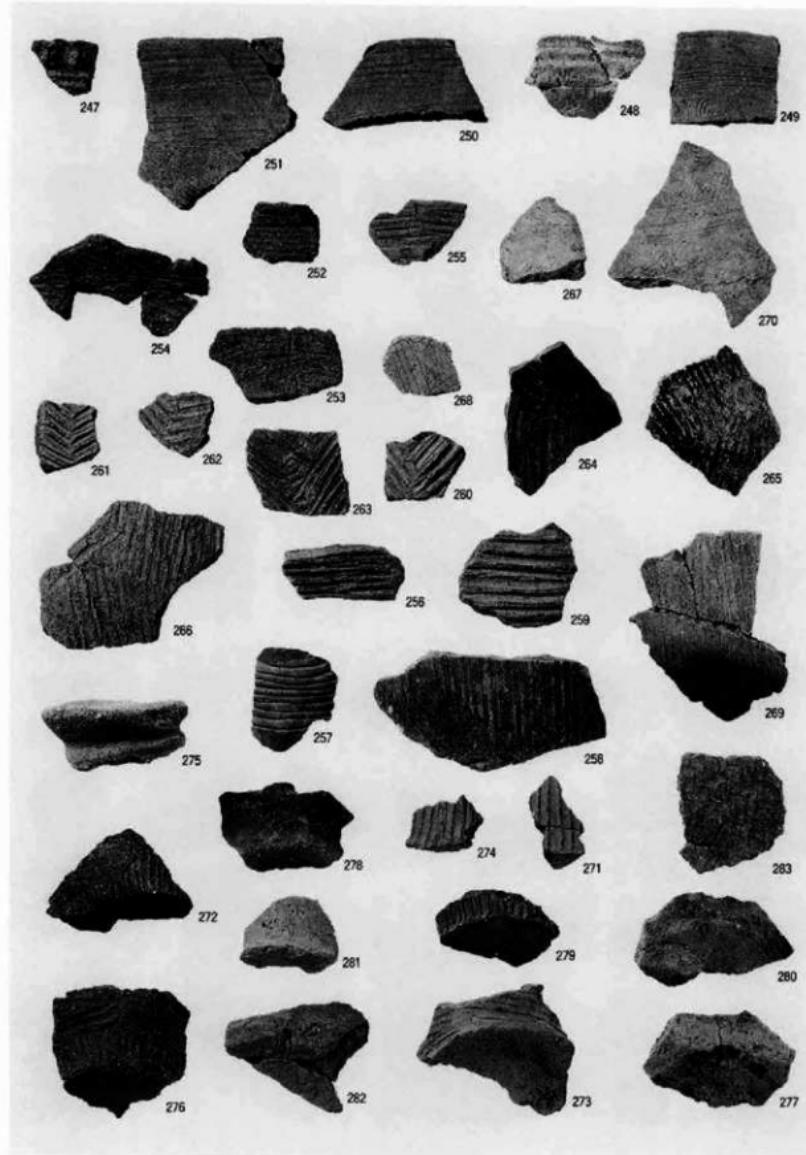


NZ II 遺構外出土繩文土器(2)

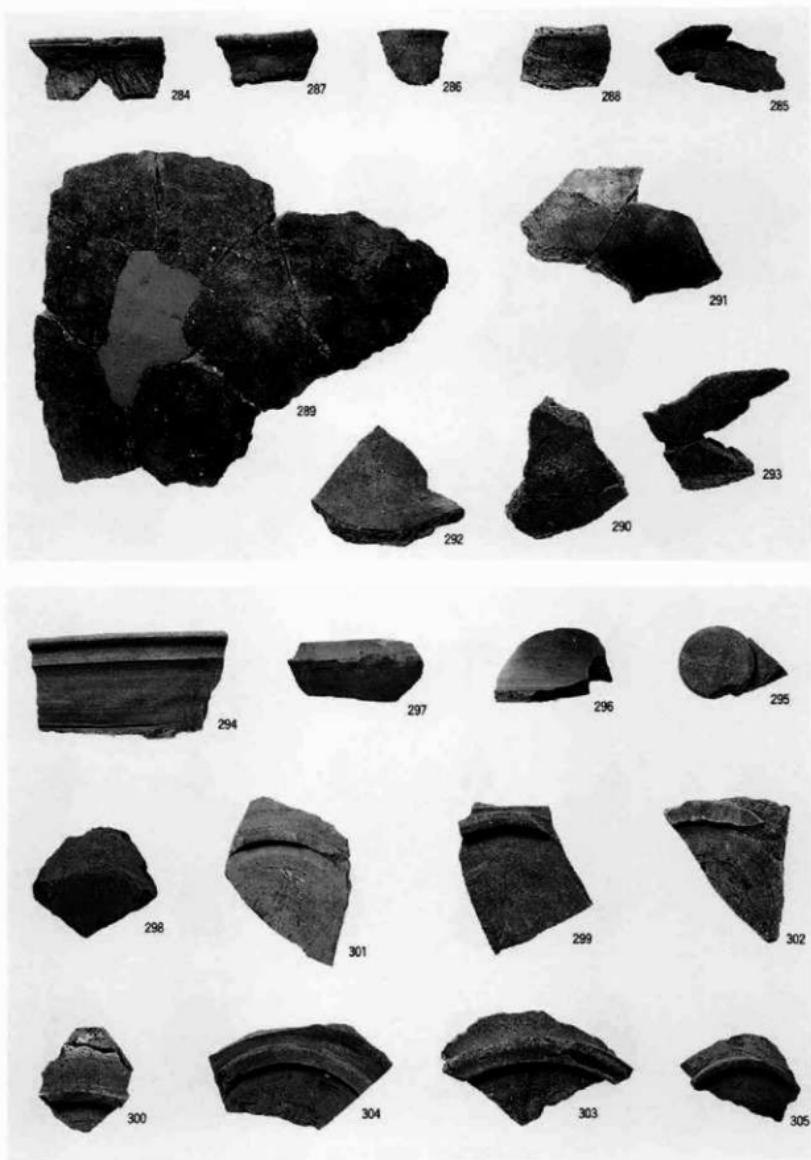


NZ II 造構外出土陶文土器(2)

図版20

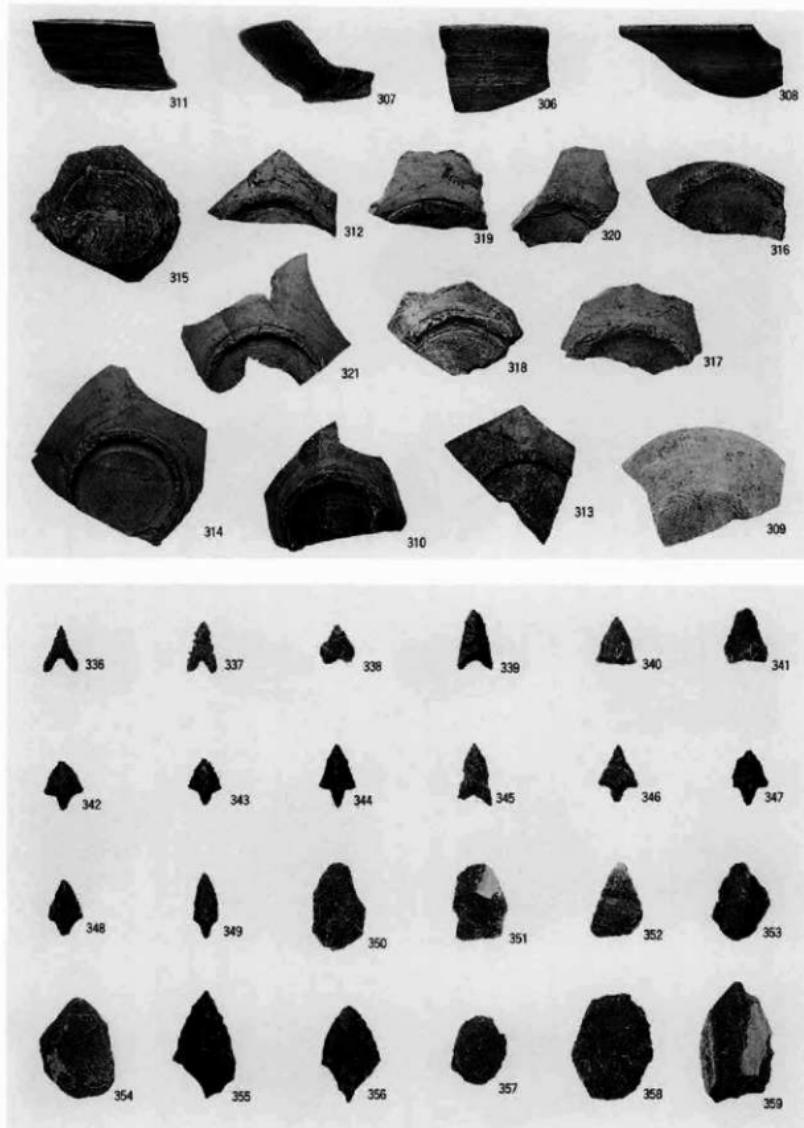


NZ II 遺構外出土弥生土器

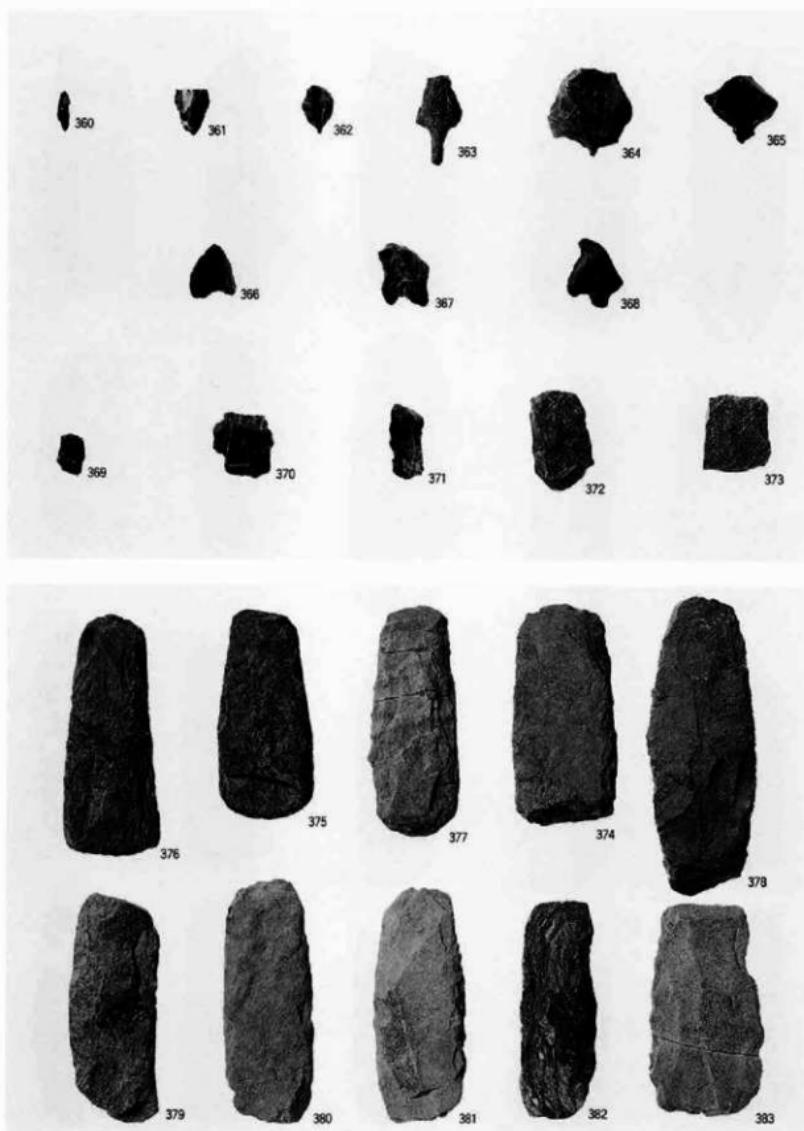


NZ II 遺構外出土土師器・須恵器・灰釉陶器

図版22



NZ II 遺構外出土山茶碗・石鏃・石槍

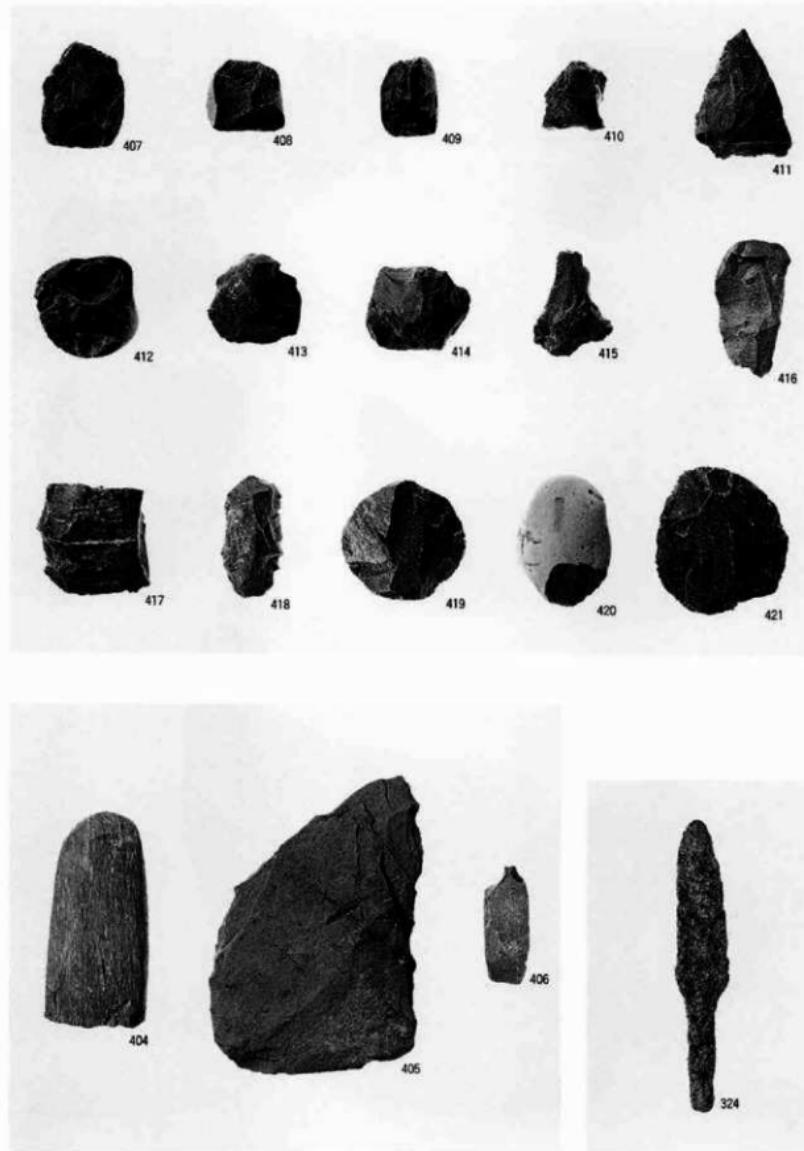


NZ II 遺構外出土石錐・ノッチドスクレイバー・剥片石器・打製石器

図版24



NZ II 遺構外出土打製石斧(2)

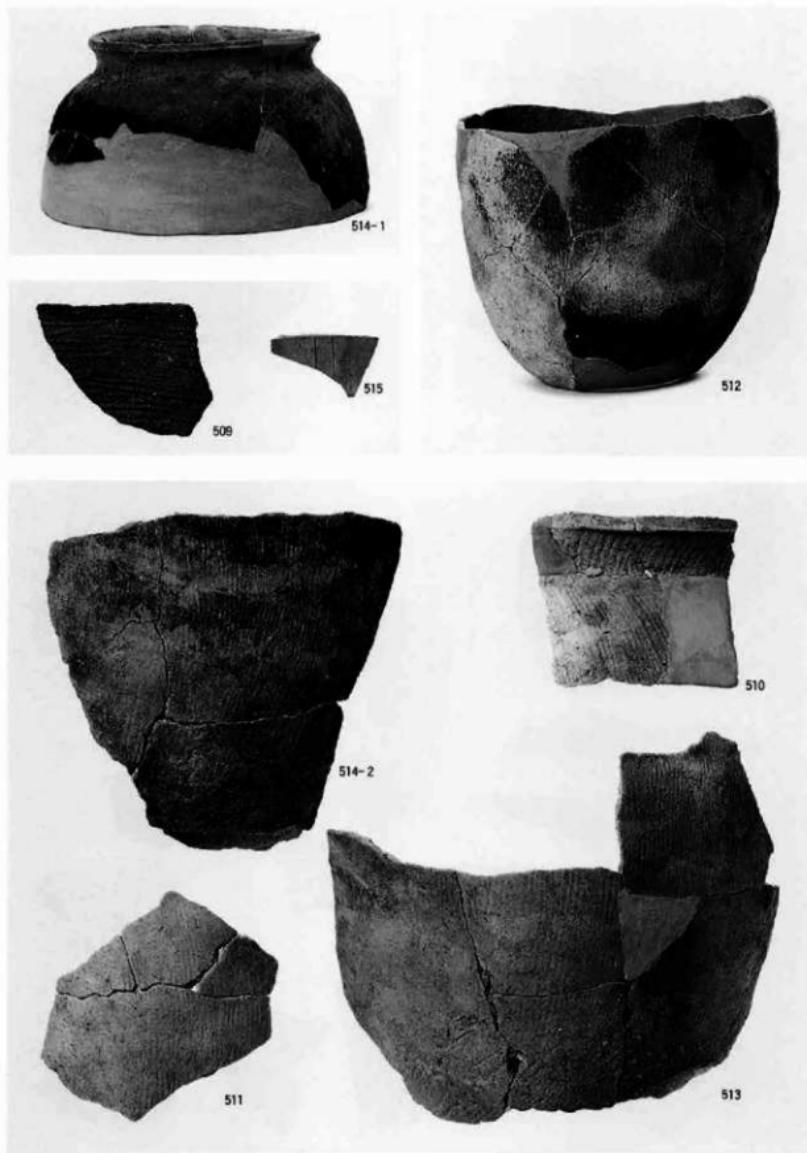


NZ II 遺構外出土石核・磨製石斧・石鎚・偽石器・銅鎌

図版26

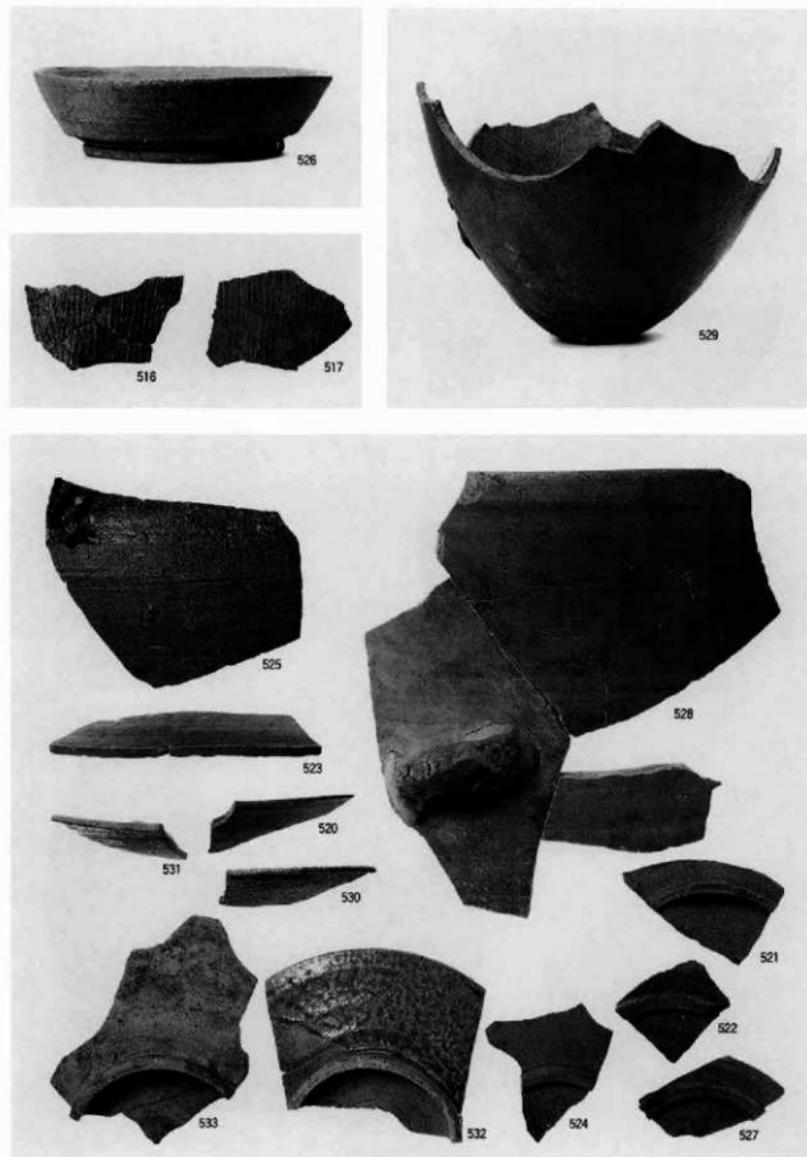


NZ III-SB01出土遺物



NZ III-SB02出土遺物

図版28

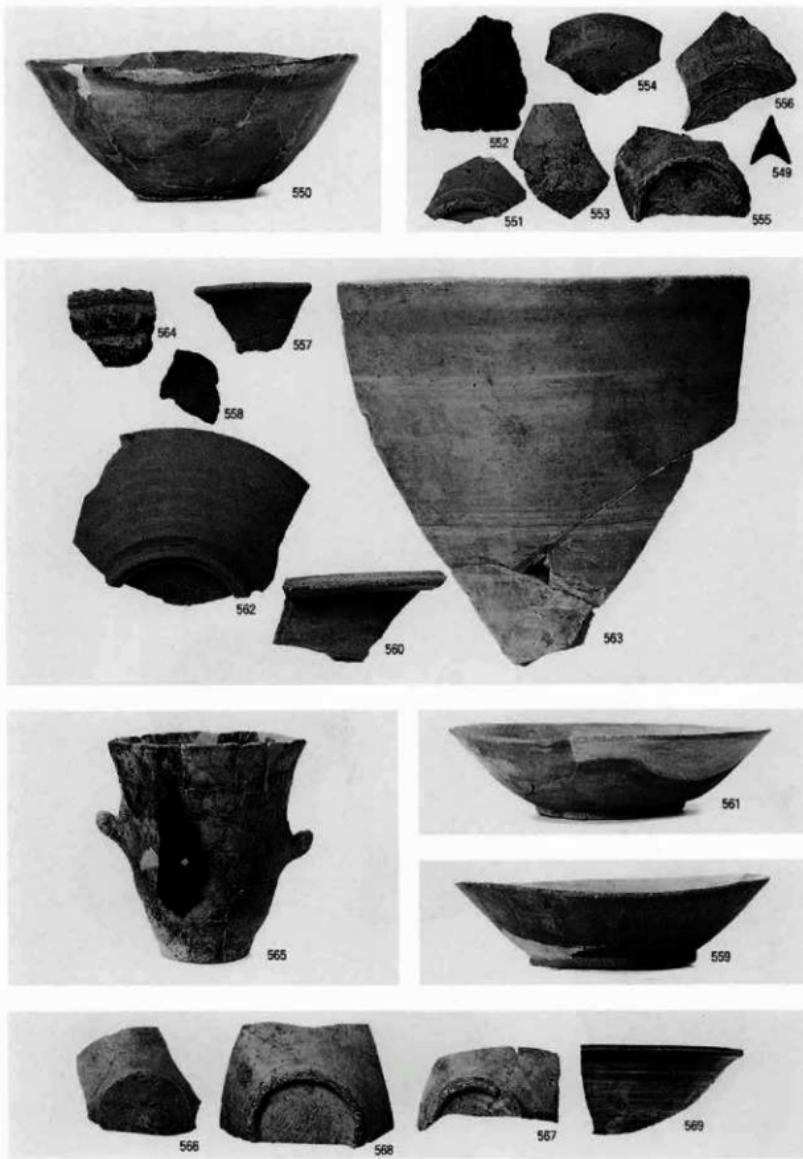


NZ III-SB03出土遺物

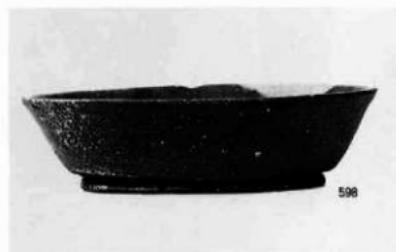
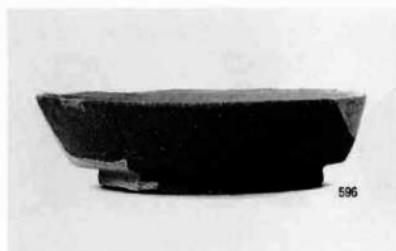
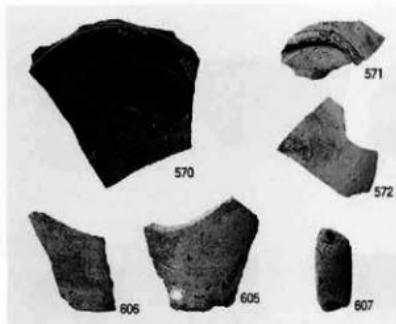


NZIII-SD01・02・03出土遺物

図版30

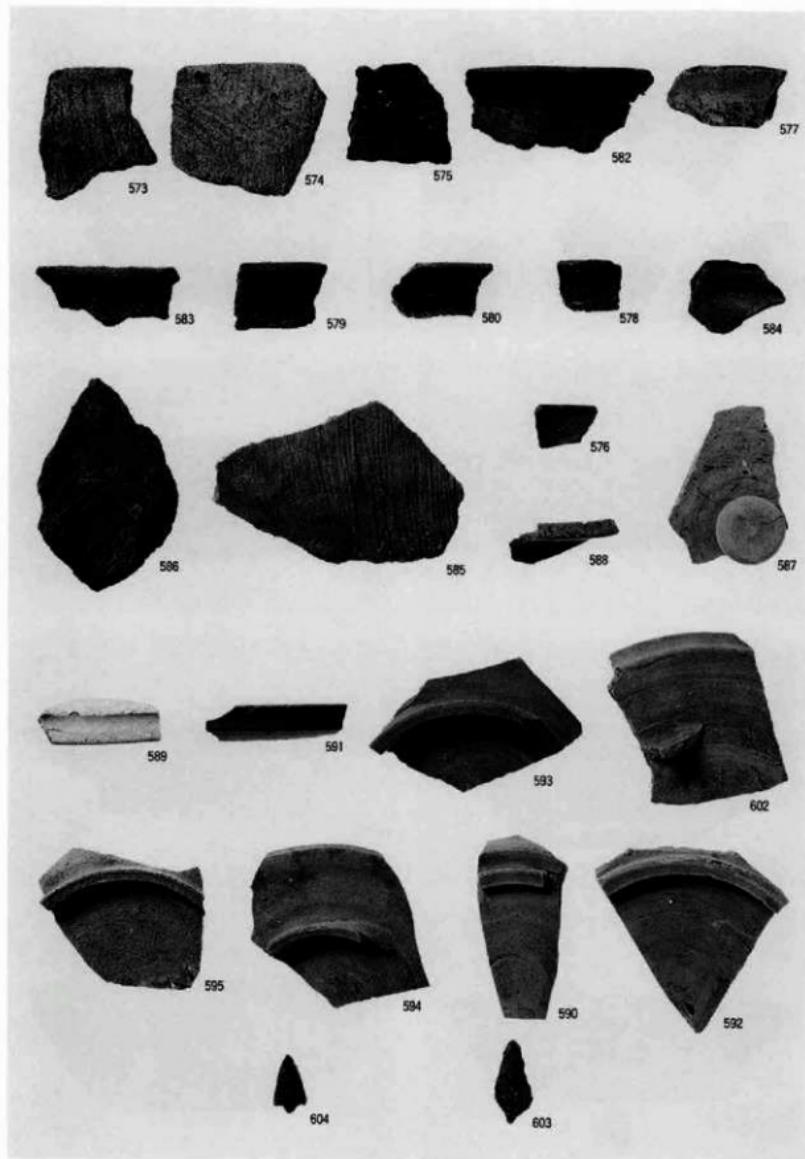


NZ III-SK07・12・14・17・18・P 02・23・41・SU01・02出土遺物

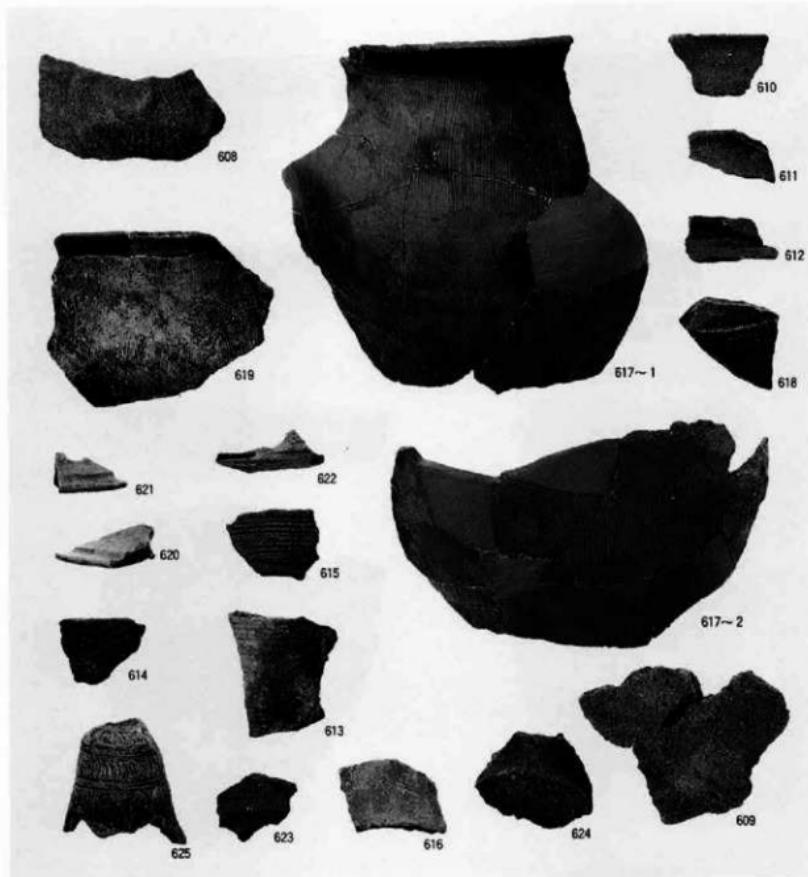


NZ III-SX01・02・07・09出土遺物

図版32

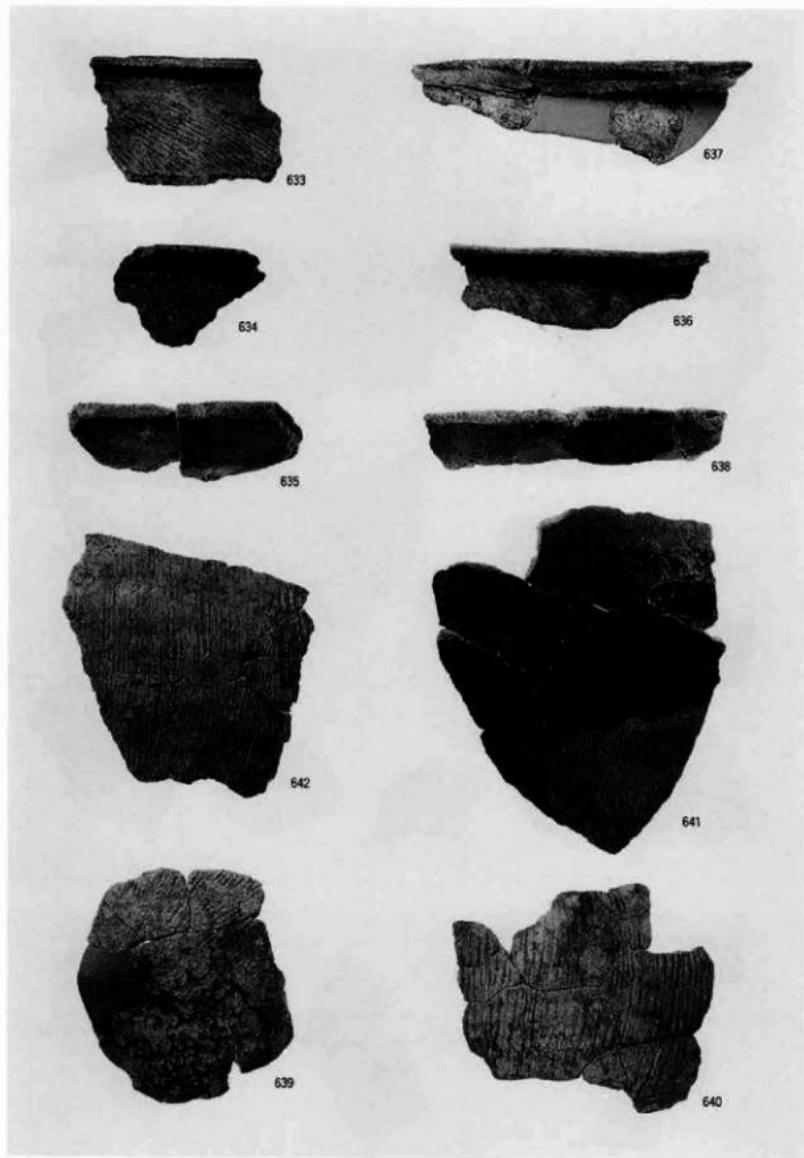


NZ III-SX02出土遺物

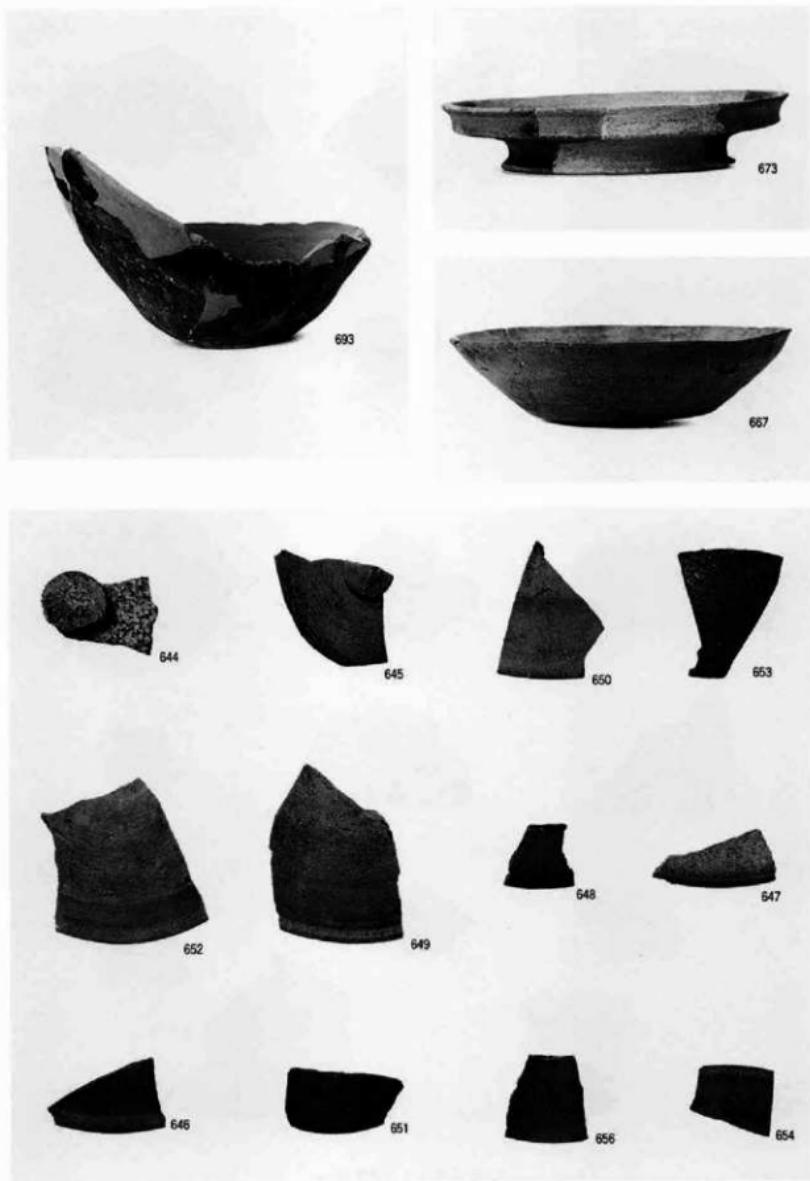


NZⅢ遺構外出土縄文土器・弥生土器

図版34

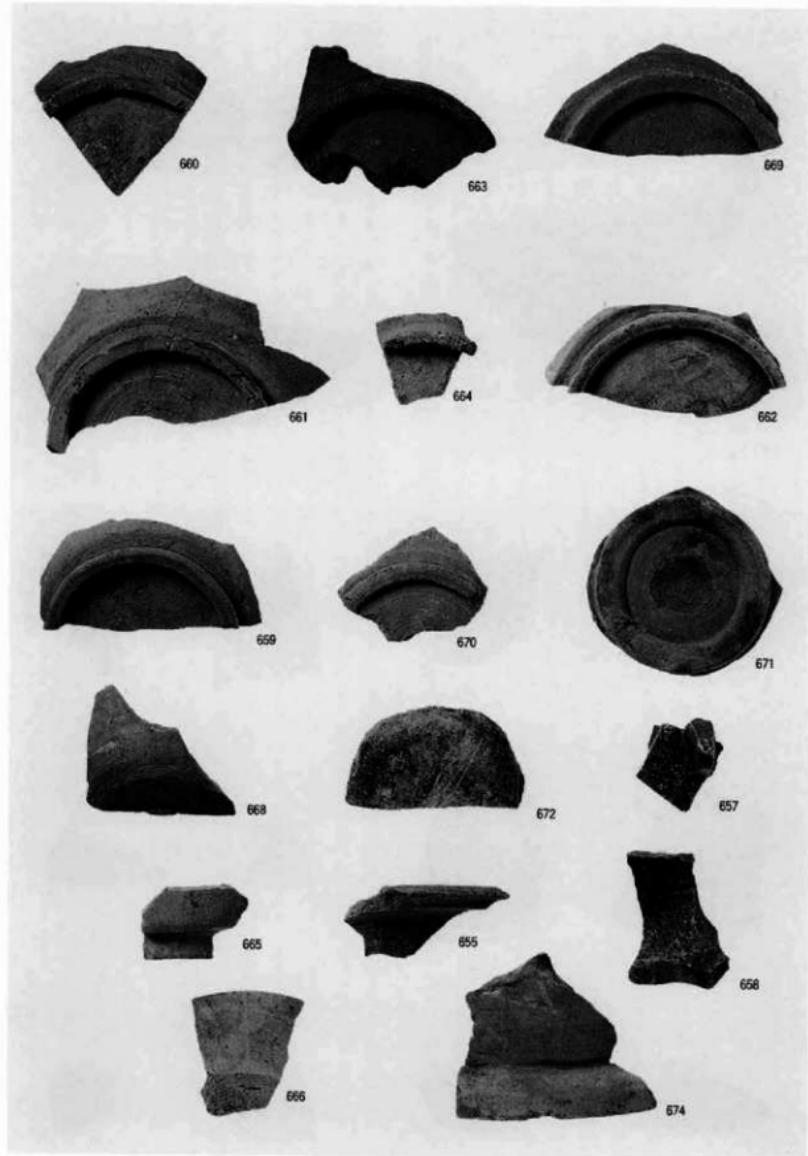


NZ III 造構外出土土師器(1)

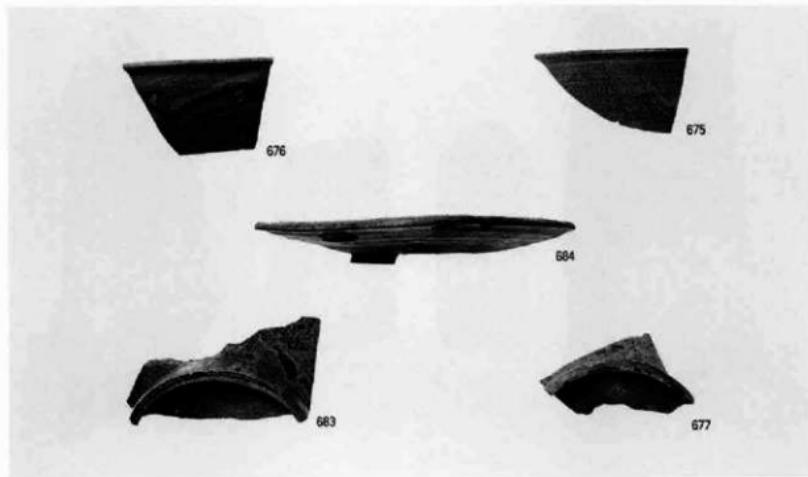
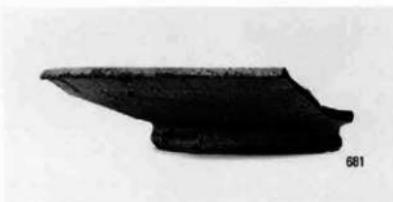


NZ III 造構外出土土器(2)・須恵器(1)

図版36

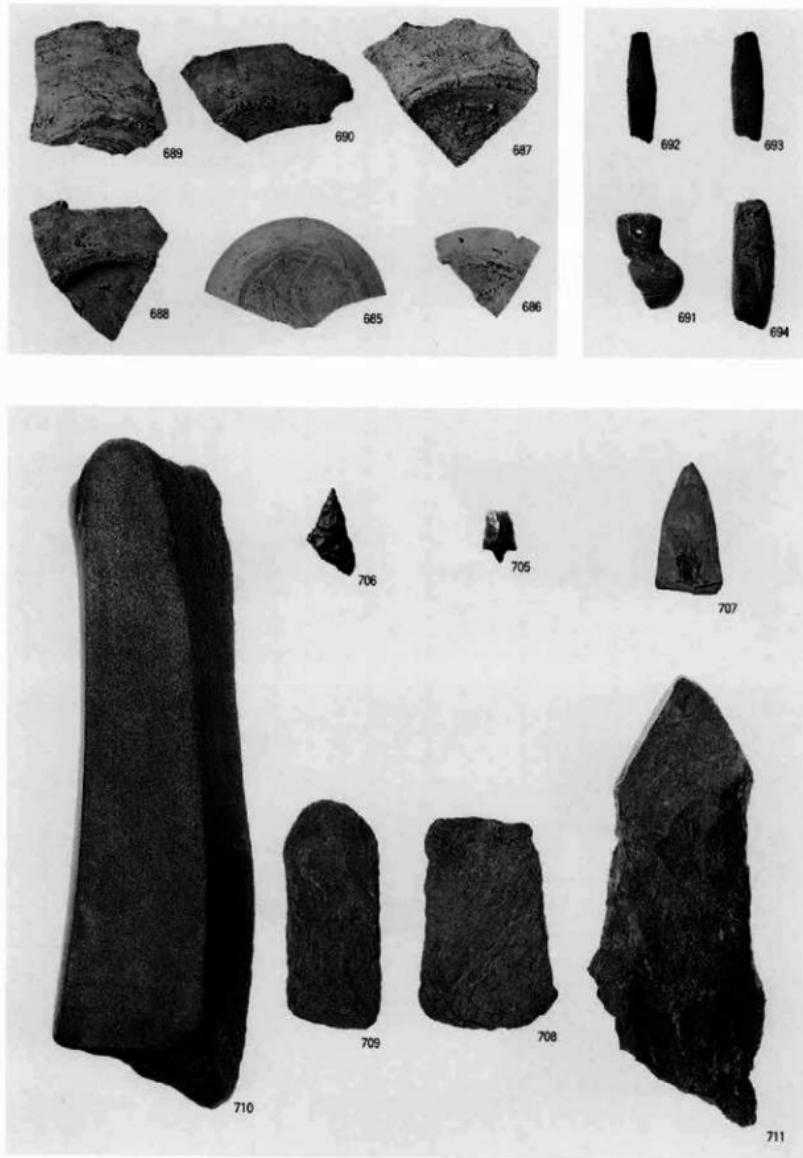


NZⅢ遺構外出土須恵器(2)

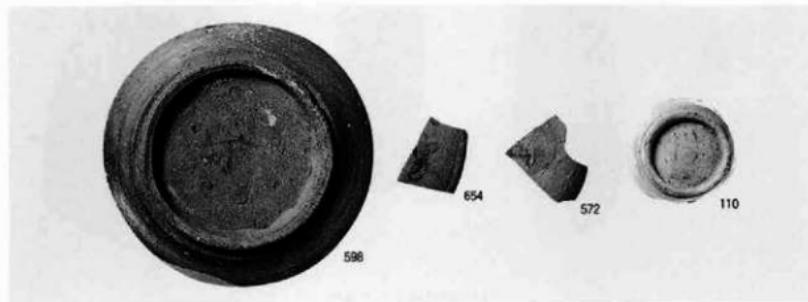


NZⅢ造構外出土灰釉陶器

図版38

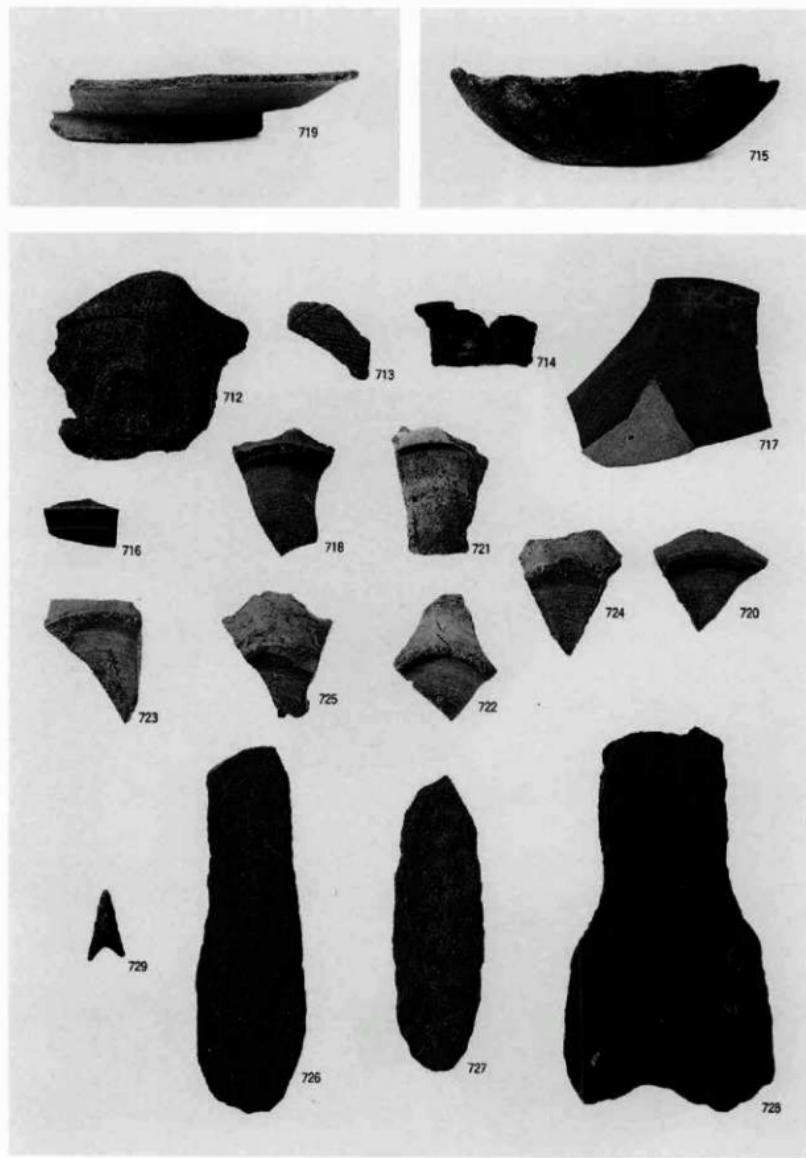


NZⅢ邊構外出土山茶碗・土製品・石器



NZ III 造構外出土近現代陶器・NZ II・III出土堅書土器

図版40



NZ III 試掘調査出土遺物



824



825



826



827



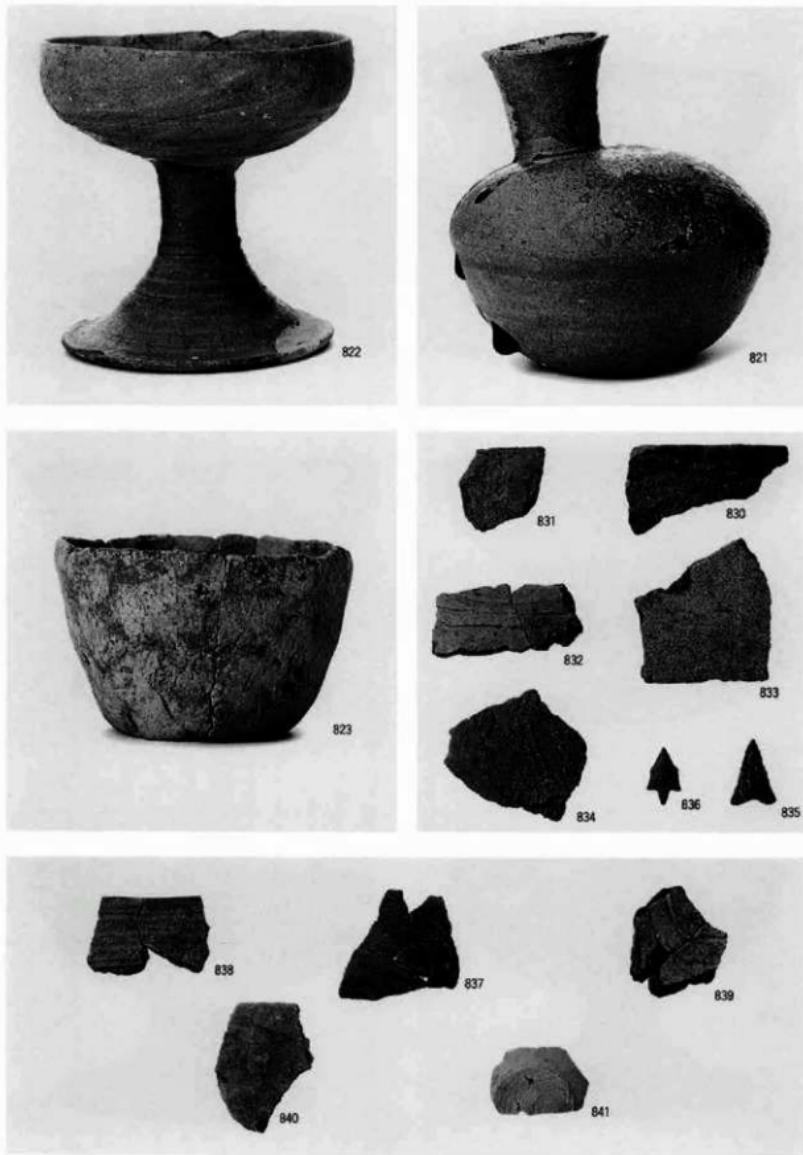
828



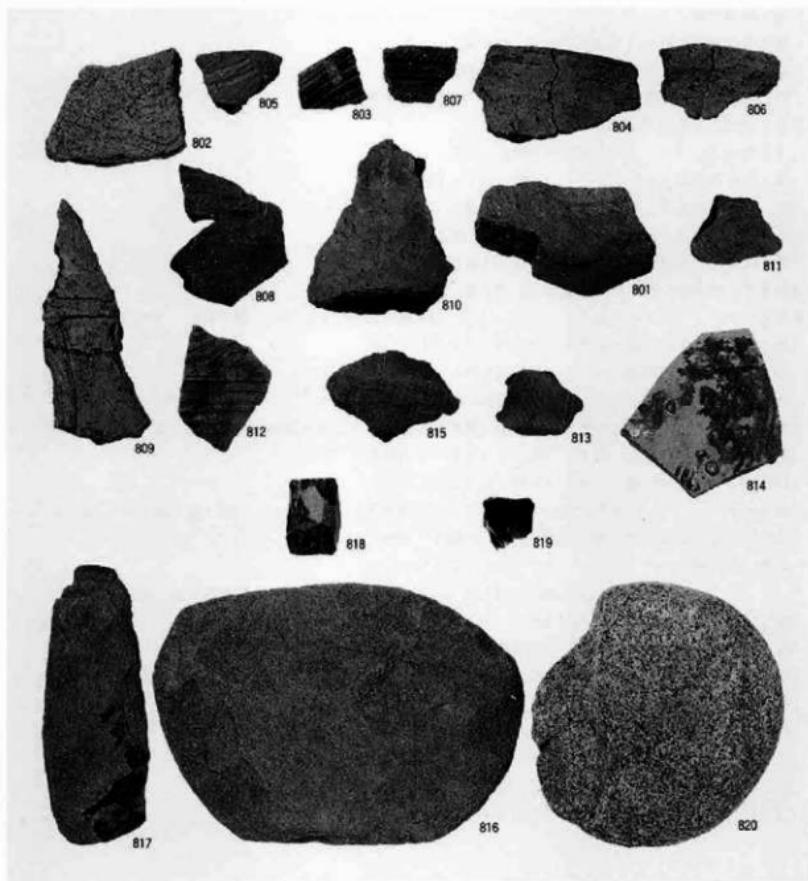
829

赤池4号墳石室内出土遺物

図版42



赤池4号古墳石室内及び周辺部出土遺物



赤池4号古墳周溝出土遺物

引用・参考文献

- 美濃加茂市教育委員会『美濃加茂市史 通史編』
- 日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』No.2 1982
- 上町C地点遺跡発掘調査団「上町遺跡C地点発掘調査報告書」 1989
- 都立学校遺跡調査会『白鷗』 1990
- 三重県埋蔵文化財センター『城之越遺跡』 1992
- (財) 愛知県埋蔵文化財センター『山中遺跡』 1992
- (財) 愛知県埋蔵文化財センター『松河戸遺跡』 1994
- (財) 愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡V』 1995
- (財) 岐阜県文化財保護センター『下巾上遺跡』 1995
- 齊藤孝正・後藤建一『須恵器集成図録』第3巻 東日本編 I 1995
- 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会『第4回東海考古学フォーラム 鍋と壺』 1996
- (財) 岐阜県文化財保護センター『堀田城之内遺跡』 1997
- (財) 岐阜県文化財保護センター『荒尾南遺跡』 1998
- (財) 岐阜県文化財保護センター『今宿遺跡』 1998
- 水峯光一・水遺跡発掘調査資料図譜刊行会『長野県小諸市 水遺跡発掘調査資料図譜』第三冊 1998
- (財) 岐阜県文化財保護センター『城ヶ谷7号墳・片山城跡』 1998
- (財) 岐阜県文化財保護センター『牧野小山遺跡 C地点』 1998
- 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会『第6回東海考古学フォーラム 七器・墓が語る』 1998
- 中村浩『古墳出土須恵器集成』第3巻 東日本編 I 1998
- 八賀晋「須恵器製作の一覧点 一ロクロ成形と置き台」
- 横崎彰一先生古稀記念論文集刊行会『横崎彰一先生 古希記念論文集』所収 1998
- (財) 岐阜県文化財保護センター『ホヤノ木古墳』 1999
- (財) 岐阜県文化財保護センター『諸洞遺跡・大坪遺跡』 1999
- (財) 岐阜県文化財保護センター『船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡』 2000
- (財) 岐阜県文化財保護センター『榎ノ木洞遺跡』 2000
- (財) 岐阜県文化財保護センター『南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡』 2000
- (財) 岐阜県文化財保護センター『額戸南遺跡』 2000
- (財) 岐阜県文化財保護センター『砂行遺跡』 2000
- (財) 岐阜県文化財保護センター『野並遺跡I』 2000

報告書抄録

ふりがな	のざいせきに・あかいけよんごうふん					
書名	野笛遺跡II・赤池4号古墳					
副書名						
卷次						
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書					
シリーズ番号	第71集					
編著者名	堀田一浩					
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター					
所在地	〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1 Tel058-237-8550					
発行年月日	西暦2002年3月25日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間 調査面積	調査原因
野笛遺跡	岐阜県美濃加茂市御門町 (II区)	21211	08845	35° 26' 20" 137° 02' 28"	19990701~ 20000331	一般国道248号 道路改良工事に 伴う
	岐阜県美濃加茂市野笛町 (III区)	21211	08845	35° 26' 29" 137° 02' 22"	19991101~ 19991118 20000703~ 20000905	
赤池4号 古墳	岐阜県美濃加茂市御門町	21211	09272	35° 26' 19" 137° 02' 30"	計2,850m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
野笛遺跡II区	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世	住居跡 溝 土坑 多数	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 山茶碗 中近世陶器 中国陶器	横穴式石室を持つ 円墳1基を新たに 発見	
III区	集落跡	弥生時代 古墳時代 古代 中世	住居跡 溝 土坑 多数			
赤池4号古墳	古墳	古墳時代	円墳 1基			

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第71集

野笛遺跡II・赤池4号古墳

2002年3月25日

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 西濃印刷株式会社